

『日本旧派歌道流派総覧』
— 旧派歌道・歌学の流派・家元・宗匠・師範・団体の総覧 —
旧吉備王国(郷里岡山県および兵庫県、広島県、山口県など山陽地方)系巫女神道・巫女歌道
令和新时代 最終協力版

平成9年 巫女、社家子女、歌道家子女らが歌書や神儒仏の秘伝奥義の岩崎への相伝を開始し、岩崎が継承と調査研究を開始
平成23年7月6日 岩崎が本資料を起筆、平成25年4月28日 一部を公開
令和元年6月2日

著作権法および『岩崎純一全集』第6巻に基づき、協力者の著作部分に係る著作権の全部の岩崎への譲渡が完了したことをもって、本資料の全部を公表するため、名称を『旧派歌道・歌学の流派・家元・団体の総覧』から現在の名称に変更し、これを母体として、本資料を含むその他の資料と合わせた『岡山県巫女特別協力資料』を設置
令和2年5月18日 最終更新

筆頭編著者： 岩崎 純一

(岩崎純一学術研究所所長、財団事務局長、大学非常勤講師等)

編纂総本部： 岩崎純一学術研究所(IJAI)

編纂作業： 同上第二学堂(『岩崎純一全集』編纂学堂)第一学廊第九学館第二学庭

編纂作業補助： 同上第二女子学堂(『岩崎純一全集』編纂女子学堂)第一女子学廊第一女子学館第〇女子学庭～第九女子学庭

本資料群の編著者・協力者一覧

岩崎純一学術研究所(IJAI)
岡山県巫女特別協力資料

(1)『日本神道道統図』(『全集』第14巻 別添資料)

(2)『吉備・ヤマト相関図』(『全集』第14巻 別添資料)

(3)『吉備巫女神道・ヤマト皇統相関系図』(『全集』第32巻 別添資料)

(4)『日本旧派歌道流派総覧』(『全集』第92巻 別添資料)

(5)『日本旧派歌道流派系統図』(『全集』第92巻 別添資料)

(6)『吉備巫女神道に対する弾圧策の実相とその再興計画』(『全集』第14巻 別添資料)

(7)『巫女神道吉備派道統総覧』(『全集』第14巻 別添資料)

(8)『巫女神道吉備派の大局的歴史観マップ』(『全集』第14巻 別添資料)

姉妹資料	『巫女神道比較表』(『全集』第14巻)
	『巫女神道探訪記 - 日本的アニミズム感覚の源流を訪ねて -』(『全集』第14巻)
	『大日本帝国陸軍歩兵第十連隊(岡山・鉄五四四八部隊)戦史調査資料』(『全集』第34巻)
岩崎純一学術研究所ウェブサイト (本資料群の掲載場所)	https://iwasakiunichi.net/
<p>※ なお、本資料群は、上掲の巫女や歌道子女らが所属する社家や神社、岩崎が協力している女子寮の閲覧室の一部でも入手できる。また、岩崎が非常勤講師や特別講師を務める大学の講義でも、適宜使用する。</p>	
参考文献(岡山県巫女特別協力資料の全資料の参考文献)	
Copyright (C) 2012-2019 岩崎純一 All Rights Reserved.	

目次と総論

序

(1) 巫女神道・巫女教(斎の巫女・斎女の神道)・原始日本神道・古道歌壇(縄文・弥生時代、列島先住・先占の日本列島民、太古の帰化渡来人)

(1)や(2)における「歌壇」の語意は、(3)以降の「文芸としての和歌の歌人の集い」とは異なり、「神事と一体化して(未分化のままに)行われていた歌謡の担い手の共同体」の意である。

ここでは、日本列島文明創生期・縄文時代・弥生時代の自然信仰に由来し、後期弥生系渡来人・ヤマト王権(大王)・現皇統(天皇)勢力にそのほとんどを征討された古代巫女神道文明(ヤマト王権追従以前の筑紫、出雲、吉備、卑弥呼女王連合)の歌壇と、勃興当時のヤマト王権の定型詩の状況を解説する。

この時代には、歌道の原初形態である歌壇・倭語・列島語文化の代表者は、巫女舞・磐座(いわくら)祈禱・託宣・亀卜・鬼道・神剣演舞などの神懸り神事を行う主に女系女子の巫女(「めかんなぎ(巫)」、「斎(いつき)の巫女」、「斎女(いつきめ)」)であって、「神の道・性神道(かんながらのみち)」「(のちの神道)と「歌の道・巫女神楽」(のちの歌道)とは未だ不可分である。また、これらの巫女と男子が支える王も男系男王とは限らない(巫女を兼ねる女王や女系男王がいた)のであって、女王と巫女らが巫女連合として、神懸り神事により男神と天変地異をなだめる上、男子の家臣団にも巫女の共同神事を助ける「おかんなぎ(覲・男巫)」が存在した。また、これらの女王国・男王国が組織する軍もまた、基本的には巫女軍・女軍であり、神懸りとなった巫女の列が呪的戦略で男子の兵らを先導した。この点で、男系女子の巫女が主に「治天の君」たる男系男子大王(天皇)の神性を支え、男子は神懸り神事を行わない(あくまでも祝詞を読み上げる奉納祭祀を行うのみである)斎王系神道以降の皇室・神社神道とは、構造・系統が異なる。また後者では、軍の組織も、男子こそが官軍(朝廷軍)の戦略を練り、実行部隊として紅旗征戒を行うのであって、斎女の役割は希薄であるか、存在しない。

現在、巫女神道は、山陽・瀬戸内海地方(とりわけ岡山県、兵庫県、広島県、山口県)に偏って残り、女系秘儀伝授が行われている。埴輪は岡山県(古代吉備王国)で発祥し、これがヤマトに入って大規模な前方後円墳文明を築くが(吉備も同様だが)、当初吉備では「埴輪」とは呼ばれず、現在「特殊器台・特殊壺」と呼ばれる巫女の祭器として楯築埴丘墓などで発祥しており、現在もこれらを用いて秘伝の巫女舞を舞い、呪歌を唱えているのは、岡山県や兵庫県の特定の女系巫女に限られると考えられる。岡山県総社市阿曾地域を中心に県内各地に残る鳴釜神事は、世に知られた現在でも、男性神職が行う場合は女装しなければならない。しかし本来は、女系の純潔女子が行わなければならない、神々と交信する歌(神楽歌)も必要であって、巫女神道家ではこれを守っている。

巫女神道家の巫女舞や鳴釜などの秘儀の奥義は、女系女子が継承しているが、その言動は、現代の精神病理学においては転換性障害、憑依障害、身体表現性障害、身体化障害、カタトリア、カタリプシーなどの女子の異常心身機能として記録・報告される。そのため、埴輪(祭器)による巫女祭祀は、また、注釈・学問をけじめ

日、身体化降口、カクローノ、カクレンノ「なごり」の英市心身探感として記録 報口されている。このため、恒種、系譜による巫女系祀はひつづり、仏然、不口とはじり、旧教派神道(黒住教、金光教)、ほんぶしん、日蓮講門宗、日蓮宗不受不施派、日本救世軍など、日本史上、古代宗教・新宗教が集中的に発祥してきた岡山県に巫女の秘伝が集約されたことは無理もない。

しかし、これについては、近世国学・近代の民俗学において、折口信夫の『最古日本の女性生活の根柢』や中山太郎の『日本巫女史』が次の通り記す。

事実において、我々が溯れる限りの古代に実在した女性の生活は、一生涯あるいはある期間は、かならず巫女として費されてきたものと見てよい。(中略)女として神事に与らなかつた者はなく、神事に関係せなかつた女の身の上は、物語の上に伝誦せられるわけがなかつたのである。(折口信夫『最古日本の女性生活の根柢』、1924)

我国の原始神道が巫女教であったことは、神道発達史から見るも、古代社会史から見るも、更に巫女史から見るも、民俗史から見るも、疑うべからざる事実である。(中山太郎『日本巫女史』第一篇第一章第三節、1930)

上古代、とりわけ万葉以前の時代には、女子は全て巫女であり、神懸り神事は女子の生物的本分であり、神道は元来巫女教であった旨のこのような主張は、岩崎ほか本資料の全ての協力女性も有するところであり、本資料でもこれに基づき論を展開するものである。代表者の岩崎は、「縄文・先住列島民女性の総巫女性(巫女性の普遍性)」の観点から、吉備王国以前の巫女神道を守る一部の女系巫女の言動について、過度に心身症の判断を下したり新宗教の儀式に利用したりしないよう、県内の医療施設や新宗教団体などに呼びかけている。

大陸・朝鮮・アジアの諸言語と日本語・和歌(倭歌)の起源(歌垣・歌掛き・懸け合い・嬬歌・口寄せ)

女系女子のシャーマニズム・巫女神道(女王卑弥呼の邪馬台国・倭国連合など)と呪歌・巫女舞歌道の時代、およびその系譜を引く近現代の巫女神道社家歌壇

古代四大王権(筑紫、出雲、吉備、ヤマト中央王権連合)の歌壇と、ヤマト連合・ヤマト語文明圏の最終勝利・倭国統一

主にヤマト王権・豪族政権下に創生したが、女系女子の巫女神道における歌垣・巫女舞歌道を原初に近い姿で維持した歌壇

(2) 斎王系・後期巫女神道系歌壇(末期弥生時代、朝鮮系・百済系帰化渡来人)

ここでは、男系男子のヤマト王権(大王)・現皇統(天皇)勢力が整備し、皇祖神天照大神と天皇神格を保証する神事・祭祀を司る男系女子の巫女を中心とする神道系歌壇を解説する。

上古代の巫女神道における磐座(いわくら)神事に対する男系男子王権の高御座(たかみくら)神事(天皇即位)の優越性を自らの生け贄(天皇に代わる神々降臨の媒介者「御杖代(みつえしろ)」としての女性身体)と地上における処女性・純潔性(男神との交信)によって担保する伊勢の斎王らによる歌壇などが、これに該当する。天照大神が女神かつ巫女と解釈できる(従って、皇統はイザナギ・イザナミから見れば女系男子血統である)ことはもちろん、神武天皇の祖母かつ伯母である豊玉姫命および母である玉依姫命の父である豊玉彦命から見ても、皇統は元来女系である。このことから、太古の日本では(縄文期、弥生中期までは)女系巫女を中心に家系が成り立っており、母娘を同時に妻とする(神懸った女系巫女の身体の助けを借りて生きる)ことは普通に行われた一方で、朝鮮(百濟)系渡来人がヤマトに入り、女子(内親王や女王)を斎王(斎宮や斎院)として地方に追いやることで成立した男系男子皇統は、当時の日本人(縄文・中期弥生の先住の人々)にとっては異様な事態に映ったと考えられる。

『古事記』・『日本書紀』は、欠史八代天皇の創作には成功したが(現在の研究でも明らかに実在が疑われる)、その皇統の根本を女系と設定したことに苦肉の策が見え、これは当時のヤマト王権においてさえ、それまでの縄文時代の女系巫女神道の名残があったことを示すものである。しかし、ヤマト王権系新宗教(つまりは「神道」、『記紀』神話)の「神武(天皇の武勇)」が巫女神道(正確には「神道」でない「神の道・性神道(かんながらのみち)」)の「神事(女子の祭祀・呪的行為・まつりごと)」を配下に置く構図は明らかで、これ以降、男系男子皇統を模して、日本の神道家(社家)・歌道家をはじめ、宗教・芸道の当主・宗匠(師範)は続々と男系男子に置き換わることとなる。

このような神話観は、敗戦にもかかわらず一億総国民の無意識に浸透するに至り、「神武景気」、「岩戸景気」、「いざなぎ景気」、「三種の神器(白黒テレビ、洗濯機、冷蔵庫)」、「新三種の神器(カラーテレビ、クーラー、自動車)」などの語は全て、皇室神道・国家神道・神社神道系神道を支える『記紀』神話の男神や男系男子天皇の武勇伝に経済的栄華を託けたものである。「岩戸景気」の名称でさえ、アマテラスやアメノウズメの巫女性に仮託したものではなく、天岩戸の扉が開き天地が晴れ渡ったのちの男系男子皇統の栄華に仮託したものである。

一般女子専用であっても、代表者が巫女舞や神懸り神事を行う巫女でない、現日本国における歌壇(いわゆる和歌関連結社)は、(5)に含める。奈良時代および江戸時代の男系女性天皇の即位の例も、巫女の代理である要素が強いが、(5)に含める。

主にヤマト王権・豪族政権下に創生し、女系女子の巫女神道における歌壇・巫女舞歌道から訣別しつつも、依然として女性の託宣・呪的行為が中心である歌壇

(3) 古代ヤマト系神社神道から近代社格制度下・神社本庁統制下までの古代神社・古道歌壇

ここでは、ヤマト王権(大王)・現皇統(天皇)勢力が整備し、代々男系男子が歌道宗匠となったものの、太古の原始神道に由来する古代神社などの歌壇を解説する。日本古来の自然信仰に由来するが、これを母体とするわけでない天皇・皇族・貴族・武家歌壇、および国学・古学(古道研究)に伴う新規の歌壇全般は、(5)に含める。

主に仏教伝来後の大和朝廷・貴族・武家政権下に創生したが、原始神道に由来する古代神社・社家歌壇

主に近代社格制度のもとに整備されたが、原始神道に由来する神社・社家歌壇

(1)の原始の巫女神道と次項(2)の斎王系(ヤマト王権系)巫女神道との合同演舞を観覧できる歌壇(近代に作られた巫女神楽・巫女歌謡)

(4) 山岳信仰・修験道・仏教・神仏習合歌壇

ここでは、ヤマト王権(大王)・現皇統(天皇)勢力が整備し、代々男系男子が歌道宗匠となったものの、太古の山岳信仰・修験道・古道・仏教・神仏習合に由来する歌壇を解説する。

日本古来の自然信仰に由来するが、これを母体とするわけでない天皇・皇族・貴族・武家歌壇、および国学・古学(古道研究)に伴う歌壇全般は、(5)に含める。

主に仏教伝来後の大和朝廷・貴族・武家政権下に創生したが、山岳信仰・修験道・古道に由来する歌壇

(5) ヤマト王権・大和朝廷・現皇統勢力圏(大王・天皇の確立期から立憲君主制・象徴天皇制の現在に至るまで)の歌壇

ここでは、上古代・有史以降の日本列島・日本国に現れた歌壇で、上記に該当しない全ての歌壇を解説する。

各歌壇の代表者は、万世一系とされる男系血統の男子(一時的には巫女を兼ねる女子)である天皇を頂点(治天の君)として、堂上家・公家・貴族・武家・国学者・商家などの男系男子当主である。また、近現代の女性主催の歌壇のほとんどは、女権運動団体を兼ねる。すなわち、その歌道は、家父長制の堅持またはそれに対する抵抗運動と一体化して展開している。勅撰和歌集のシステムでは、(1)~(4)の巫女舞・神懸り神事や修験道によって詠んだ歌は「神祇・釈教」に、歌垣は「恋」に、主に分類される。

大和朝廷の皇親政治・豪族の歌壇と『万葉集』の成立(飛鳥・白鳳・天平・弘仁・貞観文化)

国風文化の発達に伴う歌道と『古今和歌集』の成立、摂関政治期における王朝和歌と勅撰和歌集の確立

院政期文化・鎌倉時代における歌道宗匠家・勅撰和歌集の発展と御子左派の全盛

御子左派の分裂と両統迭立初期における二条派の台頭

両統迭立・建武の新政・南北朝の動乱(観応の擾乱・正平一統)・南北朝合一(明德の和約)・後南朝の時代と室町幕府の歌壇、および歌道と結託した世襲宮家の乱立、勅撰和歌集の終焉、京極派の長期低迷

古今伝授・二条派の全盛、公家・武家の家職としての歌道(歌道師範家)、応仁の乱・戦国時代の地方の歌道文化、織豊政権の歌壇

御所伝授・近世二条派(近世における宮廷・公家の二条派歌道の維持)、および江戸幕藩体制下の歌学政策と幕臣・武家・大名の歌学

地下伝授(近世における地下歌人による二条派歌道の展開)と二条派新派の興亡、桂園派の隆盛

連歌・俳諧連歌の発展

近世前期における国学・歌学としての和歌研究の勃興と、近世中・後期の国学・歌学の派閥(縣居派・江戸派・鈴屋派)

国学の大成と平田派(平田国学、平田神道)、および藩校における歌学

開国・近代化における明治新政府の皇国史観に基づく旧派(桂園派・御歌所派・宮内省派)の歌学政策と新派短歌への抵抗、神仏分離令・大教宣布運動および国家神道・教派神道(神道十三派)関連歌壇、軍部歌壇、教育勅語関連歌壇、師範学校歌道部の創設と、新旧両派の対立解消の模索

門跡還俗による宮家増設と門跡寺院歌壇の継承、近代宮家歌道の粗製濫造・破綻と御歌所派への吸収消滅

戦後における短歌・歌会始・披講の国民事業化と、民間の和歌鑑賞会・披講会・『万葉集』関連団体の増加(歌道としての和歌から鑑賞・披講としての和歌へ)

近世の上流社会における女流和歌の空白時代と地下女性への桂園派歌道の流入、および近世・近代の花街・傾城・三業地(置屋・待合茶屋・料亭)・旅館における芸妓・女将歌壇の繁栄

近代の上流・中流家庭(華族・士族)の子女による歌道継承

戦後の家政婦・派出婦、一般・民間女性、女子大学・女子短期大学(旧女学校・女高師系)、女子学生の有志による歌道関連活動

その他の歌壇(右翼団体が標榜する歌道など)

(6) 琉球・海外における歌壇

ここでは、戦前・戦中の汎アジア主義・八紘一宇・大東亜共栄圏構想の影響下に現れた沖縄および海外の(すなわち、当時の大日本帝国の外地における)歌壇を解説する。

汎アジア主義・八紘一宇・大東亜共栄圏構想の影響下における海外の(すなわち、当時の大日本帝国の外地における)歌壇の形成(琉球、台湾、朝鮮、中国、満州、サイパン、パラオ、樺太)

■近代以降の二大系譜(桂園派・御歌所派の系譜の旧派と正岡子規・根岸短歌会・アララギ系などの系譜の新派)のうち、現在は廃絶されたか、またはほとんど継承者・会員を有さず、存続が危ぶまれる旧派の流派・歌会のみを掲載し、新派の系譜を引く短歌結社についてはほぼ全て省略した。

■情報の正確さには万全を期しておりますが、誤りがございましたらご指摘下さい。(旧宮家の血統断絶の情報など。)

■歌道廃絶・血統断絶の事実の有無や会員数などのデータは、上記の最終更新日の時点のものです。ご了承ください。

凡例

●いわゆる歌道・歌学の流派・集団・家柄・サロンのうち、現在までに第三者による文献での言及がある流派(かつての秘伝も含む)を掲載した。

●流派名の記法は「○○流」を基本とするが、氏族・家系が一流派を成す場合はそれぞれ「○○氏」・「○○家」とした。

●「衰退」・「断絶」・「廃絶」などは、歌道・歌学・師弟関係・師範家としてのそれらを指す。血統の衰退・断絶・廃絶とは限らない。また、現在における当該歌風の研究者・愛好家などの不在を表すわけではない。

(ただし、歌道の存続の有無にかかわらず、多くの歌道家の血統が断絶している。特に、冷泉家をはじめ、旧皇統・旧宮家・旧堂上公家の男系断絶が著しく、婿養子による歌道継承が多い。)

●男系血統の断絶は、皇統・家の断絶のみならず、歌道の断絶とも強く結びついており、男系断絶の場合は可能な限り記載した。

●同じ歌道流派に属する重要歌人は、血縁がない場合でも記載した。

●平成時代については、歌会を催し、宮中関連行事・神道関連行事・伝統祭祀・文化事業に和歌詠進経験のある流派(和歌を職業としたことのある流派)のみを掲載した。

●現在も存続している家系については、プライバシー保護のため、判明していても掲載していない内容がある。

●宮家については、ほぼ全て掲載した。

●堂上家・公家・公卿ではない貴族も歌道家となった例または時期があるため、これらは全て「貴族」と記した。

●歌道を継承する旧華族・巫女・比丘尼・家政婦などへの直接のインタビューに基づく記載がある。

●「戦前」とは、第二次世界大戦(特に太平洋戦争)の勃発以前で、第一次世界大戦の終結以後を指す。

●参考文献は当表紙の最下部に掲載した。

序文 岩崎 純一 平成23年7月6日 筆

和歌がいつ、どこで、どのようにして誕生したかは定かではないが、このような定型詩が日本だけのものでないことは確実である。そして、あらゆる定型詩が、文芸・文学の意識によってではなく、鳥の規則的な鳴き声のように、人間の規則的な「鳴き声」として始まったことも確実である。日本列島では、定型詩が、縄文人や弥生人のアニミズム・自然崇拜・マナ(霊)信仰・太陽信仰の賛歌、原始神道・シャーマニズムの呪術・祭祀の言葉、鬼神を呼び寄せたり追いやったりする呪文、男女相互の求愛行動すなわち歌垣(うたがき)などとして自然発生的に始まったことも確実である。『万葉集』は、その頃の粗野だが素朴な日本人と日本列島の実状を、確かに語っている。また、岡山県や兵庫県などに見られる女系女子の巫女神道系歌道家も、同様である。

その頃は、それらの言葉(言霊)は「うた、うたい(歌、唄、詩、謡)」でしかなかった。「和歌」とは、無論、漢詩・朝鮮の定型詩や、国内の漢風・朝鮮風の定型詩に致し方なく対峙するため、後世に「うた」、「やまとうた」などの大和言葉に代わって作られた漢風異称である。「やまとうた」でさえ、本来は「やまと(日本)」を省略して「うた」としてよいのであって、遣唐使廃止直後に編まれた『古今集』の仮名序で、これを「やまとうた」と宣言した紀貫之は、明らかに大陸の定型詩に対する我が国(大和の国)の定型詩文化の固有性を悟り、誇り、また愛している。

さらに、「歌道」とは、紀伝道(文章道)に対して、紀貫之や凡河内躬恒が初めて唱えた「うたのみち」(『三月三日紀師匠曲水宴(紀師匠曲水宴和歌)』など)を、漢風・有職故実風に音(おん)で読んだ熟語である。和歌の内容(日本列島の四季や恋)はともかく、歌題の類型化・組織化、歌判の方法や歌壇の運営規範・礼儀作法の整備、和歌に関する文献学・有職故実研究の手法などは、律令制の整備と共に、当初は中国風・漢詩風を模倣して(しかし当然、日本風に改変しつつ)行われたのである。このことは、後世「仮名」・「女手」が、「真名」・「男手」である漢字から見た異称または蔑称として生じたのと同様であり、その意味では当初、我が国の人々の意識において、漢詩は男のもの、和歌は女のものであったのである。(そして、さらに後世、『万葉集』が「ますらをぶり」と称えられ、『古今集』が「たをやめぶり」と揶揄される時代が、到来するのである。)

元を辿れば、「すめらみこと」、「おほきみ」を漢風に「天皇」としたのも、中国文明の力量に圧倒された当代の人々の苦肉の策である。「勅撰和歌集」なる概念(和歌集編纂の勅命)も、中国皇帝風の天命を非常に強く意識したものであり、「歌道」意識の確立期に同時に生じたことは、偶然ではないのである。

日本列島の民が、歌垣の時代を経て、長歌、旋頭歌、仏足石歌、短歌(または単にこれを和歌という)、俳句、近現代短歌(または単にこれを短歌という)を生み出してきたのと同様、大陸の民は漢詩を生み出し、朝鮮半島の民は郷歌や時調を生み出し、琉球の民は琉歌を生み出してきた。しかし、殊に朝鮮のそれらは(朝鮮の言語表記体系が、口訣・吏読・郷札などしかなく、庶民への文字体系すなわち訓民正音・ハングルの普及は15世紀以降であったことを主な理由として)文献が極めて少ない。但し、そのことは各言語文化・文明の優劣を全く決しない。豊富な和歌・定型詩文献を有する我が国の民が自らこれらを調査研究することは、我が国のみならず、多くの隣国(ヴェトナムなど東南アジアや環太平洋地域を含む)と世界の言語文化の理解につながるのである。

芸道意識としての歌道は、『古今集』成立・国風文化期に確立し、六条源家・六条藤家・御子左家などの初期の歌道師範家が敷いた師弟制度で発展したのち、御子左流歌道から二条・京極・冷泉の三派に分かれた。そして、いつのまにか歌道は、男系男子当主を師範とする歌道師範家が担うようになった。連歌、俳諧連歌が隆盛し、国学・古道による『万葉集』・『古今集』解釈が現れる中、二条派歌道の系譜では、芸術至上主義的な価値観のもと、絶対的神秘化を押し進め、「古今伝授」と呼ばれる秘伝的継承を繰り返し、「御所伝授」を生んで明治期の御歌所へと継承されたかと思えば、「地下伝授」にまで裾野を拡大し、全国に秘密歌壇を形成した。京極派は室町時代に早々に衰退し（現代によやく見直され）、冷泉家は何とか婿養子を迎える女系女子血統として現代に生き残り、そうかといって二条派も今は昔の「芦屋の里に飛ぶ蛭」のごとく、アラギ系近現代短歌の完全支配に呑み込まれた。

ここに表向きは、全ての旧派歌道はその歴史に幕を閉じた。これは当然、近代以降に正岡子規、与謝野鉄幹、萩原朔太郎らの実に激しい罵詈雑言によってその価値そのものを「愚劣」と否定されて以来、到来が予定されていた結果でもある。

しかし、何よりもまず、和歌愛好家が現に存在する以上、歌道もまた生き残っているはずである。そもそも現在でさえ、歌道の継承者はかの冷泉家だけではない。歌道（とりわけ、古今伝授などの秘伝的歌道）の一部は、御歌所に入り、大寺院・教導職・社寺局・神社局・神祇院に入り、出雲大社教や黒住教などの教派神道系新宗教に入り、近衛兵の家系に入り、また一部は、大和朝廷系のあらゆる歌道と異なる原初的定型詩を持った古代四大王国（とりわけ、吉備王国）の末裔である岡山の巫女神道系歌道家に再び入った。

社家に歌道がよく残っているのは、和歌そのものが巫女の神託の言葉と未分離の時代があり、元より歌道（当時は単に「歌」）と巫女神道（当時は単に「惟神道（かんながらのみち）」）とは不可分のものとして同時に生じたこと、そして、巫女禁断令で巫女の託宣が禁止された近代の神社神道行政においてさえ、教導職に歌人・俳人が優先的に任命されるなど、神社神道も和歌を利用したことによる。とりわけ、御歌所に優先的に召されたのが岡山や兵庫など山陽地方の国学者・神道家たちであったことは、偶然ではない。これらの地は、ヤマト王権以前の縄文系・巫女神道系歌壇文化と、ヤマト王権以降の男系男子歌道師範家文化との、極めて重要な結節点であるのだろう。

無論、そうとは言え、歌道（歌論・歌学）は現在、一部の貴種の家系、歌道師範家、地方の巫女神道社家、旧大寺院・教導職・教派神道系社家、和歌の愛好家・好事家などを除いては、壊滅的状况にあることは事実である。和歌・歌道と縁のない大多数の国民は、当然、今後ともその生活で全く差し支えないのである。しかし、日本の伝統精神なるものをあれほど強硬に定義して国民に流布せんとしている（表向きは民間団体だが、実態は国家組織である）神社本庁やその関連団体である神道政治連盟などが、かつての御歌所・教導職・神社局・神祇院のような立派な歌道を有さず、その構成員らが和歌も詠めず古典も読めないことは、論理矛盾にほかならず、これらの組織が日本の国体を主導する限り、和歌をはじめとする日本文化の行く末は見るも明らかである。

本資料は、岡山出身者を中心とする和歌愛好家、巫女神道系歌道家が、我が国の歌道を総覧するため、作成する資料である。但し、郷土文芸資料ではなく、あくまでも日本列島全土、ひいてはかつて大東亜共栄圏にあった和歌文化をも網羅する汎用的な学術研究教育資料であるので、いかなる人々にも利用可能である。

(1) 巫女神道・巫女教(斎の巫女・斎女の神道)・原始日本神道・古道歌壇(縄文・弥生時代、列島先住・先占の日本列島民、太古の帰化渡来人)

大陸・朝鮮・アジアの諸言語と日本語・和歌(倭歌)の起源(歌垣・歌掛き・懸け合い・嬬歌・口寄せ)

流派名	本拠地	代表的歌人・歌論者・当主	流派の主体	流派の成立時期・成立事情 (cは世紀)	特徴	衰退・分裂・断絶の時期 (cは世紀。血統断絶の場合、掲載可能な限りその旨を記す。) ●衰退・分裂・断絶に至る記述 ◆は存続についての記述	衰退・分裂・断絶の理由 ●最終断絶以外(一時的な衰退など)の理由も記載した。 ◆は存続についての記述
-----	-----	--------------	-------	------------------------	----	---	--

言葉・歌の側面(歌垣・歌掛き・懸け合い・嬬歌・歌謡・口寄せ)と巫女神道・巫女教の側面(鬼道・呪術・神懸り神事・巫女舞・巫女神楽)が未分化である時代

●日本語(ここでは、漢字の音ではなく、訓の集合であるヤマトコトバの最古のもの)が、いつ、どこで、どのようにして誕生したかは、和歌(古くは「倭歌」と書いた)のそれ以上に定かではない。但し当然、古代四大王権(大和、筑紫、出雲、吉備)の時代には、統一的な「日本語」、「日本」という認識が列島民になく、そのような統一言語や統一国家の存在もない。百済と手を結び、反新羅・反唐主義(白村江の戦いがこれを象徴)を採った当時のヤマト王権が日本の政権(ひいては現在の立憲君主制)そのものとなるまでは、筑紫や吉備は新羅と連合してヤマト王権に反抗したのである。

本資料作成者の多くを占める岡山県出身者(の知見)が見る限りでは、「扶余・三韓・高句麗・新羅・百済・日本語族」の下位に「三韓・新羅・吉備日本語派」と「扶余・高句麗・百済・大和日本語派」とを並立させる判断もあり得る。事実として、新羅の版図に吉備日本語らしき(現代日本語と異なる)地名が見られるのであるし、百済語といっても、王族・上流階級(高句麗の出身)がいれば扶余高句麗語・扶余百済語を、庶民が三韓(韓系)百済語を話しており、両者は語派レベルでなく語族レベルで異なる言語である。大和、筑紫、出雲、吉備の支配層・庶民間、支配層どうし、庶民どうしの言語が同一である根拠はどこにもない。

この他、扶余・三韓・高句麗・新羅・百済・日本語から三韓・新羅語を除くべきとする「扶余語族」説(「日本・高句麗語族」説)、日本語を統一日本語と見て扶余語・新羅語との関連を指摘する「扶余・新羅語族」説、三韓百済語を漢語系と見る「シナ・チベット(・三韓)語族」説など、様々な学説がある。いづれにせよ、現在の朝鮮語(韓国語・北朝鮮語)は、当時の韓系諸語の直系言語ではなく、新羅語の方言であると見られる。当然、北海道や東北、北陸に分布していたアイヌ語、ニブツ語、ツングース語、ウィルタ語、オホーツク語なども考慮すると、正確な系統判断は極めて困難である。(琉球語については、大和語すなわち日本語の方言ないし同語族・同語派であることは明らかである。)

以上を踏まえれば、日本語は、ヤマト王権連合(葛城氏、平群氏、巨勢氏、秦氏などの朝鮮・百済系帰化渡来人連合)が自ら発案した言語である可能性は低く、神武東征神話に見られるように、末期渡来系氏族が朝鮮から日本列島に辿り着いた後に、山陽・山陰地方の言語(縄文時代からの倭語)を吸い上げながら東進し、それらの氏族・豪族の言語(母語)がいつのまにか百済語から倭語に切り替わったことによって得られた言語である可能性が高い。このうち、今度は畿内中央から軍団を派遣して、出雲と吉備の王国勢力や東北原住民・蝦夷を滅ぼし、ここに統一倭語(現在の京都方言や関西方言の原型)が完成するのである。

元を辿れば、「マナ・ひ・たま(霊)」や「うた、うたい(歌、唄、詩、謡)」といった単語は、ヤマトコトバそれ自体でもあり得る(そう呼んでもよい)が、他のアジア・環太平洋地域から入った「pi・phi・hi」や「uta」がヤマト王権の言語に取り入れられたものでもあり得る。その時期は、「タケ・チク(竹)」や「ウメ・バイ(梅)」の音訓が列島に流入した時期よりも、早期であるはずである。今や我々日本人は、「タケ」や「ウメ」を漢字音ではなくヤマトコトバであると信じている。しかしこれらは、シナ・三韓語系の音である可能性が高いのであって、百済・ヤマト王権言語系の訓ではない。ヤマト王権が征服した筑紫、出雲、吉備地域にあった言葉である可能性のほうが高いのである。すなわち、「和歌(古代短歌)は、(近代)短歌に比すれば、ヤマトコトバで詠むべきである」かもしれないが、そのヤマトコトバ(大和の言葉)とて、筑紫、出雲、吉備の言葉、そして元を辿れば中国大陸や朝鮮半島の言葉の「器用で優れた寄せ集め」なのである。

●さて、和歌の起源は、「歌垣・歌掛き・懸け合い・嬬歌(かがい、東国方言)」や「女系女子の巫女(斎女)神道・鬼道における呪術・口寄せの言葉」、要するに、神や人の心に(対象に手を触れずして)入り込むことのできる恋や言祝ぎや呪いの言葉(呪歌・神楽歌・巫女神楽)であった。このことを明確に述べた慧眼の学者に白川静(漢文学者)がいるが、白川は『万葉集』の歌も「呪歌」であると述べるどころか、万葉を中心に日本語を見る学者でもあるため、万葉までの歌と(呪歌でなく修辞技巧の文芸である)勅撰集の歌の相違を強調する立場ではある。

歌垣は、琉球(沖縄)・南西諸島や蝦夷(東北・北海道)に近代までよく残っていた。また、口寄せ・神懸り神事もこれらの地域によく残り、とりわけ巫女のノロ・ユタ・カミンチュ(琉球)、トキ・ホゾン(奄美群島)、サス(宮古列島)、ムヌチ・カンピトゥ(八重山列島)、イタコ(北東北)、アイヌの巫女らが行っていた。

いずれにせよ、原始和歌が呪歌であったことを物語る氏族は、確認できる限り日本最古の豪族である葛城氏や、他の男系男子氏族(葛城氏、平群氏、巨勢氏、秦氏、蘇我氏、物部氏など)ではなく、女系女子の巫女神道を有する氏族の息長氏や、女系女子・巫女神道文化(とりわけ太陽信仰)を比較的長期に亘って維持した和邇氏・吉備氏・和気氏などである。

もともと、葛城氏などの男系男子氏族も、元は女系女子氏族であったと考えられる。但し、これらの氏族は、「氏(うじ)」を冠せられた頃には男系男子血統となっているため、正確には、かつて「女系女子部族」であったというほかになく、「女系女子の巫女を事実上の長者とする氏族」と呼べる血統は息長氏など数氏しかない。

また、『新撰姓氏録』では、渡来系の氏族が「諸蕃」として分類されているが、実際には、「皇別」・「神別」氏族にも渡来系氏族が極めて多く、あるいはヤマト王権そのものが、渡来系の氏族集団による連合政権であった可能性が高い。

その後のほとんどの神道家・歌道家の当主が男系男子となったことは、最終的に列島を統一した古代王権が男系男子王権(大王の勢力)たるヤマト王権であったことと当然関係があり、または同義である。本資料では、この経緯も解説しつつ、和歌の歴史を総覧する。

女系女子のシャーマニズム・巫女神道(女王卑弥呼の邪馬台国・倭国連合など)と呪歌・巫女舞歌道の時代、およびその系譜を引く近現代の巫女神道社家歌壇
※ この項の各神道・歌道流派名の多くは、当時の呼称ではなく、現代の巫女および巫女神道社家(本資料の協力者ら)と、本資料の筆頭著者の岩崎による、便宜上の命名である。

本項は、別掲の『巫女神道吉備派道統総覧』を見よ。

古代四大王権(筑紫、出雲、吉備、ヤマト中央王権連合)の歌壇と、ヤマト王権・ヤマト語文明圏の最終勝利・倭国統一

流派名	本拠地	代表的歌人・歌論者・当主	流派の主体	流派の成立時期・成立事情 (○は世紀)	特徴	衰退・分裂・断絶の時期 (○は世紀。血統断絶の場合、掲載可能な限りその旨を記す。) ●衰退・分裂・断絶に至る記述 ◆は存続についての記述	衰退・分裂・断絶の理由 ●最終断絶以外(一時的な衰退など)の理由も記載した。 ◆は存続についての記述
古代四大王国以外の地方歌壇	全国	<p>★古代王国は、王権の版図で言えば筑紫、出雲、吉備、ヤマトの四権が群を抜いて大きく、築造した古墳の規模で言えば吉備、毛野、ヤマトの三古墳圏が群を抜いて大きい。列島にはその他にも、日向、尾張、美濃、越などの王権があった。但し、和歌文化の存在が確実に追跡できるのは、版図の大きな四大王国のみである。筑紫・太宰府はヤマトと類似の歌壇を有し、出雲は(伝説上の)和歌の発祥地の矜持をもって歌壇を形成し、吉備は最後の巫女神道系歌壇を維持してきた。但し、毛野は、『万葉集』における常陸筑波山の歌壇の記録のように、歌壇文化を有した可能性が高い。他の王権の圏内も同様であろう。</p> <p>★他の地方勢力も、筑紫、出雲、吉備と同様に、古墳時代の中盤から終盤まではヤマト連合(とりわけ武内宿禰系の葛城氏、平群氏、巨勢氏、蘇我氏や秦氏など)に抗戦したが、敗北し、連合に取り込まれて(連合の構成豪族となって)太古の倭語方言・定型詩を失った(または畿内・中央に提供した)。</p>					
出雲歌壇	出雲	『万葉集』では、詠み人知らずの出雲の歌多し 出雲大社	<p>★旧派和歌がそのほとんどの時代において京都・宮廷を舞台として歴史を刻んできたのに対し、伝説上、和歌(正確には短歌)の発祥地とされるのは出雲である。ヤマタノオロチ(八岐大蛇)を退治したスサノオノミコト(須佐之男命)が詠んだ「八雲立つ出雲八重垣妻籠に八重垣作るその八重垣を」が最古の和歌であるとされ(『記紀』が記す)、従ってスサノオは我が国初の歌人であることになるが、当然和歌史の観点からは疑わしく、あくまでも伝説の域である。</p> <p>しかしながら、古代出雲は古代吉備と並び、筑紫や大和よりも早期から歌壇を有したことは事実であると目される。但し、出雲と吉備の歌壇は、巫女神道やト占と連動した、原始の歌壇に近い歌壇、すなわち、長歌や原始的な祝詞をいわゆる「山彦」などの効果を利用して山や谷で唱う形をとった、男女の恋情の掛け合いや自然崇拜の儀式的の場であったと見るのが自然である。その意味で、出雲や吉備の和歌が「うた、うたい(歌、唄、詩、謡)」であるとすれば、京都宮廷歌壇や太宰府歌壇の和歌は「ふみ(文)」であると言える。</p> <p>『出雲国風土記』には、記紀神話とは異質の神話の伝承が記され(国引き神話など)、また、中央の神祇官や他の各地の風土記には記載がない神社が記録されている。そのため、出雲王国以後の出雲の神道歌壇の実態はほとんど不明である。この点は、神道系宗教歌壇(巫女神道、神社神道、大教院、教派神道などの歌壇)の歴史を比較的追跡しやすい吉備地方とは大きく異なる。</p> <p>邪馬台国(卑弥呼、日の巫女の勢力)と、この後身またはこれを吸収したヤマト王権の巫女神道が、中央集権的であると仮定するならば、出雲や吉備の巫女神道は、王国・古墳文化の衰退後も、朝廷の傘下に半ば入りつつも、比較的長期に亘って独自性の強い歌壇を有したであろう。</p> <p>出雲では、古代歌壇は別にして、実に近世後期まで、長きに亘ってまとまった歌壇を持たなかった。出雲阿国などの出雲大社の巫女は、未だ神道と歌道とが未分化の巫女舞歌謡やかぶき踊りを舞い、謡うばかりであった。出雲に再び和歌文化をもたらしたのは、京都や岡山の歌人たちである。まず、明珠庵釣月が二条派歌道を、岡山の澄月が山陽の歌学一般を、出雲へ持ち込んだ。そして、釣月・澄月門下で、出雲松江で酒造・海運業を営む小豆沢家が歌壇を形成し、近世出雲歌壇が本格化した。千家家による梅廼舎・鶴山社中と北島家による亀山社中がその代表であり、これら出雲・杵築社中の文芸意識は二条派とも岡山歌道とも相性がよかった。</p> <p>しかし、時は既に近世末期であった。そして、千家家が明治政府・伊勢神宮の神道行政に異を唱え、かつ敗北したことで、出雲の旧派歌壇は消滅した。現在は、歌道こそ継承していないが、出雲大社権宮司の千家国麿と高円宮家の典子女王の結婚が、かつて(古代と近代に)敵対した出雲文化と御所文化の再会の象徴的な出来事となった。</p>				

吉備歌壇	吉備 『万葉集』では、 詠み人知らずの 吉備の歌多し 吉備氏 下道罔勝 吉備真備 吉備由利 吉備泉 吉備津神社 吉備津彦神社 和氣氏 和氣広虫 和氣清麻呂 円珍	<p>★吉備王権は、筑紫、大和、出雲と並ぶ古代日本の四大王権の一つである。墳丘墓・古墳文明として見た場合、その規模は筑紫、出雲を凌駕し、大和に次ぐ第二位である。埴輪は、吉備の墳丘墓の特殊器台・特殊壺が起源である。また、製鉄王国としては、最大規模である。他の王権との関係は古事記・日本書紀や先代旧事本紀においても不明確であるものの、ヤマト王権に反抗的だった出雲王国などに比べれば、中立的な吉備王国として、『記紀』にある通り、吉備豪族の時代からヤマト王権と(否応なしに)強い結びつきを持ってきたと考えられる。中には、邪馬台国が吉備にあったとする邪馬台国吉備説も存在する。</p> <p>吉備・新羅連合軍が雄略天皇の大和朝廷に反乱を起こし(吉備氏の乱、推定463年)、敗れて以降は、大和朝廷の優位が確定したが、吉備王国および吉備地方の歌壇そのものに余力があり、これらは先細りながらも綿々と継続された。</p> <p>吉備歌壇は、巫女神道やト占と連動した、原始の歌垣に近い歌壇として、大和歌壇よりも早期から成立していたものと見られる。あるいは、吉備王国以前から在地住民によって成立しており、吉備王国でさえ、これを取り込んで支配下に置いたにすぎない可能性もある。『万葉集』にも、吉備人の歌および詠み人知らずの吉備ゆかりの歌が多数採られている。(『吉備ゆかりの万葉を歩く』高見茂、吉備人出版、1998年などが紹介。)</p> <p>岡山には、第五の元伊勢神宮(「元伊勢」たる名方浜宮(なかつのはまみや)が多く存在し(『倭姫命世記』に豊鍬入姫命の巡歴として記載あり)、吉備国内宮(岡山伊勢内宮)はその中心であった。いわゆる伊勢市の伊勢神宮内宮のおよそ四十年前に創建されたと考えられるが、岡山大空襲で吉備国内宮は失われた。全国の内宮のうち、爆撃で焼失した内宮は岡山のもののみとなっている。</p> <p>吉備国内宮の祭祀・秘儀などを執り行っていた神官・巫女の家(神官家・社家)は、同内宮の焼失と小規模での再建後は、一般家系となっているほか、同内宮や県内の他の元伊勢の社家として細々と存続している家系もある。ただし当然、華族制度や近代社格制度の廃止により、多くは現代的な職業としての神職・巫女となっている。</p> <p>岡山県内の他の元伊勢には、伊勢神社、穴門山神社、神明神社などがあり、吉備王国時代(領域は岡山県～広島県東部～兵庫県西部～香川県島嶼部～徳島県東部～和歌山県西部)を含めると、今伊勢内宮外宮(広島県福山市)、伊勢部柿本神社(和歌山県海南市)、国主神社(和歌山県有田郡有田川町)などがある。これらの神社には、大和朝廷以前の古代歌垣の痕跡が残る。</p> <p>県内には、縄文・弥生文化や古代吉備王国の繁栄により、国内最大級の墳丘墓(楯築墳丘墓など)、大和朝廷に次ぐ規模の古墳群(造山古墳など。造山古墳を応神天皇陵とする説は、『神道道統図』や『吉備・ヤマト相関図』で詳説)、マヤ文明型ピラミッドの仏教遺跡(熊山遺跡)など、有史以前、朝廷・日本誕生以前に遡らなければ実態が分からない物珍しい史跡が多くある。歌壇についても、極めて原始的性質の色濃いものであったと考えられる。</p> <p>吉備王国歌壇ののち、多数の宗教歌壇が成立したのも、同県の特徴である。これは、同県が大和と並ぶ神道の中心地であったことに加え、全国有数の新興宗教の発祥地であることに起因する。浄土宗宗祖の法然や臨済宗宗祖の栄西(吉備津神社社家出身)が岡山の出であることはもちろん、江戸幕末三大新宗教のうちの黒住教、金光教も岡山が発祥地であり、これらいずれにも宗教歌壇の成立が見られる。また、吉備王国衰退以降も、吉備地方、県内からは朝廷歌壇、そして近代の旧派歌壇の中核部の人材を立て続けに輩出しており、尾上柴舟、木下幸文、木下利玄、小寺家、正徹、澄月(「平安和歌四天王」の一人)、土肥家、萩原広道、平賀元義、藤井高尚、藤井高雅、正富汪洋、正宗家、岡家などが代表的な歌人・歌道家である。(これらは、項目を立てて別掲、詳説。)</p>
------	--	---

<p>吉備氏 :歌垣や「うた、うたい(歌、唄、詩、謡)」から和歌への過渡期を経験した太古豪族</p>	<p>吉備国 備前国 備中国 美作国 播磨国 備後国 安芸国 周防国 長門国 讃岐国 岡山県 兵庫県 広島県 山口県 香川県</p>	<p>吉備氏 稚武彦命(ワカタケヒコノミコト) 吉備下道前津屋(シモツミチノサキツヤ) 吉備上道田狭(カミツミチノタサ) 吉備武彦 吉備御友別 吉備鴨別 下道罔勝 吉備真備 吉備由利 吉備泉</p>	<p>★吉備氏 血縁(豪族) 皇別(孝靈天皇)系 または、皇統とは別系の女系女子家系 家祖:稚武彦命(ワカタケヒコノミコト)</p>	<p>上代～ ●別掲のヤマト中央王権連合の構成豪族、すなわち葛城氏(確認できる限り日本最古の豪族)、平群氏、巨勢氏、秦氏、蘇我氏、(万葉期を除く)物部氏などが和歌文化を全く有していない一方、吉備氏は古くから和歌の原型とも呼べる定型詩文化、さらに遡れば歌垣(うたがき)文化を持っていた。 ●全盛期は5cであり、6cに台頭した上記豪族や別掲の息長氏がヤマト中央に現れる前に、岡山に土着していた。 ●太古の太陽信仰・自然信仰を基盤とする女系女子の巫女神道・巫女舞歌道を行っており、神道と歌道の区別はない。</p>	<p>●吉備氏は、左記の中央豪族(皇別、神別、諸蕃の連合だが、実際はほとんどが渡来系)よりも古い欠史八代系豪族である。また、倭国統一期のヤマト王権下にかろうじて残った女系女子の巫女神道歌壇は、別掲の息長氏のほぼ一氏である。これらのことを踏まえれば、出雲や吉備の倭語方言による定型詩文化が中央に流れ、ヤマト中央語で行われるようになったものが、和歌であると定義できる可能性がある。あるいは、神武東征神話にあるように、有力豪族が山陽・山陰地方の定型詩文化を吸い上げながら東進した結果、ヤマト王権に和歌が発生したと見てもよい。いずれにせよ、原初のヤマト王権自体(渡来系)は、和歌文化を自ら作り出してはいないと見られる。 ●牛窓神社(岡山県瀬戸内市牛窓町牛窓)や、岩崎がその歌碑を解説した大日女尊神社(兵庫県神戸市東灘区西岡本)などは、姫社に次ぐ神社の古式形態を残しており、これら瀬戸内海沿岸地域の神社は、巫女神道・歌垣文化を有していた各王権が男系男子のヤマト王権(大王の日本語)によってどのように滅ぼされていったかを物語る重要な物的史料である。</p>	<p>◆当時の巫女神道系の太陽信仰の一部は、岡山発祥の黒住教と金光教に流入している(幕末三大新宗教の二つ。残る天理教は現在、自然信仰の性質が消失)。但し、このような巫女祭祀はこれらの家に固有のものではなく、上代には各氏族で行われていたものの、現在は息長家や岡山の社家など数家にのみ残っているものと考えられる。 ◆また、岡山県の吉備津神社その他の古代由来の神社や旧阿曾郷(現総社市阿曾地域)に、鳴釜神事なる神事が残るが、女装した男性神職が行うことがあり、元は巫女が行っていたことを示唆する。これも、古代吉備王国の版図の各地で行われていたものが、王国の中心部(岡山県)にのみ色濃く残ったものと推測される。歌垣の類似儀式は、岡山県では平成時代まで阿哲台地域に残り、ドリーネやウバーレを神格化して行われていたほか、県以外では、(万葉に歌垣が行われたと確かに記されている)常陸筑波山に残っていた。 ◆これらにより、日本の神道・歌文化そのものが、古代のある時期において、女系女子の巫女神道(卑弥呼はその筆頭である)・歌垣から男系男子の神社神道・和歌へと変質したことが示唆される。</p>	<p>◆吉備氏血統ではないが、当時の巫女神道系歌壇は、岡山県内の社家に受け継がれている。 ◆別掲の「斎皇家」の分家は岡山県にも存在するが、その他の同県の女系女子血統の多くは、「斎」や「皇」のような特別な自称を用いない。但し、これらの家の苗字は「神社」、「神庭」、「国定」、「高祖」などで、これらは岡山県に集中的に見られる苗字である。このことも、ヤマト王権から現天皇家に至る男系男子王家とは別血統の女系女子血統による巫女神道家が、古代吉備にいくつか存在したことを物語る。</p>
<p>和氣氏 :歌垣や「うた、うたい(歌、唄、詩、謡)」から和歌への過渡期を経験した太古豪族</p>	<p>吉備国 備前国 備中国 美作国 播磨国 備後国 安芸国 周防国 長門国 讃岐国 岡山県 兵庫県 広島県 山口県 香川県</p>	<p>和氣氏 和氣広虫 和氣清麻呂 など</p>	<p>★和氣氏 血縁(豪族) 皇別(垂仁天皇、日本武尊)系 または、皇統とは別系の女系女子家系 家祖:鐸石別命(ヌテシワケノミコト)</p>	<p>上代～ ●吉備氏にやや遅れて台頭した。出自は垂仁天皇、日本武尊系であるとされており、皇別ながら、別掲の息長氏よりも女系神道・歌道を保っている。但し、吉備氏同様、神道と歌道の区別そのものがない。</p>	<p>●和氣氏についても、吉備氏と同様のことが言える。</p>	<p>◆和氣氏についても、吉備氏と同様のことが言える。</p>	<p>◆和氣氏についても、吉備氏と同様のことが言える。</p>

<p>筑紫・太宰府歌壇 ヤマト(大和)歌壇</p>	<p>筑紫 大和</p>	<p>柿本人麻呂 山部赤人 大伴旅人 山上憶良 などの万葉歌人</p>	<p>★上代・『万葉集』の時代には、歌風・血統・社会的立場などの近縁の者どうして集まって歌を詠むことはあったが、「うたのみち」・「芸道」としての「歌道」の意識は希薄であった。この時代、とりわけ弘仁・貞観時代は、漢籍・漢詩・漢文体(真名)の知見こそが氏族男子の教養であり、後世女流作家を中心に自然発生した仮名による大和言葉の表記も、未来の話である。</p> <p>いわゆる「筑紫歌壇」・「大和歌壇」などの概念も、後世の学者や万葉を愛好する当地の市民団体によるものであり、万葉歌人たちの歌壇意識は、平安後期の「六条源家」や「六条藤家」などの「歌の家」としての自覚とは異なる。現在、太宰府市や太宰府万葉会(別掲)などが「(万葉集)つくし歌壇」の名称を盛んに用いているが、万葉歌人たち自身の語ではなく、現代の造語である。</p> <p>しかし、万葉歌人たちも、大君、豪族、防人、庶民などの出自を問わず、和歌が日本固有の文芸であるとの認識はすでに有しており、橘氏・紀氏・大伴氏・菅原氏・藤原南家・藤原式家・藤原京家など、和歌に長じた家は多く存在した。ただし、これらの家は、例外なく和歌以前に大陸の文化・文明(とりわけ漢詩・漢文学・中国史・文章道・紀伝道)に長じていたがゆえに高い位階を得、政治権力の中樞を担うことに成功した家であった。</p> <p>古代四大王権のうち、筑紫国は、新羅の要請を受けた磐井が、百済と組んだヤマト王権の進軍を阻むなど(磐井の乱、527～528)、何度かヤマト王権に対して軍事的反抗を行ったものの、太宰府や鎮西府の設置により、最終的には最も大和朝廷に協力的となった。邪馬台国の所在地をめぐって大和説と筑紫説とが存在するのも、無論、古代ヤマト勢力と古代筑紫勢力の類似性・近縁性(双方が邪馬台国の性質を同等に有すること)によるところが大きい。その一方、早くからいわば朝廷の支部・出張先となった太宰府と異なり、出雲と吉備は、国(クニ)としての独自性と共に、独自性の高い和歌文化を有したと考えられる。</p> <p>各古代豪族勢力がそれぞれに独自の首長を戴く中、それまで「大王、大君(オホキミ)」と呼ばれていたヤマト王権ないし筑紫王権の首長が漢風(百済風)に「天皇」を名乗るようになり、これが確定的となったのが天武天皇の時代である。この時、出雲や吉備の人々が「大王」を「天皇」と呼び、自らの首長を凌駕する勢力の首長であると認識するより前に、九州の防人たちが「天皇」と呼び、仕えるようになったのである。これをもって、和歌も、『万葉集』をはじめとして、ヤマト王権の唄文化である以上に日本の定型詩としての位置を確定させるのである。</p> <p>次第に国風文化が花開き、紀氏は『古今和歌集』編纂の中心的存在となった。これらの家に代わって源氏や藤原北家が台頭すると、家系・血統を歌道流派とする意識が萌芽し、「六条源家」や「六条藤家」などの「歌の家」が成立した。</p> <p>なお、「平成」の次の元号となった「令和」は、『万葉集』巻五の梅花の歌三十二首の序文より採られ(于時初春令月 氣淑風和)、初の国書由来の元号となった。(但し、この万葉の序そのものもまた、張衡の「帰田賦」(『文選』)や王羲之の『蘭亭序』など、漢籍の影響を受けてはいる。) この梅花の宴は太宰府で催されたものであり、太宰府万葉会が現在も再現活動を行っている。</p>
-------------------------------	------------------	---	--

<p>和歌文化の存在が確認できない太古豪族(定型詩文化を有したが、比較的早期にこれを失い、かつ、のちの日本の和歌・歌道の誕生の前に衰亡したと考えられる、最末期の渡来人勢力)</p>	<p>大和国 河内国 和泉国 摂津国 山城国</p>	<p>葛城氏 平群氏 巨瀬氏 秦氏 蘇我氏 (万葉期を除く) 物部氏</p>	<p>左記 ●『新撰姓氏録』では、他のあらゆる氏族と同様に、皇別、神別、諸蕃に分類されているが、ほとんどが渡来系・朝鮮系(特に百濟系)氏族か。 ●これらの氏族の定型詩文化は、和歌ではなく、当時の大和言葉による郷歌や時調風のものであった可能性が高い。 ●ヤマト王権が百濟と組んだのに対し、出雲市や吉備氏を中心とする山陽・山陰豪族は三韓・新羅と組んで、ヤマト王権に対抗した。</p>	<p>●早くからヤマト王権に協力・連合したか、ヤマト王権連合の支配層それ自体を構成した男系男子氏族のうち、「臣(おみ)」ののほぼ全でと、有力な「連(むらじ)」のほとんど、とりわけ武内宿禰系の葛城氏(確認できる限り日本最古の豪族)、平群氏、巨瀬氏、蘇我氏や秦氏、(万葉期を除く)物部氏などは、渡来系の定型詩文化を持った可能性はあるが、内乱の時代にあつて安定した歌壇を持つはずもなかった。あるいは、その軍事行動自体が、地方の歌壇文化を結果的に攪乱させ、ヤマト王権の和歌へと定型詩文化を集約させた(そして自らは、和歌文化の安定を見る前に没落した)。</p>	<p>●最終的には、これらの豪族の連合体で、男系男子を大王として戴いた勢力(ヤマト王権)が日向、筑紫、出雲、吉備、越、尾張、美濃、毛野などの全王国や初期倭語・倭語方言・定型詩文化を滅ぼし、邪馬台国の支配層の言語をそのまま(東北・北海道を除く)日本列島の統一言語とすることに成功したと考えられる。邪馬台国の言語は、「魏志倭人伝」(『三国志』「魏書」第30巻烏丸鮮卑東夷伝倭人条)の分析により、奈良時代日本語系であることが分かっており、つまり現在の日本語の原型である。従って、古代四大王権のうち、ヤマトと、ヤマトに早期に追従した筑紫を除く二王権(出雲、吉備)の言語、すなわち縄文語の名残を残した言語は、ヤマト語とやや異なった倭語方言だったと考えられる。 ●『新撰姓氏録』で「諸蕃」でない氏族も、多くは渡来系の可能性が高い。この点で、別掲の和邇氏は、ヤマト連合の中央にいながら太古の太陽信仰と歌壇文化を有し、そのまま柿本家の血統につながるため、やや特殊ではある。</p>	<p>●歌壇を失い、和歌文化・歌壇も持たず、衰亡 ●これらの豪族の後に筑紫や出雲や吉備から中央政権に入った豪族たちが、郷里の定型詩文化(和歌の原型)を持ち込み、これがヤマト中央言語で詠まれるようになったものが、和歌であると考えられる。あるいは、神武東征神話にあるように、有力豪族が山陽・山陰地方の定型詩文化を吸い上げながら東進した結果、ヤマト王権に和歌が発生したと見てもよい。いずれにせよ、原初のヤマト王権自体(渡来系)は、和歌文化を自ら作り出してはいないと見られる。 ●元より、これら上代豪族の末裔か、それよりも後に日本に渡来・定着した氏族こそが、平城京・平安京の時代を作った貴族たちであり、これも当然、あくまでも便宜上、朝鮮人と問わず、日本人と言うのである。</p>	
<p>和邇氏:歌壇や「うた、うたい(歌、唄、詩、謡)」から和歌への過渡期を経験した太古豪族</p>	<p>大和国</p>	<p>和邇氏 柿本氏 柿本人麻呂 春日氏 小野氏 粟田氏 大宅氏</p>	<p>★和邇氏 血縁(豪族) 皇別(孝昭天皇)系 または、皇統とは別系の女系女子家系 家祖:天足彦国押人命(アメタラシヒコクニオシヒトノミコト)</p>	<p>●和邇氏も、吉備氏・和氣氏とほぼ同様のことが言える。ほとんど実態が不明な(和歌との関わりの軌跡もほとんど遺していない)息長氏とは異なり、古墳時代以降も本家または分家が存続し、社家や歌道家を輩出している。</p>	<p>●日の巫女(御子)・太陽信仰の源流は朝鮮半島にあり、当然、吉備氏、和邇氏、息長氏などの上代豪族・職能集団が朝鮮系渡来人である可能性は高い。 ●また、そうであるならば、和邇氏が柿本家のような有力歌人集団(柿本人麻呂などを輩出したように、多くの万葉歌人たちも渡来人なのであり、朝鮮族と倭族の区別が生じるのも、明らかにこの後のことである。万葉は、渡来人日本語と倭人日本語の合作、ないし地方の倭語方言とヤマト中央倭語の合作であるか、または両者を別の民族語と認識しないで編まれた歌集である。のちにヤマト中央倭語がすなわち日本語(現在の京都方言と関西方言の原型)となるのであり、東京標準語となっていくのである。</p>	<p>和邇氏の末裔歌壇は存在していない。</p>	<p>●他の有力豪族の台頭による没落</p>

ヤマト王権
連合が進化
した大和朝
廷・日本国に
おいて和歌
文化の中心
を担う豪族・
貴族・武家

皇親政治・豪族の歌壇以降に解説する全ての歌壇がこれに該当する。これ以降、日本列島の全ての歌壇は、天皇を君主とする統一国家の内部で展開する歌壇であると解される。

主にヤマト王権・豪族政権下に創生したが、女系女子の巫女神道における歌垣・巫女舞歌道を原初に近い姿で維持した歌壇

流派名	本拠地	代表的歌人・歌論者・当主	流派の主体	流派の成立時期・成立事情 (○は世紀)	特徴	衰退・分裂・断絶の時期 (○は世紀。血統断絶の場合、掲載可能な限りその旨を記す。) ●衰退・分裂・断絶に至る記述 ◆は存続についての記述	衰退・分裂・断絶の理由 ●最終断絶以外(一時的な衰退など)の理由も記載した。 ◆は存続についての記述
齋皇(日の巫女の王)歌壇	近江国河内国播磨国吉備国兵庫県(六甲)岡山県(総社、倉敷、上道、瀬戸内、備前)	各代の齋皇(女系女子)阿加流比売(アカルヒメ)を自らに降ろすことができる巫女である	血縁 皇別(女系血統女子) 各代の齋皇(女系女子)	上代～ ●齋皇を中心とする歌壇。 ●齋皇を出した原始祭祀氏族である息長氏は、『新撰姓氏録』で皇別とされるが、齋皇制度がヤマト王権から出たのではなく、列島各地にあった女系女子の巫女神道の女王制度のうち、初めてヤマト王権に取り込まれたものが「齋皇」と呼ばれたと考えられる。	●齋皇は、現在確認できる限り、伊勢の齋王(齋宮)や賀茂の齋院よりも古い女系女子王権である。 ●兵庫県から岡山県、すなわち神武東征の経路(「元伊勢」と呼ばれる原始神宮の痕跡)に沿って、その末裔を称するいくつかの社家が残るが、その王権や連合政権が卑弥呼・邪馬台国やヤマト王権とどのような関係にあったかは分かっていない。しかし、これらの家系は現在も女系女子血統にあることや、巫女舞を舞いながらの和歌詠草(呪歌としての歌道)を継承していることなどから、皇別系家系であるとしても、男系男子血統の女子しか就任できない齋王(齋宮・齋院)よりも太古の原始女系王権の系譜を引くことだけは確認できる。 ●齋王制度の発生により、齋皇などが司った巫女神道は衰退に向かう。	存続 ◆男系男子(一時的には男系女子)の天皇および男系女子の齋宮・齋院から構成されるヤマト王権(現天皇制につながる)の血統システムとは異なる、女系女子の巫女舞呪術による歌詠みが、兵庫県から岡山県にかけて残る。これらの女系巫女神道家のうち、兵庫県の家系は皇別、岡山県の多くの家系は縄文系・非ヤマト系であると称している。歌垣、息長氏や岡山県の巫女神道の解説を見よ。 ◆息長家などの巫女神道の祭祀は、(男系男子家系たる)現皇室とも大きく異なっている。無論、現皇室においても、宮中三殿の内掌典その他の巫女とその祭祀は、神社本庁の神社神道における巫女とその祭祀の地位よりも遥かに上位にあり、天皇概念(「現人神」性)自体が巫女らの祭祀によって保証されている。中世までは、天皇概念は齋王(齋宮)や齋院が保証していた。 ところが、息長家などの巫女神道の立場にあつては、巫女が家の本体であり、巫女の頭(かしら)が首長・当主(日の巫女の王)であるため、理論上、息長家の女系女子の首長は、天皇と同位の存在であり、むしろ日本(日の本の国)の首長(大王・天皇)の地位を(『記紀』、神武東征神話を創作した渡来系朝鮮人・百濟人やヤマト王権の)男系男子に奪われたとする主張が生じることになる。すなわち、巫女神道家においては、『記紀』に記された欠史八代が、それらの男系男子天皇による後世の捏造である(吉備豪族などを意図的に皇別氏族に置いて懐柔している)と見るが、元より捏造か否かに関係なく、別に女系女子の王たちが存在した時代として理解されている。このことは、親百濟・反新羅・反唐主義の当時のヤマト王権に対し、親新羅的な立場をとったのが出雲と吉備であったことにも矛盾しない。 ◆巫女禁断令以降、巫女弾圧策の一環として、巫女を欧米の宗教者の男性の妻としたり欧米の魔術師(魔女)に転向させたりする形での国外追放と家系根絶が行われたが、齋皇家は特にその影響を受けた家系であり、特に著しく欧米の血が混じっている。	

息長氏

全国、とりわけ、近江国出雲国河内国播磨国吉備国島根県兵庫県(六甲)岡山県(総社、倉敷、上道、瀬戸内、備前)

息長氏
日子坐王・彦坐王(ヒコイマスノミコ)
袁祁都比売命(オケツヒメノミコ)
山代之大筒木真若王(ヤマシロノオオツツキマワカノミコ)
丹波能阿治佐波毘売(タニハノアヂサハヒメ)
迦邇米雷王(カニメイカツチノミコ)
息長宿禰王
高材比売(タカキヒメ)
神功皇后(息長帯比売命、オキナガタラシメノミコ)
息長日子王(オキナガヒコノミコ)
息長真手王

★息長氏血縁(豪族)皇別(応神天皇)系
または、皇統とは別系の女系女子家系
家祖: 意富富杼王(オホホドノオホキミ)

上代～

●『記紀』に息長氏とされる人物が多数記され、『新撰姓氏録』にも収められるものの、現代に至るまで「謎の氏族」と言われ、実態不明。後述の他の古代豪族(橘氏、紀氏、大伴氏など)の台頭を待たずして既に歴史の表舞台から消えているが、巫女神道・鬼道に基づく歌壇を形成していたと考えられる。
●しかし、欠史八代皇別系の和邇氏・吉備氏や垂仁天皇系の和気氏ほどには古い氏族でない。

●息長氏は、現代に至るまでその末裔を名乗る女系女子家系が存在するにもかかわらず、上古代の実態のほうが極めて不明確である稀有な氏族である。主要な学説は、息長古墳群の存在や息長の地名の名残をもって、その本拠地を古代近江国坂田郡(現滋賀県米原市)としているが、息長宿禰王の子の代(神功皇后や息長日子王)に播磨・吉備(古代吉備国)に勢力を伸ばしていることから、古代吉備国が本拠地である可能性もある。
●息長氏の軌跡の解明は、神道や和歌の源流の解明でもあると考えられる。息長氏は、長らく「神社」を「姫社(ひめこそ)」と呼んできた。岡山県総社市福谷には「姫社神社」が存在するが、同地域では「姫社」(すなわち、ヤマトコトバ、訓)は「神社(ジンジャ)」(漢風の音)の古称で、「姫社神社」は近代社格制度以降の名称であり、従って、同神社・同地域は神社の発祥地(の一つ)である可能性がある。
●現在、息長氏の直系女系女子を名乗る一族は、六甲に居を構え、男系男子の現皇室とは異なる伝統祭祀を営んでいると報告しており、歌壇についても旧派歌道の歌壇が存在する。
●その他、『岩崎純一全集』の神道の巻に、岡山県の巫女と岩崎が共に息長氏について語った談義を収録。

存続

◆左記の通り、息長氏の女系女子血統(日の巫女の王家、斎皇家)であると名乗る一族が播磨(兵庫県、特に六甲)と吉備(岡山県、特に総社、倉敷、上道、瀬戸内、備前)に散在する。
また、息長氏ではないが、女系女子血統の神道と歌壇を継承し、日本の巫女神道や歌壇・「うた、うたい(歌、唄、詩、謡)」の源流を名乗る家は、全国のうち滋賀県や岡山県に偏っていくつか残る。(後述)
いずれも、旧派歌道(正確には、旧派歌道成立以前の巫女神道の儀式)を伝承する。
◆とりわけ、六甲の息長氏の女系女子血統では、自身の首長を「斎皇」、家を「斎皇家」と称している。
◆このように名乗る理由として、これらの家の祭祀・儀式の内容が、確かに現在の神社神道や旧派歌道から大きくかけ離れていることが挙げられる。また、京都以外の周辺地域にこのような家が残っていることは、奈良・京都(朝廷・宮中)の神道・歌道が、これらの家や地域から見て異質に進化したことを意味する。

(2) 斎王系・後期巫女神道系歌壇

主にヤマト王権・豪族政権下に創生し、女系女子の巫女神道における歌垣・巫女舞歌道から訣別しつつも、依然として女性の託宣・呪的行為が中心である歌壇

流派名	本拠地	代表的歌人・歌論者・当主	流派の主体	流派の成立時期・成立事情 (cは世紀)	特徴	衰退・分裂・断絶の時期 (cは世紀。血統断絶の場合、掲載可能な限りその旨を記す。) ●衰退・分裂・断絶に至る記述 ◆は存続についての記述	衰退・分裂・断絶の理由 ●最終断絶以外(一時的な衰退など)の理由も記載した。 ◆は存続についての記述
-----	-----	--------------	-------	---------------------	----	--	--

多くの巫女が巫女連合を形成し、男系男王とは限らない王(特に、巫女を兼ねる女系女王や、女系男王)を鬼神道で補佐する体制が、男系女帝・男系巫女を男臣らが時に恐れ、時に利用する体制に変質したのは、奈良時代である。確認できる限り、全ての女性天皇は男系で、かつ内乱鎮圧の呪術指導者・巫女として臨時に即位しており、天皇は元来あくまでも男系男子に限るという意識の萌芽が見られる。

特に孝謙天皇の称徳天皇としての重祚、武力による淳仁天皇排撃においては、公卿・男臣ら(藤原仲麻呂、和氣王、道鏡、弓削浄人、和氣清麻呂ら)が、立場は異なれど、女帝の巫女性(霊媒体質・神託受信体質)を恐れ、あるいは利用した点で、注目すべきである(藤原仲麻呂の乱、宇佐八幡宮神託事件)。

男臣らは、あくまでも道鏡など男臣のいずれかが皇位に就くことを画策し、称徳天皇については、その巫女性のみを都合よく利用している。孝謙・称徳天皇派には吉備真備がおり、これは吉備の女系巫女神道の呪術の技法を男系女帝に適用しようとした例でもある。道鏡は当時、男子の託宣者・霊媒たる「おかんなぎ(甕・男巫)」の一人であり、この時点で、皇位には、女系女子はもちろん、前天皇直系血統の女子でさえなく、血統を問わない男子(とりわけ、呪術に基づく武力に長けた男子)が就くべきとされていたことが分かる。

称徳天皇は日本史上唯一、出家のままで即位しており、その霊媒体質の再利用が急務であったことを物語る。一方で、すぐに天皇家は万世一系であるべきとの思想が生じ、道鏡の立場も通用しなくなる。この時に群臣らが用いた手法は、称徳天皇の遺宣なるものであり、もはや女帝は利便な託宣祭具にすぎなかった。

この内乱・女帝即位期を通じて、孝謙・称徳天皇のみならず、和氣広虫、紀益女、辛嶋勝与曾女など、周囲の巫女は都合よく男子天皇・男臣らに託宣させられ、あるいは託宣を「捏造」されている。

このような時期に、男系皇族女子(内親王・女王)が男系男子天皇の万世一系の神性をその処女性によって保証する体制として確立したのが、斎王制度(斎宮制度・斎院制度)である。皇嗣(皇太子など)は、アマテラスの神託を帯びた処女であるこれらの上級巫女が三種の神器の皇嗣への移動を認めることによってしか、天皇(現人神)そのものにはなれない。この思想は、女子は全て巫女・神子(神の子)すなわち斎女・「めかんなぎ(巫)」であって、女王はその筆頭者の立場であり、男王もまた自身が男子の託宣者・霊媒たる「おかんなぎ(甕・男巫)」であった原始神道とは根本的に異なる。

この斎王制度の本格化をもって、非ヤマト系の巫女神道は、歴史の表舞台から姿を消し、専ら非神社神道・旧教派神道などの系譜に潜り込むことになる。特に、ヤマトタケル、応神・仁徳・雄略天皇など、多くの王・天皇・皇族男子に妃・妻・愛妾を供給していた吉備王国の巫女神道は、ヤマト王権が王国を征服し、敗れた吉備氏や和氣氏がヤマト王権の一員となったことで、秘伝化の道が確実となった。

<p>齋王(齋宮) 歌壇</p>	<p>伊勢国 山城国</p>	<p>倭姫命 大来皇女 円方女王 雅子内親王 徽子女王 馬内侍 規子内親王 当子内親王 良子内親王 恂子内親王 齋宮甲斐 亮子内親王 殷富門院大輔 肅子内親王 奨子内親王 權子内親王 祥子内親王</p>	<p>血縁 皇別(男系血統 女子) 齋王(齋宮) 未婚の内親王・女 王</p>	<p>上代～ ●伊勢齋王を中心とする歌壇。 ●欠史八代を脱した崇神天皇の代には既に存在しており(一説には垂仁天皇の皇女倭姫命が起源)、欠史八代天皇の存在を虚構であると仮定すると、齋王歌壇は、出雲や吉備の巫女歌壇と同じく、ヤマト王権とほとんど無関係に、巫女神道において生じた可能性もある。 ●ヤマト王権主導で整備されたのは天武朝期。</p>	<p>●歌壇は齋宮寮においてのみ形成されるとは限らず、群行の道中、群行を行わない場合は初齋院・野宮において形成されることもあった。 ●単に「齋王」とは伊勢齋王を指したが、のちに賀茂齋王と区別するため、伊勢齋王は「齋宮」、賀茂齋王は「齋院」と呼ばれた。 ●貝合も行われ、特に「齋宮良子内親王貝合」(1040年開催。『良子内親王貝合日記』に記録)を模した貝合は現在も行われている。 ●多くの齋王の代で、歌壇がしめやかに、齋王の悲哀を慰める目的でも営まれた一方、時に齋王自身が神懸りや酒乱の状態でも月次祭や歌会を開催しており、齋王が天皇・朝廷に反抗的な託宣を下す例も出てきた。歌が『後拾遺集』に採られた■子女王(■は女ヘンに専)の託宣事件(1031年)など。</p>	<p>断絶(1334)</p>	<p>●治承・寿永の乱(1180～85) ●承久の乱(1221) ●南北朝の動乱</p>
----------------------	--------------------	---	---	---	--	-----------------	--

齋院歌壇	山城国	選子内親王 馬内侍 ■子内親王 (■は示へんに某。号六条齋院) 六条齋院宣旨 統子内親王 式子内親王 (萱齋院、大炊御門齋院) 儀子内親王	血縁 皇別(男系血統女子) 齋院 未婚の内親王・女王	810～ ●賀茂齋王を中心とする歌壇。	●歌壇は紫野齋院においてのみ形成されるとは限らず、群行の道中、群行を行わない場合は初齋院において形成されることもあった。 ●単に「齋王」とは伊勢齋王を指したが、のちに賀茂齋王と区別するため、伊勢齋王は「齋宮」、賀茂齋王は「齋院」と呼ばれた。 ●都に近いことから伊勢齋宮よりも尊ばれ、歌壇も大いに繁栄し、齋院主催の歌合が多く催された。 ●祿子内親王(六条齋院)歌壇が最盛期。「天喜三年(1055年)五月三日物語歌合」など、多くの「六条齋院物語合」と「六条齋院歌合」が催された。歌合の開催は、少なくとも25回が確認できる。 ●『狭衣物語』の作者とされる六条齋院宣旨は、天喜三年の物語合には、物語『玉藻に遊ぶ権大納言』を提出。歌合には少なくとも16回に出詠。 ●式子内親王は、多くの齋院と同じく、歌人としての活動の記録や現存する歌数には乏しいが、後鳥羽院・定家歌壇と親しく、百首歌も詠み、現存する400首弱のうち三分の一以上が勅撰集に採られるなど、宮廷歌壇では大いに活躍した。新三十六歌仙、女房三十六歌仙の一人となり、現在最もよく知られる齋院である。しかし、それは宮廷歌壇に出詠する形式を主としたためである。一方、祿子内親王歌壇は、内親王家が歌壇の場であり、かつ女流歌人らによる歌壇であった。齋院から見た場合、齋院歌壇の最盛期はこの頃であったらう。	断絶(1212) 齋王代として復活(1956) ●ただし、現代の齋王代(一般市民女性から選ばれる)は、特に歌道の伝承を受けない。未婚女性であることに(古代齋王から)変わりはなく、名家の子女から選ばれるが、裏千家茶道を学ぶ「すみれ会」から多く輩出されているように、茶道、華道など他の芸道との関わりが深い。 →「宮中三殿 伊勢神宮～」の項も参照。(下部)	●治承・寿永の乱(1180～85) ●承久の乱(1221) ●南北朝の動乱
賀茂社歌壇	山城国	賀茂保憲女 賀茂成助 賀茂重保 賀茂重政 鴨長明 藤原俊成	血縁(神官家・社家) 賀茂氏(賀茂建角身命を始祖とする天神系氏族とされる。) 鳥居氏	上代～ 特に12c初頭～ ●賀茂氏は鴨氏・加茂氏・加毛氏とも書き、鴨長明や近世の賀茂	●賀茂社歌壇は、住吉明神の津守家歌壇とも交流した成助を事実上の祖とし、賀茂齋王(齋院)が置かれた時代(810～1212)には、齋院歌壇が繁栄した。齋院は、都に近いことから伊勢齋宮よりも尊ばれ、齋院主催の歌合が多く催された。 ●12cの賀茂重保により、中央の御子左家・六条源家歌壇との積極的なつながりがひらける。重保は、経盛家歌合・実国家歌合・広田社歌合に参加して頭角を現し、自らも藤原俊成を判者とした別雷社歌合や養和二年尚齒会を開催。『寿永百首』勸進や『月詣和歌集』編著などをおこなった。また、六条源家・俊恵の歌林苑を後援した。その重政も、経盛家歌合などで活躍し、勸撰歌	古代・中世期の齋院歌壇の繁栄のうち、近世に至って国学系の歌学が流行し、賀茂家の賀茂真淵は「国学の四大人」の一人となった。明治政府の神道政策・近代社格制度のもとでは、賀茂社においても再び旧派歌壇が興り、現代に至って巫女や旧社家の女性に受け継がれている。	●治承・寿永の乱(1180～85) ●承久の乱(1221) ●南北朝の動乱 ●賀茂社歌壇の中心を担った齋院歌壇の衰退

		藤原俊成 俊恵 顕昭 二条院讃岐 賀茂規清 賀茂尚久	鳥居大路氏 梅氏 梅陰氏 梅辻氏 錦部氏 西村氏 中大路氏	真淵もこの氏人である。 ●陰陽道宗家の賀茂氏や備前鴨(加茂)氏は別氏族とされる。	丁の里政も、社務家歌壇として活躍し、初撰歌人となる。 ●平安中期から室町時代の終わりまで、賀茂社家町が栄え、大小の歌会が催された。近世には賀茂社家の数はおよそ300にまで膨れ上がったが、賀茂真淵の登場によって、賀茂社とこれら賀茂社家町の文壇は一時期、従来の中世歌道から国学に塗り替えられた。ただし、明治新政府の神道政策は、旧派歌道の再興にも有利にはたらし、現在も旧社家の末裔の家々に旧派の歌書と新派の国学書とが共に保存されている。 ●賀茂尚久による撰家の九条家への「返し伝授」については、同家の項を見よ。	●以下の別項を参照。 →「齋院歌壇」 →「神道・社家歌学系(反中世歌道系)」 →「近代の神社における大覚寺統・南朝模倣歌壇の再興」 →「巫女・社家の女性による歌道」 ●賀茂規清の鳥伝神道は吉備・岡山県によく流入。	上つた齋院歌壇の衰退、及び齋院の廃止 ●賀茂真淵による国学の隆盛、賀茂社・賀茂社家自らによる中世歌道から国学への乗り換え
八神殿 宮中三殿 伊勢神宮 上賀茂神社 下鴨神社 熱田神宮 津島神社 八坂神社 北野天満宮 出雲大社 その他、上中級官社の巫女・社家の女性	皇居 八神殿 や各神社の所在地	神子 巫女 御巫 大御巫 座摩巫 御門巫 生島巫 内掌典 社家の女子 特に近代社格制度において上中級の官社に位置づけられた神社の男系巫女	女性のみ ほぼ血縁女性 旧宮家の女性 旧社家の女性 旧堂上公家の女性 旧華族の女性 ●主な年齢層：10～80代	近代～戦後 ●現在も少数ながら歌会がひらかれている。社務所は歌会のよい会場となっている。 ●一部、歌道伝授を受けるためには、貞淑であり、かつケガレの期間でない必要がある。 ●賢所、皇霊殿、神殿より成る宮中三殿の巫女については、ケガレに対する忌避観念が当然、極めて厳格に適用される。	存続 ●八神殿は、古代から中世までは宮中八神殿として神祇官西院に、江戸時代には吉田神社境内・白川家邸内にそれぞれ設けられ、八神殿を取り巻く歌壇も存在した。現在、八神は宮中三殿の神殿に合祀されている。 ◆上賀茂・下鴨神社の旧社家の一般女性が最もよく歌道を継承。 ◆「神宮」・「宮」・「大社」・「大神宮」・「皇大神宮」・「天満宮」などを社号に持つ大神社の巫女は、旧宮家・社家・華族の令嬢より選ばれることが多く、その意味では、両者の歌会どうし(神社歌壇と各家の歌壇)は同じ出自であることがある。 ◆ただし現在、上賀茂・下鴨神社の斎王のなごりである「斎王代」は、一般女性ながらも社家・文化人・実業家の子女から選ばれるが、歌道への習熟度は問われない。 ◆伊勢神宮も、かつての外宮歌壇は断絶しており、内宮は元より神事中心で、歌壇は形成されていない。 ◆熱田神宮・津島神社・八坂神社・北野天満宮などの大神社でも、作歌を旨とする歌壇は形成されていないが、例祭・献詠祭・余香祭などで披講は行われている。 ◆現在では、「天皇」と「神道・神社」とは法令上は相互に無関係に規定され、前者が憲法に象徴天皇制(立憲君主)としての規定を受け一方で、後者の多くは宗教法人としての教団である神社本庁とその地方組織神社庁が統括しており、かつては天皇の勅許を必要とした「神宮」号などを、現在は神社が自由に名乗れるようになったため、「神宮」・「大社」などの上級社号を名乗る神社であっても、歌道とは無縁の職業巫女・アルバイト巫女がほとんどを占める。 ◆秘伝的な歌道伝授あり ◆→「齋宮歌壇」の項も参照。		◆存続はしているが、以下の打撃は受けた。 ●近代化で著しく衰退。 ●大教宣布の詔 ●平田国学に基づく祭政一致論 ●祭政一致の国家神道創設による、近世までの神道の終焉。 ●明治四年太政官布告第二三四・二三五号(神道の中央集権化に伴う世襲神職の廃止と精撰補任) ●第一次世界大戦 ●関東大震災(1923) ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲)

(3) 古代ヤマト系神社神道から近代社格制度下・神社本庁統制下の古代神社・古道歌壇

主に仏教伝来後の大和朝廷・貴族・武家政権下に創生したが、原始神道に由来する古代神社・社家歌壇							
流派名	本拠地	代表的歌人・歌論者・当主	流派の主体	流派の成立時期・成立事情 (cは世紀)	特徴	衰退・分裂・断絶の時期 (cは世紀。血統断絶の場合、掲載可能な限りその旨を記す。) ●衰退・分裂・断絶に至る記述 ◆は存続についての記述	衰退・分裂・断絶の理由 ●最終断絶以外(一時的な衰退など)の理由も記載した。 ◆は存続についての記述
物部氏→石上氏	非渡来系の神別天神氏族とされるが、諸蕃氏族よりも原始的な渡来系の可能性もある。元は巫女神道における盟神探湯などの呪術を担った血統であると考えられるが、後世、ヤマト王権連合の中枢を構成し、排仏の立場から崇仏の蘇我氏と対立する。→皇親・豪族の同項で詳説。						
忌部氏→齋部氏	非渡来系の神別天神氏族とされるが、諸蕃氏族よりも原始的な渡来系の可能性もある。中臣氏と朝廷祭祀氏族の正統を争ったが、敗北し、著名な万葉歌人も出なかった。→皇親・豪族の同項で詳説。						
中臣氏→大中臣氏	非渡来系の神別天神氏族とされるが、諸蕃氏族よりも原始的な渡来系の可能性もある。元より宗教祭祀氏族で、巫女神道呪術を行っていたと考えられる。崇仏・廃仏論争では、概ね物部氏側に立ち、蘇我氏と対立した。ところが後世、ヤマト王権連合の中枢を構成し、神祇伯・伊勢神宮祭主を世襲するどころか、その後のあらゆる官職と歌道宗匠を占有することになった藤原氏を出し、当初その氏長者・嫡流であった。しかし、中臣氏側の配慮で、別系が藤原氏として藤原氏長者を戴いて独立すると、元の祭祀氏族としての中臣氏嫡流は大中臣氏を称し、神祇大副・伊勢神宮祭主の家となった。→皇親・豪族の同項で詳説。						
祭主歌壇	伊勢国山城国	藤波教忠 三条西季知 有栖川宮熾仁親王	藤波家 皇族 神官 神職 社家 元皇族女性	7c前半～ ●中臣御食子(鎌足の父)が祭官となり、中臣意美麻呂の代に祭主と改められ、歌壇も形成される。	●大中臣氏から藤波家が分家し、引き続き祭主を世襲。豪族としての中臣氏の歌壇(伊勢大輔などが活躍)は早くに衰退したが、祭主・藤波家歌壇としては綿々と継続。 ●歌道師範家の三条西季知の大教正兼祭主への就任により、歌道・古今伝授と教導職・宗教行政と神宮とが一時的に結びつくが、宗教行政の混乱や、乱立した宮家からの祭主への連続就任などで、歌壇は急速に衰退・離散。御歌所派が歌道の全権を握る。 ●戦後は、祭主には男系皇族出身の女性が就任しているが、歌道継承とは無縁である。	歌道・歌会は衰退 ●祭主は継続	●社家の世襲の廃止 ●第一次世界大戦 ●日中戦争 ●第二次世界大戦に向けての戦時体制・国家総動員体制突入のため ●敗戦 ●新派短歌の全盛 ●近代社格制度の廃止

<p>神祇官・神祇伯・白川伯王家・伯家神道歌壇</p>	<p>山城国</p>	<p>兼覧王 大中臣輔親 花山天皇 源延信(延信王) 白川顯広王 白川仲資王 白川資訓</p>	<p>血縁(祭祀王族) 花山源氏嫡流 師弟関係</p>	<p>8c半ば～ ●神祇伯の中臣東人や石川年足が和歌をよくし、神祇官歌壇が萌芽。 9c後半～ ●藤原氏による神祇伯就任が途絶え、(大)中臣氏の就任も斜陽に差し掛かったこの頃、兼覧王(中古三十六歌仙の一人)が和歌をよくして、紀貫之や凡河内躬恒にも敬愛され、歌壇を神祇官内に形成。大中臣頼基と共に宇多院の亭子院歌合にも参加。</p>	<p>●11cより、大中臣氏は神道祭祀よりも歌壇運営に長けるようになり、輔親は神祇伯としては最大の歌壇を形成(歌合開催や大嘗会和歌・屏風歌詠進)。 ●大中臣輔親に代わって花山源氏嫡流の源延信が神祇伯に就任、延信王を名乗る。これ以降、しばらくは同嫡流が、力の衰えた大中臣氏と神祇伯を穩便に分け合うが(仲資王の母は大中臣氏の出)、12c後半に完全に世襲・独占するようになる。 ●同嫡流の神祇伯は非皇族ながら、延信王の次代の康資王以降も、就任時に王を名乗ることが慣例化する。神祇伯就任を源氏からの王氏復帰とする形式である。13c半ばから、この復帰王氏の家を「白川(王)家」や「伯家」と称するようになった。 ●白川伯王家は、非皇族としては、王氏長者を戴き王号を世襲する日本唯一の血統である。 ●「神祇伯家学則」により、神道と武道の不可分性、および「大道」である神道の根本としての皇典(『記紀』・『古語拾遺』など)の重要性を説く。</p>	<p>15c後半に衰退 近代に断絶 ●神祇大副を世襲していた吉田兼俱(ト部氏)が吉田神道を確立し、神道の主宰者として神祇管領長上を称する。白川伯王家は衰退。 ●17c後半、白川家は「伯家神道」を称して吉田神道に抵抗するも、及ばず。但しその間、伯家神事秘法を連綿と伝授し、神祇伯の家として近代を迎えることには成功する。しかし、血統断絶により秘伝が途絶え、衰退。明治新政府の宗教行政の影響で完全に断絶。 ●現在は、旧教派神道系の新宗教などに流入している。</p>	<p>●吉田神道(ト部神道)の隆盛 ●白川資訓の王号返上と子爵叙任 ●子のない白川資長の養子縁組(伯爵上野正雄の男子の久雄を養子とするもの)の解消による白川家の断絶 ●近代化で著しく衰退。 ●大教宣布の詔 ●平田国学に基づく祭政一致論 ●祭政一致の国家神道創設による、伯家流神道の終焉。 ●明治四年太政官布告第二三四・二三五号(神道の中央集権化に伴う世襲神職の廃止と精撰補任)</p>
<p>住吉明神・津守家流(単独流派→二条派・南朝一門)</p>	<p>摂津国(住吉)</p>	<p>津守国基 津守国助 津守有基 津守景基 津守国冬 津守国道 津守国夏 津守国量 津守国豊 津守国礼 津守国福 柿葉亭喜始</p>	<p>血縁(豪族・宮司) 津守氏(天火明命系の神別天孫族で、家祖は田蓑宿禰とされる。)血縁(津守家門下の京阪の神官家) 梅園家 高木家 など</p>	<p>11c半ば～ ●天火明命(アメノホアカリ)の子孫で、ヤマト王権創設時の一族とされる。(『新撰姓氏録』) ●和歌の活動が頻繁に表れるのは11c以降。</p>	<p>●和歌三神の一柱 ●津守歌道としての意識が芽生えたのは六条源家や六条藤家と同期であるが、歌神を奉祀する神官家歌道として、極めて長い歴史を持つ。 ●『津守和歌集』・『津守国基集』・『津守国福詠草』 ●日野家と血縁を持って以降、代々歌道の指導を受けた。 ●『新後撰集』は、津守氏の歌が多いために『津守集』の異名を持つ。 ●古今伝授 ●近代に入り、官幣大社となって以降も歌壇が存続しており、社務所において『住吉和歌集』が編まれている。</p>	<p>戦前に衰退 戦後に門下離散・歌道断絶・世襲断絶 ●神社は現存</p>	<p>●南北朝時代に南朝方(後村上・長慶・後龜山天皇)についたことで、一時衰退。 ●近代化で著しく衰退。 ●大教宣布の詔 ●平田国学に基づく祭政一致論 ●国家神道と教派神道の分離 ●祭政一致の国家神道創設による、近世までの神道の終焉。 ●明治四年太政官布告第二三四・二三五号(神道の中央集権化に伴う世襲神職の廃止と精撰補任)</p>

<p>伊勢神道(度会神道)・神宮外宮歌壇(二条派一門)</p>	<p>伊勢国(伊勢神宮外宮)山城国</p>	<p>度会行忠 度会家行 出口延住 山本正重 伊藤栄治 祐海法印 中西宗友 中西信慶 杉木光敬 杉木正祐 杉木正長 杉木正則 杉木正孝 来田伯耆 久志本常彰 足代弘臣 足代弘魚 御巫清直 御巫清白</p>	<p>師弟関係 血縁(神官・僧侶・貴族)</p> <p>度会氏 中西家 杉木家 来田家 足代家 桧垣家 久保倉家 橋村家 町人 庶民</p>	<p>13c後半～ ●度会氏の時代にも小規模の外宮歌壇はあったが、栄えず。 17c末～ ●元禄期以降、伊勢神宮外宮を中心とする神官歌壇が出来上がる。</p>	<p>●13c後半から、本地垂迹説を採る両部神道や山王神道に対し、反本地垂迹説の伊勢神道、次いで吉田神道が勃興。但し、この頃は、伊勢では齋王歌壇が最期の栄えを見せ、外宮神職の歌壇よりもまだ大きかった。また、吉田家が神祇大副を務めた神祇官でも、世襲神祇伯であった大中臣氏と白川伯王家の歌壇があり、渡会氏の時代の外宮歌壇は神職・社家歌壇としても小規模であった。 ●月次歌会の開催 ●中院家・竹内家など、公家歌道家にも門人がいて出入りしていた。 ●地下では、長雅流をひらいた平間長雅と頻りに交流。 ●冷泉為村の歌学を中心に冷泉流が流れ込み、二条派・冷泉派が折衷される。 ●周辺の町人・庶民にも門下を持っており、内宮に対する外宮の文化的地位の維持に貢献した。</p>	<p>近代に衰退・断絶 ●月次祭などの年中行事は存続しているが、歌道・歌壇と呼ばれるものは衰退した。</p>	<p>●近代化で著しく衰退。 ●大教宣布の詔 ●平田国学に基づく祭政一致論 ●国家神道と教派神道の分離 ●祭政一致の国家神道創設による、近世までの神道の終焉。 ●明治四年太政官布告第二三四・二三五号(神道の中央集権化に伴う世襲神職の廃止と精撰補任)</p>
---------------------------------	-----------------------	--	--	--	---	--	--

<p>伊豆ト部(吉田)家 (為世流一門)</p>	<p>山城国 鎌倉 江戸</p>	<p>ト部兼好 吉田兼俱 吉田(清原) 宣賢 吉田兼右 智慶院 細川幽齋</p>	<p>血縁(祭祀貴族) ト部平麻呂流 師弟関係</p>	<p>10c末～ ●ト部氏が亀ト道宗家としての地位を確立。 14c初頭～ ●ト部兼好が御子左為世門下となる。 (兼好の時代に吉田家は未だ存在しないため、「吉田兼好」の表記は本来誤り。中世和歌史研究者の小川剛生は、兼好をト部氏の出自とする系譜自体を、吉田兼俱による捏造と見る。歴史学者の井上智勝も、兼俱がト部氏・吉田氏の系図を改竄したと見る。いずれも、兼俱以前に兼好をト部氏出自とした史料がないことなどによる。) 15c後半～ ●兼俱が吉田神道を創始。吉田家は、神道歌壇を形成した大中臣氏や白川伯王家ほどには歌道を行わなくなる。</p>	<p>●冷泉流に近縁 ●兼好は二条為世の系譜で、今川貞世とも交流。『今川了俊歌学書』で紹介される。(貞世も『徒然草』の編纂に携わったというが、不明。)勅撰集にも入集。正徹が、幽玄論を展開した歌論書『正徹物語』で『徒然草』を評価。歌僧二条派として「為世門の四天王」の一人と称される。 ●古今伝授 ●兼好自らの本家は神道の家として存続(左記の通り、異説あり)。分家の萩原家・錦織家などに歌道流入。 ●その吉田家の神道(吉田神道)は、ト部神道(唯一神道)とも言われるが、実際は吉田兼俱の一代で体系化された。反本地垂迹説(神本仏迹説)を採用。 ●しかし、大中臣氏、白川伯王家とは異なり、吉田家では文壇・歌壇と神道との結びつきは弱く、兼好と兼俱の(互いに時代は違えど)異分野での名声がそれを象徴している。従って、吉田家が神祇伯の時代には、目立った神祇官歌壇は見られない。もっともそれは、歌道と仏道や茶道(茶の湯)との結びつきが強固である室町文化の影響下にあつたためでもある。吉田神道も、密教・道教・儒教・陰陽道を取り入れた神道的汎神論と言えるものになっている。 ●兼好以後の吉田家も、為世流と今川貞世流の歌道を有したものの、上記の理由により、歌道の名家とはなり得なかった。 ●一方、和歌・古今伝授・連歌の大家である細川幽齋は、清原宣賢の娘・智慶院の子である。</p>	<p>近代に衰退 戦後に断絶 ●兼俱による吉田神道創始以降、吉田家は、神道歌壇を形成した大中臣氏や白川伯王家ほどには歌道を行わなくなった。一方、代々の当主は自らを神道の主宰者として「神祇管領長上」を名乗り、神祇伯の白川伯王家に対抗した。 ●近世には、笠岡稲荷神社祠官の小寺家に神道を指導していたため、その歌道も敬業館・小寺派に流入した。 ●現在は、旧教派神道系の新宗教などに流入している。</p>	<p>●近代化で著しく衰退。 ●大教宣布の詔 ●平田国学に基づく祭政一致論 ●祭政一致の国家神道創設による、ト部流神道の終焉。 ●明治四年太政官布告第二三四・二三五号(神道の中央集権化に伴う世襲神職の廃止と精撰補任)</p>
<p>備作和歌会 (吉備津歌壇) (二条派・桂園派一門)</p>	<p>備前国 (吉備津)</p>	<p>渡辺重豊 宣阿(香川景継) 岡俊直 岡春江 岡敬名 岡直廬 岡千春 石津信躬 池田綱政 池田政孝 池田斉輝 池田博忠 赤沢氏温</p>	<p>師弟関係 血縁(禰宜・神官) 酒折宮(岡山神社) 吉備津宮(神社) 岡山護国神社 岡家 血縁(武家・岡山藩) 美濃池田氏岡山藩宗家 町人 庶民</p>	<p>17c後半～ ●吉備津神社・酒折宮(岡山神社)・岡山護国神社など、吉備地方の梅月堂・香川景樹に近縁の神官を中心とする二条・桂園派。</p>	<p>●近世の岡山県は、京都宮廷以外で二条流歌道が隆盛した地方の一つで、二条派歌道・国学・儒学が同居した。 ●『岡山神社日記』 ●岡山城下周辺の神社では二条派・桂園派歌道が栄え、外様大名の池田氏周辺や備前東部の閑谷学校などでは儒学が栄えたが、池田氏内にも親二条派・桂園派を示す者がいた。 ●岡直廬が吉備史談会の羽生永明と共に平賀元義を紹介・研究したために、元義の歌学が明らかになった。</p>	<p>近代に衰退</p>	<p>●国学の隆盛 ●幕末の混乱 ●版籍奉還(1869) ●廃藩置県(1871)</p>

<p>熱田神宮歌壇 (二条派・冷泉派の二派隆盛)</p>	<p>尾張 (熱田)</p>	<p>藤原季兼 藤原季範 宣阿 粟田知周 粟田廣治 田中大秀</p>	<p>尾張神官 熱田神宮大宮司 血縁(神官) 藤原南家貞嗣流・ 千秋家 栗田家 師弟関係 町人 庶民</p>	<p>11c半ば～ ●漢詩人・藤原実範の子として生まれた季兼は、和漢両方の知識を身につけ、三河・尾張に本拠を置いた。当時高齢の47歳で子・季範を設けるが、妻は熱田大宮司の尾張員職であり、季範以降、この南家貞嗣流(と後裔の千秋家)が熱田大宮司を世襲した。これにより、季兼までの同流の豊富な和漢の知識が熱田神宮に流れ込み続けた。 17c末～ ●熱田神宮を中心に歌壇が栄える。芝山重豊・冷泉為村・冷泉為泰の系譜を引く粟田知周期に全盛。</p>	<p>●熱田神宮歌道は、古くは藤原南家の季兼・季範及び西行にさかのぼる。 ●熱田神宮は院の北面を担い、京都宮廷文化圏の一部である。 ●後醍醐天皇・南朝と足利氏・北朝の双方からの信頼を得る。 ●二条派・宣阿の梅月堂流を中心として歌会を開催。 ●源頼朝の母由良御前の父藤原季範が大宮司となり、二条派歌道と接触が生じるが、歌道全盛は近世である。</p>	<p>18c半ば 衰退 ●歌道・歌壇と呼ばれるものは衰退したが、綾小路流披講は盛んである。</p>	<p>●近代化で著しく衰退。 ●大教宣布の詔 ●平田国学に基づく祭政一致論 ●国家神道と教派神道の分離 ●祭政一致の国家神道創設による、近世までの神道の終焉。 ●明治四年太政官布告第二三四・二三五号(神道の中央集権化に伴う世襲神職の廃止と精撰補任)</p>
----------------------------------	--------------------	--	--	--	---	---	--

<p>神道・社家歌学系 (反中世歌道系)</p>	<p>山城国 畿内 遠江国 (浜松) 東海 道 国 江戸</p>	<p>荷田春満 荷田在満 荷田蒼生子 賀茂真淵</p>	<p>師弟関係 血縁(社家) 国学者</p>	<p>17c後半～ ●荷田春満も賀茂真淵も社家出身で、神道と歌学の一体化を図った。</p>	<p>●中世歌道の超克と国学の一環としての歌学は、堂上家歌道直系の歌人と地下神道系の歌人の双方より始まるが、歌道批判を強め、国学の主流を占めることになるのは、契沖・安藤為章の直接の門下ではなく、これらの黎明期の国学者に私淑した地下の神道家・神職者(荷田家・賀茂真淵門下など)である。 ●伏見稲荷の神官で、契沖を研究した荷田春満が、歌学・神道融合の「古道論」を唱えた頃に、「国学」の語が生じている。しかし、「復古神道」の語は未だ見られない。「復古神道」は、ほぼ平田国学そのものであると見てよい。すなわち、まず中世公家歌学の反省的・批判的態度に神道を融合した「古道」が生じ、古道の学問体系化の試みを「国学」と称し、ここから歌学の要素が希薄化し神霊学の要素が増大したものを「復古神道」と呼んだのである。しかし、契沖以後、塙保己一や伴信友らは、古道に始まり神霊学に至る系譜とは距離を置き、より実証主義的態度で国学に臨んだ。</p>	<p>賀茂真淵一門の形成に至る。 ●国学は、近現代の日本史学・神道学・民俗学・国文学などの諸学問の基礎となっている。</p>	<p>●近世初期の和歌の系譜は、二条派の堂上家の歌道、この直系の木下長嘯子らの歌学、荷田・真淵らの歌学に大分類できるが、このうち最後の系譜は、荷田春満から小中村清矩以降の日本史学に至るまで個人的な師弟関係で結ぶことができる。</p>
<p>神道・社家歌学系 (親中世歌道系) 歌仙堂</p>	<p>山城国 畿内 東海 道 国 江戸 山陽 道 国</p>	<p>松岡仲良 小寺清先 賀茂季鷹 鬼島広蔭 松田直兄</p>	<p>師弟関係 血縁(社家) 梅辻家 井関家 西村家 など 国学者</p>	<p>18c前半～ ●特に上賀茂神社は一台歌壇となり、周辺の社家町にも歌壇が広がった。</p>	<p>●国学の多くの学派が中世歌道への批判やその不要性を説く中、江戸派・鈴屋派などの新派と京都歌壇の双方と交流し、有栖川宮職仁親王に師事した上賀茂社家出身の賀茂季鷹(自邸に和歌を行う歌仙堂を設置)の頃、小沢蘆庵一門に代わって桂園派と勢力を二分する勢いを持った。 ●八田知紀らのちの御歌所派歌人とも交流し、旧派歌道の神道・社家歌壇における維持に尽力した。 ●備前・備中・備後などにこの親中世歌道的な歌学がよく残り、笠岡稲荷社家の小寺家などによる歌壇形成へとつながった。 ●松田直兄による「ただこと歌」の提唱。</p>	<p>近代と戦後に衰退 ●荷田・真淵一門とは対極的に衰退の一途を辿ったが、一部は地方に保存された。 ●上賀茂社家の血統は多く存続し、現在歌道は社家の女子に受け継がれている。</p>	<p>●近代化で著しく衰退。 ●大教宣布の詔 ●平田国学に基づく祭政一致論 ●国家神道と教派神道の分離 ●祭政一致の国家神道創設による、近世までの神道の終焉。 ●明治四年太政官布告第二三四・二三五号(神道の中央集権化に伴う世襲神職の廃止と精撰補任) ●第一次世界大戦 ●関東大震災(1923) ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●敗戦</p>

<p>梅廼舎・鶴山社中・亀山社中</p>	<p>出雲国</p>	<p>釣月 澄月 小豆沢勝興 小豆沢良意 千家俊信 千家尊孫 千家尊福 中村守臣 中村守手 中村守城 森為泰 北島從孝 北島全孝 佐草美清 手銭さの子</p>	<p>血縁(国造) 千家国造 北島国造 血縁(酒造・海運業、宿屋) 小豆沢家 手銭家 師弟関係 庶民</p>	<p>19c初頭～ ●清水谷実業と武者小路実陰に和歌を学んだ明珠庵釣月が二条派歌道を、岡山の澄月が山陽の歌学一般を、出雲へ持ち込む。釣月・澄月門下で、出雲松江で酒造・海運業を営む小豆沢家が歌壇を形成し、近世出雲歌壇が本格化。</p>	<p>●出雲歌道は、釣月・澄月の歌道が中心であるが、清水谷実業・武者小路実陰・入江相尚の堂上二条派・御所伝授の系譜も引く。 ●本居宣長に国学を学んだ千家俊信が梅廼舎(梅之舎・うめのや)と号し、歌学に出雲古学を折衷した学堂を形成。『梅之舎三箇條』を著す。 ●鶴山・亀山社中は、大社および杵築地域(大社町)を代表する二大和歌結社で、合わせて「つるかめ」と称される。 ●「出雲大社奉納和歌」 ●『類題八雲集』千家尊孫編(1842) ●合同歌会も開催。1858年の歌会が有名で、「両社中内会兼当和歌控」(出雲市立大社図書館蔵)が遺される。 ●手銭記念館が手銭家の古文書を収める。(現在は、古文書よりも出雲・杵築全般の美術工芸品の展示が主。)</p>	<p>幕末に衰退、明治期に断絶 ●千家尊福の出雲大社教設立(1873)、北島脩孝の出雲教設立(1882)をもって近代的神社神道へ移行し、祭神論争での出雲側の敗北により、旧派歌壇も並行して衰亡。 ●但し、2014年に、出雲大社権宮司の千家国麿と高円宮家の典子女王が結婚。(現在は、当時の歌道は継承されていない。)</p>	<p>●明治新政府による神道行政への応急的対応とその不備・不徹底(教派神道教団としての再編) ●千家尊福の国政への参加や、祭神論争における中央政府および伊勢神宮・伊勢神宮歌壇(伊勢派)との、出雲派としての強硬な対決姿勢(中央神社行政への参画・介入)、そして尊福の敗北による、出雲・杵築文学の衰退</p>
<p>越前・三國神社歌壇</p>	<p>越前国 上方</p>	<p>内田曾平 内田庸 池内尊 浅海澳満</p>	<p>師弟関係 町人 庶民</p>	<p>19c前半～ ●富士谷御杖に学んだ豪商内田庸の財政援助により隆盛。</p>	<p>●越前には、冷泉派を中心に二条派の歌道も流入したが、賀茂真淵・加藤千蔭の系譜の国学や富士谷家の新派歌道も流入した。</p>	<p>幕末から近代初期に断絶</p>	<p>●歌人・門下生の死 ●豪商内田家の援助断絶</p>

主に近代社格制度のもとに整備されたが、原始神道に由来する神社・社家歌壇

流派名	本拠地	代表的歌人・ 歌論者・当主	流派の主体	流派の成立時期・成 立事情 (cは世紀)	特徴	衰退・分裂・断絶の時期 (cは世紀。血統断絶の場合、掲載可能な 限りその旨を記す。) ●衰退・分裂・断絶に至る記述 ◆は存続についての記述	衰退・分裂・断絶の理由 ●最終断絶以外(一時的 な衰退など)の理由も記載 した。 ◆は存続についての記述
近代の神社に おける歌壇	全国各地	伊勢神宮 明治神宮 賀茂神社 熱田神宮 住吉神社 太宰府天満宮 宇佐神宮 出雲大社 日御碕神社 大阪天満宮 水無瀬神宮 大杉神社 桑名神社 岡山県護国神 社	神官 神職 社家 巫女	明治初期から戦後直 後にかけて成立	<p>●上古代より近世末期までの長い歴史を有し、歌壇をも有していた大規模神社は、近代社格制度の下においてもそのまま歌壇を維持し続けた神社が多い。社務所を出版元として、かつての勅撰集に匹敵する規模の歌集を編んだ神社も多い。また、小規模神社ながらも歌壇を有した神社もある。</p> <p>『住吉和歌集』住吉神社社務所(1930) 『太宰府天満宮献詠和歌集』太宰府天満宮社務所(1932) 『梅の下風：大阪天満宮献詠和歌集』天満宮社務所(1934～35) 『水無瀬宮御法楽和歌集』水無瀬宮社務所(1936) 『杉野倭歌葉集：大杉神社献詠和歌』大杉神社社務所(1892) 『八桑枝集 遷宮奉納和歌』不破造酒三郎 桑名社務所(1893)</p> <p>●岡山県護国神社は献詠祭を保存・開催しており、神社を中心とする和歌会の歌道五声会も残る。</p>	<p>歌道・歌会は衰退</p> <p>●伊勢神宮・賀茂神社・熱田神宮などの大規模神社においては、現在でも献詠や披講が残る。</p> <p>●これら以外の一般の中小神社の歌壇は、巫女らによる自主的な歌道継承によってかろうじて維持されるようになる。</p>	<p>●社家の世襲の廃止</p> <p>●第一次世界大戦</p> <p>●日中戦争</p> <p>●第二次世界大戦に向けての戦時体制・国家総動員体制突入のため</p> <p>●敗戦</p> <p>●新派短歌の全盛</p> <p>●近代社格制度の廃止</p>

<p>近代の新設南朝系神社における歌壇</p>	<p>全国各地</p>	<p>吉野神宮 鎌倉宮 四條畷神社 名和神社 藤島神社</p>	<p>神官 神職 社家 巫女</p>	<p>明治初期～</p>	<p>●儒教思想を基盤とした江戸幕府から実権を奪還した明治天皇・明治政府の正当性の主張は、尊王思想と強く結びついた国学・『万葉集』派・新派歌壇、及び御歌所派歌壇において主におこなわれたが、近世以前の天皇親政実現に功のあった側近らを祀る神社の歌壇においても行われた。建武中興時代は明治天皇親政にとって理想的な時代の一つであり、新政府は近代社格制度を整備する中で、同じく理想的な親政を展開した醍醐天皇の勅命により編纂された『延喜式』を模倣すると共に、建武中興十五社の再編・造営に力を入れた。これらの神社の神官・神職・巫女らによって和歌献詠と歌集編纂が行われた。官幣大・中社に限らず、別格官幣社も歌会・歌壇を持った。(四條畷神社社務所内献詠和歌会・『四條畷神社献詠集』など)</p>	<p>歌道・歌会は衰退 ●建武中興十五社については、これら十五社で結成された「建武中興十五社会」は存続。 ●これら以外の一般の中小神社の歌壇は、巫女らによる自主的な歌道継承によってかろうじて維持されるようになる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●社家の世襲の廃止 ●第一次世界大戦 ●日中戦争 ●第二次世界大戦に向けての戦時体制・国家総動員体制突入のため ●敗戦 ●新派短歌の全盛 ●近代社格制度の廃止
<p>近代の神祇官(宣教使)・神祇省・教部省(教院・教導職)・内務省社寺局・国家神道・教派神道・神社局・神祇院・新宗教系教団歌壇(宮内省よりも急進的で平田復古神道を奉じる立場と、桂園派・御歌所派一門とが複雑に混在)</p>	<p>明治新政府は、尊皇愛国思想を教化する大教宣布運動、神道国教化策を展開し、のちに神道を国家神道(神道、神社、祭祀、神社神道)と教派神道(宗教)に編成。「神社神道は宗教ではない」とする神社非宗教論を採ることで、神社神道を国の祭祀として他宗教の上位に置き、事実上、神道による国民統合策を強化し、擬似的な神道国教化策を敷いた。これらの動きに伴って歌壇も形成されたが、これら一連の教部省系歌壇は宮内省・御歌所歌壇よりも急進的で、かつ度重なる宗教行政方針の転換により、大混乱をきたした。国家神道は、神社局、次いで神祇院が保護(事実上の管理統制)。神祇院廃止以降、教派神道系歌壇は急速に岡山県とその周辺(山陽地方)に集中した。詳しくは、開国・近代化における旧派の歌学政策を見よ。</p>						

(1)の原始の巫女神道と次項(2)の斎王系(ヤマト王権系)巫女神道との合同演舞を観覧できる近代巫女神楽の舞台(明治以降に作られた巫女神楽・巫女歌謡)

本項は、別掲の『巫女神道吉備派道統総覧』を見よ。

(4) 山岳信仰・修験道・仏教・神仏習合歌壇

主に仏教伝来後の大和朝廷・貴族・武家政権下に創生したが、山岳信仰・修験道・古道に由来する歌壇

流派名	本拠地	代表的歌人・歌論者・当主	流派の主体	流派の成立時期・成立事情 (cは世紀)	特徴	衰退・分裂・断絶の時期 (cは世紀。血統断絶の場合、掲載可能な限りその旨を記す。) ●衰退・分裂・断絶に至る記述 ◆は存続についての記述	衰退・分裂・断絶の理由 ●最終断絶以外(一時的な衰退など)の理由も記載した。 ◆は存続についての記述
熊野別当・熊野三山検校・新熊野検校・聖護院・修験道本山派歌壇	紀伊国熊野大和国山城国	白河院 増誉 行尊 覚宗 鳥羽院 待賢門院 待賢門院堀河 美福門院 美福門院加賀 後白河院 覚讚 実慶 後鳥羽院 定豪 九条良経 良尊 一条家経 道昭 二条兼基 二条道平 良瑜 二条良基 道意 近衛政家 道興 近衛植家 道増 道澄	血縁(皇族・貴族・僧侶) 熊野三山検校 新熊野検校 熊野三山奉行 聖護院門跡 藤原北家九条流 藤原北家近衛流 北白川宮家	上古代～ 特に12c初頭～ ●白河院が熊野参詣の直後、熊野三山を中央の僧綱制のもとに置いたため、増誉を熊野三山検校に補任(1090)。増誉は京都に天台寺門宗聖護院を建立した。これにより、京都にありながら熊野に通じた独特の歌壇が同院を拠点に形成される。	●熊野三山検校は、増誉の補任当初は、長快が務めていた現地の執行僧職である熊野別当の上位に置かれつつも名誉職で、武士化した別当家が戦国時代に衰退するまで、現地を統べる実権は希薄で、文壇を担うものが多く現れた。 ●増誉以降6代覚実までは、三山検校自身が修験者で、行尊・覚宗のように、験者として歌壇にかかわる者が現れた。(行尊『行尊大僧正集』) ●後白河院は、新熊野社を法住寺の御所に勧請し、三山検校の覚讚を初代新熊野検校に補任。実慶以降、三山検校と新熊野は兼職となる。 ●後鳥羽院の熊野行幸(『熊野懐紙』)以降、院・両検校歌壇と現地の熊野別当・神官家・社家歌壇とがいっそう密接する。 ●承久の乱後、陸奥に流罪となった長厳に代わり、親鎌倉幕府派・鶴岡八幡宮別当の定豪が両検校に補任。鎌倉歌壇とかわる。 ●九条良経の子良尊以降、両検校は皇子と撰閤家の子弟が独占し、一条家経の子で、園城寺長吏・准后・四天王寺別当を兼任した道昭の代をもって、京都の両検校を中心とする熊野歌壇の全盛を迎える。 ●14c以降、聖護院門跡が両検校をほぼ独占し(重代職化)、衰退した熊野別当に代わり、日利尊氏が新設した現地の実権者である熊	衰退(1868) ただし、以下の各家各流に歌道が流入し、現在に至る。 熊野神官家・社家 旧北白川宮家(1947年10月14日に皇籍離脱) 近衛家(『陽明文庫』) ●興意法親王以降の聖護院歌壇衰微の一方、京都中央歌壇では聖護院門跡である親王の父である後陽成・後西・中御門天皇や、同じく王子の父である有栖川宮・閑院宮・伏見宮家の親王により、古今伝授を含む歌道伝授が盛んに行われた。 ●1868年に聖護院宮信仁入道親王が還俗し、1870年に北白川宮智成親王を称して北白川宮を創設。ここに三山検校は廃絶となり、歌道・歌書は熊野三山社家・北白川宮家・近衛家の『陽明文庫』に保存されることとなる。(同文庫は『熊野懐紙』・『類聚歌合』などを保存。) ●五撰家のうち、歌道家である九条流三家(九条・二条・一条家)に対し、近衛流二家(近衛・鷹司家)は歌道家と呼ばれないにもかかわらず、近現代以降に近衛家が和歌活動(宮中歌会始の講師など)を担っている要因には、熊野三山検校・新熊野検校への補任による、三山家・二条家・一条家の歌道	●承久の乱(1221)による長厳の陸奥配流 ●応仁の乱(1467～77)による聖護院焼失 ●道昭歌壇の全盛以降、道興の両検校・聖護院門跡補任(15c半ば)をもって、それらの血統が和歌・連歌の二条家からそれらの盛んでない近衛家に移ったことによる、道昭・二条家を頂点とする両検校・聖護院歌壇の衰微、聖護院への歌道流入の滞り ●道増の両検校・聖護院門跡補任に際しての熊野・聖護院門下の内訌・対立 ●興意法親王の補任以降、14c末以来となる皇子・王子による聖護院門跡独占が行われたことによる、聖護院歌壇のいっそうの衰微、歌壇の中核の両検校・聖護院から京都中央への移動

		追尊 北白川宮智成親王			足利尊氏が新設した玩地の夫務儀とめる熊野三山奉行と共に実権を握る。歌壇の中枢も聖護院となる。	備位による、大室家・一室家・一室家の歌壇の吸収によるところが大きいのである。	
御里房歌壇	京都御所周辺の公家町	門跡	血縁(皇族・貴族・僧侶)	上古代～ 特に13c～ ●本来「日本の仏教の開祖の後継者」の意であった「門跡」が、「貴種(皇族・貴族)が住職を務める院家・院主」の意に転じる。	●多くの門跡は、御所周辺に御里房(別邸)を構えており、御所の歌会に参加したり、御里房で歌会を開催するなどした。	近代に衰退	●御里房の廃止・撤退 ●秩禄処分(1876) ●華族の東京移住命令 ●門跡還俗と宮家の増設 ●御歌所派への吸収 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第一次世界大戦
両部神道・山王神道歌壇	山城国近江国	真言密教(東密) 天台密教(台密)	血縁(皇族・貴族・僧侶)	仏教伝来～ ●平安時代末期から鎌倉時代に特に隆盛	●当時の勅撰集の釈教歌に両神道の密教歌が多く採られた。 ●両神道は当然、仏界を本地法身として八百万の神々を権現と見る本地垂迹説を採り、伊勢神道(度会神道)や吉田神道に対抗したが、近世を通じて力及ばず、衰退した。	近代に衰退 ●現在は、旧教派神道系の新宗教などに流入している。	●廃仏毀釈 ●1868年の太政官布告(神仏分離令) ●大教宣布運動の失敗 ●神仏合同布教禁止令 ●神道事務局の設置と大教院の解散 ●教部省の廃止と内務省社寺局の設置、神社局と宗教局への分離、神祇院の設置による宗教行政の混乱
比丘尼御所歌壇	各比丘尼御所の所在地	尼門跡	女性のみ 皇女 王女 公卿子女 旧華族女性 ●主な年齢層:10～80代	江戸時代に整備 ●皇女・王女・公卿の娘などが住職となった尼寺。	良好に存続 ◆現在も二条派・京極派・冷泉派歌道の継承者がいるほか、これらの歌道に優れた皇女・王女・公卿子女が多く生活。 ◆歌集の編纂、歌会の開催 ◆秘伝的な歌道伝授あり ◆比丘尼歌道の実態はほとんど知られていないが、古くは西行ら僧侶歌人とのかわりにまで遡る。江戸時代には、皇女・王女・公卿の娘の出家者も、歩き巫女・遊女・売春婦も、いずれも単に「比丘尼」と呼んだが、比丘尼御所の比丘尼、すなわち皇女・王女・公卿の娘は売春業は営まず、現在も同様である。		

(5) ヤマト王権・大和朝廷・現皇統勢力圏(大王・天皇の確立期から立憲君主制・象徴天皇制の現在に至るまで)の歌壇

大和朝廷の皇親政治・豪族の歌壇と『万葉集』の成立(飛鳥・白鳳・天平・弘仁・貞観文化)

流派名	本拠地	代表的歌人・歌論者・当主	流派の主体	流派の成立時期・成立事情(cは世紀)	特徴	衰退・分裂・断絶の時期(cは世紀。血統断絶の場合、掲載可能な限りその旨を記す。) ●衰退・分裂・断絶に至る記述 ◆は存続についての記述	衰退・分裂・断絶の理由 ●最終断絶以外(一時的な衰退など)の理由も記載した。 ◆は存続についての記述
王、大王、大君、天皇(男系男子歌壇の成立)	大和国 和泉国 山城国	天皇	万世一系の血縁とされる 皇祖神:天照大神 家祖(初代):神武天皇	神話の時代～	●『記紀』神話において、スサノノミコが我が国初の和歌を詠んだと伝えられて以来、勅撰集の編纂から現在の歌会始に至るまで、天皇は常に我が国の定型詩である和歌文化の中心的存在である。	存続 ◆和歌文化は常に天皇と一体的であり、天皇存在がある限り、和歌の衰退もないと推定される。但し、現代の天皇家・皇族は、旧派歌道を継承せず、新派短歌のみをお詠みになる。 ◆天皇の和歌を有職故実(漢風敬称)で「御製」と称する。	◆但し、天皇も各代によって様々な歌壇・歌学の流派に属し、「天皇流」と呼べる一系の歌道流派は存在しないため、これ以降、各流派の説明内に代表的な天皇を分けて記す。
		★万葉草創期 仁徳天皇 磐之媛命 雄略天皇 推古天皇 聖徳太子		上代～ ●ここには、『万葉集』の歌人を記す。すなわち、同集の編纂期の歌人のみならず、同集の編纂期を終期として、それ以前の歌人を記す。おおよその始期が判明している他の全ての(歌	●この歌集を、文芸鑑賞ではなく、成立過程・ヤマト王権史・歌道史の観点から見た場合、次のことが言えると考えられる。 ○『万葉集』は勅撰集であると解することが可能であり、むしろその解釈が妥当である。 ○藤原北家の摂関政治の勃興と、それによる天皇親政の(後世に親政が、とりわけ寛平の治、延喜の治、天曆の治が、理想視され懐古されるほどの)断片化の後に編纂された、残る全ての勅撰集とは異なり、「大王」(天武天皇以降の呼称は「天皇」)の治天下(治天の君の御世)において編まれた勅撰集(本来の「勅撰」集)である。 ○「天皇親政」を、大東亜戦争後の左派学閥において、「天皇専制」と見て「皇親政治」と呼ぶ場合がある(最初、北山草土が		

<p>皇親政治・『万葉集』歌壇</p>	<p>大和国 和泉国 山城国 筑紫・ 太宰府 出羽・ 陸奥の 北部と 九州南 部を除 く全国</p>	<p>★万葉第2期 柿本人麻呂 高市黒人 天武天皇 持統天皇 大津皇子 大伯皇女 志貴皇子 但馬皇女</p> <p>★万葉第3期 山部赤人 大伴旅人 山上憶良 高橋虫麻呂 (大伴)坂上郎女 湯原王 笠金村</p> <p>★万葉第4期 大伴家持 大伴池主 笠郎女 橘諸兄 中臣宅守 狭野弟上娘子 車持千年 小野老</p>	<p>万世一系の血縁とされる天皇 皇親 豪族 貴族 防人 庶民(詠み人知らず多し)</p>	<p>している他のエピソード(歌壇・歌道・歌道家・歌人集団などの)項目とは、基準が異なる。例えば、「万葉草創期」とは、同集の編纂草創期ではなく、同集収録歌人のうち最古の歌人の活躍時期の意味である。 ●現存するものに限るならば、我が国最古の歌集は『万葉集』である。最近では、元号「令和」の出典が同集であることから、頓に国民の話題となっている。 ●同集をめぐる学説は多々あるが、当資料の編纂者としても、同集の意義を常々再考している。 ●『万葉集』は、主に五七調(万葉調)の律動を有する。</p>	<p>石上氏(物部)がある(最初、北山茂人が提唱)。但し、万葉時代の政治が、天皇単独の親政ではなく、大王(天皇)・皇族・有力豪族とそれらの勢力圏の辺境警備部隊(中央から派遣された征東大將軍・征夷大將軍と、王権に取り込まれた筑紫・出雲・吉備や各地の防人など)の連合王権政治であることを考えれば、「皇親政治」の呼称はむしろ妥当である。 ○万葉に天皇から防人までの多種多様な職掌・階級の歌人たちが収められていることは、むしろ大和朝廷の皇親政治の徹底と軍事行動・版図拡大の成功を意味している。万葉の中心を占める大伴家持(陸奥国司・持節征東將軍)などの高名な歌人たちは、異言語・異文化を持つ蝦夷・隼人などの辺境民族の征伐と領土拡大に積極的に、早期から大王に進言・協力し、その信頼を勝ち得た官人、とりわけ軍事豪族・軍事貴族であったことに留意すべきである。防人歌や東歌の哀感ある歌風とて、大伴氏や紀氏の項に記す通りの大和語文明圏の拡大、異民族の征討と表裏一体である。 ○賀茂真淵国学の万葉称揚の心は、古今集の「たをやめぶり」に対する「ますらをぶり」の素朴で雄大な文芸的意義の再評価の側面と、王権(治天の君)の神性を利用する撰閣政治や中世・近世の武家政治に対する皇親政治の懐古の側面の、双方が一体化したものである。</p>	<p>およそ150年間の歌を収録しており、終期は8c半ば大伴家持らによる完成は783年頃 これ以降、『古今集』の時代にかけて、「歌道・歌学」意識の萌芽と共に、歌壇を担う有力豪族が絞られる。 ●万葉時代には、歌人たちは和歌がヤマト王権(大和朝廷)の勢力圏に固有の文芸であることは認識しているが、「歌道・歌学」意識は未だ見られない。 ●但し、万葉の歌風は、近世国学・古学を中心にあらゆる後世の歌道・歌学で尊重され、近代以降の御歌所歌壇やアララギ系歌壇の精神的支柱となる。 ●しかしながら、現在は、万葉時代の文法や万葉仮名によって歌を詠む国民は、ほとんど存在していない。</p>
<p>物部氏→石上氏</p>	<p>大和国 山城国</p>	<p>物部秋持 物部乎刀良 物部古麻呂 物部刀自売 物部広足 物部真嶋 物部真根 物部道足 石上麻呂 石上乙麻呂 石上宅嗣</p>	<p>血縁(祭祀豪族) 神別天神(饒速日命)系 家祖:物部十千根</p>	<p>5c前半～ ●筑紫磐井の乱を鎮圧し、雄略期には大伴氏と並ぶ軍事氏族となる。</p>	<p>●葛城氏、平群氏、巨勢氏、秦氏、春日氏、蘇我氏などと同じく、ヤマト王権初期には国風の定型詩文化を一切持たなかったと考えられる。しかし、万葉時代になると、同じく朝廷の神道系祭祀を担い、「連」姓である中臣氏と共に、豪族歌壇の中心を成し、万葉歌人を多く輩出した。仏教を積極的に取り入れ、最終的には物部氏を滅ぼした「臣」姓の蘇我氏が万葉歌人を生まなかったのとは、対照的である。</p>	<p>祭祀氏族としては7c初頭に衰退 ●7c末に石上氏を称し、万葉歌人や仏道の大家を輩出。 ●崇仏の蘇我氏にほぼ滅ぼされたが、太古神道の生き残りである物部神道・祭祀は、秘儀化して吉備・山陽に流入し、教派神道系教団に一部が残る。</p> <p>●蘇我氏との崇仏・廃仏論争における敗北 ●蘇我氏推挙の崇峻天皇の即位(587)</p>

<p>忌部氏→齋部氏</p>	<p>大和国 山城国</p>	<p>齋部浜成 齋部広成 齋部文山</p>	<p>血縁(祭祀豪族) 神別天神(天太玉命)系 家祖:忌部黒麻呂か</p>	<p>5c前半～ ●「忌部氏」とは「ケガレを忌む部民(べのたみ)」の意であり、狭義には全国の忌部を統率した畿内の氏族としての忌部氏を、広義には忌戒・齋戒を担う全ての部民を指した。</p>	<p>●中央祭祀氏族の地位を中臣氏に奪われるまで、中臣氏と共に朝廷祭祀を司り、その地位は中臣氏の上位にあった。『延喜式』の祝詞には、「御殿(おほと)の御門(みかど)等の祭には齋部氏の祝詞を申せ、以外の諸の祭には、中臣氏の祝詞(中臣祓詞、中臣祭文とも。いわゆる大祓詞)を申せ」とある。 ●大化の改新以後は、中臣氏が朝廷祭祀を独占した。齋部広成は造式(律令格式の式)のための調査報告書である『古語拾遺』を著したが(807)、これには中臣氏への批判と齋部氏の正統性の主張が含まれている。</p>	<p>9c半ばに衰退 ●中臣氏と朝廷祭祀氏族の正統を争ったが、敗北した。 ●物部氏や中臣・大中臣氏のように著名な万葉歌人も出なかったが、文山が東大寺大仏の修理を担うなど、石上氏同様に仏教との縁を深くしていった。 ●中臣氏に朝廷祭祀官職を独占されたまま、振るわず、太古神道の生き残りである齋部神道・祭祀は、秘儀化して吉備・山陽に流入し、教派神道系教団に一部が残る。(岡山市備前市伊部)</p>	<p>●中臣氏の台頭と朝廷祭祀の独占による敗北・没落</p>
<p>中臣氏→大中臣氏</p>	<p>大和国 山城国 伊勢国</p>	<p>中臣鎌足 中臣意美麻呂 中臣東人 中臣宅守 大中臣清麻呂 大中臣頼基 大中臣能宣 大中臣輔親 伊勢大輔 康資王母 筑前乳母 源兼俊母</p>	<p>血縁(祭祀貴族) 神別天神(天児屋根命)系 家祖:大中臣清麻呂</p>	<p>6c半ば～ ●本来、宗教祭祀を担ってきた氏族としての中臣氏の嫡流であった中臣鎌足が、天智天皇より藤原朝臣氏姓を賜った。その娘婿の中臣意美麻呂も藤原を名乗り、初の藤氏長者(氏上)となった。しかしこれは一時的なもので、結局、鎌足の子で、成人した不比等に氏長者を譲り、意美麻呂は中臣に復帰。その子孫が祭祀氏族としての中臣氏の嫡流と見なされるようになり、子の清麻呂以降、大中臣氏を称した。</p>	<p>●崇仏・廃仏論争では、概ね物部氏側に立ち、蘇我氏と対立した。 ●清麻呂の家系が神祇伯・伊勢神宮祭主を世襲し、同時に有能な歌人を輩出した。頼基が宇多院の亭子院歌合に参加して以降、能宣が和歌所寄人・「梨壺の五人」の一人となり、大嘗会和歌を詠進した神祇伯・輔親の代で最盛期。輔親の娘・伊勢大輔など女流歌人を多く出し、藤原南家と並ぶ女流歌人の家となった。 ●白川伯王家の神祇伯世襲が始まると、神祇大副世襲家となり、歌壇も振るわなくなった。白川伯王家は歌道家の中院家・冷泉家より養子を迎えている。</p>	<p>11c半ば ●歌壇は衰退し、神祇伯も輩出しなくなるも、神祇大副・伊勢神宮祭主の家として確立。堂上の藤波家が分家した。 ●物部神道、齋部神道に次ぐ古い朝廷祭祀系神道である(大)中臣神道も、両神道と同様、秘儀化して吉備・山陽の教派神道系教団に流入したが、両神道よりもよく残る。</p>	<p>●同族別流の藤原氏の台頭 ●白川伯王家の台頭</p>

<p>大伴氏→伴氏</p>	<p>大和国 和泉国 山城国</p>	<p>大伴旅人 大伴宿奈麻呂 大伴稻公 大伴安麻呂 大伴坂上郎女 大伴家持 大伴池主 大伴駿河麻呂 伴国道 伴善男 伴健岑</p>	<p>血縁(豪族・貴族) 神別天神(天忍日命)系 家祖:道臣命</p>	<p>5c後半～ ●雄略朝期に大伴室屋が台頭。武烈朝期の金村の代に大伴氏全盛。以降も公卿を輩出し続ける。 ●有力歌人の輩出は7c後半以降。</p>	<p>●7c後半以降、大伴旅人以下の万葉・勅撰歌人を多く輩出。 ●坂上郎女は、大伴氏の巫女の中心的存在で、額田王と並ぶ万葉の女流歌人。女流歌人では最多入集で、家持、人麻呂に次ぐ第三位。 ●国道の代の頃より、伴氏に改氏。応天門の変を機に急速に衰退し、10世紀後半に公卿輩出の記録が途絶える。 ●豪族歌壇に共通する特徴として、大和朝廷の北方における版図拡大の最前線で、蝦夷(えみし)と軍事的衝突を繰り返していた陸奥の国司の要職(陸奥守、陸奥介)に就いた家が、中央歌壇をも制していることが挙げられる。大伴氏も陸奥国司を歴任している。大伴家持も陸奥守・持節征東將軍であり、蝦夷征討を担った。</p>	<p>8c後半のうちに歌壇は衰退 10c後半に家も没落 ●鶴岡八幡宮社家の伴氏は、古代豪族伴氏の後裔か。</p>	<p>●橘奈良麻呂の乱(8c半ば)への連座に伴う古麻呂の処刑と古慈斐の流罪 ●応天門の変(866)による紀氏・伴氏の一掃 ●藤原摂関政治の全盛</p>
<p>石川氏</p>	<p>大和国 山城国 播磨国</p>	<p>石川君子 石川年足</p>	<p>血縁(豪族) 皇別(孝元天皇)系 家祖:蘇我倉山田石川麻呂</p>	<p>7c前半～ ●蘇我氏系統の歌人家系。</p>	<p>●万葉期の歌人家系。但し、収録歌数は少ない。</p>	<p>9c前半に衰退</p>	<p>●石川氏と近い関係にあった藤原仲麻呂の没落。仲麻呂の乱(764)や道鏡の台頭。</p>
<p>小野氏</p>	<p>大和国 近江国 山城国 武蔵国</p>	<p>小野妹子 小野綱手 小野篁 小野好古 小野老 小野道風 小野小町</p>	<p>血縁(豪族・貴族) 皇別(孝昭天皇)系 家祖:天足彦国押人命</p>	<p>7c前半～ ●孝昭天皇の第1皇子天足彦国押人命が祖。</p>	<p>●代々漢詩人・遣隋使・遣唐使などを輩出したが、有力な歌人は篁・好古や数名にとどまった。 ●小野小町については、『尊卑分脈』には小野篁の子良真の娘とあるが、不詳。 ●小野氏も、大伴氏や紀氏の項に記す通り、(これら二氏にやや遅れて)陸奥国司を歴任した。この後、桓武平氏、清和源氏、藤原氏へと陸奥国司が移るにつれ、豪族歌壇は廃れていった。</p>	<p>10c後半に歌壇は衰退 ●篁の末裔から、のちにそれぞれ武蔵七党の一派と言われた横山党・猪俣党が出た。</p>	<p>●藤原摂関政治の全盛 ●武蔵国近隣を拠点とする武士団化</p>

坂上氏	大和国 山城国	坂上是則 坂上望城	血縁(豪族) 諸蕃(後漢靈帝 後裔阿知使主・東 漢氏)系 家祖:坂上志肇	5c前半～ ●秦氏と並ぶ渡来系の東 漢氏系から出た氏。	●諸蕃最大の歌人家系。是則が宇多・醍醐 歌壇で活躍し(「寛平后宮歌合」、「大井川 行幸和歌」など)、子の望城は和歌所寄人 に任じられ、「梨壺の五人」の一人として『後 撰集』を撰集。 ●紀氏・大伴氏などの項でも述べる通り、 坂上氏も、蝦夷討伐で名を挙げて歌壇の中 央に入った氏で、坂上田村麻呂は、阿弭流 爲(アテルイ)征討など、上代の征夷大将軍 の中でも最大の成果を挙げる。	10c後半に歌壇は衰退 ●『後撰集』撰集以降は特筆すべき歌人を 出しておらず、後世において歌道を継承し た堂上家の分家もない。	●藤原摂関政治の全盛
紀氏	大和国 和泉国 山城国 紀伊国	紀鹿人 紀小鹿 紀有則 紀友則 紀貴之 紀時文 紀内侍 紀静子 紀長谷雄 紀淑望 紀淑人 紀時文	血縁(豪族・貴族) 皇別(孝元天皇) 系 家祖:紀角	6c前半～ ●天智朝以降、公卿を輩 出。 ●有力歌人の輩出は9c後 半以降。	●紀氏は大伴氏と並び、早期(8c後半)か ら陸奥守を輩出した。応天門の変により、 政治的には没落。文学・宗教祭祀中心の家 となる。 ●貫之が『古今集』撰者となる。友則は編 纂中に没か。紀氏は、その後も勅撰歌人を 輩出。 ●大伴氏の項に記す通り、紀氏も蝦夷征討 で名を挙げた氏族である。大和朝廷の版図 拡大は、当然、大和語(日本語)による支配 領域の拡大でもある。この時代には、朝廷 としては、大陸から律令制・漢籍・漢詩・朝 鮮半島文化(とりわけ百濟文化)を学ぶ立 場にある一方、日本列島内の異言語文化 圏(蝦夷や隼人)に対しては、それらの言 語・文化を制圧するため、軍事的戦略と和 歌(特に防人歌・東歌など)の双方に長けた 氏族が当然重用され、辺境の采職に送ら れたのである。紀氏は、大化の改新以前は 大臣を輩出していないが、この時期は葛城 氏や平群氏など、初期豪族が大王と共にヤ マト連合政権を成しており、まとまった和 歌・歌壇文化を有していない。従って、紀氏 は「歌の家」「歌道家」意識を初めて有した 氏族の一つであると言える。	10c後半に歌壇は衰退 血統は存続 ●長谷雄の子孫が武家や社家に分家。多 くが女系で存続。紀伊国造の家系も女系 継承が続き、紀三冬より歌道家飛鳥井家 の血統となる。貴族院議員・和歌山市長の 紀俊秀が出た。	●応天門の変(866)による紀氏・伴 氏の一掃 ●藤原摂関政治の全盛 ●明治維新による紀伊国造の廃止

橘氏	大和国 和泉国 山城国	橘諸兄 橘清友 橘公頼 橘則光 能因 小式部内侍 橘為仲 橘俊綱	血縁(豪族・貴族) 皇別(元明天皇) 系 家祖:橘三千代	7c後半～ ●天然痘の疑いによる藤原四子の死後、橘諸兄が聖武・孝謙朝で権勢を振るい、橘氏全盛を築く。 ●有力歌人の輩出は8c前半以降。	●橘諸兄は万葉歌人。『万葉集』撰者の可能性もある。(『采花物語』の「月の宴」の記述や中世期の仙覚の研究による。) ●橘奈良麻呂の乱で橘氏は一時衰退するが、橘嘉智子が嵯峨天皇の皇后となり、同上皇の崩御後、藤原氏と共に承和の変を起こして紀氏と橘氏傍流の橘逸勢を排斥。9世紀以降に二度目の権勢を振るい、中級公卿を出し続けた。(983年に最後の公卿橘恒平が薨去。) ●その後、紀氏同様、歌壇の一族となり、能因・小式部内侍・為仲ら勅撰歌人を輩出した。 ●橘俊綱は藤原頼通の子だが、橘氏の養子となる。歌会を主催したほか、庭園書『作庭記』の著者ともされる。 ●大伴氏・紀氏の項に記した陸奥国司職との関連においては、橘氏からは橘道貞らが陸奥国司に就いており、橘氏の場合、中央歌壇での活躍後の時期に陸奥で重用され始めたこととなる。	10c末に歌壇は衰退 ●現代における末裔の存在は不詳。(橘氏を仮冒した者・家の続出のため。) ●他の有力豪族に比べ、後世まで政権中枢に位置し、「源平藤橘」の一氏として崇められ、橘氏の仮冒が続出、かえって他氏よりも血統が不明瞭となっている。 ●筑後橘氏や地下貴族の分家を出す。橘氏長者は同氏唯一の堂上家の薄家が継承。 ●近世歌人・国学者の橘千蔭(加藤千蔭)・橘守部・橘曙覧らは歌道者・国学者としての権威付けのため橘氏を仮冒したもので、橘氏血統とは無関係。	●橘奈良麻呂の乱(8c半ば) ●承和の変(842) ●藤原摂関政治の全盛 ●橘氏長者家薄家の断絶(1585)
清原氏	大和国 山城国 紀伊国 出羽国 陸奥国 下野国 東京府 東京都	清原夏野 清原長谷 清原深養父 清原元輔 檜垣姫 清少納言	血縁(豪族・貴族) 皇別(舍人親王) 系 家祖:清原夏野・清原長谷	8c末～ ●夏野・長谷が小倉王より清原真人の氏姓を賜与される。 ●有力歌人の輩出は10c前半以降。	●夏野の血統は途絶えるが、有雄の血統から深養父・清少納言などの有力歌人・文人が出た。 ●檜垣姫は元輔と親交があり、『無名草子』には元輔と檜垣姫との間にできた子が清少納言であると書かれているが、不詳。	11c前半に歌壇は衰退 現代における末裔の存在は不詳。(清原氏を仮冒した者・家の続出のため。) ●清原光頼・武則・武貞・武衡ら出羽清原氏が舍人親王系清原氏の後裔であるかどうかは疑わしい。また、奥州藤原氏は、前九年の役ののち、藤原経清の妻が清原武貞の妻となり、同じく子清衡が武貞の養子となったことを機に台頭した藤原氏の一族で、清原氏血統ではない。 ●清原業恒の血統(明経道を家業とする堂上の舟橋家・伏原家など)も清原氏後裔を称したが、仮冒である。	●藤原摂関政治の全盛 ●血統断絶 ●清原氏を仮冒した別氏(業恒の血統である舟橋家・伏原家など)の清原氏本流化や養子による家の存続に伴う、清原氏の血統・家柄そのものの変化(業恒血統の家業は明経道となり、武則・武貞・清衡の家は奥州藤原氏そのものとなる。)

菅原氏→美作菅氏	大和国和泉国山城国美作国備前国備中国筑前国	菅原道真 菅原文時 菅原孝標女 菅原為長	血縁(豪族・貴族) 神別天孫(天穗日命)系土師氏後裔 家祖:菅原古人	8c末～ ●阿衡の紛議における調停の功により、道真が宇多天皇に重用され、台頭。 ●有力歌人の輩出は9c後半。	●家業は紀伝道・文章道。菅原氏の私塾山陰亭(菅家廊下)は紀伝道が主で、和歌は扱わなかった。 ●菅原氏における和歌は、道真一人を除いてはほとんど反映していない。(道真による歌壇の黎明期のうちに、醍醐天皇・藤原時平の謀略により一族共々左遷・流刑されたため。)しかし、紀伝道博士を世襲し、平安後期には代々侍読を務め、天皇・九条家・御子左家など歌壇からも信任を得た。	10c末までに歌壇は衰退 血統は存続 ●まず武家の美作菅氏、次に半家の唐橋家・高辻家が分家。これらの家からさらに多くの公家・武家・社家が分家。西高辻家は現在、太宰府天満宮宮司である。	●昌泰の変(901)による道真一族の左遷・流刑 ●藤原摂関政治の全盛 ●唐橋在数殺害による唐橋家の没落、及び高辻家・五条家・東坊城家による菅原氏長者(北野の長者)の奪い合い
大江氏	大和国山城国	大江千里 大江千古 大江匡衡 赤染衛門 和泉式部 小式部内侍 大江嘉言 大江為基 大江匡房 大江広元	血縁(豪族・貴族) 神別天孫(天穗日命)系土師氏後裔 家祖:大枝諸上	8c末～ ●菅麻呂・諸上らが桓武天皇より「大枝朝臣」を授かり、大枝氏となり、音人以降「大江」と改める。 ●有力歌人の輩出は9c後半以降。	●中古三十六歌仙(藤原範兼『後六々撰』)に一族より五名が選ばれた。(大江千里・大江匡衡・赤染衛門・和泉式部・大江嘉言) ●公卿の輩出が途絶えた一方、文壇で活躍するが、匡房の代に再び公卿となり、広元が鎌倉幕府で重用された。大江氏より堂上の北大路家が分家し、和歌を含む文学全般を家業として承えた。	12c前半に歌壇は衰退 現代における末裔の存在は不詳。(広元の後裔より分家したとされる長井氏・那波氏・毛利氏・酒井氏などの名門武家は、いずれも大江氏の出を仮冒している可能性あり。)	●藤原摂関政治の全盛 ●宝治合戦(1247)における毛利季光(大江広元の四男)の三浦氏への連座
在原氏	大和国山城国	在原業平 在原行平 在原棟梁 在原元方 在原滋春	血縁(豪族・貴族) 皇別(平城天皇)系 家祖:阿保親王	9c前半～ ●始期が正確に判明している、『古今集』歌壇の中でも新しく代表的な氏族。	●『古今集』歌壇の中心を占め、宇多源氏・醍醐源氏歌壇や藤原北家歌壇の台頭まで活躍。	10c前半に藤原北家歌壇に入って自然消滅 ●在原元方が藤原国経の養子となり、北家歌壇と親和・融合。	●藤原北家の台頭 ●在原元方の藤原国経への養子入り

藤原氏	大和国 山城国	中臣(藤原)鎌足 藤原不比等 藤原四兄弟 以下、 藤原南家 藤原北家 藤原式家 藤原京家	血縁(貴族) 神別天神(天兒 屋根命)系 家祖:中臣(藤 原)鎌足	7c半ば ●鎌足が大化の改新 (645)での功績により、天 智天皇から藤原朝臣氏姓 を賜る。子の不比等の代よ り正式に名乗る。	●元は中臣氏の嫡流。しかし、藤原氏と なったため、中臣意美麻呂の子孫が中臣 氏嫡流となり、大中臣氏を名乗る。 ●藤原四兄弟の死以降、一時的に橘諸兄 が権力を握ったが、その後、南家の豊成・ 仲麻呂の台頭を機に再度高官に復帰。 ●「家」は、「氏」の本流(嫡流)または分流 (庶流)のうち、特に権勢を誇り独立性が高 い系統を指し、養子を迎えるなどして家系を 保つ限り、存続せられる。藤原氏の場合、 氏創立から早期に四家が分立しており、他 氏に比べて、嫡流のみならず庶流について も、その規模拡大の早さが窺い知れる。	藤原南家、式家、京家は没落するも、北家 は著しく勢力を拡大。日本史上最大の権勢 を誇る豪族・貴族となり(摂家、清華家、大 臣家をほぼ独占)、また血統の広がりも皇 室に次ぐ規模と考えられる。九条、近衛、 二条、一条、鷹司の苗字を名乗った場合 も、男系男子は全て藤原氏あるいは藤氏 長者である。非堂上家・非貴族(とりわけ織 田信長や豊臣秀吉などの戦国大名や地下 勢力)が有力氏族を假冒した場合も、天神 系の藤原氏の假冒が皇別の源平橘などを 上回り、最多である。武家政治の最大の目 的が、天下統一であると共に、自ら藤氏長 者となって天皇からの信任を得ることに あったためである。 従って、歌道師範家も、御子左家をはじめ として、藤原氏血統が日本史上最多であ る。『古今集』の秘伝の伝授である古今伝 授も、元来は平氏血統が始めたものでは ないが、すぐに藤原氏血統の歌道家にその主 導権を奪われている。また、歌道に限れ ば、政治的には没落した南家の子孫が、 北家と共に二条派歌道の中心を成すことと なる。 しかし、近現代短歌の隆盛以降は、旧派歌 道そのものの衰退により、必ずしも藤原氏 の子孫が歌道に長じてこれを継承するとい う傾向にはなくなった。	●天然痘の流行(737)による家祖の 死 ●藤原仲麻呂の乱(764) ●氷上川継の乱(782)における藤原 魚名の連座 ●清和源氏・桓武平氏の台頭、摂関 政治の衰退、武家政治の成立 ●秩禄処分(1876) ●華族の東京移住命令 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第二次世界大戦の戦災(東京大空 襲) ●敗戦 ●華族制度の廃止(1947) ●税制の一新と混乱による歌書の散 逸(財産税・富裕税・シャープ勧告) ●標準国語の変化(東国方言の東京 標準語化)
藤原南家	大和国 山城国	藤原仲麻呂 藤原巨勢麻呂 藤原訓儒麻呂 藤原敏行 藤原元真 藤原季縄 右近 上東門院小馬命 婦 藤原公経 素意 藤原範兼 信西 小弁 祐子内親王家紀 伊	血縁(貴族) 神別天神(天兒 屋根命)系 家祖:藤原武智 麻呂	8c初頭～ ●長屋王の変(729)により 武智麻呂が聖武朝で政権 を握る。	●巨勢麻呂の家系は当代随一の女流歌人 の家となった。(右近・上東門院小馬命婦・ 小弁・祐子内親王家紀伊など。)賀茂斎院 歌壇・親王家歌壇の一角を担った。 ●同じく巨勢麻呂流の実範の家系は代々 漢詩人・文章博士を輩出していたが、高階 氏の養子となった通憲は家業を継ぐこと叶 わず、出家して信西を名乗り、保元の乱 (1156)などを通じて院近臣として権勢を誇 る。	南家としては衰退するも、為憲後裔の工藤 氏流の二階堂氏(頼阿・経賢・堯尋・堯孝 ら)が中世期に二条派の全盛を築く。 娘が源義朝の正室となった季範の家系 は、熱田大宮司家として熱田神宮歌壇の 基礎を築く。	●天然痘の流行(737)による家祖の 死 ●藤原仲麻呂の乱(764) ●伊予親王の変(807) ●藤原北家の台頭

藤原北家	大和国 山城国	藤原真楯 藤原関雄 伊勢 藤原高経 藤原高子 藤原時平 藤原敦忠 藤原仲平 藤原忠平 藤原兼輔 藤原雅正 清正母 藤原清正 清正女 藤原為頼 藤原為時 紫式部 藤原定方 藤原朝忠 藤原朝成	血縁(貴族) 神別天神(天兒 屋根命)系 家祖:藤原房前	8c初頭～ ●藤原四家のうち、最も遅く台頭。冬嗣以降、天皇の外戚を出し続け、藤氏長者・摂関を独占するに至った。	●藤原氏の最大勢力であると共に、歌道家をも最も多く輩出した家系である。 ●この項には、別項を設けた北家流の歌道家・歌道流派以外の北家の歌人を掲載した。(真夏・長良ら嫡流家の歌人、及び基経の子、時平の家系、兼輔の家系) これらの北家分家が栄えた直後に、小野宮流・小一条流・世尊寺流歌道が栄え、その後に六条藤家と御子左家の拮抗と飛鳥井家の台頭があり、御子左家より京極派・冷泉派・諸派が分裂し、遅れて二条派が諸派を合流しつつ台頭。六条藤家・御子左家歌壇を様子見しつつ着実に歌道を確認した閑院流三家(三条家・西園寺家・徳大寺家)や真夏流の日野家が、古今伝授・歌道師範の家として栄える。 ●紫式部は勸修寺流の出で、祖父・雅正、父・為時共に勅撰歌人であり、同流はその後も韻文・散文共に長じ、日記を家業とした(「日記の家」)。同流からはのちに、紀伝道と装束の家でありつつ、披講会会長や歌会始講師を輩出することになる坊城家が分家した。	歌壇は分散、北家以外の歌道家などに発展的に継承される ●現代におけるほぼ唯一の歌道家である冷泉家が存続している以上、藤原北家歌壇も存続していると言える。冷泉家はすでに女系継承となっているが、婿養子を他の藤原北家の分家より迎えており、いずれにせよ北家の血統は安泰である。 ●また、旧堂上家・旧公家・旧貴族・旧華族・旧士族以外にも、北家の血統はありとあらゆる地域と身分の一般国民に分散し、今日に至っている。 ●しかし、冷泉家歌道をはじめとする旧北家系歌壇の存在を認知している国民のあまりに少ない現状、および、当の冷泉家歌道が旧派和歌の詠進よりも歌書・家宝の保全と既存和歌の披講に力点を置かざるを得なくなっている現状、そして、ほとんどの北家系家系が和歌を詠まなくなっている現状を考慮すれば、本資料の定義上、もはや北家歌壇は荒廃・衰亡したと考えて差し支えないであろう。	●天然痘の流行(737)による家祖の死 ●氷上川継の乱(782)における藤原魚名の連座 ●清和源氏・桓武平氏の台頭、摂関政治の衰退、武家政治の成立 ●秩禄処分(1876) ●華族の東京移住命令 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●敗戦 ●華族制度の廃止(1947) ●税制の一新と混乱による歌書の散逸(財産税・富裕税・シャープ勧告) ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化)
藤原式家	大和国 山城国	藤原良継 藤原仲文 藤原後生 藤原仲実 藤原敦光	血縁(貴族) 神別天神(天兒 屋根命)系 家祖:藤原宇合	8c初頭～ ●長屋王の変(729)により宇合が聖武朝で政権を握る。	●藤原広嗣の乱で一時衰退するが、平城・嵯峨・淳和天皇の外戚となり、長岡京・平安京造営期に藤原四家のうち最大の権勢を振るう。	鎌倉時代に断絶か ●没落後は、明衡・敦基などの名儒者・名漢詩人を輩出するが、この頃以降は存続が確認できる家系が存在しない。	●天然痘の流行(737)による家祖の死 ●藤原広嗣の乱(740～41) ●平城太上天皇の変(810) ●承和の変(842)による藤原吉野の失脚 ●藤原北家の台頭
藤原京家	大和国 山城国	藤原麻呂 藤原浜成 藤原興風 藤原忠房	血縁(貴族) 神別天神(天兒 屋根命)系 家祖:藤原麻呂	8c初頭～ ●浜成が孝謙・淳仁朝に台頭。藤原仲麻呂の乱を機に昇進を重ね、公卿となる。	●藤原四家のうちで最も振るわなかったが、家祖の代から有能な『万葉集』・『懐風藻』歌人で、浜成の家系に有力歌人が出た。 ●浜成が現存中最古の歌論書『歌経標式』を著す。 ●興風が古今歌壇の中心を担う。	不明。断絶か ●直江氏が京家後裔を称したが、仮冒の可能性が高い。	●天然痘の流行(737)による家祖の死 ●氷上川継の乱(782)における藤原浜成の連座 ●藤原北家の台頭

国風文化の発達に伴う歌道と『古今和歌集』の成立、摂関政治期における王朝和歌と勅撰和歌集の確立

流派名	本拠地	代表的歌人・歌論者・当主	流派の主体	流派の成立時期・成立事情 (cは世紀)	特徴	衰退・分裂・断絶の時期 (cは世紀。血統断絶の場合、掲載可能な限りその旨を記す。) ●衰退・分裂・断絶に至る記述 ◆は存続についての記述	衰退・分裂・断絶の理由 ●最終断絶以外(一時的な衰退など)の理由も記載した。 ◆は存続についての記述
<p>晩期豪族・初期貴族・『古今和歌集』歌壇</p>	<p>山城国</p>	<p>醍醐天皇 紀友則 紀貫之 凡河内躬恒 壬生忠岑 (以上、撰者とされる。友則は編纂半ばで没か。貫之は仮名序執筆者か。) 紀淑望(真名序執筆者か) 在原業平 在原元方 伊勢 大江千里 小野小町 清原深養父 素性 春道列樹 藤原興風 藤原兼輔 文屋朝康 文屋康秀 遍昭 源融</p>	<p>血縁(天皇・豪族・貴族) 紀氏 凡河内宿禰 壬生直 在原氏 大江氏 小野氏 清原氏 嵯峨源氏 藤原京家 藤原式家 藤原南家 藤原北家</p>	<p>9c半ば～10c初頭 ●『古今集』収録歌は上代のものを含むが、『古今集』歌壇(撰者の歌壇)と呼べるものは9c半ば以降。 ●和歌の律動が五七調(万葉調)から七五調(古今調)に変化。 ●『古今集』から『拾遺集』までを「三代集」、『新古今集』までを「八代集」という。</p>	<p>●『万葉集』が編まれたのち、漢風(唐風)文化が隆盛を見たが、遣唐使の廃止後、国風の文化、とりわけ和歌文化の醸成の気運が高まる。 ●ここに編まれた『古今集』は初の勅撰和歌集。真名序と仮名序を有し、万葉未収録の歌を中心に、上代から撰者らの時代の歌を収録。詠み人知らずが極めて多い。 ●藤原氏の歌についても、未だ藤原北家への権力集中の過渡期であるため、収録歌数も偏らず、京家・式家・南家の歌も収録。 ●天皇の歌壇と和歌集との結節点、すなわち勅撰集は、聖代思想として生じた。すなわち、醍醐天皇の治世が「延喜の治」として崇められたことから、勅撰集の編纂は天皇自身の悲願となった。一方で、聖代思想と結びついていない『万葉集』については、勅撰集の手続きを踏んでいたとしても、勅撰集とは見なされない。 ▼『古今集』: 905(延喜5)年から912(延喜12)年頃までに成る。醍醐天皇勅。紀友則、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑撰。20巻・1111首(長歌5、旋頭歌4)。艶やかさを基調とする「たをやめぶり」と評される。七五調。柿本人麻呂と山部赤人は、序で「和歌の仙(ひじり)」と評され、ここから「歌仙」の語が生まれた。序で個性的な歌風を紹介された僧正遍昭、在原業平、文屋康秀、喜撰法師、小野小町、大伴黒主は、後世に「六歌仙」と呼ばれた。</p>	<p>『古今集』撰者歌壇としては断絶 ●『古今集』は、直後の国風文化の基礎となり、漢風文化に対する日本固有の文化としての和歌の地位を確立せしめ、また後世の全ての勅撰集の手本、二条派歌道の基盤となったほか、その秘伝化された解釈・奥義は、古今伝授として御所から地下にまで伝播し、桂園派歌道の根幹を成し、本居宣長の国学の大成に寄与した。 ●一方で、近代以降、万葉を称揚する立場からは、『古今集』に対して激烈な批判が行われ、正岡子規や萩原朔太郎らが『古今集』(の擁護者)に対して罵詈雑言を浴びせる『古今集』「愚劣」論が展開された。</p>	

和歌所	山城国平安御所各撰者・編者の私邸など	和歌の専門家	歌人集団 別当:長官・総監督 開闢:文書事務の長 寄人:和歌の専門家 召人:寄人にほぼ同じ 連署:寄人にほぼ同じ	事実上の設置は905年頃 正式な設置は951年 ●勅撰集編纂や和歌研究を主要職務とする臨時の役所またはその編纂場所。宮中や貴族の私邸に設置された。	●『古今集』編纂の際は事実上、内御書所に設置されたが、和歌所の名はなかった。 ●『後撰集』編纂の際に昭陽舎(梨壺)に設置されたのが最初。 ●『拾遺集』編纂の際には設置されなかった。 ●開闢は和歌所の文書事務の長で、『新古今集』編纂の際の源家長、『新後撰集』・『続千載集』編纂の際の長舜の就任などがある。 ●連署は寄人・召人と同様の職務であるが、勅撰集の大規模化に伴い、撰者を補佐すると共に別当・開闢以下の文書事務を処理するために設置された。	廃止 ●勅撰集の終焉により、長期に渡って設置されなかったが、明治時代にこの和歌所に倣い、御歌所が設置された(1888)。 御歌所も廃止(1946) ●現在、女流専門または女流中心の和歌サークルである「清風会」や「余情会」が和歌所に倣った役職の呼称を採用している。	●勅撰集の終焉(1439)
梨壺の五人(五歌仙)、『後撰和歌集』歌壇	山城国平安御所(昭陽舎)	村上天皇 藤原伊尹 大中臣能宣 清原元輔 源順 紀時文 坂上望城	歌人集団 別当 寄人	951～ ●村上天皇の勅命により、昭陽舎(梨壺)に撰和歌所が設置され、有能な歌人らが集められた。	●和歌所別当の藤原伊尹が五人を統括。 ●主な職務は、『万葉集』の訓釈及び二番目の勅撰集『後撰集』の編纂。 ●『後撰集』には日常生活を詠んだ「褻(け)の歌」を多く採っている。 ▼『後撰集』:951(天曆5)～956(天曆10)年成る。村上天皇勅。源順ら撰。20巻・1425首。貴族の贈答歌中心、物語化。撰者の歌なし。褻の歌多し(←→晴の歌)。	10c末 離散・廃止	●五人の死
宇多・醍醐天皇歌壇	山城国	宇多天皇 醍醐天皇 藤原興風 藤原国経 藤原高経 藤原忠房 凡河内躬恒 坂上是則 紀貫之 在原業平 素性 大中臣頼基 兼覧王 伊勢	血縁(天皇・貴族) 藤原北家長良流 法性寺流 坂上氏 紀氏 在原氏	9c後半～	●歌合の形式の確立(「寛平后宮歌合」、「大井川行幸和歌」など) ●宇多法皇「亭子院歌合」(913) ●醍醐天皇が『古今集』編纂を勅命、八代集が始まる。 ●醍醐天皇『延喜御集』 ●高経流は、源氏をはじめ藤原氏以外の諸氏や卑官の壬生忠見をも歌会に引き入れた村上天皇の天徳歌壇は別にして、宇多・醍醐・円融・花山・一条の各天皇・各院歌壇を主導。高経の子の惟岳のみはあまり歌壇に参じなかったが、その後は歌道家の地位を確立。長能は『拾遺集』撰者と目される。 ●国経流は、高経流歌道の全盛期を過ぎた「常磐三寂」の代に全盛。	10c前半 天徳・村上天皇歌壇へ継承発展	●醍醐天皇の崩御(930)

宇多・醍醐源氏流	山城国	源雅信 源師賢 源高明 源博雅 源延光 源兼氏 長舜	血縁(貴族) 宇多・醍醐天皇直系 宇多源氏・醍醐源氏	10c前半～ ●歌道を称してはいないが、橘氏・紀氏・大伴氏・菅原氏衰亡後、和歌の争いが事実上の源氏と藤原氏の権力争いを兼ねる。	●藤原北家文化全盛前の貴族源氏の主流。「天徳内裏歌合」など豪華絢爛な歌会に参加して藤原北家と争う。 ●「歌道」意識の萌芽 ●和歌と官位・政務の強固な結びつき ●のちに勅撰歌人や和歌所闡園・連署を輩出し、勅撰集時代にも有力な一派となる。	11c半ば 衰退 ●一部は六条源家として発展する。 ●この血統はのちの庭田家・五辻家・武家の佐々木氏などであり、末裔は存続している。	●安和の変(969) ●藤原摂関政治の全盛 ●政務への専心
小野宮流・小一条流・世尊寺流	山城国	藤原実頼 藤原師輔 藤原公任 藤原定頼 藤原経家 藤原高遠 藤原実資 藤原資仲 藤原顕仲 藤原通俊 藤原師尹 藤原伊尹 藤原義孝 藤原行成 藤原伊経 世尊寺行能 世尊寺行房 藤原朝光 藤原定頼女 建礼門院右京大夫 小大君	血縁(貴族) 藤原北家小野宮流 藤原北家小一条流 藤原北家世尊寺流	10c前半～ ●同上	●藤原公任『三十六人撰』(『三十六人歌合』)。いわゆる「三十六歌仙」による歌合形式。後世これを模して、「中古三十六歌仙」(藤原範兼の『後六々撰』に掲載)、「女房三十六歌仙」(撰者不明の『女房三十六人歌合』に掲載)、「新三十六歌仙」(撰者や歌仙の構成に諸説あり)が編まれた。 ●和歌・書道・有職故実・管弦において宇多・醍醐源氏としてのぎを削る。 ●実頼が「天徳内裏歌合」の判者となる。 ●「歌道」意識の萌芽、および「漢詩」と「和歌」の対峙意識の萌芽。藤原公任編『和漢朗詠集』(1018頃)が好例。 ●和歌と官位・政務の強固な結びつきを象徴。村上朝までは、これら三流をはじめとする藤原北家庶流(当時の主流・御堂流)の権勢が(のちの)御堂流を上回っており、円融・花山朝で御堂流の権勢が逆転。 ●小野宮家は、韻文・散文共に長じ、日記を家業とした(「日記の家」)。 ●世尊寺家は、「三跡」の一人の行成以降、書道を家職としたが、和歌にも優れ、伊経の代と、正式に世尊寺の家名を冠した行能の代以降に、歌道でも知られ、九条流・御子左流歌壇に呼ばれるようになった。伊経は、九条兼実とその能書を評価されながらも、官位の低さや経済的低迷を理由に依頼を断るほどであったが、定家が行能の書と歌を評価し、世尊寺流はそれら双方の家として名を馳せた。行能の代に、官位も従三位に復帰した。	16c末 断絶 ●歌道家・書道家・堂上家全てとして絶家。	●北家御堂流血統の全盛 ●世尊寺流書道・歌道の双方を評価した九条兼実の失脚 ●世尊寺流書道・歌道の双方を評価した藤原定家の子らの代における、御子左流の分裂 ●世尊寺流書道への専心 ●血統断絶

<p>天徳・村上 天皇歌壇</p>	<p>山城国</p>	<p>村上天皇 藤原実頼 源高明 源延光 源博雅 藤原朝忠 平兼盛 源順 坂上望城 清原元輔 大中臣能宣 少弐命婦 中務 藤原博古 壬生忠見 藤原元真 本院侍従 右近</p>	<p>血縁(天皇・貴族) 藤原北家小野宮 流 宇多源氏・醍醐源 氏 嵯峨源氏 光孝平氏 藤原南家巨勢麻 呂流 坂上氏 清原氏 大中臣氏 壬生直</p>	<p>10c半ば ●有力豪族血統である初期貴族が撰者を担った『古今集』の時代から、藤原北家御堂流による撰関政治確立期までに、最も栄えた歌壇</p>	<p>●『古今集』が成った直後、『後撰集』(951頃～958頃)の時期までは、古代軍事豪族の多くが没落する一方、藤原北家が台頭する時期であり、この時期を象徴し、かつ最も栄えた歌壇が、村上天皇の勅命歌壇である。 ●とりわけ「天徳内裏歌合」(960)が名高く、判者と左右の講師には、宇多・醍醐天皇時代に歌壇を制していた藤原北家小野宮流と宇多源氏・醍醐源氏がそれぞれ任じられたが、没落直前の豪族の各氏からも参加し、直(あたい)の姓に過ぎなかった壬生忠見の参加も許された。20番「恋」の題における壬生忠見と平兼盛の両歌について、村上天皇が兼盛の歌を口ずさんで勝ちとなり、忠見が悶死したとする逸話が知られる。</p>	<p>10c後半 ●円融・花山院・御堂流歌壇へ継承。</p>	<p>●村上天皇の崩御(967) ●歌壇の担い手の変化(天皇・皇族・豪族から貴族、とりわけ藤原北家へ)</p>
<p>円融院・花 山院・一条 天皇・『拾遺 和歌集』歌 壇</p>	<p>山城国</p>	<p>円融天皇 花山天皇 一条天皇 平兼盛 大中臣能宣 清原元輔 源重之 源道濟 紀時文 藤原倫寧 藤原長能 曾禰好忠 源為憲</p>	<p>血縁(天皇・貴族) 紀氏 大中臣氏 清原氏 清和源氏 光孝源氏 光孝平氏 藤原北家長良流 法性寺流</p>	<p>10c後半～ ●『古今集』・『後撰集』・天徳内裏歌合の後、歌壇の中樞が徐々に源氏、次いで藤原北家の手に集中。</p>	<p>●宇多・醍醐歌壇に続き、藤原北家長良流法性寺流(のちの御堂流以外の長良流)、とりわけ藤原高経の血統が主導した歌壇。 ●歌壇の中樞が源氏と藤原北家に絞られていく中、円融・花山天皇が享樂的な歌会を開催。特に花山天皇は、法皇となったのちも、和歌を愛好し、『拾遺和歌集』を親撰する一方で、多数の女官との享樂や「長徳の変」などの闘乱事件に明け暮れ、風紀と政局を攪乱させる。 ▼『拾遺集』: 1006(寛弘3)年頃成る。花山院宣か、一条天皇勅。花山院親撰か、源道濟、藤原長能ら撰。20巻・1350首。典雅、格調、『古今集』の伝統。「拾遺」=前代集に漏れた秀歌を拾い集めるの意。平明優美で、晴の歌、恋歌(百人一首に八首)多し。</p>	<p>11c初頭 ●北家長良流はそのまま御堂流血統となり、歌壇も御堂流へ移行継承。花山院政期は、一条朝・道長政治の全盛期であると共に、御堂流歌道の確立期である。但し、倫寧・長能を中心とする一条歌壇と、道長の政権中樞とは、ややずれがあり、後世において道長が大歌人に列することはほとんどない。</p>	<p>●円融天皇・花山院の享樂的な歌会の開催による政局の混乱と、それに乗じた藤原北家御堂流の権勢の確立 ●花山天皇の崩御(1008)</p>

御堂流・撰 関歌壇	山城国	<p>一条天皇 三条天皇 後一条天皇 後朱雀天皇 後冷泉天皇 後三条天皇 藤原師輔 藤原伊尹 藤原兼家 藤原道隆 藤原道長 藤原頼通 藤原彰子 藤原師実 藤原師通 藤原忠教 藤原公実 崇徳院 藤原忠実 藤原教長 藤原斉信 難波頼輔 徳大寺公能 藤原顕輔 藤原俊忠 藤原俊成 西行 中務 和泉式部 小式部内侍</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家九条流 (御堂関白道長より 前の師輔・兼家は九 条流と呼ばれる。) 藤原北家御堂流</p>	<p>10c前半～ ●藤原北家御堂流血 統はこの頃より台頭 10c後半～ ●円融・花山朝の間、 御堂流が外戚の地位 を利用して急速に台 頭、撰関政治の全盛を 迎える。 11c～ ●血統としての御堂流 は、撰関政治の全盛 期には、北家嫡流と天 皇の外戚の威をもって 政治に専心。書の名 人などを輩出するも、 師輔・師実など数人を 除き、歌道としては脆 弱の感が否めない。御 堂流歌壇の本格的な 繁栄は道長・頼通の後 の代からである。</p>	<p>●頼通の代に撰関政治が斜陽に差し掛かると、そのおよそ50年の撰関就任期に御堂流歌壇が活気を増していき、まずその撰関・藤氏長者から名歌人として師実を出し、のちの御子左流歌壇の中心的歌人となる九条良経に至るまで、長者から歌人を輩出し続けた。 ●長者・北家嫡流以外では、忠教の血統と閑院流の公実の血統が、御堂流歌壇の双壁を成した。まず前者では、忠教と子の教長・頼輔を輩出し、頼輔は難波家を創始、のちに難波家から堂上二条派の名門・飛鳥井家が分家する。閑院流からは、公実が出て、名門歌道家の三条・西園寺・徳大寺家の共通の祖となった。のちに三条家からは名門の正親町三条・三条西家が分家するが、御堂流歌壇では徳大寺家の力が優越しており、徳大寺公能が家人の西行や義兄の俊成と共に歌道を極めた。 ●御堂流歌壇全盛期には、撰関の権威が斜陽にあったことから、天皇・上皇主催の歌会・歌題が増加。崇徳院歌壇が最も栄え、院の命で集められた久安百首(1150)には、藤原教長、徳大寺公能、藤原顕輔、藤原俊成らが参加。顕輔と俊成は、六条藤家流と御子左流の歌学論争の端緒を作る。</p>	<p>12c前半 ●九条家へ継承。</p>	<p>●北家嫡流として撰関を独占、権勢を振るうが、撰関政治の全盛期には、その和歌は小野宮・小一条・六条・御子左各流に及ばず。撰関政治衰退期から歌壇が栄え、そのまま嫡流の九条家へ継承。九条良経を中心とするその九条家歌道は、御子左流と同化し、同流の一派として中世歌道の礎を築く。 ●保元の乱(1156) ●平治の乱(1160)</p>
--------------	-----	---	---	---	---	---------------------------	---

<p>中宮・女院 歌壇</p>	<p>山城国</p>	<p>藤原穩子 藤原安子 藤原■子(■ は女に皇) 藤原詮子 藤原定子 藤原彰子 藤原妍子 藤原威子 禎子内親王 藤原■子(■ は女に原) 藤原賢子 ■子内親王 (■は女に是) 篤子内親王 藤原聖子 藤原忻子 平徳子 藤原任子 藤原■子(■ は金に章)</p>	<p>血縁 皇別(男系血統女 子) 藤原北家御堂流</p>	<p>8c前半～ ●「中宮」の語意は時代によって異なるが、ここでは、正妻・後妻・側室を問わず、皇后・皇太后・太皇太后の総称、ないし、これらの女性たちが住まう居を指す。 ●「女御」とは、皇后・中宮に次ぐ後宮の身分で、天皇の寝所に侍る女性。中世には女御から立后する慣例だったが、近世には必ずしも立后しなくなった。 ●「女院」とは、院号定に基づいて三后、准后、内親王、女王の女性に宣下された称号、ないし、女院の実務を司る院庁(女院庁)を指す。</p>	<p>●未だ神道と歌道とが不可分の巫女神樂の要素を残し、時に神懸りとなって天皇・朝廷に意見することもあった齋王(齋宮・齋院)の歌壇とは異なり、中宮歌壇の時代には、これらの要素はほとんど欠落した。中宮歌壇は、男系男子の天皇と、男系男子の歌道宗匠(公家)が先導する歌道を展開する場であり、呪術や神道の儀式としての歌謡を行う場ではなくなった。さらに、1300年に亘る中宮の歴史において、そのほとんどは藤原北家の出自であり、内親王・女王・源平の出自の中宮はほとんどいなかった。しかし、中宮歌壇は、齋王歌壇と同じく、女流歌人で占められており、中宮から女御、下女まで様々な出自の女性が集う場であったため、和歌の出来が政局に直結する男性歌壇とは異質の、女性の文化サロンであることに変わりはなかった。摂関政治の時代を全盛期として、大いに栄え、多くの女流歌人を生み出した。</p>	<p>近代に衰退 ●皇后が和歌を行う限り、広義の中宮歌壇は継続していると言えるが、旧派歌道直系(摂関政治期、御子左流、二条流、三条西流)の歌道としては消滅。</p>	<p>●近代化と新派短歌の隆盛 ●明治天皇の皇后・側室の歌道の新派短歌への移行 ●大正天皇以降の一夫一妻制の導入による、皇后・側室歌壇そのものの縮小。</p>
---------------------	------------	--	---	--	---	--	---

院政期文化・鎌倉時代における歌道宗匠家・勅撰和歌集の発展と御子左派の全盛

流派名	本拠地	代表的歌人・ 歌論者・当主	流派の主体	流派の成立時期・成 立事情 (cは世紀)	特徴	衰退・分裂・断絶の時期 (cは世紀。血統断絶の場合、掲載可 能な限りその旨を記す。) ●衰退・分裂・断絶に至る記述 ◆は存続についての記述	衰退・分裂・断絶の理由 ●最終断絶以外(一時的 な衰退など)の理由も記載 した。 ◆は存続についての記述
平家歌壇	東国 山城国 大和国 伊勢国 摂津国 瀬戸内 海周辺 国	平貞文 平兼盛 平資盛 平棟仲 周防内侍 平忠盛 平忠度 平経正 平行盛	血縁(貴族・武家) 桓武平氏、伊勢平 氏 桓武平氏、伊勢平 氏以外の平氏(平 兼盛など)	10c後半～ ●源氏・藤原氏・橘氏 と共に台頭。「源平藤 橘」 ●この時期よりすでに 明確な歌道意識、家 の血統と歌道継承の 結びつきが見える源氏 (源家)・藤原氏(藤家) に対し、平氏を含め大 伴氏・橘氏・紀氏・菅原 氏・小野氏・大江氏・清 原氏などにおいてはそ れらが希薄であるが、 有力な歌人は各血統 に多く存在する。 11c～ ●明確な歌道意識が 萌芽。	●保元の乱(1156)および平治の乱(1160) で平清盛が勝利し、武士初の太政大臣とな り、かつ武家初の貴族風歌壇を短期間で作 り上げた。 ●平氏に対し平家とは、一般に武家平氏全 盛期の平清盛一族を指すが、本来の「平 家」の観点からは、清盛一族は、貞盛に始 まる伊勢平氏の庶流にすぎなかった。ただ し、古くは、源家のうち清和源氏の一流であ る河内源氏を、単に「源家」と言う場合もあ った。 この本来の「平家」(公家平氏)の末裔は、 明治維新を迎え、現在も存続している。	1185 ●家業としての歌道意識が芽生える 以前に滅亡 ●のちに平氏一門より出た歌道家に は、千葉氏流の東家・遠藤家などが ある。	●源氏・藤原氏歌壇に比 する平氏歌壇の低迷 ●治承・寿永の乱(1180～ 85)
六条源家・歌 林苑	山城国 (六条・ 白川)	源経信 源俊頼 俊恵 勝命 鴨長明	血縁(貴族) 宇多源氏 師弟関係	11c前半～ ●宇多源氏歌道の一 派	●清新・叙景・田園的・万葉復興・誹諧歌・ 象徴美・幽玄 ●「歌道」意識・師弟関係の確立 ●『金葉集』撰 ●白河院・堀河院歌壇期に全盛。	12c末 ●六条藤家、御子左家などに影響を 与え、発展的に吸収され解消。	●御子左流の隆盛 (一部は後世に御子左家 歌風を示す。) ●宇多源氏の分家分散と 他流源氏の台頭

和歌六人党	山城国	能因法師 相模 藤原範永 平棟仲 源頼実 源兼長 藤原経衝 源頼家 橘為仲 藤原重成 藤原頼実	師弟関係 連帯	11c前半～ ●後一条・後朱雀・後冷泉・後三条朝期に活動した、定員六人制（欠員のたびに新人参加）の中級貴族の歌人集団である。 ●藤原清輔の『袋草紙』では、藤原範永、平棟仲、源頼実、源兼長、藤原経衝、源頼家が六人党であった時期が記される。	●白河天皇勅命、藤原通俊撰の『後拾遺集』では、和泉式部(68首)・相模(39首)・赤染衛門(32首)・伊勢大輔(26首)など女流歌が三割を占め、能因法師(31首が同集に入集)や相模に指導を受けていた和歌六人党員歌の入集は40首にとどまった。 ●しかし、同集は情感偏重・格調希薄の批判を受けた。(源経信の『難後拾遺』) ●村上源氏の源師房や、範永・頼家と姻戚関係にある藤原南家の藤原実範・季兼・季綱・季範らに庇護を受け、師房主催の歌合を中心に活動し、有力な歌人集団に発展する。 ●橘為仲は准党員であったと考えられ、正規党員中最後まで生存した源頼家には終始参加を忌避されていた。(『続古事談』・『袋草紙』・『十訓抄』)	12c前半 衰退・断絶	●党員の死 ●血統・嫡流を中心とする歌道の勃興 ●摂関政治全盛期の終焉
中御門流	山城国	藤原頼宗 藤原俊家 藤原基俊 藤原宗通	血縁(貴族) 藤原北家御堂流・ 中御門流 師弟関係	11c前半～ ●北家御堂流中御門流は、道長の子の頼宗に始まる。	●頼宗は、六条源家と共に一条期から後冷泉期までの天皇・院歌壇を牽引。北家の家督が頼通に移り、摂関政治が斜陽の兆しを見せる中、大式三位や小式部内侍ら女流歌人を囲い、享樂的な歌会を催した。 ●俊家は和歌、朗詠、舞、能楽など多芸に長け、基俊も真摯に歌道に取り組み、俊成を弟子とした。俊成は中御門流歌道の影響を受けて、考証的叙景を旨とする六条藤家・為忠・三寂歌道とは別に、幽玄美を旨とする歌道を興すことになる。	12c半ば 衰退・断絶 ●『金葉集』が酷評された際に、相対的に評価が著しく上がったが、勅撰集の撰者は出していない。 ●俊成は、中御門流の影響を強く受けて新風を模索しつつも、『金葉集』、とりわけ源俊頼の歌風の意義を見直し、『千載集』に多くの歌を入集させた。 15c初頭 ●中御門流嫡流は、宗宣の代以降、家名を中御門家改め松木家と称した。(勤修寺流中御門家との重複を避けるため。)	●御子左流の隆盛 (俊成が継承し、御子左流歌道に吸収。)

<p>村上源氏中院流</p>	<p>山城国</p>	<p>具平親王 源師房 源顕房 源師忠 源麗子 源師頼 源師時 源師俊 源師光 源泰光 源具親 後鳥羽院宮内卿 源師仲</p>	<p>血縁(貴族) 村上源氏 師弟関係</p>	<p>11c半ば～ ●国風文化期の源氏歌壇は宇多・醍醐源氏が担ったのに対し、院政期のそれは村上源氏が担った。</p>	<p>●最も栄えた村上源氏歌壇は、具平親王流であり、この血統が中院流の名で村上源氏嫡流ともなる。この中院流の嫡流が、後鳥羽院歌壇を彩った久我流である。だが、久我流よりも歌壇登場が遅れたものの、旧嫡流の名を引き続き冠した分家の中院家こそが、村上源氏歌壇の栄華で、古今伝授の中心を成し、近代まで続いた(後述)。 ●当初、中院流の祖の師房と次男の顕房、四男の師忠が中院流歌壇を創始するが、やがて歌壇の中心は長男で能書家の俊房の子ら(師頼、師時、師俊)に移る。 ●師頼の子の師光は、九条兼実から「和歌の外他芸無し」と評されたが(『玉葉』)、その歌才は子の泰光、具親、後鳥羽院宮内卿によく継承された。とりわけ夭逝の宮内卿は、自然観察眼や器用な言葉選びの才に溢れ、後鳥羽院歌壇の重鎮歌人の多き中にあっても引けを取らず、「薄く濃き野辺のみどりの若草に～」の歌により「若草の宮内卿」と称えられた。 ●師時の子の師仲も歌をよくしたが、平治の乱に参加し、流罪となる。</p>	<p>12c前半 ●母体は村上源氏久我流に継承。 ●久我流の権勢と歌壇が衰えたのち、分家の中院家が二条流の一派として栄える。久我流歌道を直接には継承しないが、広義の後鳥羽院・御子左流歌壇の後継である点では、同流である。</p>	<p>●御子左流の隆盛 ●平治の乱(1160)</p>
----------------	------------	---	---------------------------------	--	---	---	---------------------------------

<p>六条藤家・善勝寺流、『詞花和歌集』・『統詞花和歌集』歌壇</p>	<p>山城国 (六条烏丸)</p>	<p>堀河天皇 鳥羽天皇 崇徳院 二条天皇 藤原隆経 藤原顕季 藤原家成 藤原長実 藤原顕輔 藤原清輔 藤原重家 藤原季経 顕昭 藤原経家 藤原顕家 藤原有家 藤原知家 藤原顕氏 藤原(九条)行家 藤原(九条)隆博 藤原(九条)隆教</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家末茂流・善勝寺流師弟関係</p>	<p>11c後半～ ●修理職に就き「六条修理大夫」と呼ばれた顕季の代に、白河院の信望を得、以降、院近臣として権勢を振るう。</p>	<p>●理知的・考証的・叙景的な歌風の六条藤家が主導。『万葉集』重視。 ●六百番歌合での御子左家との攻防(『六百番陳状』) ●『詞花集』撰 ●『統詞花和歌集』は、二条天皇崩御により幻の勅撰集となる。 ●歌道の制度化 ●顕季が人麻呂影供和歌会を創始。(『古今著聞集』) ●清輔『袋草紙』 ●季経が『千五百番歌合』判。 ●有家は、同家の中でも特に御子左流の歌風に近く、同流歌人らと交流。『新古今集』撰。 ●行家が『統古今集』撰。 ▼『詞花集』:1151(仁平元)年成る。崇徳院宣。藤原顕輔撰。10巻・415首。『後拾遺集』歌人重視。当代歌人は原則的に一人一首。 ▼『統詞花集』:1165(永万元)年以後成る。二条天皇勅。藤原清輔撰。清輔の父顕輔が崇徳院の勅命により編んだ『詞花集』に続く意でこの名とするも、二条天皇崩御により第七勅撰集とならず、私撰集に。20巻。</p>	<p>14c後半 断絶 ●家成の子隆季の家系は、血統は何度も断絶しているが、中御門家・冷泉家など他の堂上家から養子を迎えつつ、四条家として現代に続く。六条流歌道は14c後半に途絶えたが、四条流庖丁道を家業とする。</p>	<p>●御子左流の隆盛(有家など一部は御子左流に接近。) ●血統断絶</p>
<p>白河天皇・『後拾遺和歌集』歌壇</p>	<p>山城国</p>	<p>白河天皇 藤原通俊 源経信 周防内侍</p>	<p>血縁(天皇・貴族) 藤原北家小野宮流 宇多源氏</p>	<p>11c後半～ ●白河天皇中心の歌壇。</p>	<p>●六条源家、六条藤家、御子左家が台頭し、歌道の三つ巴となる直前の歌壇で、藤原北家小野宮流と宇多源氏の歌道の集大成となった。 ●『後拾遺集』の撰歌の実状は、「和歌六人党」の項に記す通り。同集では、周防内侍を初め、多くの女流歌人の歌が重視された。 ▼『後拾遺集』:1086(応徳3)年奏覧、翌年再奏。白河天皇勅。藤原通俊撰。20巻・1218首。格調よりも情感偏重に批判。後拾遺問答が展開され、再奏となる。(源経信『難後拾遺』)</p>	<p>11c後半 衰退・断絶</p>	<p>●六条源家、六条藤家、御子左流の隆盛、およびそれらの歌道への吸収・継承による自然消滅</p>

堀河院歌壇	山城国	堀河院 源俊頼 源国信 藤原仲実 藤原基俊 藤原俊忠	血縁(天皇・貴族) 宇多源氏 藤原式家 藤原北家中御門流 藤原北家御堂流・御子左流 師弟関係	11c末～	<ul style="list-style-type: none"> ●29歳で夭逝したが、歌壇は父の白河院勅命の『金葉集』に先行して繁栄。 ●六条源家に限らず、藤原式家、北家中御門流、初期の御子左流も中心を成し、とりわけ俊忠は、堀河院歌壇における活躍の中で、子の俊成と孫の定家による御子左流歌壇全盛の基盤を作った。 ●白河天皇(院)の二勅撰集の間に堀河院歌壇が割って入ったことで、六条藤家自身が過度に考証的な詠みぶりを自戒してライバルの中御門流を推したり、互いに比較的同風の幽玄歌路線でもあった六条源家の姿勢(特に後述の俊頼撰の『金葉集』)を御子左流(俊成)が批判したりするようになり、御子左流の幽玄・余情の歌風が広がりを見せる。 ●堀河院艶書合(1102) ●堀河百首(1105) 	12c初頭	●堀河院の夭逝(1107)
白河院・『金葉和歌集』歌壇	山城国	白河院 源経信 源俊頼 藤原顕季	血縁(天皇・貴族) 宇多源氏 藤原北家末茂流・善勝寺流 師弟関係	12c前半～	<ul style="list-style-type: none"> ●堀河院が夭逝したのち、父白河院を中心に再度開花した歌壇で、主に『金葉集』をめぐる歌壇。しかし、白河院と撰者俊頼(六条源家)の意見は折り合わず、二度の奏覧・大改訂を経て、三奏本となった。但し、出回っているものは二度本である。 ●『金葉集』には、最終的に六条源家・六条藤家(特に顕季)の歌が多数入集したが、六条藤家の清輔は歌論書『袋草紙』において、中御門流の基俊を撰者とすべき意見が多かったことを記す。俊成も、歌論書『古来風体抄』で『金葉集』を批判した。逡巡しつつも、六条両家よりは中御門流・基俊の歌道を良しとする当時の俊成の立場が見て取れる。 ▼『金葉集』:1126(大治元)年または翌年成る。三奏本。白河院宣。源俊頼撰。10巻・650首強。古今以来の伝統にとらわれず、新奇。田園趣味、写實的、俳諧趣向、「戯(ざ)れの様」。格調の欠如をのち俊成が批判。 	12c前半	<ul style="list-style-type: none"> ●『金葉集』とその担い手である六条源家・六条藤家への内外からの批判噴出による、中御門流歌道の評価の上昇。 ●俊成・御子左流歌道の隆盛。

<p>常磐丹後守・常磐三寂(大原三寂)</p>	<p>山城国</p>	<p>藤原為忠 藤原為盛 藤原為業(寂念) 藤原為經(寂超) 藤原頼業(寂然) 藤原忠成 藤原俊成 源仲政 源頼政 俊恵 九条兼実 藤原重家 平忠度 西行 範玄 二条院三河内侍 藤原隆信 藤原信実</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家長良流 法性寺流 清和源氏(摂津源氏)</p>	<p>12c前半～ ●法性寺流歌道の名門は、それまで藤原高経流であったが、国経流が御子左流の隆盛期よりもやや早く法性寺流の名門に加わり、「三寂」と呼ばれる三兄弟が出た。</p>	<p>●白河院に仕えた藤原為忠は、京都太秦の常磐に居を構え、常磐丹後守と号す。「六条宰相家歌合」(1116)、「人麻呂供」(1118)など、藤原顕季の歌会に参加し、六条藤家歌道との親和を示す。主君の白河院の院宣による『金葉集』に入集し、撰者の源俊頼を初め、六条源家とも交流。両六条家の歌道を支えるパトロンとなり、かつ両歌道を大成。病氣(糖尿病か)を患う中、「為忠朝臣三河国名所歌合」、次いで「丹後守為忠朝臣家百首」を主催。後者には、為忠と子の為盛・為業(寂念)・為經(寂超)・頼業(寂然)、御子左流の忠成・俊成(顕広)、源仲政・頼政が参加。これらの歌人は友人関係にあり、為忠俊成はこれを機に和歌活動を本格化。 ●寂念・寂超は、父為忠の百首歌合で才能を示し、同じく歌才を見せ西行と交流した寂然と共に、常磐三寂と呼ばれる。大原山に隠棲したため、大原三寂とも呼ばれる。 ●三寂の兄の忠盛も歌人。</p>	<p>13c半ば ●常磐丹後守・常磐三寂の歌道は、寂念の子の範玄、二条院三河内侍、寂超の子の隆信などに継承された。とりわけ隆信は、祖父・父と同様に歌壇のパトロン活動に積極的で、九条兼実と藤原俊成とを引き合わせ、その後の御堂家・九条嫡流家と御子左家の共同の歌壇活動(良経と定家との共同歌壇の隆盛)の契機を作った。但し、隆信自身は、良作が浮かばない低迷期に入って平凡な作風となり、俊成による忠告と清輔による評価を受けて自問自答し、六条藤家の歌人を自覚した活動に移った。 ●為忠流血統は、隆信の子、信実までが有名歌人で、それ以降は、隆信・信実も得意とした似絵の家系となり、八条家を名乗った。 ●俊成、西行、平忠度など、一部が為忠・三寂歌道をよく継承し、かつ新風・独自の歌論を入れて、そのまま御子左流を形成。残る六条藤家と攻防を繰り広げる。</p>	<p>●御子左流の隆盛(俊成、西行、平忠度など、一部が為忠・三寂歌道をよく継承。)</p>
-------------------------	------------	--	---	--	--	--	---

<p>村上源氏久我流</p>	<p>山城国</p>	<p>久我(源)雅実 久我(源)雅定 久我(源)雅通 源定房 土御門(久我・源)通親 源通具 藤原俊成女 道元 源通光 式乾門院御匣</p>	<p>血縁(貴族) 村上源氏久我流 師弟関係</p>	<p>12c半ば～ ●藤原顕季娘を妻とした雅定の代に、源俊頼や藤原顕輔と共に歌を磨き、『金葉集』入集。</p>	<p>●雅定の養子の雅通(村上源氏・源顕通の次男)が俊成の評価を受け、『千載集』に入集。久我流を御子左流と並ぶ歌壇に押し上げる。 ●通親が、後鳥羽院・頼朝の双方と近かった九条兼実を謀略で排斥し、土御門天皇を即位させてからは、久我家は後鳥羽院歌壇においても主導的立場となり、久我流歌道を一時的に御子左流と並ぶ主流派とすることに成功する。 ●通具が俊成女を妻とし、定家とも盟友となり、俊成流・御子左流歌壇との仲を盤石なものとするも、のちに通具は按察局を妻とし、歌の出来も低迷する。 ●源通具・通光兄弟は後鳥羽院・九条流歌壇に親和的で、通具は和歌所寄人となり、『新古今集』撰者にも呼ばれたが、父通親による兼実追放の謀略後は、久我流歌道としては、九条家の手前、後鳥羽院歌壇内であり機能しなくなった。元より通具は、父の代理で急遽『新古今集』撰者となったにすぎず、歌才も、主君後鳥羽院や盟友定家から厳しい評価を受けた。 ●さらに、九条兼実の子・良経が歌才に秀で、また九条家の権勢も瞬く間に復活したため、久我流は、御子左流に近縁ながらも、後鳥羽院歌壇での主流の地位を失った。</p>	<p>13c半ば ●通光は、承久の乱による後鳥羽院遠流ののちも遠島歌合に参加。後嵯峨院歌壇まで活躍した。</p>	<p>●御子左流の隆盛 ●土御門(久我・源)通親が起こした九条兼実排斥の謀略の影響による、九条家に対する通具・通光の歌壇内の立場の失墜</p>
<p>俊成流、『千載和歌集』歌壇</p>	<p>山城国</p>	<p>後白河院 藤原基俊 九条兼実 藤原俊成</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家御堂流・御子左流 師弟関係</p>	<p>12c半ば ●中御門流歌道を基礎としつつ、常磐丹後守歌壇に出入りしていた俊成が、幽玄美を基調とする新風を創始。藤原基俊に入門し、久安百首(1150)に参加、自らの幽玄の歌風を確実なものとした。</p>	<p>●俊成は、「住吉社歌合」、「廣田社歌合」の判者を務めたのち、出家。藤原隆信の手引きによって九条兼実と会い、九条嫡流歌壇と御子左流歌壇の非敵対的・融和的な共同での新風和歌活動の契機を作る。 ●九条良経主催の「六百番歌合」では、六条藤家と御子左家の攻防が展開され、良経や定家の象徴美的歌風がより鮮明となる。 ▼『千載集』:1188(文治4)年。後白河院宣。藤原俊成撰。20巻・1288首。格調と抒情性、幽玄、本歌取り。『詞花集』に反して当代重視に戻る(全体の半数)。</p>	<p>13c初頭 ●俊成の死以降も、同門の歌壇は一切衰えず、そのまま御子左流として当代の最大歌壇となる。俊成の唱えた「幽玄」は、和歌のみならず、茶の湯や能楽の根本理念となる。 ●また、御子左家は代々長寿命で、各代の歌人が生涯を賭けて長きに亘り歌道を極めることができた。</p>	<p>●俊成の死(1204)</p>

<p>二条院歌壇</p>	<p>山城国</p>	<p>二条院 藤原清輔 藤原範兼 俊恵</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家末茂流・ 善勝寺流 藤原南家貞嗣流 宇多源氏 師弟関係</p>	<p>12c半ば ●和歌を好む若き二条院のもと、六条藤家や南家貞嗣流、六条源家・歌林苑を中心に展開。</p>	<p>●二条天皇は清輔に『続詞花集』撰進を命じたが、崩御により第七勅撰集とならず、私撰集となる(別掲)。 ●鳥羽院に仕えていた範兼も、六条藤家・六条源家歌道に近縁で、崇徳院から二条院へと主君が代わる中、歌を磨き、二条院歌壇の中心を成す。俊恵らを招いて歌会を開催。歌学書『和歌童蒙抄』や『五代集歌枕』、私撰集『後六々撰』を著し、清輔や俊恵に近い立場から俊成流・御子左流の新風に対抗。しかし、清輔も俊恵も、源師光率いる中院流歌人らとの歌会に出入りし、特に俊恵は俊成ら御子左流歌人との交流を厭わず、新風の歌風を体得。 ●範兼『後六々撰』。いわゆる「中古三十六歌仙」を掲載。</p>	<p>12c半ば ●二条院は23歳で崩じたが、歌壇の実態は名門歌道家の複合体であり、二条院の崩御そのものがこれらの歌道の衰退を意味するものではない。しかし、直後の御子左流寄りの後鳥羽院歌壇の規模との大差は如何ともしがたく、六条藤家、南家貞嗣流、六条源家の勢いは削がれていく。</p>	<p>●源義朝らに幽閉された後白河院・二条院の六波羅邸への避難と平清盛への接近 ●二条院と父後白河院との対立 ●二条院の崩御(1165) ●俊成流・御子左流歌道と後鳥羽院歌壇の隆盛による、二条院歌壇を形成した六条藤家、南家貞嗣流、六条源家の低迷と、範兼の歌学の立ち後れ</p>
		<p>後白河院 藤原長家 藤原基俊 藤原俊忠 藤原忠成 藤原俊成 後鳥羽院 西行 平忠度 小侍従 九条兼実 九条良経 藤原定家 藤原家隆 藤原家隆</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家御前流</p>	<p>11c後半～ ●中御門流・堀河院歌壇における基俊・俊忠の活躍を力として、俊成が本格的に御子左流歌道を醸成させる。これを定家や家隆が継承し、大成。 ●一方、御堂流嫡流の九条兼実は、土御門通親による謀略で失脚させられ、これにより九条家歌壇は一時的に衰退。代わって村上源氏久我流が栄え、御子左歌壇と双壁を成す。しかし、善成</p>	<p>●芸術至上的・詩人的・穏健正雅・巧緻・難解・幽玄・象徴美・映像美・絵画的・音楽的・余情妖艶の体・唯美主義的・夢想的。三代集、特に『古今集』重視。 ●『新古今集』の主流で、『新勅撰集』・『続後撰集』・『続古今集』をも撰した。 ●同流中心の勅撰集では『新古今集』の評価が最も高く、歌風は「新古今調」として、「万葉調」、「古今調」と並び称される。 ●中心歌人は、「新六歌仙」と呼ばれた藤原俊成、西行、九条良経、藤原定家、藤原家隆、慈円。 ●六百番歌合で六条藤家と攻防。 ●当初は異端的歌風ながら、九条良経や後鳥羽院の庇護により歌道師範家としての地位を確立。 ●俊成に師事した平忠度のように、六条藤家・三寂と御子左流の双方の歌壇に出入りする者もあり、両歌道は歌判における攻防以外は、相互に切磋琢磨して発展した。 ●定家が、諸同門間の行程に「和歌創作の</p>	<p>●家としての御子左流は、道長の血統(御堂流庶流)ではあるが、摂関家</p>	

<p>御子左家・後鳥羽院・『新古今和歌集』・『新勅撰和歌集』・『統後撰和歌集』・『統古今和歌集』歌壇 (のちに多数の流派に分派)</p>	<p>山城国</p>	<p>藤原有家 飛鳥井雅経 土御門(久我・源)通親 堀川(源)通具 源通光 寂蓮(藤原定長) 慈円 藤原隆信 藤原俊成女 土御門天皇 順徳天皇 後堀河天皇 四条天皇 後嵯峨院 藤原(冷泉・御子左・中院)為家 冷泉(御子左)為氏 御子左(二条)為世 御子左(二条)為通 後鳥羽院宮内卿</p>	<p>藤原北家御室流・御子左流 師弟関係 ※「御子左家」を家名とした者はいないともされるが、いずれにせよ血統および歌道家としては「御子左流」と呼ばれる。 藤原北家魚名流・秀郷流 村上源氏久我家・分流堀川家</p>	<p>を成す。しかし、兼美の子良経が後鳥羽院政のもと再び九条家を立て直し、また、その秀でた歌才をもって自ら九条流・御子左流歌壇の代表的歌人となった。 ●御子左家は、主君良経や後鳥羽院の鼻肩を受けて、政局・歌道の両面において、つかず離れずの源家久我家と、それよりは異風の六条藤家の両家を凌駕し、良経歌壇・後鳥羽院歌壇・新古今歌壇の主流となる。これをもって、九条流・御子左流の両歌壇は、良経、定家、家隆らによって、御子左流優位のもと、一大新風歌壇として統合された。 ●『新古今集』をもって八代集成。『古今集』以来の平安期・鎌倉初期歌道の集大成。</p>	<p>●叔連か、諸国行脚の旅程に、和歌劇生の地として(「八雲立つ」の歌の伝説による)訪れた出雲で、大社の高さに驚嘆した歌を詠んでおり、その社殿の変遷についての近年における解明の端緒の一つとなった。 ●『新勅撰集』は、御子左流の伝統を受け継ぎながらも、定家晩年の平明・枯淡な歌が多数入集し、二条派の手本となる。 ▼『新古今集』: 1205(元久2)~1216(建保4)年成る。後鳥羽院宣。定家、家隆、源通具、寂蓮ら撰。20巻・1979首。「新古今調」。幽玄・有心を発展させ、「余情妖艶の体」を確立。唯美的、情調的、幻想的、絵画的、音楽的、象徴美的。韻律重視で技巧的。体言止め、七五調、初句切れ、三句切れを多用。題詠が常道。1221(承久3)年より、後鳥羽院が『隠岐本』として切継を継続。 ▼『新勅撰集』: 1235(文暦2)年成る。後堀河天皇勅、四条天皇継承。定家撰。20巻・1370首強。新古今から一転、平明枯淡、定家晩年の好みを示す。「実」中世の体現として和歌の手本となり、その保守性が二条派の尊重を受ける。 ▼『統後撰集』: 1251(建長3)年成る。後嵯峨院宣。為家撰。20巻・1400首程。新古今風の有心体に抛りつつ、より明朗で華やか。調和の取れた美的構成。 ▼『統古今集』: 1265(文永2)年成る。後嵯峨院宣。為家撰。20巻・1915首。のち反御子左派が参加し、為家はほぼ撰歌作業を放棄、為氏に任せる。古今・新古今以来の正統の一方で、撰者の不和により、統一性に欠ける。平淡、古風。</p>	<p>嫡流(九条流)からは遠く、他の御堂流庶流(中御門流、花山院流、飛鳥井流)や閑院流と比べて官職は振るわず、院近臣に恵まれなかった。御子左流歌道がこれら全ての歌道宗匠家の模範的地位にあるのとは、様相を異にする。 14c ●多くが御子左嫡流・二条・京極・冷泉の主流派、及びそれ以外の諸流に分裂。 嫡流は生前、血統・歌道共に二条家に対し御子左家を称している。(為氏・為世流)</p>	<p>●承久の乱(1221) ●相続問題 ●一族内訌 ●一門の歌風相違 ●蹴鞠流派の御子左流(御子左家)と飛鳥井流(飛鳥井家)も、歌道と同じく近縁であったが、近世に御子左流のみが断絶し、飛鳥井流は現在も残存している。</p>
--	------------	---	--	--	---	--	--

<p>花山院家 (御子左派・新古今調。二条派台頭によりその一門となるが、大いに御子左派・新古今調をも示す。)</p>	<p>山城国(花山院) 東京府 東京都</p>	<p>藤原家忠 藤原忠宗 藤原兼雅 花山院忠経 花山院定雅 花山院師繼 花山院師信 花山院師賢 花山院家賢 花山院長親母 花山院長親 花山院師兼</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家御堂流・師実流</p>	<p>11c後半～ ●家忠が、師実の子師通の急死と孫忠実の失脚に乗じて藤氏長者・摂関の地位を狙うが、叶わず、そのまま清華家花山院家の祖となる。積極的に花山院を称したのは忠経以降。</p>	<p>●中世初期の歌道家として最も栄えた飛鳥井家に先立って栄えた閑院流三流(三条家・西園寺家・大徳寺家)よりも、さらに早く藤原氏嫡流から分家。 ●笙・筆道を家業とするが、師賢・家賢・長親・師兼の時に和歌でも才を成し、歌壇で活躍、代々勅撰歌人となり、特に准勅撰集の『新葉和歌集』で極めて重用されている。ただし、花山院家も、撰者の宗良親王を補助する立場で撰にかかわっている。 長親『耕雲千首』 師兼『師兼千首』 ●二条派一門ではあるが、御子左派・新古今調を示す歌も多く、二条派隆盛期にも長親を中心に本歌取・掛詞による観念的・技巧的な歌を多作した。</p>	<p>歌道は衰退し、本業の笙や筆道に専念 ただし、血統は存続</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●秩禄処分(1876) ●華族の東京移住命令 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●敗戦 ●華族制度の廃止(1947) ●税制の一新と混乱による歌書の散逸(財産税・富裕税・シャウブ勧告) ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化)
<p>転法輪三条家 (諸派折衷)</p>	<p>山城国(三条) 東京府 東京都</p>	<p>藤原公実 三条実行 三条公教 三条実房 三条公房 三条公忠 三条実冬 三条公量 三条実美 三条公美 三条公輝</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家閑院(公季)流嫡流</p>	<p>12c前半～ ●実行が徳大寺実能と共に崇徳院に仕え、勢力を伸ばす。</p>	<p>●歌道は、公忠から公冬にかけてが全盛である。 ●公忠の日記『後愚昧記』(『大日本古記録』所収)には、南北朝期歌壇の実状が描かれる。 ●歌道の所属流派は定まらず、一方でのちに二条派・古今伝授の中心となる分家の正親町三条家・三条西家を出している。 ●長期に渡り正親町三条家・三条西家の歌道隆盛の影に隠れたが、歌道伝授を続け、清華家として公卿を多数輩出。実美は公爵となり、御所歌長(公輝)を輩出するに至る。</p>	<p>戦後に歌道断絶 家は存続 ●三条実美は尊皇攘夷急進派の一人で、姉小路公知ら急進派公家や長州藩と共に攘夷親征(大和行幸)強行を計画。この暴走を知った孝明朝廷、中川宮、会津藩、薩摩藩ら公武合体派や、京都所司代・稲葉正邦が藩主の淀藩、徳島藩、岡山藩、鳥取藩、米沢藩が八月十八日の政変(1863)を起こす。五撰家や平田国学の項も見よ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●八月十八日の政変(1863)による三条実美を含む七卿落ち(但し、王政復古の号令で直ちに復帰) ●秩禄処分(1876) ●華族の東京移住命令 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●敗戦 ●華族制度の廃止(1947) ●税制の一新と混乱による歌書の散逸(財産税・富裕税・シャウブ勧告) ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化)

<p>西園寺家 (のち二条派一門)</p>	<p>山城国 東京府 東京都</p>	<p>藤原公実 西園寺通季 西園寺公通 西園寺実宗 西園寺公経 西園寺実氏 西園寺実兼 西園寺公宗 西園寺実遠 西園寺公朝 西園寺実益 西園寺公宣 西園寺公遂 西園寺致季 西園寺寛季 西園寺公望</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家閑院流</p>	<p>12c前半～ ●藤原公実の子の代より分かれた閑院流の清華家三家(三条・西園寺・徳大寺)の一つである。</p>	<p>●公衡の時代に、亀山天皇の遺詔に従い、後宇多院に無断で常盤井宮恒明親王を擁立し、大覚寺統から忌避され、勢力が衰えた。 ●後宇多院が『新後撰集』・『続千載集』を撰したため、西園寺家が撰者に抜擢されることはなかったが、実衡の妻で両集の撰者御子左為世の娘が嫡子公宗を設け、為世の鼻肩が甚だしく、『新勅撰集』以降、実宗・公経・実氏の入撰歌数は、他の堂上家を差し置いて極めて多い。 ●後村上天皇以降の天皇には忠実に仕え、再び歌道にも専念。 ●実遠『新菟玖波知集』</p>	<p>14c前半 衰退 ●その後も歌道・歌会の継承は続け、戦後に断絶。 ●家は存続。 ●「西園寺文庫」と呼ばれる書籍群が学習院大学・立命館大学などにある。</p>	<p>●反後宇多・親常磐井宮方、のちに反南朝・親北朝方についてのことによる衰退。 ●中先代の乱(1335) ●秩禄処分(1876) ●華族の東京移住命令 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●敗戦 ●華族制度の廃止(1947) ●西園寺家自身による書籍の寄贈 ●税制の一新と混乱による歌書の散逸(財産税・富裕税・シャウブ勧告) ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化)</p>
<p>徳大寺家 (のちに多数の流派に分派するが、ほぼ二条派一門)</p>	<p>山城国 (衣笠) 越中国 東京府 東京都</p>	<p>藤原公実 徳大寺実能 徳大寺公能 徳大寺実定 徳大寺公継 徳大寺実孝 徳大寺実盛 徳大寺実通 徳大寺公維 徳大寺公信 徳大寺公全 徳大寺実憲 徳大寺実祖 徳大寺公迪 徳大寺実堅</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家閑院流</p>	<p>12c前半～ ●藤原公実の子実能の代より分かれた閑院流の清華家三家(三条・西園寺・徳大寺)の一つである。</p>	<p>●代々、西行や俊成・定家ら御子左家と交流。 ●御子左家・飛鳥井家と異なり勅撰集の撰者に名を連ねることはなかったが、家格は清華家を誇り、踏歌節会・大歌所などの要職を代々歴任し、有職故実全般に長じていた。 ●徳大寺実通以降は頻繁に嫡流が途絶え、遠近の血縁の公家より養子を迎える。 ●養子が相次ぐたびに、清水谷・四辻・中院家と縁戚となり、公迪・実堅が香川景樹に和歌を学んだことから、二条派・桂園派を網羅した歌道となる。</p>	<p>戦後に歌道断絶 家は存続</p>	<p>●血統断絶 ●宝暦事件 ●秩禄処分(1876) ●華族の東京移住命令 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●敗戦 ●華族制度の廃止(1947) ●税制の一新と混乱による歌書の散逸(財産税・富裕税・シャウブ勧告) ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化)</p>

<p>九条家・松殿家庶流・九条流二条家・九条流一条家（のちほぼ二条派一門）</p>	<p>山城国</p>	<p>藤原忠通 覚忠 九条兼実 慈円 藤原忠良 九条良経 九条良平 藤原家房 九条道家 九条基家 二条道平 二条良基 二条持基 一条家経 一条兼良 九条植通 一条兼香</p>	<p>血縁（貴族） 藤原北家御堂流・師実流・九条流嫡流</p>	<p>12c前半～ ● 撰家として権勢を振るう。 ● 兼実 は当初、六条藤家の清輔に師事したが、その死後は俊成を迎え、俊成流歌壇の優れたパトロンとなり、自らも九条家歌壇を形成。後白河院崩御後に実権を握り、後鳥羽院と源頼朝の双方に近かったものの、両者から見切りを付けられ、土御門通親の謀略により失脚してからは、九条家の権勢と共に九条流歌壇も一時的に衰える。 ● しかし、兼実の子の良経がすぐに挽回。後鳥羽院歌壇において、それまで御子左流に次ぐ中心的流派であった村上源氏久我流は九条流に置き換わり、九条・御子左連合歌壇とも言える新風歌壇が形成された。 ● 九条教実の弟の良実が撰家の二条家を、実経が撰家の一条家を創設。但し、二条家のみが二条派歌壇の中核なのではなく（二条派主流の二条家は別掲の通り御子左流血統であり）、いずれの撰家も同流歌壇を満遍なく継承。</p>	<p>● 良経は、御子左家・六条藤家と交流し、叔父の慈円の後援のもと九条家歌壇を主導。和歌の才も定家・家隆に匹敵し、時に後鳥羽院自身をも唸らせる求心力と文才・歌才で歌壇を統率したが、父兼実に先立って夭逝した。 ● 松殿家は、忠通の子の代に近衛家・九条家と同時に分家した北家本流の一家だが、家祖の基房とその三男の師家の二代のみで絶えた。しかし、庶流扱いとされた次男家房は、松殿をこそ名乗らなかつたが、良経・九条家歌壇の中心を占めた。 ● 源通具・通光兄弟は後鳥羽院・九条流歌壇に親和的で、通具は和歌所寄人となり、『新古今集』撰者にも呼ばれたが、父通親による兼実追放の謀略後は、久我流歌壇としては、九条家の手前、後鳥羽院歌壇内であり機能しなくなった。 ● 定家の死後、基家は反御子左派に立ち、定家の子為家と対立。後嵯峨院より為家に撰進の勅命が下り、編纂作業に入ったが、同院の意向により基家ら反御子左派が四名が加わり、不満を抱いた為家は子為氏に編纂作業を任せた。（『続古今集』） ● 良基の歌壇は頼阿、源氏学は河内方の系譜を引く。 ● 和歌と共に、連歌によっても栄える。 ● 一条家経の子道昭・良慶は熊野三山検校・新熊野検校となり、両検校を中心とする歌壇の全盛を築いた。</p>	<p>15c後半 衰退 ● ただし、養子を迎えつつ家は存続。 ● 現在、子孫は歌詠・歌道と呼べる活動はおこなっていないが、和歌鑑賞は盛ん。（藤原氏末裔で組織する藤裔会が中心。） ● 一条家に伝来する歌書・日記・歴史書などが「桃華堂文庫」として遺されている。</p>	<p>● 連歌・源氏物語学・歴史学などに移行 ● 応仁の乱・戦国時代 ● 九条家・九条流二条家の血統断絶。</p>
---	------------	---	-------------------------------------	--	--	--	---

<p>宇都宮家 (のちほぼ二条派一門だが諸派折衷の風)</p>	<p>下野国 豊前国 筑後国 伊予国 山城国 東京都 東京都</p>	<p>藤原道兼 藤原兼隆 藤原兼房 藤原宗円 八田宗綱 宇都宮朝綱 宇都宮業綱 蓮生(宇都宮頼綱) 信生(塩谷朝業) 宇都宮泰綱 宇都宮景綱 宇都宮貞綱 宇都宮公綱 宇都宮氏綱</p>	<p>血縁(貴族・武家) 藤原北家道兼流 (下毛野氏流・中原氏流とも)</p>	<p>12c前半～ ●前九年の役での藤原宗円戦功により台頭、孫の朝綱の代より宇都宮を名乗る。</p>	<p>●宗円の父は藤原兼房との説が主流であるが、異説もある。 ●頼綱の代以降、京都の宮廷歌壇、鎌倉の武家歌壇に匹敵する歌壇を形成する。 ●宇都宮歌壇を評価した御子左為氏の撰により『新和歌集』が編纂された。(ただし、笠間時朝や宇都宮景綱の撰とする説もある。) ●藤原定家撰『小倉百人一首』は、頼綱の求めに応じたものである。頼綱は、京都嵯峨野に新築した別荘・小倉山荘の襖の装飾のため、定家に色紙の作成を依頼し、定家が完成させた。和歌のアンソロジーではあるが、秀歌撰であるかどうかについては多々異論がある。</p>	<p>14c後半 離散・衰退 主家末裔及び分家末裔は全国に多く存続</p>	<p>●平安末期・鎌倉期の宇都宮歌壇の隆盛以降の、宇都宮家の全国への分家・離散・土着。 ●戦国大名としての軍務・政務への専心</p>
<p>飛鳥井家 (飛鳥井・御子左流→これらを含む二条派一門)</p>	<p>山城国 下野国 伊勢国 東京都 東京都</p>	<p>飛鳥井雅経 飛鳥井教定 飛鳥井雅有 飛鳥井雅縁 飛鳥井雅世 飛鳥井雅永 飛鳥井雅親 飛鳥井雅康 飛鳥井雅俊 飛鳥井雅俊 飛鳥井雅庸 飛鳥井雅章 飛鳥井雅重 飛鳥井雅威</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家花山院流難波家支流</p>	<p>12c後半～ ●本家難波家の時代より蹴鞠の家として確立。和歌にも秀で、歌道師範家としても発展。</p>	<p>●『新古今集』・『新続古今集』撰 ●蹴鞠と和歌が家業 ●初め、俊成流の幽玄を継承するも、のちに二条派勅撰集の撰者を歴任し、歌風がマンネリ化。京極・冷泉派和歌の意図的排除を行うなど、『新古今集』より後世の勅撰集編集に最も力を持った堂上家である。</p>	<p>19c 歌道・歌会断絶。 ●ただし、披講の流派及び家は存続。武家伝奏を務め、伯爵に任ぜられる。現在も学識者を輩出。</p>	<p>●秩禄処分(1876) ●華族の東京移住命令 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●敗戦 ●華族制度の廃止(1947) ●税制の一新と混乱による歌書の散逸(財産税・富裕税・シャープ勧告) ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化)</p>
<p>家隆流 (御子左流に近縁)</p>	<p>山城国 隠岐国</p>	<p>藤原家隆 藤原隆祐 藤原長清 土御門院小宰相</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家利基流</p>	<p>12c後半～ ●家隆は御子左流歌風に近縁ながら、のちに門下が二条・京極・冷泉の三派に対し、一派を成そうと少数で分派。</p>	<p>●御子左流歌道に近縁。 ●家隆はほぼ御子左流の歌風そのもので、俊成・定家と交流するも、門下共々、終始後鳥羽院と交流。 ●後嵯峨院歌壇期まで活躍。</p>	<p>13c前半 断絶</p>	<p>●二条派歌道の隆盛 ●血統断絶 ●後鳥羽院崩御</p>

<p>中山家 (のち二条派一門)</p>	<p>山城国 東京府 東京都</p>	<p>中山忠親 中山兼宗 中山定親 中山親綱 中山冷泉為親 中山愛親 中山忠光</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家花山院流</p>	<p>12c後半～ ●忠親が鹿ヶ谷の陰謀・治承三年の政変に乗じて台頭。</p>	<p>●兼宗は「若宮社歌合」・「六百番歌合」・「千五百番歌合」などに出詠、歌道家としての中山家を確立。 ●定親の代に玉川宮家など短期断絶の世襲親王家に二条派歌道を教える。 ●一旦上冷泉家の養子となったが、廃嫡されて中冷泉(中山冷泉)家を創設した為親も、上冷泉家への不信から中山家歌道と宮廷歌壇への参加に専心する。 ●尊王攘夷派であった忠光は、天誅組主将となり、天誅組の変を起こす。</p>	<p>歌道は衰退 血統は存続</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●宝暦事件 ●尊号一件(1788～91) ●天誅組の変・八月十八日の政変(1863) ●長州征討(1860年代) ●秩禄処分(1876) ●華族の東京移住命令 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●敗戦 ●華族制度の廃止(1947) ●税制の一新と混乱による歌書の散逸(財産税・富裕税・シャウブ勧告) ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化)
<p>清和源氏流・河内方</p>	<p>山城国 鎌倉</p>	<p>源経基 源季遠 源季貞 源政隆 相模 四条宮下野 源光行 源親行 源実朝 素寂 素因 源義行 行阿</p>	<p>血縁(武家) 清和源氏 將軍家 師弟関係</p>	<p>12c末～ ●光行・親行の歌道・源氏学は、二人が河内守となった頃より栄えたことから「河内方」と呼ばれるが、本拠地は鎌倉。</p>	<p>●光行・親行・実朝共に朝廷方・御子左家と交流し、光行は定家・家隆・寂蓮の歌風に近縁。 ●源氏学の確立(秘伝書『水原抄』・『紫明抄』など)</p>	<p>14c前半 断絶 ●三条西家及び九条流二条家が河内方歌道を一部継承。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●血統断絶 ●清和源氏の没落 ●文書散逸

<p>中院家 (のち二条派一門)</p>	<p>山城国 加賀国 東京府 東京都</p>	<p>土御門(久我、源)通親 中院通方 肖柏 中院通勝 中院通村 中院通純 愛宕通福 靈元天皇(上皇) 中院通茂 中院通躬 宣阿</p>	<p>血縁(貴族) 村上源氏久我家 中院流</p>	<p>13c初頭～ ●村上源氏久我通親の子通方より中院を名乗る。</p>	<p>●通親の死後、著しく低迷したのち、再興。二条派主流とはならなかったが、歌道家としては最長の家の一つ。 ●定家の子為家が一時「中院」を名乗るが、歌道流派の名とはならず、冷泉(御子左)為家となる。 ●中院通勝が古今伝授を受けて以降、再び歌道隆盛。源氏学をも構築。 ●通茂の代に、清水谷実業、武者小路実陰、烏丸光栄らと共に靈元院歌壇の中心を成し、宣阿や三輪執斎らを指導した。 ●通茂の子の通躬も靈元院歌壇で活躍。烏丸光栄や三条西公福に歌道伝授。靈元院歌壇の歌人(歌道師範)らは、任官の上でも優遇され、通躬は右大臣となり、家の極位極官を達成した。近世における大臣家からの右大臣任官は、通躬と三条西実条のみである。</p>	<p>歌道・歌会断絶(1923) ●中院文庫(京都大学)に歌書多数あり。</p>	<p>●秩禄処分(1876) ●華族の東京移住命令 ●関東大震災(1923) ●中院家自ら歌道文書を京都大学に寄贈、歌道は断絶するも、中院家歌道の研究者は増加。 ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化)</p>
<p>尚齒会</p>	<p>大和国 山城国 鎌倉 江戸 東京府 東京都</p>	<p>藤原清輔 中院通茂 渡辺幸庵 清水成利 横井並明</p>	<p>師弟関係 血縁(天皇・皇族・貴族・武家) 地下・僧侶</p>	<p>上古代～ ●1172年の藤原清輔らによる京都白河の宝荘嚴院での尚齒会より、詩賦のみならず和歌をも行うようになった。</p>	<p>●中国の風習に倣って行われた、詩賦・和歌を作る文化的遊宴。 ●当初は漢詩が主であったが、次第に和歌も盛んに詠まれるようになる。 ●漢詩が基礎にあるだけに、当初、理知的・考証的な歌風の六条藤家と相性がよかった。 ●主に七人の長老者が会する。近代になるまで行われた。</p>	<p>19c末 断絶</p>	<p>●近代化 ●敗戦 ●華族制度の廃止(1947) ●各家の離散</p>

<p>鎌倉殿・鎌倉幕府・御家人・御内人・御門葉歌壇(源氏→藤原北家→皇族の將軍交代に乗じて平氏血統の執権・連署・得宗・内管領が歌壇を主導)</p>	<p>鎌倉 山城国 大和国</p>	<p>源頼朝 源頼家 源実朝 藤原頼経 藤原頼嗣 宗尊親王 惟康親王 久明親王 守邦親王 北条泰時 北条政村 北条時宗 北条義政 北条時春 北条国時 北条貞時 島津忠景 島津忠宗</p>	<p>血縁(武家・皇族・貴族) 將軍家 清和源氏流河内源氏(源氏將軍) 藤原北家九条流(攝家將軍) 皇族(親王將軍) 執権 連署 得宗 桓武平氏高望流(直方流)北条氏 内管領 御内人</p>	<p>1180頃～</p>	<p>●鎌倉幕府の中枢部を占めた征夷大將軍(鎌倉殿)および執権、連署らは、代ごとに和歌への興味の有無に極端な相違、斑(むら)があり、和歌を少し嗜む程度の者から、没頭する者までいた。また、將軍家も源氏、藤原北家、皇族と変遷した上、執権と連署を平氏傍流(北条氏)が、御内人筆頭(御内頭人)の内管領も平氏血統が担い、最終的に得宗専制を引き起こしたため、幕府主催の統一歌壇と呼べるものは形成されなかったと推定される。御門葉とは、將軍家(鎌倉殿、当初は頼朝)と擬似的血縁関係で結びつき、御家人の上位に位置した家臣団を指し、足利氏などが含まれるが、北条氏・得宗の台頭により、1200年前後(幕府創始からわずか数年内)には御家人に対する優位を失っており、歌壇も見られない。 ●鎌倉時代は、六条藤家、御子左派から二条派全盛への過渡期であり、幕府自らが流派を興すことはなく、多くの武家は引き続き旧来の貴族歌道家を師とした。 ●『金槐和歌集』を著した実朝は別として、歌道をよくしたのは執権、連署であり、とりわけ『玉葉集』を中心に歌が採られた。 ●『金塊和歌集』と実朝の全般的歌風は、後世に万葉調、ますらをぶりとして賀茂真淵に称賛されたが、やや真淵の誇張であり、定家風・新古今調の技巧表現が多く見られる。</p>	<p>1333頃 断絶</p>	<p>●鎌倉幕府の滅亡(1333) ●六条藤家、御子左派、二条派の隆盛</p>
---	---------------------------	---	---	---------------	---	---------------------	---

御子左派の分裂と両統迭立初期における二条派の台頭

流派名	本拠地	代表的歌人・歌論者・当主	流派の主体	流派の成立時期・成立事情 (cは世紀)	特徴	衰退・分裂・断絶の時期 (cは世紀。血統断絶の場合、掲載可能な限りその旨を記す。) ●衰退・分裂・断絶に至る記述 ◆は存続についての記述	衰退・分裂・断絶の理由 ●最終断絶以外(一時的な衰退など)の理由も記載した。 ◆は存続についての記述
反御子左派、後期『続古今和歌集』歌壇(後期六条藤家・鎌倉歌壇)	山城国 鎌倉	九条基家 藤原知家(蓮性) 藤原行家 衣笠家良 葉室光俊 尚侍家中納言 鷹司院帥 宗尊親王 島津忠景 後藤基政	血縁(貴族) 藤原北家末茂流・善勝寺流 藤原北家高藤(勸修寺)流 師弟関係 御家人	13c前半～ ●定家に師事した公家(九条・衣笠・葉室家など)と武家・御家人の歌人らが、定家の子為家とは異風を示して宗尊親王歌壇に親和し、一方で宗尊親王の父後嵯峨院が両派を勅撰集撰者としたことで、より不和が拡大した。	●知家は六条家ながら定家に師事し、葉室光俊も定家に師事したが、定家の死後、為家・為氏とは異風を示した。 ●宗尊親王の後援を受け、鎌倉武家歌壇において勢力を持った。 ●知家による『蓮性陳状』と『春日若宮社歌合』が事実上の「反御子左派の旗揚げ」となった。 ●後嵯峨院の勅命により、『続古今集』の撰者に反御子左派の九条基家・藤原行家・衣笠家良・葉室光俊が加わり、先立って撰者を務めていた為家が編集作業を放棄し、事実上撰者の立場を子の為氏に譲った。 ●華麗・絢爛な歌風と古風・平淡な歌風との融合・両立が見られ、『続古今集』でも、最多入選歌人は宗尊親王ながらも、後鳥羽院・定家・家隆らが重視されていることから、この一派は反御子左歌風というよりは反為家・反為氏・反為世すなわち反嫡流の立場であったと言える。 ●九条基家『雲葉和歌集』 ●伝衣笠家良撰『万代和歌集』。勅撰集に洩れた歌約3,800首を収める。	14c後半 衰退	●宗尊親王の失脚 ●各一族の内訌 ●歌風相違 ●御子左派の分裂及び二条派・京極派・冷泉派・諸派の対立の顕在化による反御子左派の存在意義の希薄化

<p>為氏・為世流、 『統拾遺和歌集』・『新後撰和歌集』・『統千載和歌集』歌壇 (御子左派一門)</p>	<p>山城国 鎌倉</p>	<p>亀山院 後宇多院 藤原(冷泉・御子左・中院)為家 冷泉(御子左)為氏 京極為教 御子左(二条)為世 御子左(二条)為道(為通) 御子左(二条)為藤 御子左(二条)為定 御子左(二条)為明 御子左(二条)為重 御子左(二条)為遠</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家御堂流・御子左流 ※「御子左家」を家名とした者はいないともされるが、いずれにせよ血統および歌道家としては「御子左流」と呼ばれる。</p>	<p>13c半ば～ ●御子左流歌道を継承。為家は当初、冷泉や中院を名乗り、新派歌道を模索する。 ●為家は、『統後撰集』撰の頃は冷泉為家を名乗り、『統古今集』撰に際し反御子左嫡流を示す六条・葉室家などの歌人らが選者に加わった頃から、御子左為家を称した。 ●為氏・為世は一般に二条家・二条派歌道の祖とされるが、両者が生前に二条と称せられた記録はなく、冷泉または御子左と称せられている。 ●当初、為家・為氏・為世・為道嫡流に対し、為明ら庶流の二条家の歌道を二条派と称する。</p>	<p>●為氏・為世・為通・為藤・為定ら嫡流はそのまま「御子左家」を称し、二条派・大覚寺統・南朝に対して持明院統・北朝に接近。京極・冷泉家とも対峙。為藤が為定を養子とするなど、御子左嫡流の地位を固めようとするも、歌道は二条派の隆盛に及ばず。 ●ただし、冷泉流歌風を示す者も多い。 ●為世『新後撰集』・『統千載集』・『統現葉和歌集』 ●二条派との対立の緩和期には、持明院統の後光厳天皇の綸命、為定の撰による『新千載集』編纂において二条派の歌を多く採るなど、二条派を重用。 ●一方で、二条為忠の歌を採らないなど、個人批判の風が強まる。 ▼『統拾遺集』: 1276(建治2)年奉勅、1278(弘安元)年奏覧。亀山院宣。為氏撰。20巻・1500首弱。温雅、平淡、優美だが、変化には乏しく、やや類型的。 ▼『新後撰集』: 1301(正安3)年奉勅、1303(嘉元元)年奏覧。後宇多院宣。為世撰。20巻・1600首強。前集同様に温雅、平淡だが、より大様。 ▼『統千載集』: 1318(文保2)年奉勅・奏覧、1320(元応2)返納。後宇多院宣。為世撰。20巻・2100首強。同音反復、字余りに特徴あり。題詠を抑え、純粋な心情歌重視。</p>	<p>14c後半 断絶</p>	<p>●血統断絶 ●一族内訌 ●歌風相違</p>
<p>京極(為兼)派、 『玉葉和歌集』・『風雅和歌集』歌壇 (持明院統)</p>	<p>山城国 鎌倉</p>	<p>伏見院 久明親王 京極為教 京極為兼 冷泉為相 京極為基(玄哲) 永福門院 藤原為子 花園院 光厳院 祝子内親王</p>	<p>血縁(天皇・皇族・貴族) 藤原北家御子左流 師弟関係</p>	<p>13c後半(1280年前後)～ ●京極為教が次第に反御子左流歌風を示し、子為兼の京極派に引き継がれる。</p>	<p>●破格・清新・叙景・繊細・観察眼 ●持明院統・北朝 ●『玉葉集』・『風雅集』撰 ●為兼『為兼卿和歌抄』 ▼『玉葉集』: 1311(応長元)年奉勅、翌(正和元)年奏覧。1313(正和2)年完成。伏見院宣。為兼撰。20巻・2801首。京極派。大覚寺統・二条派を冷遇。180歌人中113歌人初出。女流過半数。清新自由で、静と動の対比に優れる。擬態語、対句の技巧。 ▼『風雅集』は後期京極派を見よ。</p>	<p>14c前半 断絶 ●歌道勢力としては、わずか一代(為兼の代)で二条派の後塵を拝するが、養子の正親町公蔭が為兼の歌風を継承。後期京極派と呼ばれる。 ●近世末まで二条派に圧倒されるも、近代以降の評価は高い。(折口信夫・土岐善麿・岩佐美代子らによる研究。)</p>	<p>●血統断絶 ●二条派歌道の隆盛 ●持明院統の後光厳院が二条派を重視(『新千載集』・『新拾遺集』) ●観応の擾乱</p>

為顯流	山城国 鎌倉	藤原為顕	血縁(貴族) 藤原北家御子左流	13c後半～ ●御子左・京極各派に対し、一派を成そうと少数で分派。	●『竹園抄』・『玉伝神秘巻』など多くの歌道秘伝書を遺す。	14c 断絶	●二条派歌道の隆盛
為相流	山城国 鎌倉	冷泉為相	血縁(貴族) 藤原北家御子左流	13c後半～ ●未だ一派を成すに至らず、京極派歌壇に積極的に参加していた冷泉為相を中心に創始された。	●当初、為氏と為相の双方が冷泉を名乗り争ったが、嫡流としての御子左流と歌道としての二条流とが分立するにつれ、為相の血統・歌道が冷泉流となる。	13c後半 ●為氏流に圧倒されつつ、そのまま冷泉派に継承される。	●二条派歌道の隆盛
冷泉派 (のち准二条派一門)	山城国 鎌倉	阿仏尼 冷泉為相 冷泉為秀 冷泉為成 冷泉為邦 冷泉為尹	血縁(貴族) 藤原北家御子左流 師弟関係	13c後半～ ●為家の側室阿仏尼が正妻の子為氏と争う。 ●冷泉為相・冷泉為秀が中心となり、一派を確立。	●二条・京極家の血統断絶後は、歌書の保存・収集に尽力。 ●分家以前は、やはり歌風が定まらず、京極派歌集にも多数採られる。 ●南北朝の対立が明確化すると、二条派から評価を受ける。	1417 分派して存続 ●冷泉為尹の子の代より為之流(上冷泉家)と持為流(下冷泉家)とに分かれる。	●二条派歌道の隆盛 ●分家による歌道・歌書の二分
五条(為実)流	山城国 鎌倉	五条為実(二条為実)	血縁(貴族) 藤原北家御子左流	13c後半～ ●御子左・京極・冷泉各派に対し、一派を成そうと少数で分派。	●為世ら兄弟の御子左派・二条派に圧倒され、ほぼ一代で断絶。	14c前半 断絶	●二条派歌道の隆盛

<p>二条派、『統後拾遺和歌集』・『新千載和歌集』・『新拾遺和歌集』・『新</p>	<p>山城国 大和国 (吉野)</p>	<p>龜山院 後宇多院 後醍醐天皇 宗良親王 長慶天皇 後光厳天皇 後円融院 後小松院 後花園天皇 御子左(二条) 為氏 御子左(二条) 為世 二条為道(為通) 二条為藤 二条為定 二条為明 二条為忠</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家御子左流 師弟関係 ※「御子左家」を家名とした者はいないとされるが、いずれにせよ血統および歌道家としては「御子左流」と呼ばれる。 藤原北家九条流支流二条家 ※九条道家の二男・二条良実が、摂家としての「二条家」を創設し、この二条家の歌道も二条派とな</p>	<p>14c初頭～ ●嫡流の御子左流及び庶流の京極・冷泉派と対峙。のちに、二条良基ら九条流二条家の台頭と共に、この摂家に仮託し、為世に遡及して「二条」が冠せられ、この二条為世流が為忠・為重流に連なるものとされ、京極・冷泉派に対峙する意図で</p>	<p>●持明院統・北朝歌壇の主力となった九条流二条宗家の二条良基は、二条為重を重用し、為重も御子左家庶流として二条派歌道の二条宗家への仮託をおこなったが、次第に良基が為重の後塵を拝するようになる。 ●しかし、保守的で、次第にマンネリ化。為衡の死もあって、二条派の大成は頼阿の手により成されることになる。頼阿は「二条派再興の祖」と謳われる。 ●頼阿、浄弁、慶運、吉田兼好(歌僧二条派)は「為世門の和歌四天王」と謳われる。『今川了俊歌学書』や『正徹物語』がこれを記す。 ●南北朝統一で皇統は北朝系に一本化されるも、既に中央歌壇はほぼ二条派一色となっていた。その直前から、後光厳天皇も京極派の歌中心の勅撰集の編纂を諦めており、『新千載集』、『新拾遺集』は二条派に撰歌をさせ、二条派の歌を中心に、京極派を無難に取り入れて、平明な歌集となった。南北朝統一後唯一の、かつ最後の勅撰集である『新統古今集』では、撰者の飛鳥井雅世や堯孝の主導により、京極・冷泉派和歌の意図的排除が行われ、また、飛鳥井家代々の歌人の歌が優遇され、多く入集した。 ▼『統後拾遺集』: 1326(正中3・嘉暦元)年成る。後醍醐天皇勅。為藤(途中病没)、為定</p>	<p>15c初頭 ●血統が断絶し、一時的に勢力が衰えるが、直ちに頼阿によって挽回され、二条派は明治時代初頭まで勢力を保つ。</p>	<p>●為衡の死による血統断絶</p>
---	-----------------------------	--	---	---	--	---	---------------------

<p>『新和歌集』・『新後拾遺和歌集』・『新統古今和歌集』歌壇 (大覚寺統)</p>	<p>撰津国河内国鎌倉</p>	<p>二条為重 二条為遠 二条為衡 頓阿浄弁 慶運 頓阿経賢 堯尋 堯孝 吉田兼好 嘉喜門院 飛鳥井雅世 (以下、藤氏嫡流九条流二条家) 二条道平 二条良基 二条持基</p>	<p>る。それ以前の「二条」の家名は、藤氏庶流・御子左流の歌道家としてのそれであり、藤氏長者・撰家としてのそれではない。二条派全盛期の藤氏長者は、「藤原」のほか、「近衛」、「九条」、「松殿」を称したが、これらは撰家としての家名である。二条派の二条家からは藤氏長者・撰関は出ていない。松殿家は、撰家の地位を失い、戦国時代に断絶。</p>	<p>二条派(二条流)と称せられた。 ●大覚寺統 ●『玉葉集』・『風雅集』以外の勅撰集の撰者を独占。但し、御子左家が「二条家」を名乗った記録は為藤・為定以降にしかなく、勅撰集で言えば『統後拾遺集』以降。 ●当初は冷泉流歌風を示す者も多い。</p>	<p>撰。20巻・1347～1353首。叙景歌に優れるが、二条派の平凡化していく類勢を示す。 ▼『新千載集』:1359(延文4)年成る。足利尊氏執奏。後光厳天皇勅。為定撰。20巻・2365首。深沈な心境の描写。平明。後光厳天皇は持明院統ながら、やむを得ず二条派の歌風を重視。しかし、より枯れた新古今風の秀作多し。 ▼『新拾遺集』:1364(貞治3)年成る。足利義詮執奏。後光厳天皇勅。為明(途中病没)、頓阿撰。20巻・1920首。恋・雑の部に僧多し(頓阿撰のためか)。平明。 ▼『新葉集』:1381(弘和元)年成る。後醍醐天皇皇子宗良親王撰。のち長慶天皇勅。准勅撰集。20巻・1426首。二条派の伝統通り平明枯淡だが、より悲哀に満ち、抒情的。 ▼『新後拾遺集』:1383(永徳3)年から翌(至徳元)年成る。足利義満執奏。後円融天皇勅。為遠(途中病没)、為重撰。20巻・1554首。二条家撰最後の集。新古今風。藤氏嫡流九条流二条家の良基が最多入集。 ▼『新統古今集』:1439(永享11)年成る。足利義教執奏。後花園天皇勅。飛鳥井雅世、堯孝撰。20巻・2144首。幽玄、枯淡を基調とする新古今と二条派の歌風をよく踏襲。但し、京極・冷泉派の入集は皆無に近い。また、女流歌人も冷遇された。</p>	<p>●二条派歌道はまず、東家と三条西家に別個に合流。古今伝授と一体化して発展し、東西の地方へ伝播。 ●二条派歌道が山陰・出雲へ入ったのは18c初頭。明珠庵釣月による。</p>	<p>●一族内訌 ●大覚寺統の衰退 ●歌風相違</p>
--	-----------------	---	---	---	---	--	-------------------------------------

<p>小倉家 (二条派一門)</p>	<p>山城国 東京都 東京都</p>	<p>洞院実雄 小倉公雄 小倉実教 小倉季雄 小倉公脩 小倉実起</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家閑院流 洞院庶流</p>	<p>13c半ば～ ●洞院実雄が後宇多・伏見・花園天皇の外祖父となり、権勢を振るう。</p>	<p>●実教の代に、頼阿・丹波忠守・二条道平・兼好らと交流し、歌道全盛。 ●小倉実教『藤葉和歌集』</p>	<p>近代に断絶 血統は家創設以来十回以上断絶 家は存続</p>	<p>●度重なる血統断絶と他の歌道家からの養子による継承のため、歌道が養子元の歌道家に吸収される。 ●小倉事件(1681) ●秩禄処分(1876) ●華族の東京移住命令 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●敗戦 ●華族制度の廃止(1947) ●税制の一新と混乱による歌書の散逸(財産税・富裕税・シャウブ勧告) ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化)</p>
------------------------	----------------------------	--	------------------------------------	--	---	--	---

<p>近衛家・鷹司家 (諸派折衷)</p>	<p>山城国 東京府 東京都</p>	<p>近衛基実 近衛政家 近衛尚通 近衛植家 近衛前久 近衛信尹 近衛信尋 近衛基熙 近衛家久 鷹司基平</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家近衛流 師弟関係</p>	<p>12c半ば～ ●近衛家は近衛基実を祖とする。 13c後半～ ●兼平が藤氏長者となり鷹司家が分家。五撰家の一つとして繁栄。 ●近衛家・鷹司家共に、長年、御子左派・二条派・古今伝授の主流を成さず、その中世歌道は他の撰家(九条家及び九条流の二条家・一条家)ほどには繁栄しなかった。但し、代々有職故実の家ではあり、特に近衛家の歌道は近世以降に全盛を迎えている。 ●明応の政変(1493)による足利将軍家の分裂に際しては、九条流三撰関家(九条家、二条家、一条家)が義植系に、近衛流二撰</p>	<p>★近衛家 ●当初、歌道は九条流藤家に及ばないながらも、撰関を九条流と二分したことによって近衛家にも歌書が伝承・所蔵されるようになる。 ●後白河院・後鳥羽院らの熊野行幸によって熊野三山検校・聖護院門跡による歌壇が栄えるようになったが、九条家・二条家の子弟が世襲していたこれらの重職が近衛家の子弟の手に移ったため、近衛家に歌道が流入した。 ●政家は即興で詠んだとされる近江八景の八首が知られる。また、応仁の乱に際し、家宝の歌書や有職故実の書を避難させたため、邸宅焼失後も残った。(現在、陽明文庫所蔵。) ●尚通は宗祇より古今伝授を受けた。 ●前久は和歌、青蓮院流書道、鷹狩り、馬術などに優れ、鷹狩りの解説書を兼ねた「龍山公鷹百首」を編んだ。 ●信尹は猪苗代兼与に古今相伝をおこなった。青蓮院流書道に長け、近衛流(三藐院流)を創始。 ●後陽成天皇の第四皇子・信尋より皇別撰家となる。信尋は和歌のほか、三藐院流書道、連歌、茶道にも長け、この時点では古今伝授を受けないが、その礎を築く。一方で、六条三筋町(後に嶋原に移転)の太夫・吉野太夫の馴染み客であり、和歌を相互に指南した。 ●基熙が後西天皇より古今伝授を受け、家久に授けた。これをもって近衛家は、九条流の各撰家と同様に、歌道家としても二条流歌道・御</p>	<p>★近衛家 ●近衛家当主で首相でもあった近衛文麿が「陽明文庫」を設立した。 ●現在では、旧五撰家のうち、最も歌会始に縁の深い家となっている。近衛忠大は歌会始の講師を務めている。 ★鷹司家 ●鷹司家血統としての歌道は、忠冬の死により断絶(1546)。 ●左記の通り、家は信房により再興(1579)。信房は二条晴良の子であり、以後の鷹司家歌道は、近衛家よりは二条家に近づいたほか、養子を迎えて他の撰家の影響を受け続けた。輔平の代に皇別撰家となり、御所伝授系統そのものとなる。熙通より血統は九条流となる。 ●1574年に、松平信平に始まる鷹司</p>	<p>●鷹司家は血統断絶(1546年の鷹司忠冬の死)その後の度重なる歌道家からの養子による継承のため、独自の歌道創設の機会を消失。 輔平より血統は閑院宮直仁親王流に。 熙通より血統は九条流に。 輔平の血統は菊亭家となる。 ●八月十八日の政変(1863)から大政奉還(1867)、王政復古、明治維新(1868)までの一連の政変 ※ 前関白・近衛忠熙、権大納言・近衛忠房父子や、右大臣・二条齊敬らが参内・謀議して引き起こした</p>
---------------------------	----------------------------	--	------------------------------------	--	--	--	--

平忠冬
鷹司基忠
鷹司冬平
鷹司忠冬

関家(近衛家、鷹司家)が義澄系に付き、歌道・有職故実においても同流(二条派)内の異系統の見立てによる対立が生じた。二条昭実と近衛信輔の間で生じた関白相論(1585)でも、同様の事態となった。しかし、五撰家全てが概ね二条派歌道である上、二条家血統による鷹司家再興に始まる、五撰家間の度重なる養嗣子交換により、五撰家間(特に九条流三家と近衛流二家間)の歌道論争はほとんど意味を成さなくなった。

所伝授(天皇・後続の歌道師範)の正統の家の地位を獲得した。
●家久と一条兼香の対立により、近衛流二撰家と九条流三撰家の歌道・有職故実論争も再発したが、五撰家どうしの養嗣子交換により、やはり意味を成さず、一時的な対立に終わった。
★鷹司家
●鷹司家は、基忠・冬平の代に二条派の頼阿より評価を得て、歌道隆盛を迎えた。《『井蛙抄』》
●忠冬の死による断絶後、二条晴良の子信房が鷹司家を再興した。再興後の家の歌道は、まず信房の出身家である二条家の歌道そのものとなった。その後も、近衛家、一条家から養嗣子を迎え、これらの撰家の歌道の影響を受け、閑院宮直仁親王の第四皇子・輔平からは皇別撰家となり、御所伝授の系統となる。
●鷹司家の歌道は、近世を通じて、血統断絶のおそれの小さかった本家近衛家や九条流の九条家、二条家、一条家ほどには繁栄しなかった。しかし、歌道を含む有職故実の名門であり続けた。

●1654年に、松平信平に始まる鷹司松平家が親藩として分家し、信清以降、吉井藩主を務めた。
●輔熙は、八月十八日の政変(1863)、禁門の変(1864)に対応できず、会津・薩摩・幕府軍の攻撃を受けて鷹司邸焼失。撰関職廃止により、鷹司家は皇別撰家として幕を閉じる。輔熙の子・輔政の早世により、九条家から熙通を養嗣子に迎えた。
●以来、歌道は継承していないが、血統は存続。

八月十八日の政変では、二条流歌道宗匠の三条西季知を七卿落ちの一人として長州に下向させることに成功したため、五撰家のいずれかが三条西家に代わる歌道宗匠家となる契機を得た。しかし、王政復古の大号令により、撰関は廃職された。その上、季知は早々に復位し、明治天皇の歌道師範となり、旧来と変わらぬ威風を保って旧撰家歌道をも先導した。

<p>九条家・二条家・一条家 (諸派折衷だが、二条派・古今伝授系統)</p>	<p>山城国 東京府 東京都</p>	<p>九条道家 九条基家 九条種通 賀茂尚久 九条幸家 二条道平 二条良基 二条持基 一条実経</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家九条流 嫡流</p>	<p>13c半ば～ ●九条家第四代当主・教実の弟の良実が撰家の二条家を、実経が撰家の一条家を創設。但し、二条家のみが二条派歌道の中核なのではなく(二条派主流の二条家は別掲の通り御子左流血統であり)、いずれの撰家も同流歌道を満遍なく継承。 ●二条派(の二条家)と撰家の二条家との関係は、二条派の項に記す通り。 ●一条家は、九条道家三男・一条実経を祖として創設。 ●二条家と一条家の分家をもって、九条家についても新たな九条家の創設と見る場合、これを後九条家と称することがある。 ●明応の政変(1493)による足利将軍家の公認に際しては、九条</p>	<p>★九条家 ●兼実・良経以降の九条家歌道としては、種通が白眉。三条西実隆に『詠歌大概』を学び、古今伝授を受ける。一条兼良の『伊勢物語愚見抄』の書写『伊勢物語九条禅閣抄』、『孟津抄』、書写『古今集抄』など。細川幽斎、里村紹巴、松永貞徳らと交流し、後者二人は弟子として、和歌・連歌に励む。『山路の露』・『巢守』などの『源氏物語』補作・注釈書を著す。 ●種通は、賀茂社の賀茂尚久に歌道伝授・源氏三ヶ秘決伝授を行い、目をかけた孫の幸家への「返し伝授」を託し、尚久がこれを実現した(1619)。 ★二条家 ●二条家は、道平が鎌倉倒幕を狙った元弘の乱(1331～33)への関与を疑われ、幕府より一時断絶を命じられたが、後醍醐天皇のもとで復帰。二条派歌道・古今伝授の一端を担ったほか、良基は連歌を大成。五撰家の中でも、即位灌頂の儀を独占し、親江戸幕府や親霊元天皇の立場をとり、有職故実の家職を保った。 ★一条家 ●一条家は、五撰家の一つで、近衛家に次ぐ序列二位の家格を有し、当然、他の撰家と同様、歌道を含む有職故実を家職とした。但し、撰家・藤氏長者の家として、有職故実を総合する宿命であることも手伝って、二条派二条家(五撰家でない御子左流の二条家)の二条家</p>	<p>現在、いずれの家系も存続しているが、歌道伝授はない。 ★九条家 ●道孝が最後の藤氏長者となったが、この時既に歌壇の中心にはなかった。四女・節子が天正天皇の皇后(貞明皇后)となった。 ★二条家 ●齊敬が最後の関白となったが、この時既に歌壇の中心にはなかった。 ★一条家 ●近世末期には歌壇の中心にはなかった。一条忠季の二女・美子が明</p>	<p>●元来、撰家・藤氏長者および総合的な有職故実の家として、あくまでも宮中・公家歌壇のパトロン・支援者の役割を担ったことによる、歌道師範家・歌道の専門家としての非成立。 ●八月十八日の政変(1863)から大政奉還(1867)、王政復古、明治維新(1868)までの一連の政変 ※ 前関白・近衛忠熙、権大納言・近衛忠房父子や、右大臣・二条齊敬らが参内・謀議して引き起こした八月十八日の政変では、二条流歌道宗匠の三条西</p>
--	----------------------------	---	----------------------------------	--	---	--	---

		<p>一条経嗣 一条兼良 一条冬良 一条兼香</p>		<p>万葉に際しては、九条流三撰関家(九条家、二条家、一条家)が義植系に、近衛流二撰関家(近衛家、鷹司家)が義澄系に付き、歌道・有職故実においても同流(二条派)内の異系統の見立てによる対立が生じた。二条昭実と近衛信輔の間で生じた関白相論(1585)でも、同様の事態となった。しかし、五撰家全てが概ね二条派歌道である上、二条家血統による鷹司家再興に始まる、五撰家間の度重なる養嗣子交換により、五撰家間(特に九条流三家と近衛流二家間)の歌道論争はほとんど意味を成さなくなった。</p>	<p>(五撰家でなく、御子左流の一条家/九条家に比すれば、歌道そのものには乏しく、歌道師範家となったことは一度もない。 ●しかし、一条家の歌壇における役割は、並外れた二条派歌壇・古今伝授系統のパトロン・支援者としてのそれであり、多数の歌人の活動を支えた。これは、二条派歌壇への接近を特に示さなかった近衛・鷹司両家とは異なる特徴である。また、撰家の二条家と同様、連歌をよくした。 ●当代一の有職故実の学者であった兼良は、『新続古今和歌集』の真名序・仮名序を執筆。 ●兼良・冬良父子は、当代公家らに古今集を講義。連歌・能楽の理解も深く、冬良は『新撰菟玖波集』の編纂を支援。 ●関白・兼香は、中断を繰り返していた大嘗祭の復興支援を将軍・徳川吉宗に要望。吉宗の支援により、桜町天皇の大嘗祭が催された。この見返りを兼ねて、和歌に関心を示した吉宗は、1539年、兼香に当代の優れた歌人の推挙を求める。兼香は、中院通躬、烏丸光榮、三条西公福、冷泉為久を推挙し、四名の名声を高めた。</p>	<p>かつに。一条忠春の二女・実子が明治天皇の皇后(昭憲皇太后)となった。 ●関白・一条昭良の次男冬基が醍醐家を創設。 ●昭良の実父は後陽成天皇であり、従って、それ以降の一条家は皇別撰家である。</p>	<p>季知を七卿落ちの一人として長州に下向させることに成功したため、五撰家のいずれかが三条西家に代わる歌道宗匠家となる契機を得た。しかし、王政復古の号令により、撰関は廃職された。その上、季知は早々に復位し、明治天皇の歌道師範となり、旧来と変わらぬ威風を保って旧撰家歌道をも先導した。</p>
<p>二階堂氏 (二条派一門)</p>	<p>鎌倉(永福寺二階堂) 近江国紀伊国陸奥国(岩瀬)</p>	<p>二階堂行政 二階堂行盛 二階堂行貞 頼阿 経賢 亮孝</p>	<p>血縁(武家・僧侶) 藤原南家為憲流 工藤氏流 師弟関係</p>	<p>14c初頭～ ●頼阿が二条派の実権を掌握し、全盛。</p>	<p>●『新拾遺集』・『新続古今集』撰 ●古今伝授 ●藤原南家で最も栄えた歌道家の一。頼阿は二条派歌道の大成者であると目されている。 ●同じく南家で実範流である季兼・季範の血統は、熱田大宮司を務めるが、熱田歌壇の全盛期は、宣阿と神官粟田家の栄える近世になってからである。 ●とりわけ頼阿以降、京極派・冷泉派への非難・排撃姿勢を強める。 ●最後の勅撰集『新続古今集』において、撰者である亮孝は、冷泉派の正徹に激しく対抗し、同じく撰者の飛鳥井雅世と共に、正徹排除を画策。正徹の入集は皆無となった。</p>	<p>15c半ば 衰退 ●二条派歌道の実権は手放す。ただし、二条良経、三条西公保、常光院流などに歌道は継承。</p>	<p>●二階堂為氏の下向、須賀川城入城。(戦国大名化) ●天文の乱(1542～48)</p>

両統迭立・建武の新政・南北朝の動乱(観応の擾乱・正平一統)・南北朝合一(明德の和約)・後南朝の時代と室町幕府の歌壇、および歌道と結託した世襲宮家の乱立、勅撰和歌集の終焉、京極派の長期低迷

流派名	本拠地	代表的歌人・歌論者・当主	流派の主体	流派の成立時期・成立事情 (cは世紀)	特徴	衰退・分裂・断絶の時期 (cは世紀。血統断絶の場合、掲載可能な限りその旨を記す。) ●衰退・分裂・断絶に至る記述 ◆は存続についての記述	衰退・分裂・断絶の理由 ●最終断絶以外(一時的な衰退など)の理由も記載した。 ◆は存続についての記述
建武の新政		後醍醐天皇 宗良親王 長慶天皇 師成親王 結城親光 名和長年 楠木正成 楠木正行 千種忠顕 阿野廉子 足利尊氏 足利直義 足利義詮 足利義満 足利義教 足利義政 足利義尚 浄通尼 足利義輝 足利義昭 三好長慶 細川幽斎 斯波氏経 一色持信 一色直朝 上杉謙信 安威資脩 郷原氏直		1333頃～ ●後醍醐天皇が延喜・天曆の治の再現を目指して興した「建武の新政(建武の中興)」期より、大覚寺統の歌壇が力を持ち始める。 ●本項には、大覚寺統・南朝方が持明院統・北朝方かに関わらず、最終的に二条派歌道を学んだ歌人を中心に記す。北朝の	●両統迭立から南北朝期の両勢力と歌道との関連は大まかに、大覚寺統・南朝が二条派歌道、持明院統・北朝が京極派歌道を継承したと言え、『風雅集』までの両皇統の各勅撰集にもその傾向が表れている。 ●建武の新政の失敗により、後醍醐天皇は京を逃れて南朝(吉野朝廷)を建てた。勢力構成は、北朝方が足利氏の主流と多くの傍流を含む大勢力を維持し、数的有利にあった。 ●しかし、勅撰集の多くは引き続き大覚寺統系・南朝天皇の命で編まれ続け、その中心を担った二条派歌道が全盛を極めることとなった。 ●冷泉派は当初傍観したが、京極派の衰退を見計らいつつ二条派へ接近。このことが、現代に至る生き残りに功を奏する。 ●また、足利氏・室町幕府が歌壇に関わり始め、かつ観応の擾乱が勃発してからは、同じ二派歌道の対立は南北朝の対立とは	1573頃 衰退したが、連綿と継承 ●室町幕府歌壇としては当然、幕府滅亡と同時に断絶したが、同歌壇は、	

建武の新政・三木一草・『続後拾遺和歌集』歌壇、南北朝歌壇、室町殿・室町幕府・花の御所・三職七頭・守護大名・『新千載和歌集』・『新統古今和歌集』歌壇(二条派と京極派の行き来・混在歌壇)

山城国大和国各守護大名の勢力圏

資氏世
飛鳥井雅世
飛鳥井雅親
飛鳥井雅綱
飛鳥井雅春
飛鳥井雅庸
飯尾常房
一条■子(■は王偏に貢)
今川貞世(了俊)
今川範国
今川範政
今川氏真
小田孝朝
北畠顯統
北畠顯能
北畠親房
佐竹師義
三条西実隆
三条西公条
三条西実枝
四条隆資
慈道法親王
島津忠秀
新宣陽門院
丹波忠守
千葉氏胤
洞院公泰
道堅
中院通勝
二条教基
二条教頼
蟷川親元
古市澄胤
坊門清忠
梵灯庵
町資藤
吉田定房
吉田宗房
四辻善成
良瑜

血縁(天皇・軍事貴族・武家)
大覚寺統
将軍家(軍事貴族・武家)
清和源氏流河内源氏
守護大名
師弟関係

足利氏ほか多くの武家が二条派歌道を学び、一方で後醍醐天皇・南朝方の武家が新派歌風を詠むなど、歌壇は南北朝の動乱早期から混沌とする。
●足利将軍家(室町殿)は、義満以降、太政大臣・公卿に昇進し、事実上、撰家・清華家と同等の家格となった。主に藤原北家の日野流(足利氏と姻戚関係)・勸修寺流諸家を家司としたため、二条流歌道が将軍家に早々に流入した。明応の政変(1493)による将軍家分裂以降の状況は、五撰家の各項を見よ。
●歌道を世襲する家系(歌道家)である世襲宮家や公家については、下方の各項目を見よ。

平くも阿派歌道の対立は南北朝の対立とは必ずしも対応しなくなり、二条派歌道が北朝歌壇へ進出する(京極派歌人が南朝歌壇に接近する)形で混沌とした。とりわけその契機を作ったのは、後期京極派の正親町公隆による二条派歌風への転換である。
●足利将軍家執奏、北朝系天皇勅命の『新千載集』、『新拾遺集』、『新後拾遺集』、『新統古今集』は、二条派により撰される。二条派歌道は、二条家血統を離れて、頓阿、続いて堯孝といった歌僧、さらに飛鳥井家などの二条家血統以外の歌道家の手に移る。その後、殊に『古今集』解釈は、古今伝授の道へと入る。
●明徳の和約(1392)によって、皇統は北朝系に戻るが、その後の朝廷の歌壇は引き続き二条派歌道で彩られたばかりか、多くの足利将軍や旧北朝方の武家、守護大名らも二条派歌道家に歌を学んだ。最終的には、二条・京極両派と南北朝の対応はほとんど消え失せ、後期京極派は衰退し(『新統古今集』における京極・冷泉派の冷遇)、乱立した各世襲宮家と歌道家としての公家が二条派一門内の派閥を形成するに至った。
●室町文化(義満の北山山荘を中心とする北山文化、義政の東山山荘を中心とする東山文化が知られる)の特徴は、五山文学と呼ばれる漢文学、連歌、能、茶道(茶の湯)、華道、庭園、仏教建築などが同時に花開き、「芸の道」、武家の教養として深められたことであり、旧派歌道についても、二条派以外の新派の産出よりは、同歌道の深化と奥義の秘伝化、連歌の発展に重きが置かれた。

北朝との蜜月期を除いては、左記の通り、むしろ後醍醐天皇・南朝歌壇の後継歌壇、すなわち二条派・連歌歌壇そのものであり、その歌道は、能や茶の湯などの他の芸道と共に深化し、また、奥義を秘伝化した古今伝授を通じるなどして、近現代にまで受け継がれる。
●「三木一草」とは、後醍醐天皇の信頼を得た四人の重臣(結城親光、名和長年、楠木正成、千種忠顕)をいうが、この語は古今伝授で好んで用いられることとなる。(『六条家古今和歌集伝授』、『古今三鳥剪紙伝授』)
●「三職七頭」とは、管領などの室町幕府の要職が認められた有力大名の総称であり、どの家も、三条西家との交流を中心に二条派歌道を極めた。

●室町幕府の滅亡(1573)

<p>後期京極(為兼)派、『風雅和歌集』歌壇 (血統:持明院統 歌道・地歩:最初は正統京極派・北朝、最終的に二条派・南朝に吸収)</p>	<p>山城国</p>	<p>花園院 光厳院 永福門院 祝子内親王 京極忠兼(正親町公蔭) 徽安門院一条 京極為基(玄哲) 冷泉為秀</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家閑院流 →京極為兼の養子</p>	<p>14c前半～ ●京極家の養子となった正親町公蔭が京極派歌壇に加わり、同派は後期に入る。</p>	<p>●公蔭は、五十四番詩歌合(1343)、貞和百首(1346)、光厳院三十六番歌合(1349)、延文百首(1356)などに立て続けに詠進。『玉葉集』と『風雅集』を中心に入集。当初、為兼の没落により失職するも、為兼の歌風を忠実に継承し、北朝の光厳院政下で政局と歌壇に復帰。しかし、正親町家に戻り家督を継いでからは、二条派に接近。 ●公蔭の娘、徽安門院一条は光厳院の寵愛を受け、北朝歌壇に身を置いたが、歌風は父に比べて後期京極風を残す。『風雅集』などに入集。家集に『徽安門院一条集』。 ▼『風雅集』:1346(貞和2)～1349(貞和5)年。花園院宣、光厳院継承。光厳院親撰。正親町公蔭、京極為基、冷泉為秀らが寄人。20巻・2211首。京極派。「正しき風」の『正風集』とするところ、呉音で「傷風」に通じるのを忌み、「風雅」に。繊細な自然観照に優れる。</p>	<p>14c後半 断絶 ●近世末まで二条派に圧倒されるも、近代以降の評価は高い。(折口信夫・土岐善麿・岩佐美代子らによる研究。)</p>	<p>●血統断絶 ●二条派歌道の隆盛 ●持明院統の後光厳院が二条派を重視(『新千載集』・『新拾遺集』) ●観応の擾乱</p>
<p>順徳源氏 (ほぼ二条派一門)</p>	<p>山城国</p>	<p>忠成王 源彦仁 忠房親王 源彦善 二条良実 二条兼基 二条道平 小倉公雄 小倉実教 善統親王 尊雅王 四辻善成</p>	<p>血縁(天皇・皇族) 順徳天皇系 師弟関係</p>	<p>13c後半～ ●二条良実の娘を母に持ち、二条兼基の娘と小倉実教の娘を嫁とした忠房親王を中心に、二条・小倉両家及び丹波忠守ら丹波家を含めた歌壇が形成される。</p>	<p>●忠成王の家系を岩倉宮、善統親王の家系を四辻宮とし、宮家に含める場合もある。 ●四辻善成が二条派・河内方源氏学派の丹波忠守の指南を受けて以降、二条派傾向が増すが、すぐに両准宮家が断絶し、歌壇は終焉。</p>	<p>15c初頭 断絶</p>	<p>●血統断絶</p>
<p>常盤井宮家 (大覚寺統)</p>	<p>山城国 (常盤井殿)</p>	<p>龜山天皇 常盤井宮恒明親王</p>	<p>血縁(天皇・皇族) 龜山天皇系 世襲宮家</p>	<p>14c初頭～ ●龜山天皇の遺詔により、大覚寺統の正統となるはずであったが、果たせず、宮家として存続。</p>	<p>●大覚寺統の分裂三派(後二条天皇流・後醍醐天皇流・常盤井宮流)のうちの一派。 ●西園寺家歌道を継承。 ●龜山院勅撰の『続拾遺集』の後、父の意に従わない後宇多院が『新後撰集』・『続千載集』の二集を撰し、常盤井宮の衰退が決定的となる。</p>	<p>断絶(1552)</p>	<p>●血統断絶(大覚寺統の正統が後宇多天皇系に移る。)</p>

<p>木寺宮家 (血統:大覚寺統 歌道・地歩:持 明院統・反後 醍醐派)</p>	<p>山城国 (葛野 郡木 寺) 遠江国</p>	<p>後二条天皇 邦良親王 木寺宮康仁親 王 木寺宮邦康親 王</p>	<p>血縁(天皇・皇族) 後二条天皇系 世襲宮家</p>	<p>14c初頭～ ●大覚寺統正統を主 張するも、後醍醐天皇 系が皇統となり、宮家 として存続。</p>	<p>●大覚寺統の分裂三派(後二条天皇流・後 醍醐天皇流・常盤井宮流)のうち一派。 ●後醍醐天皇による大覚寺統皇統独占策 に対し、同統別流である木寺宮は持明院統 と行動を共にする。</p>	<p>不明(15c後半に断絶か)</p>	<p>●持明院統への寝返り (後醍醐天皇系統との確 執。) ●のち、伏見宮・後崇光院 系統から存在を黙殺され る。</p>
<p>五辻宮家 (血統:地歩: 大覚寺統・持 明院統の両統 歌道:冷泉派 が流れ込む も、諸派折衷)</p>	<p>山城国 (五辻)</p>	<p>★持明院統五 辻宮 後深草天皇 久明親王 守邦親王 五辻宮熙明親 王 ★大覚寺統五 辻宮 龜山天皇 五辻宮守良親 王 宗覚</p>	<p>血縁(天皇・皇族) ★持明院統五辻宮 後深草天皇系 ★大覚寺統五辻宮 龜山天皇系</p>	<p>14c前半～ ●幕府介入により、守 良親王の所領が実子 宗覚ではなく熙明親王 の手に渡ったことで対 立。両者が五辻宮を名 乗る。</p>	<p>●持明院統五辻宮は、両親王將軍(久明親 王・守邦親王)は伏見・京極派歌壇に近縁 で、久明親王が京極派歌壇に出入りしてい た冷泉為相の娘との間に久良親王を設けた ことから、分裂前の京極・冷泉両派の歌道 を知る宮家である。</p>	<p>不明(14c後半に断絶か)</p>	<p>★持明院統五辻宮 ●幕府による親王將軍・ 両宮家への傀儡・攪乱。 ●京極・冷泉派の低迷と 二条派の隆盛 ●血統断絶か ★大覚寺統五辻宮 ●後宇多天皇系への大覚 寺統皇統の集中。 ●血統断絶か</p>
<p>花町宮家 (血統:大覚寺 統 歌道・地歩:持 明院統・反後 醍醐派)</p>	<p>山城国</p>	<p>花町宮邦省親 王 花町宮廉仁王</p>	<p>血縁(天皇・皇族) 後二条天皇系 世襲宮家</p>	<p>14c前半～ ●大覚寺統正統を主 張するも、後醍醐天皇 系が皇統となり、宮家 として存続。</p>	<p>●大覚寺統だが、邦省親王は諸派折衷の 歌風を示し、『統千載集』以降全ての勅撰集 に満遍なく入撰。</p>	<p>不明(14c後半に断絶か)</p>	<p>●後醍醐天皇系統との確 執。</p>

<p>日野家 (二条派一門)</p>	<p>山城国 (宇治 郡日 野) 東京府 東京都</p>	<p>日野俊光 日野資朝 日野俊基 日野有光 広橋兼郷 日野勝光 日野晴光 日野輝資 日野弘資 日野資時 烏丸光栄 日野資枝 日野資矩 梶井道敏(一 室) 塙保己一 藤貞幹 土肥経平 宮地仲枝 尾池春水 尾池春道</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家日野流 師弟関係</p>	<p>14c初頭～ ●日野俊光が伏見天 皇の重用を受け、権大 納言となる。</p>	<p>●本来の家業は儒学。長期の繁栄により分 家が極めて多く、烏丸家をはじめ多くの歌道 家と血縁がある。 ●日野俊光が持明院統・伏見天皇に重用さ れたことを機に家柄を確立するが、子の資 朝以降は南朝方につく。 ●建武の新政期には、これに対立する足利 尊氏につき、これ以降、将軍の正室を出し 続けた。 ●歌道は二条派一門であり続け、持明院統 ながら二条派歌道を重視した後光厳天皇に 重用されて発展し、この頃、歌道家の烏丸 家が分家した。 ●後桜町天皇・光格天皇歌壇で活躍。資 枝・資矩の代に歌道全盛。</p>	<p>衰退・断絶 ●正中の変(1324) ●元弘の変(1331～33) ●第6代将軍足利義教と対立し、後南 朝と組んで禁裏に乱入。鎮圧・殺害さ れ、日野家嫡流の血統断絶。 禁闕の変(1443) ●分家の裏松家より勝光を養子に迎 えて日野家再興。しかし、桂川原の戦 いで再び断絶。 ●日野晴資の生母陽春院と足利義輝 により、分家の広橋家より輝資を迎 えて再興。 ●近代・戦後に衰退。</p>	<p>●度重なる寝返りによる 本家の疲弊。 ●長期の繁栄に伴う分家 創出による歌道・歌書の 流出。 ●桂川原の戦い(1527) ●近代化 ●御歌所派への吸収。 ●秩禄処分(1876) ●華族の東京移住命令 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第二次世界大戦の戦災 (東京大空襲) ●分家各家の血統断絶・ 男系断絶 ●標準国語の変化(東国 方言の東京標準語化)</p>
<p>正親町家 (二条派一門)</p>	<p>山城国 東京府 東京都</p>	<p>洞院公守 正親町実明 正親町公叙 正親町季俊 正親町実豊 正親町公通 正親町実連 正親町公明</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家閑院流 洞院庶流</p>	<p>14c前半～ ●洞院公守の次男公 守に始まる。</p>	<p>●代々、三条西家・烏丸家などの歌道家の 娘を娶り、義父などから歌道伝授を受け、二 条派一門の主流一家を成すに至る。 ●公通・実連は狂歌・戯れ歌をも好んだ。</p>	<p>衰退・断絶 ●近代・戦後に衰退。</p>	<p>●尊号一件(1788～91) ●秩禄処分(1876) ●華族の東京移住命令 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第二次世界大戦の戦災 (東京大空襲) ●敗戦 ●華族制度の廃止(1947) ●税制の一新と混乱によ る歌書の散逸(財産税・富 裕税・シャウブ勧告) ●標準国語の変化(東国 方言の東京標準語化)</p>

<p>正親町三条家 →嵯峨家 (二条派一門)</p>	<p>山城国 東京府 東京都</p>	<p>正親町三条実 繼 正親町三条公 豊 正親町三条公 積 正親町三条実 同 正親町三条実 愛 嵯峨実勝 嵯峨浩</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家閑院流 三条庶流</p>	<p>14c半ば～ ●実継が二条為明に 古今伝授を受ける。</p>	<p>●正親町三条家の始祖は公氏であるが、本格的な歌道の始祖は実継である。 ●古今伝授 ●家格は大臣家である。 ●踏歌節会内弁・外弁も多く輩出した。</p>	<p>●三条西家流に継承。 ●血統存続 ●近代に嵯峨家と改名。 ●愛新覚羅溥傑と浩の子慧生は恋人 大久保武道と共に心中(天城山心中。1957年)</p>	<p>●歌道・家の勢力共に分家の三条西家のほうが上回るようになる。 ●三大臣家のうち、三条西・中院家の勢力に及ばないながらも存続。 ●秩禄処分(1876) ●華族の東京移住命令 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●敗戦 ●華族制度の廃止(1947) ●税制の一新と混乱による歌書の散逸(財産税・富裕税・シャウブ勧告) ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化)</p>
<p>今川流 (冷泉派一門)</p>	<p>三河国 (碧海 郡今川 荘) 駿河国 遠江国 江戸 東京府 東京都</p>	<p>香雲院 今川範国 今川貞世 今川義元 今川氏真</p>	<p>血縁(貴族・武家) 清和源氏足利氏 御一家吉良家分家 師弟関係</p>	<p>14c半ば～ ●観応の擾乱で将軍方につく。貞世の代に京極為基・冷泉為秀らの教えを受けて発展。</p>	<p>●京極為基・冷泉為秀・冷泉為和らを師とする。 ●冷泉流に近縁で、特に氏真の歌は優美平明と評される。 ●『今川了俊歌学書』(頓阿、慶運、浄弁、吉田兼好が「為世門の四天王」として紹介される。)</p>	<p>近代初頭に断絶</p>	<p>●桶狭間の戦いによる衰亡 ●秩禄処分(1876) ●男系断絶(1887) ●文書散逸</p>

<p>伏見宮家 (血統:持明院統・北朝 歌道:二条派一門 地歩:反後光厳天皇系北朝・反南朝)</p>	<p>山城国 (伏見御領) 東京府 東京都</p>	<p>伏見宮榮仁親王 伏見宮貞成親王 後桃園天皇 伏見宮貞常親王 後土御門天皇 御柏原天皇 後奈良天皇 正親町天皇 伏見宮邦家親王 伏見宮貞愛親王</p>	<p>血縁(天皇・皇族) 崇光天皇系 世襲親王家</p>	<p>14c末 ●観応の擾乱、正平一統破棄、後光厳天皇即位の混乱期直後に成立。 ●後光厳系天皇系四代の即位により、北朝内の対立が起き、この間、栄仁・貞成両親王は学芸に専心し、二条・京極両派の和歌をよくした。</p>	<p>●南北朝合一(明德の和約)により、北朝皇統・伏見宮流皇統へ二条派がさらに流入、完全に定着。もはや二条派を我が物にできない後南朝の崩壊と、京極派の長期低迷が、確実なものとなった。 ●伏見宮の後花園天皇即位により、北朝内の皇統対立が収束し、最後の勅撰集『新統古今集』が編まれた。 ●ところが、足利義教によって嫌悪された京極・冷泉家の歌人は同集で冷遇された。特に招月庵流への忌避が激しく、正徹の歌は皆無となった。</p>	<p>存続 ◆血統も存続 ◆持明院統・北朝崇光天皇嫡流としての矜持から、二条派のみならず、京極派歌道をも現在まで伝える。 ◆1947年10月14日に皇籍離脱した旧11宮家は、全て伏見宮邦家親王の王子を祖とするため、その全てがいわば「伏見宮流歌道」を継承していると言える。</p>	<p>●近代化 ●御歌所派への吸収。 ●秩禄処分(1876) ●華族の東京移住命令 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●各分家宮家に歌道・歌書が細分・離散。 ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●皇籍離脱(1947年10月14日) ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化)</p>
<p>護聖院宮家 (血統:大覚寺統・南朝 歌道:二条派一門 地歩:親幕府派)</p>	<p>大和国 近江国 (護正院)</p>	<p>後村上天皇 惟成親王 世明王</p>	<p>血縁(天皇・皇族) 後村上天皇系</p>	<p>14c末～ ●南北朝の混乱・伏見宮創設による歌道・歌道書の各家への分散期直後に創設された。</p>	<p>●北朝勢力の歌道流派もほぼ二条派となった直後の宮廷歌壇で活躍。 ●世襲宮家かつ南朝歌道正統としての地位を有したが、わずか二・三代で断絶。</p>	<p>断絶(1434)</p>	<p>●第6代将軍足利義教による後南朝諸勢力の根絶計画。 「およそ南方御一流、今においては断絶さるべし」(『看聞日記』)</p>
<p>玉川宮家流 (血統:大覚寺統・南朝 歌道:二条流一門 地歩:親幕府派)</p>	<p>大和国 紀伊国 (伊都郡玉川)</p>	<p>長慶天皇 玉川宮初代当主(不明)</p>	<p>血縁(天皇・皇族) 長慶天皇系</p>	<p>1414～ ●南北朝の混乱・伏見宮創設による歌道・歌道書の各家への分散期直後に創設された。</p>	<p>●北朝勢力の歌道流派もほぼ二条派となった直後の宮廷歌壇で活躍。 ●後小松上皇・後花園天皇・伏見宮貞成親王・常盤井宮直明王など、南北を問わず、二条派宮廷歌人と積極的に交流。 ●中山定親の教えを受けている。 ●世襲宮家かつ南朝歌道正統としての地位を有したが、わずか二・三代で断絶。</p>	<p>断絶(15c半ば)</p>	<p>●第6代将軍足利義教による後南朝諸勢力の根絶計画。 「およそ南方御一流、今においては断絶さるべし」(『看聞日記』) ●長祿の変(1457～58)</p>

<p>小倉宮家 (血統:大覚寺 統・南朝 歌道:二条派 一門 地歩:反北朝・ 反幕府派)</p>	<p>大和国 (吉野)</p>	<p>後亀山天皇 小倉宮恒敦 小倉宮聖承</p>	<p>血縁(天皇・皇族) 後亀山天皇系</p>	<p>15c初頭～ ●南北朝の混乱・伏見 宮創設による歌道・歌 道書の各家への分散 期直後に創設された。</p>	<p>●後亀山院の和歌は『新続古今集』に入 集。 ●後南朝正嫡宮家として護聖院宮・玉川宮 以上の力を持ち、最期まで北朝・幕府に抵 抗。 ●世襲宮家かつ南朝歌道正統としての地位 を有したが、わずか二・三代で断絶。</p>	<p>断絶(15c半ば) ●南朝と二条派歌道の結びつきの終 焉。</p>	<p>●第6代將軍足利義教に よる後南朝諸勢力の根絶 計画。 「およそ南方御一流、今に おいては断絶さるべし」 (『看聞日記』) ●禁闕の変(1443)</p>
<p>招月庵・清巖 正徹派 (冷泉派一門)</p>	<p>備中国 (小田 郡小田 莊) 紀伊国 近江国 駿河国 加賀国 能登国 山城国</p>	<p>(清巖)正徹 正広 心敬 正韵 桜井基佐</p>	<p>師弟関係</p>	<p>15c初頭～ ●正徹が冷泉為尹や 今川貞世らの教えを 受け、冷泉門下とな る。</p>	<p>●冷泉派の系譜を引き、正徹は御子左流・ 定家に心酔・私淑するも、門下共々歌風は 唯一無二。 ●象徴的・幽玄・夢幻的・新古今風・前衛 的・新奇 ●正徹の私家集に『草根集』、歌論書に『正 徹物語』。後者では、幽玄論が展開され、定 家への著しい傾倒が見られる。また、頼阿、 慶運、浄弁、吉田兼好が「為世門の四天王」 として紹介される。 ●元より京極・冷泉派がほぼ黙殺された『新 続古今集』で、足利義教に忌避され謫居し た正徹の入撰歌は皆無。とりわけ同集の撰 者の飛鳥井雅世や堯孝が正徹の歌風に激 しく対抗し、後花園院と義教の威を借りて、 正徹が入集しないよう画策した。 ●正広ら門下は能登の畠山義統・遊佐統 秀・三宅忠俊や周防の大内教弘・政弘らの 庇護を受けるが、歌道としては終始傍流で、 二条派から異端視され、応仁の乱の混乱に より離散・衰退。</p>	<p>16c前半 衰退・断絶 ●出身地岡山に「正徹を顕彰する会」 あり。岡山の地元住民によって、同郷 の近世歌人澄月の和歌と共に、その 和歌の研究が良好に行われている。</p>	<p>●二条派歌道の隆盛 ●応仁の乱 ●門下不足</p>

<p>常光院派 (二条派一門)</p>	<p>山城国 (仁和 寺常光 院) 加賀国 越前国</p>	<p>堯尋 堯孝 堯惠 堯憲 嘉惠 猪苗代兼載</p>	<p>血縁(武家・僧侶) 藤原南家為憲流 工藤氏流 師弟関係</p>	<p>15c前半～ ●二階堂流の常光院 堯尋・堯孝以降の二条 派歌道の通称。</p>	<p>●古今伝授 ●和歌の整理実務に通じ、和歌所開闢を続 けて輩出。 ●『新続古今集』撰</p>	<p>●歌道は東家と三条西家とに合流。</p>	<p>●応仁の乱</p>
<p>大内氏・西の 京歌壇 (諸派折衷)</p>	<p>周防国 長門国 石見国 豊前国 筑前国</p>	<p>多々良盛房 大内弘幸 大内弘世 大内義弘 宗碩 大内盛見 大内持世 大内教弘 大内政弘 正広 宗祇 猪苗代兼載 大内義興 大内義隆 大内晴持 大内義長 大内輝弘</p>	<p>血縁(武家) 大内氏(百濟聖明 王第三王子琳聖太 子後裔多々良氏流 を称する。) 師弟関係</p>	<p>14c前半～ ●多々良氏は、平安・ 鎌倉時代を通じて周防 権介を世襲する在庁 官人として台頭。当主 盛房の代より大内を名 乗る。南北朝時代に大 内弘幸・弘世と大内氏 一族鷲頭長弘・弘直の 間で対立が起きるが、 鷲頭氏は大内宗家に 従属。弘世が京都を模 倣して山口の街を造 営、「西の京」文化の 端緒となる。</p>	<p>●義弘は宗碩の影響を受けて歌道精進、勅 撰歌人となる。(『新後拾遺集』) ●持世も勅撰歌人。(『新続古今和歌集』) ●教弘は招月庵正広を特に厚遇して山口に 招き、子の政弘と共に自邸にて歌会を催 す。正広は、宇佐神宮・箱崎八幡宮・太宰府 など大内氏領国内の各地で歌を詠み、山口 に心月庵を設ける。(『松下集』) ●教弘・政弘の時代には、正広の他に三条 公敦・飛鳥井雅俊・宗祇・猪苗代兼載らが山 口を訪れた。『新撰菟玖波集』の編纂は、政 弘の発案による。 ●政弘『拾塵和歌集』 ●義隆の代に大内文化は全盛を迎える。三 条西実隆や一条房家・房冬ら歌道公家と交 流。和歌・連歌をはじめとする京風・貴族趣 味と漢風・朝鮮風の折衷文化を展開。しか し、第一次月山富田城の戦いの失敗によ って、義隆は政務・軍務を放棄し、文芸に没 頭。</p>	<p>断絶 ●大内文化全盛期と迎えた義隆の代 のうちに、周防大内氏は事実上滅 亡。(第一次月山富田城の戦い・大寧 寺の変) ●防長経略と大内輝弘の乱によって 完全に滅亡。</p>	<p>●応永の乱(1399年。幕 府による大内義弘の滅 亡) ●嘉吉の乱(1441年。赤 松満祐による持世の重 傷・滅亡) ●応仁の乱(1467～77) ●嫡流と庶流との間で頻 繁に起きた一族内訌・家 督争いによる疲弊 大内弘幸・弘世と鷲頭長 弘・弘直 持世と持盛 盛見と弘茂 持世と持盛 政弘と教幸 義興と高弘 ●第一次月山富田城の戦 い(1542～43年。義隆の 敗北) ●大寧寺の変(1551年。 陶隆房による周防大内氏 の事実上の滅亡) ●防長経略(1555～57 年。毛利氏侵攻による義 長の自刃) ●大内輝弘の乱(1569 年。輝弘敗北により自刃)</p>

古今伝授・二条派の全盛、公家・武家の家職としての歌道(歌道師範家)、応仁の乱・戦国時代の地方の歌道文化、織豊政権の歌壇

流派名	本拠地	代表的歌人・歌論者・当主	流派の主体	流派の成立時期・成立事情(cは世紀)	特徴	衰退・分裂・断絶の時期(cは世紀。血統断絶の場合、掲載可能な限りその旨を記す。) ●衰退・分裂・断絶に至る記述 ◆は存続についての記述	衰退・分裂・断絶の理由 ●最終断絶以外(一時的な衰退など)の理由も記載した。 ◆は存続についての記述
古今伝授 (二条派一門)	山城国 大和国 堺 江戸	東常縁 宗祇 三条公敦 猪苗代兼載 斎藤利綱 近衛政家 足利義尚 三条西実隆 宗碩 宗長 細川幽斎	師弟関係 血縁	●一般には東常縁による宗祇への伝授(1471年)からを言う。 ●実際には中院・二階堂・正親町三条各家にて古くからあり。	●強い師弟・信頼関係に基づく『古今集』解釈・研究の秘伝。二条流一門の秘事の色彩が濃い。『古今集』研究の発展の一方、和歌の過度な神秘化をもたらす。 ●『古今集』の権威付けや秘伝系統維持のための偽書・捏造あり。 ●東常縁は、最初招月庵正徹を師とするが、のちに二条派の堯孝入門。 ●細川幽斎は、近世に身分を超えて上下・縦横に展開されるあらゆる古今伝授(御所伝授、地下伝授双方)や連歌の起点となる大家で、母・智慶院は吉田神道家の出である。	●不明だが、現在このような歌道相伝・伝授系統は皆無と思われる。(代表的歌人には、主に血縁のない者を挙げた。それ以外は、以下の各流派を参照。)	●近代化 ●華族自らによる所蔵歌書の大学・学術研究機関への寄贈 ●民間の和歌・国文学研究者の増加 ●一般国民からの和歌応募開始により、秘伝・秘蔵の意義の希薄化 ●伏見宮系宮家の乱立による、秩序的な秘伝系統の衰退。 ●華族男性と芸妓女性との自由恋愛・結婚による花街・民間への歌道の流入・拡散。
東氏 (二条派一門)	下総国(橘荘) 美濃国(山田荘) 山城国	東胤頼 東重胤 東常縁 東常和 素純 東常慶 東常堯	血縁(武家) 桓武平氏良文流 千葉氏支流 師弟関係	15c前半～ ●胤頼が治承・寿永の乱において戦功あり、源頼朝・実朝と組んで台頭。重胤の代に歌道家の基礎を築く。	●古今伝授 ●重胤が定家より和歌を学ぶ。 ●常縁の時に東家歌道全盛(当初は冷泉派の正徹の弟子、1450年以降は二条派の堯孝の弟子)。 ●常縁は古今伝授の祖とされるが(宗祇に古今伝授)、『古今集』の秘伝化と伝承はこれ以前から行われた。	断絶(1586)	●一族内訌(東氏方に殺害された兄の遠藤胤縁のための、弟の遠藤盛数による敵討ち)により敗北・滅亡。遠藤氏が東氏の家督を継ぐと共に歌書を秘蔵。 ●天正地震(1586年。東常堯とその庇護者内ヶ島氏が被災・死亡)

<p>上冷泉家 (冷泉派一門)</p>	<p>能登国 駿河国 江戸 山城国 京都府</p>	<p>冷泉為之 冷泉為広 冷泉為和 冷泉為益 冷泉為満 冷泉為久 冷泉為村 冷泉為泰 冷泉為紀 冷泉為系 慈延 屋代弘賢 小沢蘆庵</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家御子左 流 師弟関係</p>	<p>15c前半～ ●冷泉為尹の子の代 より為之流(上冷泉 家)と持為流(下冷泉 家)とに分かれる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●二条・京極家の血統断絶後は、歌書の保存・収集に尽力 ●二条派歌道から評価を受ける。 ●近世に徳川幕府に重用される以前は、下冷泉家の繁栄に及ばず、地方に下向を繰り返し、地下貴族に没落寸前であった。 ●慈延と小沢蘆庵は「平安和歌四天王」に数えられる。 ●慈延『慈延和歌聞書』、『廿一代集概覧』、『堀川院初度百首抄』 ●屋代弘賢は江戸幕府御家人・右筆。 	<p>冷泉為臣の戦死で男系断絶(1944)するも、歌道は継承。 ◆現在の冷泉家は、男系の連続断絶により女系となっている。 ◆歌会や和歌教育、婿養子による家の存続など、和歌・有職故実の保存に現在も尽力。現在、上冷泉流歌道は、宮内庁の歌会始と共に最も有名な和歌事業となっている。 ◆現代に残る稀有な旧派「和歌」の家元としての矜持もあり、旧派「和歌」と新派「短歌」とを分け隔てる論調での発言も多く、冷泉貴実子当主夫人にも、「歌道は冷泉家にしか残されていない」旨の発言が見られる。 ◆公益財団法人冷泉家時雨亭文庫を設立。 ◆現在、上冷泉家が単に「冷泉家」、下冷泉家はそのまま「下冷泉家」と名乗っている。(冷泉家時雨亭文庫役員名簿など。) ◆祖先藤原定家の和歌など、現在も未出の和歌が発見され続けている。</p>	<p>◆存続の要因 上冷泉家一族の権勢は、近世前までは下冷泉家の下位に甘んじ、ほとんど京都におらず、各地に下向を繰り返し、徳川幕府に重用されたことでようやく堂上家として京都での地位を取り戻した。大政奉還後も明治新政府による華族に対する東京移住命令にも従わず、京都にとどまった。結果的に、明治新政府の介入・関東大震災・東京大空襲・GHQの介入のいずれの困難も他の旧堂上家より円滑に乗り越え、歌書・財産保存に成功した。</p>
<p>下冷泉家 (冷泉派一門)</p>	<p>京都 東京</p>	<p>冷泉持為 冷泉政為 冷泉為純 冷泉為将 冷泉為景</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家御子左 流 師弟関係</p>	<p>15c前半～ ●冷泉為尹の子の代 より為之流(上冷泉 家)と持為流(下冷泉 家)とに分かれる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●播磨国細川庄を相続。 ●足利将軍家に重用され、冷泉家の本流として京都で活躍。 ●二条・京極家の血統断絶後は、歌書の保存・収集に尽力 ●二条派歌道から評価を受ける。 ●戦国時代に別所長治の攻勢に遭い、為純・為勝が自害するが、秀吉の協力により家が再興された。 	<p>近現代まで存続。歌書も保存。 ◆ただし、明治期には上冷泉家よりも低い爵位を与えられ、さらに立地条件が悪く、屋敷取り壊しに遭う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●華族の東京移住命令 ●京都御苑・京都迎賓館整備のため屋敷取り壊し ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化)

<p>三条西家 (二条派一門)</p>	<p>山城国 京都府 京都府 東京都</p>	<p>三条西公保 三条西実隆 三条西公条 三条西実澄 十市遠忠 三条西実枝 三条西公国 細川幽齋 一色直朝 三条西実条 三条西公勝 三条西実教 下河辺長流 三条西公福 三条西実義 清水谷実業 高松公祐 三条西季知 三条西実義</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家閑院流 嫡流転法輪三条家 分家正親町三条家 分家</p>	<p>15c半ば～ ●公保が孝に、実隆が宗祇に教えを受ける。</p>	<p>●宗祇から細川幽齋・御所伝授・桂園派に至る古今伝授の系統の中で、最重要の歌道師範家となる。常に古今伝授の中樞に位置する家系であり、二条流歌道の正嫡流、宗匠家、総師範家である。 ●御家流香道も家業 ●家格は大臣家である。 ●実隆・公条・実枝は三条西三代と呼ばれ、その和漢の教養が特筆される。 ●三条西実隆は歌道と茶道の両方をよくし、門下に九条種通や中院通勝ら公家のほか、のちの茶人武野紹鷗などがいた。また、定家の『釈奠次第』以来廃れていた公家の釈奠に代わる詩会を催している。 ●実枝は、子の公国が幼少であったため、信頼していた細川幽齋に古今伝授し、公国への再伝授を託す。自身が中継ぎであるとして三条西家に遠慮した幽齋は、成人した公国に早々に伝授を開始したが、公国が32歳で亡くなったため大部分の伝授を果たせず。しかし、公国の子である実条に全てを伝授し、師・実枝の遺志を実現した。 ●三条西実条は右大臣となり、家の極位極官を達成した。近世における大臣家からの右大臣任官は、実条と中院通躬のみである。この優遇措置には、先代の実隆・公条・実枝の中央歌壇での活躍が大いに影響している。中院通躬もまた、霊元院歌壇での活躍と同様の理由で、右大臣任官を果たした。 ●実条は、子の公勝が早世したため、孫の実教に歌道伝授。実教は、晩年に子の公福を得たため、父を失った幼少の公福は霊元天皇、中院通躬、武者小路実陰に師事した。三条西家は、しばらくは祖父・実条の伝授を受けた実教が保っていたが、実教の秀でた歌才もあり、やはり霊元院歌壇の中心を成した。 ●三条西家の青侍・下河辺長流は『万葉集』を研究。地下歌集『林葉累塵集』を編纂。 ●高松公祐に師事した季知は、明治天皇の歌道師範となり、実義は御歌所派の中心歌人となる。</p>	<p>近代に衰退・断絶 ●断絶後、三条西家文書の多くは早稲田大学、カリフォルニア大学にて分散所蔵。残るは東京大学、学習院大学、国立公文書館などにて分散所蔵。 ●現在は、御家流香道家としての活動のみで、歌道はおこなっていない。</p>	<p>●八月十八日の政変(1863)による三条西季知を含む七卿落ち(但し、王政復古の号令で直ちに復帰) ●秩禄処分(1876) ●華族の東京移住命令 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●敗戦 ●華族制度の廃止(1947) ●税制の一新と混乱による歌書の散逸(財産税・富裕税・シャウブ勧告) ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化)</p>
-------------------------	------------------------------------	--	--	--	---	--	---

<p>姉小路家 (二条派一門)</p>	<p>飛騨国 山城国</p>	<p>姉小路昌家 姉小路基綱 姉小路濟繼 姉小路濟俊</p>	<p>血縁(貴族・武家) 藤原北家小一条 流庶流</p>	<p>15c半ば～ ●京極氏・幕府との戦いである応永飛騨の乱(1411)後、姉小路家は三家に分裂したが、このうち古川姉小路家が和歌をよくし、宮廷歌会に頻繁に出入りし、宮廷と蜜月となる。</p>	<p>●飛鳥井雅親に学んだ基綱の時代に歌道隆盛。 ●將軍義政・三条西家より評価を得る。</p>	<p>16c後半 断絶 ●現在も地元では「飛騨文学」の祖と呼ばれる。</p>	<p>●一族内訌 ●三木氏・土岐氏の台頭 ●尊皇攘夷急進派の姉小路公知の暗殺(朔平門外の変、1863)</p>
<p>太田氏・江戸城・品川歌壇 (諸派折衷)</p>	<p>武蔵国 (江戸・品川) 東海 道 国</p>	<p>太田資清 太田道灌 太田資康 万里集九 飛鳥井雅親 心敬</p>	<p>師弟関係 血縁(武家) 清和源氏頼光流</p>	<p>15c半ば～ ●太田資清が扇谷上杉氏に仕え、道灌が江戸城を築城。</p>	<p>●資清は心敬・宗祇らと交流、歌会・連歌会に参加。(『河越千句』) ●道灌は心敬を江戸城に招いて歌合・連歌会を主催。(『品川千句』) ●万里集九の江戸城滞在(1485)の翌年に道灌は死去するが、集九はその後も道灌の子資康らと連句会・歌合を開催。</p>	<p>16c初頭 断絶</p>	<p>●応仁の乱 ●江戸城の乱・道灌暗殺(1486) ●長享の乱(1487～1505)による北条早雲の台頭と資康の戦死</p>
<p>水無瀬家 (二条派一門)</p>	<p>山城国 摂津国 (嶋上郡水無瀬)</p>	<p>水無瀬重親 水無瀬季兼 水無瀬英兼 水無瀬氏信 水無瀬氏信 右衛門佐局 水無瀬有成 多嘉王妃静子</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家水無瀬流嫡流</p>	<p>15c後半～ ●重親の養子に三条公量(公冬)の子季兼が迎えられ、歌道家となる。</p>	<p>●水無瀬家の祖は藤原親信であるが、歌道流入は季兼の時である。</p>	<p>近代に衰退・断絶 ●唯一の大阪府出身の華族となった。</p>	<p>●秩禄処分(1876) ●兵役 ●敗戦 ●華族制度の廃止(1947) ●税制の一新と混乱による歌書の散逸(財産税・富裕税・シャウブ勧告)</p>

富小路家 (二条派一門)	山城国 東京都府 東京都	富小路道直 富小路俊通 富小路資直 富小路貞直 富小路敬直 富小路隆直 富小路禎子	血縁(貴族) 藤原北家九条流 二条庶流を自称	15c後半～ ●二条道平の次男道直が富小路を称する。 ●九条家に仕えていた源俊通(または藤原俊通)が二条家庶流を称して台頭。歌道家としての意識はこの頃芽生える。(ただし、源氏・藤原氏も自称。) ●子の資直が昇殿を許可され、堂上の半家となる。	●初代当主道直も当代の優秀な歌人であったが、家格は地下にとどまり、歌壇の表舞台に出る機会には少なかった。 ●俊通が按察使親長卿家歌合(1473)や竹内僧正歌合(1492)などで頭角を現す。 ●資直の代に三条西実隆・公条父子の評価を得、堂上歌道家の一つとなる。資直は『従三位資直卿百首』などの歌集を残す。 ●貞直は加藤千蔭に師事、本居宣長と交流。俳諧もよくした。	歌道・男系が断絶(1957) ●隆直の代で堂上家・華族・歌道家としての富小路家は廃絶。 女系も断絶(2002) ●貴族院議員の職と華族の誇りを失った父はその後職に就かず、子の富小路禎子が生計を立てる。しかし、禎子は次第に新派短歌で頭角を現し、植松壽樹の「沃野」門下の一流歌人となる。	●秩禄処分(1876) ●兵役 ●敗戦 ●華族制度の廃止(1947) ●税制の一新と混乱による歌書の散逸(財産税・富裕税・シャープ勧告) ●血統断絶
猪苗代氏 (二条派一門)	山城国 陸奥国	猪苗代兼載 猪苗代兼純 猪苗代長珊 猪苗代兼寿 猪苗代兼郁 猪苗代兼恵 猪苗代兼誼 猪苗代宗悦 伊達政宗 猪苗代兼如 近衛信尹 烏丸光広 猪苗代兼与 猪苗代謙庭	血縁(武家) 桓武平氏三浦氏 流蘆名氏庶流か	15c後半～ ●猪苗代兼載が古今伝授者となって以来、近世を通じて栄える。	●和歌と共に連歌の家系である。 ●北野連歌会所奉行・連歌宗匠となった兼載は、常光院流堯恵より和歌の教えを受ける。 連歌関係:『心敬僧都庭訓』・『連歌延徳抄』 和歌観系:『閑塵集』・『万葉集之歌百首聞書』・『新古今抜書抄』 ●兼与は近衛信尹より古今伝授を受けた。	近代に衰退	●国学の隆盛 ●幕末の混乱 ●版籍奉還(1869) ●廃藩置県(1871)
堺伝授 (二条派一門)	堺	宗祇 肖柏 地下貴族 地下町人	師弟関係	16c初頭～ ●肖柏が和泉国堺へ移住(1518)	●宗祇の伝授を受けた中院流の肖柏による堺の町人への秘伝に始まる系譜を言う。 ●「箱伝授」のみの場合も多かった。	●不明だが、現在このような歌道相伝・伝授系統は皆無と思われる。	●古今伝授の項に同じ
奈良伝授 (二条派一門)	大和国 奈良県	肖柏 林宗二 地下貴族 地下町人	師弟関係	16c半ば～ ●肖柏より和歌・連歌を学んだ林宗二に始まる。	●肖柏を祖とする堺伝授のうち、林宗二に始まる系譜を言う。 ●「箱伝授」のみの場合も多かった。	●不明だが、現在このような歌道相伝・伝授系統は皆無と思われる。	●古今伝授の項に同じ

<p>木戸氏・二流相伝 (二条派・冷泉派の二流折衷)</p>	<p>下野国(足利庄木戸郷) 下総国(古河) 武蔵国</p>	<p>木戸孝範 木戸範実 広田直繁 河田谷忠朝 上杉謙信 木戸重朝 木戸範秀 菅原為繁 木戸元斎 直江兼統 細川幽斎 烏丸光広 中院通村 八条宮智仁親王</p>	<p>血縁(武家) 藤原南家熱田大宮司族(『兼載雑談』による)、清和源氏新田流とも 血縁・地縁(武家) 鎌倉府(鎌倉公方、関東管領、これらの側近・門下) 古河公方、この側近・門下 (古河公方を鎌倉公方嫡流と見なす場合、両者を「関東公方」と称する。) 堀越公方、この側近・門下</p>	<p>16c半ば～ ●永享の乱、結城合戦、嘉吉の乱、享徳の乱、応仁の乱などを経た鎌倉府の長官・鎌倉公方と補佐の関東管領、および足利成氏に始まる古河公方、堀越公方と、これらのもとにあった関東武士団たちは、各人が別個に宇都宮歌壇や江戸城・品川歌壇の歌壇の影響を受けつつ、歌を嗜んでいたが、ここに東国武士の古今伝授歌壇とも呼べるものを形成したのが、木戸氏である。</p>	<p>●木戸氏は、元は熱田大宮司族であり、代々栗橋城主であった野田氏そのものかこれと同族で、大宮司と城主の時期は重なる。下野国足利庄木戸郷を本拠とし、鎌倉公方足利氏、関東管領上杉氏の重臣。 ●戦国期に、古河公方側近の木戸氏と羽生・血尾城の木戸氏の二系統に分かれ、二流相伝を名乗るのは後者である。しかし、目まぐるしい情勢の変化と混乱にあって、鎌倉公方、関東管領、古河公方、堀越公方とその家臣団のいずれもが木戸氏歌壇の影響を受けた。 ●堀越公方・足利政知に仕えた木戸孝範が、冷泉持為から歌の指導を受け、貞常親王や冷泉門の正徹や心敬と交流。冷泉流歌道のほか、東常縁、東常和、宗祇(心敬門)ら古今伝授直系歌人・連歌師や、江戸城・品川歌壇の太田道灌の歌風をも吸収。のうち、冷泉流歌道と東常縁・東常和の二条流歌道の二流を折衷・発展させた孫の範実が、「二流相伝」を名乗る。 ●孝範家集『孝範集』、『自讃歌注釈』 ●孝範の娘は東常和の妻となった。 ●範実『古今秘伝』・『和歌会式』 ●元斎は越後上杉家歌壇で活躍。 ●二流相伝は、三条西実枝流の一色直朝と和歌で競い合った。</p>	<p>17c後半 ●血統は断絶するも継承される。 ●歌道は烏丸・中院歌道家ほか親王家にも吸収される。 ●御所伝授の契機を作る。 ●冷泉流歌道に端を発した新派であり、御所伝授が二条流一辺倒にならない契機ともなった。</p>	<p>●後北条氏政の攻撃による滅亡。</p>
<p>遠藤氏 (二条派一門)</p>	<p>美濃国 近江国 和泉国 (吉見藩)</p>	<p>遠藤盛数 遠藤常友 遠藤胤忠 遠藤胤城</p>	<p>血縁(武家) 桓武平氏良文流 千葉氏支流 師弟関係</p>	<p>1559～ ●遠藤盛数が本家東氏を討ち、家督を継ぐ。</p>	<p>●古今伝授 ●本家の東氏を滅ぼした後、歌道・歌書をほぼ没収・秘蔵しており、東氏血統の古今伝授を消滅させたが、一方で、常友が烏丸家に協力を依頼し、東常縁の詠草を整理して『常縁集』を編纂するなど(1671年完成)、東氏歌道の保存には全力を尽くした。 ●胤忠は烏丸光栄より古今伝授を受ける。 ●明治に至り、遠藤胤城が東氏を名乗る。</p>	<p>歌道は衰退 血統は存続</p>	<p>●秩禄処分(1876) ●華族の東京移住命令 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●敗戦 ●華族制度の廃止(1947) ●税制の一新と混乱による歌書の散逸(財産税・富裕税・シャープ勧告) ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化)</p>

<p>中冷泉(中山冷泉)家 (二条派一門)</p>	<p>山城国 東京都 東京都</p>	<p>中山親綱 中山冷泉為親 中山冷泉為尚 中山冷泉為繼</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家花山院流</p>	<p>16c末～ ●実子のない冷泉為満が中山親綱の子を貰い受けて冷泉為親としたが、実子ができなため、為親を廃嫡。為親は冷泉の家名を捨てられず、中冷泉(中山冷泉)家を創設し、歌道が分派。</p>	<p>●為親は、上冷泉家への不信から、中山家歌道と宮廷歌壇への参加に専心する。</p>	<p>断絶(1689) ●今城家の血統は近代まで存続したが、今城定徳が中山孝麿の子定政を婿養子に迎えたため、結局、中山・中冷泉・今城家の全血統が中山家に収束する。</p>	<p>●為繼が今城家を創設(御子左・冷泉流を捨て、今城定淳に改名)</p>
<p>坊城家 (二条派・御歌所派一門だが、歌道家としては近代以降に確立)</p>	<p>山城国 東京都 東京都</p>	<p>坊城俊昌 坊城俊民 坊城俊周 坊城俊成</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家勸修寺流庶流</p>	<p>16c末～ ●坊城家は13c後半に坊城俊定または俊実を祖として始まったが一時中絶し、16c末に再興され、現代の宮中歌会始に連なる最も新しい歌道家の一つとなった。</p>	<p>●家格は名家。家職は紀伝道と装束であるが、紫式部以来、勸修寺流は韻文・散文共に長じ、日記を家業とし(「日記の家」)、この分家の坊城家も文学に秀でた。 ●現在、披講会会長・歌会始の講師などを輩出している。</p>	<p>存続 ◆宮中歌会始の重職を歴任。</p>	

<p>応仁の乱・戦国時代・戦国大名歌壇</p>	<p>各守護大名の勢力圏</p>	<p>浅井長政 朝倉義景 赤松満政 一色直朝 今川義元 今川氏真 上杉謙信 円珠尼 太田資清 太田道灌 蒲生貞秀 木下勝俊(長嘯子) 木山紹宅 近衛前久 斎藤妙椿 斎藤利綱 三好長慶 安宅冬康 最上義光 伊達政宗 荒木田守晨 蒲生氏郷 乗阿 甲村紹巴</p>	<p>血縁(武家) 血縁中心だが、各戦国大名を盟主とするあらゆる地縁・</p>	<p>15c末～</p>	<p>●応仁の乱と戦国時代においては、大内氏など一部の戦国大名を除き、各戦国大名が一定の居城・在所において安定的な歌壇を形成することはなく、辞世の歌に見られるように、質実剛健な武勇の歌から、敗走や主君・家臣の死を嘆く歌まで、諸派折衷の歌を遺した。 ●一方、応仁の乱による京都文化の地方への伝播と、「西の京」の大内氏の庇護により、これら東西の文化の拠点を中心に、連歌会が全国へ普及する。 ●室町前期の北山文化に引き続き、後期の</p>	<p>1573頃 衰退したが、連綿と継承 ●戦国時代の歌壇としては当然、戦国時代の終結や織豊政権の盛衰、江戸幕府の成立と同時に断絶したが、同歌壇は、むしろ後醍醐天皇・南朝歌壇の後継歌壇、すなわち二条派・連歌歌壇そのものであり(建武の新政・</p>	<p>●室町幕府の滅亡(1573) ●戦国時代の終結(1590頃) ●織豊政権の盛衰(1568頃～1615)</p>
-------------------------	------------------	---	---	--------------	--	---	--

		<p>武田信玄 武田勝頼 武田信勝 十市遠忠 新納忠元 万里集九 古市澄胤 島津義久 細川持春 細川幽齋 北条氏康 北条氏政 北条氏照 毛利元就 豊原統秋 織田信長 明智光秀 豊臣秀吉 佐川田昌俊 小堀政一(遠州)</p>	<p>主従関係</p>		<p>東山文化においても、茶の湯や能が「芸の道」、武家の教養として一層深められ、旧派歌道についても、二条派以外の新派の産出よりは、同歌道の深化と奥義の秘伝化、連歌の発展に重きが置かれた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●東国においては、木戸氏・二流相伝 ●豊原統秋は笙の楽家の出。三条西実隆に和歌を、宗長に連歌を学ぶ。 	<p>南北朝・室町幕府の歌壇の項を見よ)、その歌道は、能や茶の湯などの他の芸道と共に深化し、また、奥義を秘伝化した古今伝授を通じるなどして、近現代にまで受け継がれる。</p>	<p>●江戸幕府の成立(1603)</p>
<p>織田政権歌壇</p>	<p>近江国 山城国</p>	<p>織田信長 織田政権直臣・家臣団</p>	<p>織田信長を中核とするあらゆる血縁・地縁・主従関係織田氏(血統不明。斯波氏家臣。桓武平氏? 藤原北家?)</p>	<p>1568頃～</p> <ul style="list-style-type: none"> ●信長も、他の戦国大名と同様、歌道のみならず茶の湯、能といった諸芸が深化した室町文化の影響を受け、「天下布武」を目指すにあたり、武力以上に徳と風流を重んじる精神を身につけた。 	<ul style="list-style-type: none"> ●信長自身は、武術、馬術、鷹狩、相撲、茶の湯、南蛮の文物(時計、地球儀)などを趣味とする一方、これらに比して歌道や能への関心は低く、和歌は嗜み程度に詠んだため、豊臣歌壇のような豪華絢爛な歌壇・歌会は、安土城や洛中に形成していない。茶の湯については、これを武家の公式儀礼とする「御茶湯御政道」を敷き、積極的に政治利用した。茶の湯の政治利用は豊臣政権にも引き継がれた。 	<p>断絶(1585)</p> <ul style="list-style-type: none"> ●織豊政権期に、茶の湯の政治化(千利休の排除・死)によって茶の湯が天下人主導の文化となった一方、歌道・歌学と天下・将軍権力は再度遠縁となり、古今伝授、御所伝授の担い手は朝廷・公家、地下伝授の担い手は江戸・地方の武家・大名と「農工商」であるまま推移し、徳川將軍家にあつては、江戸を本拠としたこととも相俟つて、京や江戸に歌壇らしき歌壇を全く持たなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ●本能寺の変による織田信長の死(1582)

<p>豊臣政権歌壇</p>	<p>播磨国 備前国 河内国 山城国 大和国</p>	<p>豊臣秀吉 豊臣政権直臣・家臣団</p>	<p>豊臣秀吉(藤氏長者を名乗り、これを豊臣氏と改める)を中核とするあらゆる血縁・地縁・主従関係 豊臣氏(血統不明。下層民の出と推定される)</p>	<p>1580頃～ ●秀吉は本能寺の変(織田信長の死)を知り、備中高松から軍を返し(中国大返し)、明智光秀を山崎の戦いで討ったが、合戦後、自らの連歌の師で、本能寺の変の四日前に光秀が行った連歌会「愛宕百韻」にも参加した里村紹巴に、謀反を知っていた可能性を疑って問い詰めたところ、紹巴が巧みに句を詠んで難を逃れたとされる。しかし、主君信長を自害に追いやる直前の光秀の連歌会を耳にしたこの頃より、秀吉の天下への渴望と共に、京都での大歌壇形成への熱意が急速に高まる。</p>	<p>●豊臣政権歌壇は、ほぼ秀吉の独断の奢侈な趣味歌壇であったと見て差し支えなく、およそ歌道・歌学の伝授と呼ばれるものとは様相が異なる。秀吉は、細川幽斎、里村紹巴、今出川晴季、千利休などを師としてあらゆる芸道に関わり、最期には辞世の歌も詠んだが、秀吉の目的は、歌道や芸道それ自体ではなく、視覚的に煌びやかな美の演出による、最高貴族(朝臣姓、関白、藤氏長者、豊氏長者)としての自身の権力の誇示に他ならず、従って、聴覚的美の表現である和歌(歌の道)の鍛錬は二義的なものであった。 ●秀吉は、これら豪華絢爛な歌壇・歌会に多くの女性を招き、その舞台は、大坂城、聚楽第、吉野(文禄三年の吉野山花見が知られる)、醍醐(慶長三年の醍醐観桜会、いわゆる「醍醐の花見」が知られ、直後に醍醐寺三宝院庭園を秀吉自ら設計)などであり、常に色彩美を謳歌し、周囲に誇示することこだわった。醍醐の花見における和歌の短冊、「醍醐花見短冊帖」は、三宝院に保管されている。</p>	<p>断絶(1615) ●秀吉の死の年(1598)のうちに、その歌壇を維持しようとする者は皆無となり、大坂の陣(1614・15)による豊臣氏(羽柴宗家)の滅亡をもって、豊臣歌壇はわずか一代限りで、完全に終焉を迎えた。</p>	<p>●豊臣秀吉の死(1598) ●江戸幕府の成立(1603) ●大坂の陣(1614・15) ●上記に基づき、全国の大名家臣が「豊臣氏」の使用を一斉に取りやめたことによる、豊臣を冠する歌壇の消滅</p>
---------------	--	----------------------------	--	--	--	--	---

御所伝授・近世二条派(近世における宮廷・公家の二条派歌道の維持)、および江戸幕藩体制下の歌学政策と幕臣・武家・大名の歌学

流派名	本拠地	代表的歌人・歌論者・当主	流派の主体	流派の成立時期・成立事情 (cは世紀)	特徴	衰退・分裂・断絶の時期 (cは世紀。血統断絶の場合、掲載可能な限りその旨を記す。) ●衰退・分裂・断絶に至る記述 ◆は存続についての記述	衰退・分裂・断絶の理由 ●最終断絶以外(一時的な衰退など)の理由も記載した。 ◆は存続についての記述
御所伝授、後西院・霊元院歌壇 (二条派一門)	山城国丹後国	細川幽斎 八条宮智仁親王 後水尾上皇 後西天皇(上皇、院) 霊元天皇(上皇、院) 東山天皇 尊昭法親王 有栖川宮職仁親王 中御門天皇 閑院宮直仁親王 桜町天皇 後桜町天皇	血縁(天皇・皇族)	1625～ ●細川幽斎が、三条西実枝の未だ幼少の子公国への将来の相伝を約束として、実枝より古今伝授を受ける。公国早世により、幽斎が公国の子実条ほか上皇・皇族に相伝を行い、八条宮智仁親王が後水尾院に相伝を行ったことが起こり。	●主に三条西家の秘伝を受け継いだ御所歌道の系譜を言う。 ●後陽成天皇は、関ヶ原の戦いで細川幽斎の戦死を恐れ、三条西実枝・烏丸光広・中院通勝を勅使として派遣・説得、幽斎は田辺城を開城。これにより、古今伝授存続が可能となった。 ●切紙伝授 ●御所伝授の最大の成果は後西院・霊元院歌壇である。この歌壇を機に、天皇・上皇は、歌道・歌学を堂上公家から一方的に伝授されるばかりの立場でなく、自ら堂上公家へと再伝授する技量を有するようになり、殊に霊元院は、中院、烏丸、武者小路の各公家の後継者に歌道を再伝授した。 ●有栖川宮職仁親王は、天皇・皇族から地下・国学者・神道家に至るまで、およそ300人に伝授を行ったが、古今伝授と国学が霊学化する端緒をも作った。 ●古今伝授は、あくまでも公家を中心とし、細川幽斎のような武家歌人はあくまでも中継ぎ役に過ぎなかった時代を経て、清水谷実業による宣阿、香川景新への伝授を皮切りに、御所伝授から地下伝授へと直接流れ込むようになる。	●現在は、天皇家の和歌活動のうち、披講の側面(御前披講)が御所伝授(二条流古今伝授)の系譜を引いている。現在の御製・皇族の和歌は近現代新風短歌。 これは飛鳥井流歌道についても同様で、現在、単に「飛鳥井流」と言えば、同名の披講や蹴鞠の流派を指し、飛鳥井流歌風の和歌自体の知識・技巧は指さない。	●桂園派・御歌所派への吸収。 ●近代化 ●華族自らによる所蔵歌書の大学・学術研究機関への寄贈 ●民間の和歌・国文学研究者の増加 ●一般国民からの和歌応募開始により、秘伝・秘蔵の意義の希薄化 ●伏見宮系宮家の乱立による、秩序的な秘伝系統の衰退。 ●華族男性と芸妓女性との自由恋愛・結婚による花街・民間への歌道の流入・拡散。

<p>堂上派 (二条派一門)</p>	<p>山城国</p>	<p>細川幽齋 三條西実条 三條西実教 三條西季知 清水谷実業 九条植通 飛鳥井雅章 高松公祐 西四辻公業 中院通勝 中院通茂 烏丸光広</p>	<p>師弟関係 血縁(堂上家)</p>	<p>16c~ ●二条・三條西・飛鳥井流の古今伝授の系譜</p>	<p>●関ヶ原合戦後の細川幽齋の古今伝授のうち、宮廷・堂上各派への伝授を言う。 ●三條西家から直接香川景樹へと連なり、地下に流入する。</p>	<p>近代に衰退・断絶</p>	<p>●御所伝授に同じ</p>
<p>江戸・関東堂上派 (二条派一門)</p>	<p>江戸</p>	<p>中院通村 中院通茂 松井幸隆 水戸光圀</p>	<p>師弟関係 血縁(堂上家) 村上源氏久我家 中院流</p>	<p>17c前半~ ●主に中院家の二条流を中心に、宮廷堂上派が江戸においても展開したもの。</p>	<p>●中院通村が徳川家光からの古今伝授要請を断るなど、幕府に対して距離を保ち、江戸の堂上家歌壇を展開。</p>	<p>近代に衰退・断絶</p>	<p>●御所伝授に同じ</p>
<p>高松宮家→花町宮家→有栖川宮家 (二条派一門)</p>	<p>山城国 東京都</p>	<p>高松宮好仁親王 後西天皇 靈元天皇 有栖川宮幸仁親王 尊昭法親王 有栖川宮職仁親王 有栖川宮織仁親王 有栖川宮韶仁親王 有栖川宮幟仁親王 有栖川宮威仁親王 千種有功</p>	<p>血縁(天皇・皇族) 後陽成天皇系 世襲親王家</p>	<p>1625 高松宮 1667 花町宮 1672 有栖川宮 ●職仁親王が古今伝授を受けて以降が全盛。</p>	<p>●歌道・書道師範家である。(有栖川流書道) ●天皇(桃園・後桜町・後桃園)・徳川各家・千種家・井伊氏・毛利氏などの歌道師範を務めている。 ●有栖川宮職仁親王は、天皇・皇族から地下・国学者・神道家に至るまで、およそ300人に伝授を行ったが、古今伝授と国学が霊学化する端緒をも作った。同親王から伝授を受けた谷川土清は、垂加神道と有栖川宮系伝授を折衷した国語学を成し、本居宣長から批判された。しかし、その著作の『日本書紀通証』(特に第1巻「和語通音」)や『和訓栞』は、宣長も評価している。 ●織仁親王は千種有功に歌を教えている。 ●幟仁親王が神道教導職総裁となり、歌道を利用した大教宣布運動に皇族自身が加わると共に、有栖川歌道が流入した。皇典講究所初代総裁にも就任し、同所にも有栖川歌道が流入。 ●威仁親王の代に、台頭する新派歌壇に対して旧派歌壇保守のため大日本歌道奨励会の総裁となるが、断絶。</p>	<p>断絶(1913) ●大正天皇により、祭祀は高松宮宣仁親王に承継される。</p>	<p>●男系断絶。旧皇室典範の規定による断絶の確定。 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲で有栖川宮が炎上) ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化)</p>

<p>烏丸家 (二条派一門)</p>	<p>山城国 (烏丸)</p>	<p>裏松資康 烏丸豊光 烏丸光広 勘解由小路資忠 烏丸資慶 烏丸光雄 烏丸宣定 烏丸光栄 烏丸尹光 勘解由小路資望 烏丸光胤 外山光実 裏松光世 日野資枝 桜町天皇 遠藤胤忠 烏丸光徳 烏丸光亨 梅井道敏(一室)</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家内磨流 日野家支流</p>	<p>●烏丸家は、日野家分家である裏松家の資康の三男豊光に始まる。1603前後～ ●光広が細川幽斎、資慶が後水尾院より古今伝授を受けて以降、隆盛。</p>	<p>●古今伝授 ●光広は、後陽成・後水尾歌壇で活躍。 ●光栄は、霊元天皇・中院通躬・武者小路実陰らに師事。その後、桜町天皇・有栖川宮職仁親王ら天皇・宮家や遠藤氏(遠藤胤忠)に歌道を伝え、烏丸流歌道は一気に普及。 ●『栄葉和歌集』・『詠歌覚悟』 ●遠藤常友より協力依頼を受け、資慶・光雄が『常縁集』を編纂。(1671年完成) ●光徳が有名無実の東京府知事に就任(1868年)。結局辞任し、京都に帰参、そのまま華族に列せられる。子の光亨は奇行によって名が知られるも、和歌・詩文・書など文雅に極めて優れた。</p>	<p>歌道は断絶 ●ただし、現在も御所伝授の切紙を所蔵</p>	<p>●秩禄処分(1876) ●華族の東京移住命令 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●敗戦・華族制度の廃止 ●税制の一新と混乱による歌書の散逸(財産税・富裕税・シャウプ勧告) ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化)</p>
<p>勘解由小路家 (二条派一門)</p>		<p>勘解由小路資忠 勘解由小路資望 勘解由小路資生</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家内磨流 日野家支流烏丸家支流</p>	<p>1644～ ●烏丸光広の子、資忠が勘解由小路家を興す。</p>	<p>●古今伝授 ●家業は儒学であるが、早くから男子に恵まれず、立て続けに養子を迎え、特に烏丸家からの度重なる養子によって、かえって烏丸流二条派歌道の名門となる。</p>	<p>歌道は断絶 ●血統は続き、第11代当主勘解由小路資淳(やはり養子)の代より山口に居住する。</p>	<p>●秩禄処分(1876) ●華族の東京移住命令 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●敗戦・華族制度の廃止 ●税制の一新と混乱による歌書の散逸(財産税・富裕税・シャウプ勧告) ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化)</p>

<p>八条宮家→常磐井宮家→京極宮家→桂宮家 (二条派一門)</p>	<p>山城国 (桂離宮) 東京府 東京都</p>	<p>八条宮智仁親王 八条宮智忠親王 近衛信尋作宮 京極宮文仁親王 桂宮盛仁親王 桂宮淑子内親王</p>	<p>血縁(天皇・皇族) 正親町天皇系 世襲親王家</p>	<p>1589 八条宮 1689 常磐井宮 1695 京極宮 1810 桂宮 ●八条宮智仁親王が細川幽齋より古今伝授を受ける。</p>	<p>●古今伝授 ●御所伝授の創始。 ●多くの古典を収集(「桂宮本」)</p>	<p>断絶(1881)</p>	<p>●血統断絶 ●分家の廣幡家の男系断絶</p>
<p>藤谷家 (上冷泉派一門)</p>	<p>山城国 東京府 東京都</p>	<p>藤谷為賢 藤谷為条 藤谷為香 藤谷為寛 来田有親</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家御子左流上冷泉流</p>	<p>17c初頭～ ●冷泉為満の子為賢による分家</p>	<p>●霊元院歌壇で活躍。 ●『藤谷家御教訓』 ●伊勢外宮御師来田家の師匠を務めた家である。</p>	<p>断絶 ●名古屋大学付属図書館所蔵の神宮皇学館文庫が、来田家に伝わった藤谷流歌道の資料を所蔵。</p>	<p>●二条派歌道の隆盛 ●秩禄処分(1876) ●華族の東京移住命令 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●敗戦 ●華族制度の廃止(1947) ●税制の一新と混乱による歌書の散逸(財産税・富裕税・シャープ勧告) ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化) ●血統断絶(1995年の阪神・淡路大震災)</p>

<p>千種家 (二条派一門 だが、近世期 には新派創 始)</p>	<p>山城国 東京府 東京都</p>	<p>千種有能 千種有維 千種有敬 有栖川宮織仁 親王 久世通理 千種有功</p>	<p>血縁(貴族) 村上源氏久我流 岩倉家庶流</p>	<p>17c初頭～</p>	<p>●千種家の祖は、六条家の有忠の次男で、建武の新政の「三木一草」の一人である忠顯であると考えられている。この千種家を岩倉具堯の四男有能が再興した。 ●この後期千種家の歌道の全盛は、近世末期の有功の代で、一条忠良・有栖川宮織仁親王・久世通理らを師として、旧来の二条派とは異なる新風和歌を詠じた。</p>	<p>近代に歌道は衰退 血統は存続</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●秩禄処分(1876) ●華族の東京移住命令 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●敗戦・華族制度の廃止 ●税制の一新と混乱による歌書の散逸(財産税・富裕税・シャウブ勧告) ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化)
<p>西郊(高松)家 (二条派一門)</p>	<p>山城国 東京府 東京都</p>	<p>西郊実号 西郊実信 武者小路実陰 似雲 高松重季 高松公祐</p>	<p>血縁(貴族) 正親町三条家庶流</p>	<p>17c初頭～ ●三条西実条の子実号により分家</p>	<p>●古今伝授 ●三条西家流歌道を継承 ●実陰が武者小路家を継いだため、西郊家は一時断絶。 ●霊元天皇の許可を得て、実陰の子重季が西郊家を再興。歌道も再興。 ●堂上家となって以降、重季は家名を高松に改めた。</p>	<p>近代に歌道は衰退 血統は存続</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●秩禄処分(1876) ●華族の東京移住命令 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●敗戦・華族制度の廃止 ●税制の一新と混乱による歌書の散逸(財産税・富裕税・シャウブ勧告) ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化) ●本家三条西家の歌道衰退

<p>三室戸家 (始め二条派 一門、早期に 冷泉派と一体化)</p>	<p>山城国 東京府 東京都</p>	<p>柳原資行 北小路(→三 室戸)誠光 三室戸光村 三室戸緝光 三室戸敬光 三室戸為光</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家日野流 庶流柳原庶流</p>	<p>17c前半～ ●柳原資行の三男誠 光を祖とする。家格は 名家。</p>	<p>●光村は冷泉為村の子、緝光は冷泉為章の子であり、近世のうちに冷泉派と一体化・吸収される。 ●敬光編『類題明治天皇御集：謹解』・『類題昭憲皇太后御集：謹解』(中央歌道会) ●歌道というよりは文学全般及び華道を家業とした。近代後期まで竹真流華道家元を称し、敬光は、御歌所派歌壇に参加し、中央歌道会での活動もおこない、三室戸家歌道を一代で大成するが、貴族院議員活動や音楽教育活動に専心するようになり、子の為光以降は、歌道家・華道家としての活動はおこなっていない。</p>	<p>歌道は廃止 血統は存続 ●貴族院議員活動に転向 ●音楽学校での教育活動に転向 敬光：東京高等音楽学院長(→国立音楽大学) 為光：東邦音楽学校創設(→東邦音楽大学・東邦音楽短期大学) ●敬光が竹真流華道家元の譲渡。(現在、三重県桑名市の市民団体などが分散継承。)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●秩禄処分(1876) ●華族の東京移住命令 ●音楽学校での教育活動への転向 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●敗戦・華族制度の廃止 ●公職追放 ●税制の一新と混乱による歌書の散逸(財産税・富裕税・シャープ勧告) ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化)
<p>芝山家 (二条派一門)</p>	<p>山城国 東京府 東京都</p>	<p>芝山宣豊 芝山定豊 芝山広豊 芝山慶豊</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家勸修寺 流庶流</p>	<p>17c半ば～ ●宣豊が勸修寺光豊の猶子となり、勸修寺家の別称である芝山家を名乗って新家を創始。</p>	<p>●勸修寺家(芝山家)は藤原高藤を祖とするが、歌道家としての芝山家は宣豊以降。</p>	<p>歌道は衰退</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●今園家・芝小路家の分家による家業としての歌道の細分化 ●秩禄処分(1876) ●華族の東京移住命令 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●敗戦 ●華族制度の廃止(1947) ●税制の一新と混乱による歌書の散逸(財産税・富裕税・シャープ勧告) ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化)

<p>武者小路家 (二条派一門)</p>	<p>山城国 東京府 東京都</p>	<p>武者小路公種 靈元天皇(上皇) 尊賞法親王 武者小路実陰 高松重季 武者小路公野 武者小路実岳 似雲 香川景新 小沢蘆庵 澄月 釣月 伴蒿蹊 梶井道敏(一室) 森田豊香 高松公祐 武者小路実篤</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家閑院流 三条西庶流</p>	<p>17c半ば～ ●武者小路公種の時に 三条西家より分家</p>	<p>●古今伝授 ●三条西家流歌道を継承 ●桜町天皇に和歌伝授 ●靈元天皇の庇護を受ける。上皇の時に、西郊実陰を特に評価して古今伝授を受け、武者小路家を継がせる。実陰は、三条西実教にも師事し、歌道の志の近い靈元院皇子・尊賞法親王と共に励み、靈元院歌壇で活躍。中御門・桜町天皇の歌道師範も務める。これらの活躍が影響し、新家の羽林家としては破格の従一位に叙され、准大臣に任ぜられる。地下歌壇との交流では、和歌梅月堂の香川景新らに歌道伝授。 ●門下から「平安の和歌四天王」を三名輩出している(小沢蘆庵、澄月、伴蒿蹊)。梶井道敏と森田豊香は三名全員に師事した。 ●道敏は、武者小路実岳、烏丸光胤、日野資枝にも師事し、正統の古今伝授を受けたほか、「てにをは」の起源を解説した『てには綱引綱』を著した。 ●豊香は、縣居派の村田春海や加藤千蔭にも師事して『万葉集』をも研究し、二条流・武者小路流から縣居派までの総合的な歌学の大家となった。伴蒿蹊の勧めで「豊香」と号す。</p>	<p>歌道は衰退 ●ただし、小説家・劇作家の武者小路実篤が出た。血統も存続。</p>	<p>●秩禄処分(1876) ●華族の東京移住命令 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●敗戦 ●華族制度の廃止(1947) ●税制の一新と混乱による歌書の散逸(財産税・富裕税・シャープ勧告) ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化) ●本家三条西家の歌道衰退</p>
--------------------------	----------------------------	---	-------------------------------------	---	---	--	---

<p>入江家 (上冷泉派一門)</p>	<p>山城国 東京府 東京都</p>	<p>入江相尚 入江為守 入江為常 入江相政</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家御子左 流上冷泉流</p>	<p>17c後半～ ●藤谷為条の子相尚による分家</p>	<p>●御歌所で活躍。 ●相政は昭和天皇の侍従長を務める。</p>	<p>歌道は衰退</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●二条派流歌道の隆盛 ●秩禄処分(1876) ●華族の東京移住命令 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●男系断絶 ●敗戦・華族制度の廃止 ●税制の一新と混乱による歌書の散逸(財産税・富裕税・シャウプ勧告) ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化) ●政治・宮内庁事務への専心
<p>竹内家 (冷泉派一門)</p>	<p>山城国 備中国 美作国 京都府 岡山県 東京都</p>	<p>竹内氏治 竹内季治 竹内惟庸 竹内惟永</p>	<p>血縁(貴族) 清和源氏義光流 平賀氏庶流 血縁(貴族・武家) 珉和氏・杉山氏・備中珉和氏・鶴田竹内氏 師弟関係</p>	<p>17c後半～ ●冷泉家からの養子が相次ぎ、冷泉派歌道家となる。</p>	<p>●近現代以降も、岡山県氏族の珉和氏や杉山氏と家系が渾然一体化しており、竹内家(京都竹内家)からは歌道が岡山に、珉和氏出身の竹内久盛からは古武道竹内流が京都に、伝播した。 ●「きよてー(けうとし)」など、王朝期から近世期の京都語のうち岡山・兵庫県過疎部にしか残存していない語があるが、竹内家・澄月など、近世・近代期に京都と岡山とを結びつけた歌人・家系によって流入したものである。</p>	<p>歌道は衰退 ●血統は存続。末裔が多く、岡山県下に竹内・杉山・珉和(羽賀・芳賀)の苗字も残っている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●二条派歌道の隆盛 ●秩禄処分(1876) ●華族の東京移住命令 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●敗戦 ●華族制度の廃止(1947) ●税制の一新と混乱による歌書の散逸(財産税・富裕税・シャウプ勧告) ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化)

<p>閑院宮家 (二条派一門)</p>	<p>山城国 京都府 東京府 東京都</p>	<p>閑院宮直仁親王 閑院宮典仁親王 閑院宮美仁親王 光格天皇 仁孝天皇 鷹司輔平 芝山持豊 日野資矩</p>	<p>血縁(天皇・皇族) 東山天皇系 世襲親王家</p>	<p>1718 ●典仁親王が有栖川宮職仁親王に和歌を習い、桜町天皇より御所伝授を受ける。美仁親王は有栖川宮職仁親王より御所伝授を受け、仁孝天皇に相伝する。</p>	<p>●古今伝授 ●公家の弟子を多く持った。 ●所蔵本・歌集など多くは秘蔵・秘伝だが、散逸。 ●日野家と共に、津守家の代々当主や塙保己一の歌道師範を務めた。 ●世襲親王家として、中御門天皇血統と有栖川宮血統の両統より御所伝授を存分に受け、結果的に後桃園天皇崩御・光格天皇即位により急遽皇統となったために、御所歌道がよく維持された。</p>	<p>断絶 ●1947年10月14日GHQの指令により皇籍離脱 ●1988年に最終的に断絶 ●ただし、師仁親王(光格天皇)系は今上天皇に連なる。</p>	<p>●尊号一件(1788~91) ●愛仁親王の血統断絶により伏見宮王子を迎え、伏見宮家と歌道が合流。 ●近代化 ●御歌所派への吸収 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●皇籍離脱(1947年10月14日) ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化) ●血統断絶(1988)</p>
<p>富士谷家 (二条派一門)</p>	<p>山城国</p>	<p>富士谷成章 富士谷御杖 富士谷元広 榎並隆璉</p>	<p>師弟関係 血縁</p>	<p>18c半ば~ ●八条宮智仁親王・有栖川宮職仁親王・日野資枝ら二条派主流の歌人を師範として成長するが、独自の国語学・言語学を主唱するに至る。</p>	<p>●二条派古今伝授の系譜を引くが、新派で、初期の香川景樹に対抗した。 ●和歌・国語の新説を提唱した新派。 ●言霊倒語説・「影の詞」・「詞の匂い」 ●『挿頭抄』・『真言辨』など</p>	<p>衰退 ●ただし、現在も和歌・国文学・言語学・歴史学・神道学など、様々な分野において研究は続けられている。</p>	<p>●堂上歌道とも国学とも異なる異風歌学で、有望な後継者を得ないまま衰退。</p>

<p>西四辻家 (二条派一門、 のち冷泉派と 折衷)</p>	<p>山城国 東京都 東京都</p>	<p>西四辻公碩 西四辻公尹 西四辻公業 冷泉為任</p>	<p>血縁(貴族) 藤原北家閑院流 西園寺庶流</p>	<p>18c後半～ ●公碩の代に四辻家より分家。</p>	<p>●元来、本家四辻家と同じく箒を家業としたが、男系断絶が連続し、歌道家の高松家・小倉家より養子を迎えたため、二条派一門の歌道家となる。 ●公業は、三条西季知と共に明治天皇の歌道師範となる。</p>	<p>断絶 ●為任が冷泉家の養子となったが、この一代で男系断絶し、日本美術史家の松尾勝彦が冷泉勝彦(為人)として冷泉家を継いだ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●秩禄処分(1876) ●華族の東京移住命令 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●男系断絶 ●敗戦・華族制度の廃止 ●税制の一新と混乱による歌書の散逸(財産税・富裕税・シャープ勧告) ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化)
<p>江戸幕府歌学方 (ほぼ二条派・ 冷泉派一門)</p>	<p>江戸</p>	<p>徳川将軍家 幕府側近 細川幽齋 九条植通 飛鳥井雅章 清水谷実業 松永貞徳 北村季吟 北村湖春 北村湖元</p>	<p>幕府直轄 将軍家 幕臣 師弟関係 血縁(堂上家・武家・地下) 北村家</p>	<p>17c～ ●二条・三条西・飛鳥井流の古今伝授の系譜である。関ヶ原合戦後の細川幽齋の古今伝授のうち御所伝授・堂上派伝授でない系譜は、幕府歌学方の発展に貢献した。北村家は幕府歌学方を世襲した。</p>	<p>●貞徳は、俳諧を和歌・連歌への入門と位置づけ、俳言の使用を主唱。 ●季吟は、和歌を飛鳥井雅章・清水谷実業らに学ぶ。 ●幕府が修史事業として、林家(林羅山、林鷲峯)など朱子学者をして編纂せしめた漢文編年体の歴史書『本朝通鑑』は、儒教的合理主義で貫かれており、和歌の地位は低く、記述内容も偽書的であり、幕府歌学方の意向とも一致していない。</p>	<p>廃止 ●ただし、歌風は二条派各派に受け継がれる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●幕府の衰退 ●大政奉還
<p>江戸冷泉派 (冷泉派一門)</p>	<p>江戸</p>	<p>徳川吉宗 冷泉為村 冷泉為泰 高松重季 石野広通 成島信遍 磯野政武 萩原宗固</p>	<p>将軍家 幕臣 師弟関係 血縁(武家・地下)</p>	<p>18c前半～ ●八代将軍吉宗の頃から、将軍家は冷泉家・冷泉派を厚遇するようになり、幕臣共々江戸冷泉派と呼ばれる一門を形成し、冷泉派が幕府内及び江戸の武家歌壇で最大勢力となった。</p>	<p>●江戸武家歌壇では、中世以来の堂上家二条派の力が弱まったのち、古学派の真淵一門と江戸冷泉派が争った。 ●石野広道は『大沢随筆』・『蹄溪随筆』などを著して、真淵一門に論駁した。</p>	<p>断絶 ●ただし、歌風は現在の冷泉家にも受け継がれる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●幕府の衰退 ●大政奉還

<p>その他の江戸幕府・幕藩体制歌壇</p>	<p>江戸</p>	<p>徳川家康 徳川光圀(水戸光圀、水戸黄門) 徳川尋子 細川幽齋 西洞院時慶 山本春正 岡本宗好 田安宗武 鶉殿余野子 和宮</p>	<p>将軍家 大老 老中 幕臣 御三家 御三卿 師弟関係 血縁(武家・地下) 親藩 譜代大名 外様大名</p>	<p>17c~ ●江戸幕府は、朝廷歌壇への接近・模倣策としては、歌学方を設置したが、将軍個々人は、これとは無関係の異風を詠む者も多く、必ずしも二条派歌風を示さず、多種多様、諸派折衷であった。</p>	<p>●徳川将軍家は、家康をはじめ、和歌を詠んだ痕跡(数種の和歌)がやや残る程度の将軍が多数を占める。 ●徳川家で最も和歌を嗜んだのは徳川光圀であり、冷泉派歌道・中院歌道から地下歌道まで幅広く学んだ。光圀の志により、地下歌集の『正木のかづら』(山本春正・岡本宗好らの編)が、万葉研究書の『万葉代匠記』(下河辺長流が注釈を起筆、契沖が継いで著・編)が成る。 ●吉宗の次男田安宗武は、真淵を厚遇して江戸冷泉派と対立した。</p>	<p>断絶 ●徳川将軍家の和歌は、特筆すべき歌風も歌数もなく、幕府消滅と共に放置され、地下歌壇でも明治の御歌所歌壇でも一顧だにされていない。 ●一方、水戸徳川家は冷泉派歌道のよき一門であり、水戸徳川歌壇は消滅したものの、現在に至るまで冷泉家と交流を持つ。 ●最終的には、水戸藩の血筋を引く松平容保が基礎を築いた会津歌壇・会津和歌会が、最後の親徳川幕府・反明治新政府歌壇として生き残り、会津藩士の子女らよって継承されたが、戦後に衰退・断絶。 ●暘城会(旧徳川幕臣会)には、冷泉派歌道を能くする歌人らがいたが、現在は途絶えている。</p>	<p>●幕府の衰退 ●大政奉還</p>
------------------------	-----------	---	---	---	--	---	-------------------------

地下伝授(近世における地下歌人による二条派歌道の展開)と二条派新派の興亡、桂園派の隆盛

流派名	本拠地	代表的歌人・歌論者・当主	流派の主体	流派の成立時期・成立事情 (cは世紀)	特徴	衰退・分裂・断絶の時期 (cは世紀。血統断絶の場合、掲載可能な限りその旨を記す。) ●衰退・分裂・断絶に至る記述 ◆は存続についての記述	衰退・分裂・断絶の理由 ●最終断絶以外(一時的な衰退など)の理由も記載した。 ◆は存続についての記述
地下派(地下伝授) (二条派一門)	上方・江戸を中心に全国	後水尾天皇 細川幽斎 飛鳥井雅章 中院通勝 烏丸光広 松永貞徳 木下長嘯子 清水谷実業 北村季吟 北村湖春 有賀長伯 有賀長因 有賀長収 釣月 地下貴族 地下武家 町人 庶民	師弟関係 血縁(地下)	16c後半～ ●「地下派」・「地下伝授」とは、元来は、細川幽斎、松永貞徳、北村家などの伝授のうち、宮廷・堂上家・幕府以外の地下に伝わったものを言う。しかし、広義には、御所伝授や公家・堂上家・貴族間の伝授以外の伝授の全てを言う。 ●古今伝授は、清水谷実業による宣阿、香川景新への伝授を皮切りに、御所伝授から地下伝授へと直接流れ込むようになる。	●単に「地下派」とは、普通、堂上でない地下貴族・地下武家の流派を指す。ただし、庶民にも広まり、特に町人文化に入り込んだ。 ●ルートは様々で、公家から地下・芸妓・花街・遊郭・農民に直接伝播した場合もある。(烏丸光広ら堂上公家の遊郭通い) ●特に寛永以後は、松永貞徳と木下長嘯子が地下歌壇の大家として並び称される。 ●細川幽斎から八条宮智仁親王へ、同親王から後水尾天皇への伝授が、御所伝授の創始とされるが、後水尾天皇は、公家直系でない幽斎を源流とする御所伝授と地下伝授の双方および連歌を、従来の公家傘下の歌道ではなく、御所歌道と地下歌道が結束した歌道の改革であるとも見ていた。従って、地下伝授にも連歌にも極めて親和的で、二十一代集から漏れた武家歌人・連歌師を集め、公家歌人をあえて一人も採らなかつた「集外三十六歌仙」は、後水尾天皇の撰と言われる。	近代と戦後に衰退	●その他の古今伝授系統(御所伝授、堺伝授、奈良伝授、堂上派・江戸・関東堂上派)の衰退理由に同じ ●国学の隆盛

<p>加治田歌壇・平井派 (二条派一門だが、新派)</p>	<p>美濃国 (加治田)</p>	<p>松浦寛舟 平井公寿 平井冬秀 平井貞誠 水田長隣 金勝慶安</p>	<p>師弟関係 武家文化集団(加治田衆) 血縁(武家) 平井家 庶民</p>	<p>16c末～ ●岐阜県加茂郡富加町加治田を中心とする流派</p>	<p>●松浦寛舟の指導を受けて発展。 ●平井家を中心とし、梅月堂や水田長隣・金勝慶安ら地下二条派の歌道を取り入れ、発展させた。 ●同じく梅月堂・桂園・御歌所派との長期交流を持つ岡山の歌道諸派(備作和歌会(吉備津歌壇)、山里和歌会、鴨方・大安寺歌壇、美作・津山歌壇、澄門)と縁が深く、岡山藩池田氏は美濃池田氏流であると考えられる。</p>	<p>19c 衰退・断絶 ●しかし、平井家は水田長隣・金勝慶安らの点入りの詠草を多く遺しており、現在も良好に保存されている。(富加町郷土資料館蔵)</p>	<p>●国学の隆盛 ●近代化 ●ただし、加治田衆の血統は存続。</p>
<p>安部(桜戸)派・毛利歌壇</p>	<p>長門国 萩</p>	<p>安部春貞 安部惟貞 安部信貞 安部和貞 安部真貞</p>	<p>血縁 阿部氏 師弟関係 町人 庶民</p>	<p>17c前半～</p>	<p>●阿部氏は代々主君の毛利氏に仕え、主に本居大平・村田春海の歌道を授けた。 ●惟貞は桜戸と号した。</p>	<p>近代に衰退 ●ただし、血統は存続</p>	<p>●国学の隆盛 ●幕末の混乱 ●版籍奉還(1869) ●廃藩置県(1871)</p>
<p>安藤家 (冷泉派・二条派一門、のちに国学)</p>	<p>丹波国 (亀岡)</p>	<p>安藤定為 安藤為章 安藤直紀</p>	<p>血縁 安藤家</p>	<p>17c半ば～</p>	<p>●定為が冷泉為景より冷泉流歌道を伝授される。 ●為章は中院通茂・契沖に歌道を学ぶ。万葉学にも優れ、『積万葉集』などの編纂に携る。 ●直紀は池袋派の池袋清風を師とした。</p>	<p>近代に衰退 ●ただし、血統は存続</p>	<p>●国学の隆盛 ●幕末の混乱 ●版籍奉還(1869) ●廃藩置県(1871)</p>

<p>清水谷実業一門</p>	<p>信濃国 飯田 山城国 上方 江戸 長野県 京都府 東京府</p>	<p>霊元天皇(上皇) 熊沢蕃山 三条西実条 三条西公勝 三条西(清水谷)公栄 清水谷実業 宣阿(香川景継) 香川景新 北村季吟</p>	<p>師弟関係 地下 血縁(貴族) 藤原北家閑院流 嫡流転法輪三条家 分家正親町三条家 分家三条西家 藤原北家閑院流 西園寺家庶流清水谷家</p>	<p>17c後半～ ●三条西家からの清水谷実業への歌道・古今伝授に始まる。実業は信濃飯田出身で、飯田藩主・堀親昌の子。母は三条西実条娘。三条西公勝の養子となり、公勝の次男公栄が清水谷家を継ぐと、その養嗣子となった。</p>	<p>●清水谷実業は、清水谷家の家督を継ぐも、清水谷家を歌道師範家と位置付けたことはなく(無論、当代の霊元院も清水谷家をそう見なしたことはなく)、専ら三条西家において、同家の歌人として歌道の鍛練を積み、自らを三条西流・二条流歌道の直系歌人と位置付けた。従って、清水谷家から見れば、実業は一代限りの歌道師範であるが、母が三条西家の出であるほか、清水谷家当主にも三条西家の男子(公栄)を迎えることとなり、その養嗣子となった実業以降の清水谷家の歌道は、実業流・三条西流そのものである。 ●実業はまず、1687年に香川景継が僧宣阿として出家すると、三条西流歌道を伝授。宣阿が梅月堂の創始を思い立つと、これを助ける。次いで景新にも伝授。 ●実業は一方で、1688年に霊元院から「和歌にてをは口伝」を伝授される。中院通茂、武者小路実陰、烏丸光栄らと共に霊元院歌壇の中心を成す。この間、宣阿が中院通茂に師事し、父宣阿の梅月堂を継いだ香川景新が武者小路実陰に師事。梅月堂は霊元院歌壇のお墨付きを得る。 ●三条西家は、ちょうど実教の父・公勝が早世し、子・公福が幼少で、しばらくは祖父・実条の伝授を受けた実教が保っていたが、実教の秀でた歌才もあり、やはり霊元院歌壇の中心を成した。 ●なお、「和歌にてをは口伝」は、武者小路家門下の梶井道敏がその著『てには綱引綱』で解説することになるが、このような口伝が地下に伝播したのは、清水谷実業による有望な地下歌人への、厳格だが惜しみなき伝授による。「和歌にてをは口伝」は、まず実業から景新へ伝授され、景新を起点に武者小路門の「平安和歌四天王」の間で共有され、これを梶井道敏が大成したのである。 ●また実業は、岡山藩を出て京都で私塾を開いていた熊沢蕃山にも学び、陽明学や狂歌をも体得した。これにより、「蕃山四天王」の一人に数えられる。</p>	<p>1709 ●実業は、清水谷家としては一代限りの、家史上唯一の名歌人・歌道師範であったが、その歌道は次の通り、各方面に伝授された。 実業は霊元天皇からも歌道を学んだが、何よりもまずは、これに先立ち、三条西流・二条流歌道を三条西家自身から託された歌の名人であり、御所伝授と地下伝授とを直接結んだ歌道伝授の匠である。 霊元院歌壇の本格化の前から取り組んでいた宣阿・香川景新への伝授は、梅月堂の創始・発展に大いに寄与した。伝授内容は左記のような口伝を含み、地下歌人への充実した伝授は、「平安和歌四天王」などの地下歌人(二条派地下宗匠)の登場に貢献した。 また、北村季吟ら江戸幕府歌学方、連歌師への歌道伝授も行い、実業の伝授以降、江戸・幕府歌壇から地下歌壇までが急速に花開いた。</p>	<p>●清水谷実業の死(1709) ◆宮中歌壇、三条西家、清水谷家、武者小路家、梅月堂、江戸幕府歌学方、連歌師など、あらゆる方面の門人に継承。</p>
----------------	---	--	---	---	--	---	---

<p>梅月堂・梅竹堂 (二条派一門だが、新派)</p>	<p>上方 山陽道 国 山陰道 国</p>	<p>清水谷実業 宣阿(香川景継) 香川景新 香川景平 香川景柄 香川景晃 香川景樹 香川景欽 香川景嗣 香川蟹仲</p>	<p>師弟関係 地下 血縁(武家) 桓武平氏良文流 鎌倉氏庶流香川家</p>	<p>1687～ ●出家した宣阿が三条西家流の清水谷実業に教えを受け、梅月堂を創始</p>	<p>●二条派古今伝授の系譜を引くが、新派。 ●宣阿の子景新も父同様に清水谷実業に学び、武者小路実陰にも師事した。 ●宣阿・景樹は歌道家の大徳寺家に仕える。 ●ここから破門され独立した景樹の流派が桂園派である。</p>	<p>19c後半衰退 ●一部は桂園派として分派する。</p>	<p>◆景樹は梅月堂を破門されるが、歌風相違や経済的事情に基づく景柄による形式的な措置で、そのまま香川を名乗ることは許された。 ●国学の隆盛</p>
<p>長孝・唯元派 (ほぼ二条派一門)</p>	<p>上方</p>	<p>望月長孝 唯元</p>	<p>師弟関係 町人 庶民</p>	<p>17c後半～ ●望月長孝は、唯元を猶子とし、歌道を継がせた。</p>	<p>●飛鳥井雅章を師とした望月長孝流歌道は、梅月堂と共に、元禄期上方地下歌道の主流二派を成す。</p>	<p>18c半ば衰退</p>	<p>●長孝門下は二分し、主流は風観齋に移る。 ●国学の隆盛</p>
<p>風観齋派 (ほぼ二条派一門)</p>	<p>上方</p>	<p>望月長孝 平間長雅 有賀長伯 有賀長因 有賀長収 水田長隣</p>	<p>師弟関係 町人 庶民</p>	<p>17c後半～ ●長雅が師である日野弘資・望月長孝の没後、二条流秘伝を門人たちに惜しげもなく相伝。</p>	<p>●当初、望月長孝流歌道は、梅月堂と共に、元禄期上方地下歌道の主流二派を成す。 ●酔露軒を上回る勢いを持つ。 ●しかし、長雅は師長孝より受けた秘伝書を門人に甚だしく流布させ、まとまりなく離散。梅月堂・桂園派の隆盛となる。</p>	<p>19c初頭 離散</p>	<p>●歌道一派としてのまとまりの欠如。歌書の散逸 ●梅月堂・桂園派の台頭 ●国学の隆盛</p>
<p>酔露軒歌壇 (二条派一門だが、新派)</p>	<p>上方</p>	<p>河瀬菅雄 恵藤一雄 三輪執斎</p>	<p>師弟関係 町人 庶民</p>	<p>17c後半～ ●飛鳥井家を師として発展。</p>	<p>●望月長孝と同じく飛鳥井雅章に和歌を学ぶが、長孝派・風観齋派とは異なる二条派新派。 ●山崎闇齋の崎門学徒で、中江藤樹の書から陽明学に傾倒した三輪執斎は、酔露軒に出入りしたほか、中院通茂にも師事し、宣阿ら通茂門下の歌人と共に靈元院歌壇と交流した。</p>	<p>19c半ば 衰退 ●庭田家(葛岡宣慶)・中院家・含翠堂に歌書が伝わる。</p>	<p>●国学の隆盛 ●平間長雅・有賀長伯一派の隆盛 ●幕末の混乱</p>

有賀家 (諸派折衷)	上方	有賀長伯 有賀長因 有賀長収 有賀長基 有賀長隣	血縁 有賀家 町人 庶民	17c後半～ ●長伯以来、歌道家となる。	●風観斎派の系譜を引く。	断絶(1906) ●長隣から長雄への歌道伝授がおこなわれなかったため、断絶した。 ●血統は存続。	●有賀長雄の元老院・枢密院職務の増大による歌道伝授の機会の喪失。
金勝・小野寺家 (二条派一門だが、新派)	播磨国(赤穂) 備前国 上方	金勝慶安 小野寺秀和 小野寺丹子 小野寺秀富	師弟関係 血縁(武家) 赤穂浪士 小野寺家 庶民	17c後半～ ●秀和・丹子が夫婦で金勝慶安に師事したことが契機	●金勝慶安の教えを受け継いだ小野寺家のもとで隆盛した二条派歌道。 ●元禄赤穂事件後も歌道を続け、妻丹子と歌を贈答している。	衰退 1703 断絶	●幕府の命による秀和の切腹と妻丹子の後追い(絶食自害) ●ただし、歌書が美濃の平井家や岡山備前に遺されている。
小笠原氏 (二条派一門)	豊前国(小倉・中津) 播磨国(明石)	小笠原忠真 小笠原忠雄 小笠原長勝	血縁(武家) 清和源氏義光流 師弟関係 庶民	17c後半～	●飛鳥井雅章・飛鳥井雅豊より飛鳥井流・二条派歌道を学び、その一門となる。	近代に衰退 ●歌道伝授は衰退したものの、分家が極めて多く、血統は極めて良好に民間に広がっている。	●国学の隆盛 ●幕末の混乱 ●版籍奉還(1869) ●廃藩置県(1871)
鴨方・大安寺歌壇 (梅月堂・二条派・桂園派一門)	備前国(大安寺) 備中国(鴨方)	宣阿 野村尚房 土肥貞平 土肥経平 湯浅常山	師弟関係 血縁(武家) 土肥家 町人 庶民	17c後半～ ●宣阿門下のうち、備中南部や備前西部に集結した一派。	●烏丸光胤・日野資枝・姉小路実紀らを師とした土肥経平により全盛を迎える。 ●野村尚房は鴨方出身で、土肥経平に影響を与える。	近代に衰退 ●『土肥秘函』(岡山大学池田文庫所蔵)	●国学の隆盛 ●幕末の混乱 ●版籍奉還(1869) ●廃藩置県(1871)

<p>垂雲軒・澄門 四高足 (二条派一門)</p>	<p>備中国 (玉島) 備前国 備後国 出雲国 山城国 尾張国 美濃国 信濃国 (伊那 郡)</p>	<p>澄月 ★澄門四高足 西山拙斎 桃沢夢宅 石井明房 堀田知之 ★その他の門 人 儘田柳軒 森田豊香 木下幸文 小寺清先 宮下正岑 朝山嘉保 小豆沢勝興 小豆沢良意 小野達</p>	<p>師弟関係 町人 庶民</p>	<p>18c半ば～</p>	<p>●澄月は、武者小路実岳、有賀長因に学び、定家、頼阿に私淑。二条派歌道の奥義を極め、「平安の和歌四天王」の一人となった。(他の三人は慈延、小沢蘆庵、伴蒿蹊。)</p> <p>●澄月『垂雲和歌集』(1831)(澄月の遺稿を桃沢夢宅が整理、夢宅門下の宮下正岑が完成させた。)</p> <p>●澄月門下は全国に広がった。京都・畿内周辺と岡山県各地以外では、尾張国から天竜川上流方面・信濃にかけて、飯田・伊那・箕輪に澄月を師と仰ぐ歌壇が近年まで多数存在した。</p> <p>●特に澄月歌道をよく伝えた左上記の四人を「澄門四高足」と呼ぶ。</p> <p>●桃沢夢宅は、晩年は故郷信濃に戻り、垂雲軒・桂園派歌道を門下生に教えた。</p> <p>●上野国松井田出身の儘田柳軒は、澄月のほか飛鳥井雅重にも学び、大坂で歌塾をひらき、妻の誓恂と共に歌道に励む。澄門・二条流・飛鳥井流歌道を森田豊香ら弟子に教授。晩年は江戸に移る。</p> <p>●森田豊香は、儘田柳軒と澄月に直接学んだほか、小沢芦庵と伴蒿蹊(澄月と共に武者小路流の門下)にも学び、また、縣居派の村田春海や加藤千蔭にも師事して『万葉集』をも研究。澄門、二条流・武者小路流、縣居派の総合的な歌学の大家となった。伴蒿蹊の勧めで「豊香」と号す。歌集に『常磐集』。</p>	<p>幕末に衰退</p>	<p>●国学の隆盛 ●桂園派への吸収 ●近代化</p>
-----------------------------------	--	---	---------------------------	---------------	--	--------------	-------------------------------------

後期宇都宮歌壇	伊予国 (宇和島)	★伊予宇都宮氏 宇都宮為忠 宇都宮安浦 宇都宮鏡男 宇都宮淳 ★豊前宇都宮氏 宇都宮堯珉 ★尾張宇都宮氏 宇都宮尚綱 宇都宮綱根	師弟関係 血縁 宇都宮氏 町人 庶民	18c後半～	●近世後期・近代前期に、宇都宮氏を名乗る各家による歌壇が各地で形成された。中世に隆盛を誇った宇都宮歌壇・宇都宮氏との流派・血縁関係が疑わしい歌壇・家も多い。ただし、おおまかに各歌壇は以下の系譜を引く。 ★伊予宇都宮氏：賀茂季鷹 ★豊前宇都宮氏：千種有功 ★尾張宇都宮氏：香川景恒	戦後に衰退 ●地元住民や旧公家・武家の子女などには受け継がれている。	●兵役による歌壇における男性の不足 ●第一次世界大戦 ●第二次世界大戦 ●検閲・出版統制 ●敗戦 ●新派短歌の全盛
飯田家 (二条派一門、のちに国学)	周防国 (徳山)	飯田範正 飯田惟徳 飯田正号 飯田忠彦	血縁 飯田家 師弟関係	18c後半～ ●代々、有栖川宮家の歌道伝授を受ける。	●国学を本居宣長・芝山持豊より学ぶ。 ●和歌・国学のほかに連歌を里村昌逸より学び、惟徳の代に徳川連歌を大成している。	近代に衰退・断絶	●安政の大獄(1858～59)による忠彦の禁獄 ●桜田門外の変(1860)の嫌疑をかけられた忠彦の自決 ●歌人・門下生の死
吉敷歌壇 (二条派一門だが、国学寄り)	周防国 吉敷 防府市 山口市	上田光美 上田光賢 上田菊子 上田清子	血縁 上田家 師弟関係	18c後半～	●上田家を中心とする近藤芳樹門下による歌壇で、国学を展開したのち、御歌所派歌道へとつながった。	近代に衰退・断絶	●歌人・門下生の死
美作・津山歌壇 (二条派・桂園派・御歌所派一門)	美作国 (津山)	小原正真 小原千座 伊東祐命 遠藤慶正 飯田汐子	師弟関係 血縁(神官) 小原家 町人 庶民	18c後半～ ●津山徳守神社祠官の小原千座により、美作歌壇が開かれる。	●明治天皇・皇室・御歌所派の信頼厚く、高崎正風に才を見い出された伊東祐命は御歌所首座となる。	戦後に衰退 ●一部は明治時代に御歌所派の一角として存続	●東京奠都
幼交庵 (二条派一門)	山城国 (室町)	日野資枝 石塚(石東)寂翁	師弟関係	18c末～ ●日野家の歌道を継承する寂翁を中心に展開	●寂翁は、日野資枝のほか、烏丸光栄にも学んだ。 ●『和歌問答』	衰退 ●ほぼ個人流派で、寂翁の死により衰退。	●寂翁の死

阿波(復古)派 (諸派折衷)	阿波国 徳島県	太田豊年 小出清音	師弟関係 町人 庶民	18c末～	●有賀家歌道の継承を主とするが、本居大平にも学んでいる。	近代に衰退・断絶	●歌人・門下生の死 ●有賀家歌道の断絶
桂園派 (二条派一門)	上方 上方以 西の各 国 信濃 江戸 全国	香川景樹 香川景恒 木下幸文 赤尾亮長 赤尾可官 熊谷直好 近藤光輔 児山紀成 中川自休 生田守直 御影顯成 亜元 上杉清憲 上杉清章 小野佳 小野務 内山真弓 高島章貞 千種有功 八田知紀 高崎正風	師弟関係 町人 庶民	1808～ ●香川景柄は、養子 景樹の歌に異風を見 たことや、経済的な事 情から、景樹を梅月堂 の跡継ぎとすることを 躊躇し、景嗣を跡継ぎ と決め、景樹に別流を 設けさせる。 ●景樹の梅月堂から の破門は、養父景柄 による形式的な措置 で、景樹が香川を名乗 り続けることは許した。 ●桂園派は、二条派 古今伝授の系譜を引く が、新派。	●景樹は元来横柄な気質を持ち、歌学にお いても奇抜な新説「調べの論」「調の説」を 提唱したため、別系新派の江戸派と京都の 旧派の双方から「大天狗」と揶揄された。但 し、調の説は、景樹が私淑した小沢蘆庵の 影響を受けたものであり、とりわけ「桂園十 哲」と呼ばれた門人らは、蘆庵と景樹の歌風 をよく継承した。 ●香川景樹の子の景恒(東鳩亭と号す)が 東鳩塾を興し、二代目桂園派歌壇が栄え る。師の景恒の命により、信濃(安曇野)桂 園派(内山真弓、高島章貞)を中心とする桂 園派歌人らが江戸で同派を広める。同時 に、倒幕派・尊王攘夷派の志士らとも交流 し、実際に倒幕に参加。これらの動きによ り、桂園派はのちの御歌所派の母体そのも のとなる契機を得る。 ●内山真弓と高島章貞の家塾と歌書・歌集 の活動により、江戸時代の歌壇としての桂 園派が一旦大成。(それぞれ、『聚芳園と『歌 学提要』』、『星園塾と『星園和歌集』』) ●一方、薩摩藩士の八田知紀は、同郷の門 人の高崎正風に二条派・桂園派和歌を教授 した。両名とも桂園派を名乗るが、この薩 摩の桂園派は、異郷ながら歌道においても思 想的にも同朋である安曇野の桂園派が倒幕 を成し遂げた後の、旧派歌壇の整備の必要 性に目を向け、より源流の二条派歌道を軸 とする桂園派の確立に重きを置いた。倒幕 は成功し、明治新政府が樹立。折しも、二条 派・古今伝授系統直系の三条西季知の後 を、事実上、高崎正風が継ぐこととなり、御 歌係長、次いで御歌所初代所長に任ぜられ る。これをもって、八田・高崎が目指した通 り、御歌所派歌壇はすなわち二条派・桂園 派を本体とすることが確定的となる。	批判を受けながらも継承 ●近代以降の御歌所派に連なる。与 謝野鉄幹・正岡子規らの激しい批判 にさらされるが、歌道一派としての存 続が危ぶまれる性質の批判ではな かった。	●東京奠都によって朝廷 が京都から東京へと移っ たために、二条派・桂園派 の中心地も東京へと移っ たが、これらの歌風はその まま御歌所の主流となる。

<p>池袋派 (桂園派・御歌所派一門)</p>	<p>日向国 都城 宮崎県 都市</p>	<p>池袋清芳 池袋清景 池袋清風 三輪長行 正宗敦夫</p>	<p>師弟関係 町人 庶民</p>	<p>19c前半～ ●桂園派に学んだ清風の代に全盛。</p>	<p>●清風を中心に高崎正風・鎌田正夫ら御歌所派とも交流し、西洋詩偏重の風潮に対し、日本固有の和歌の尊重論を唱えた。(清風『新体詩批評』など)</p>	<p>断絶 ●池袋家の歌道を直接伝えるものは現存していないが、門下である岡山の正宗敦夫の蒐集による歌学書が「正宗文庫」として保存されている。 ●岡山のノートルダム清心女子大学など中国・九州地方の女子大学を中心に研究が行われている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●国学の隆盛 ●幕末の混乱 ●版籍奉還(1869) ●廃藩置県(1871) ●近代化 ●第一次世界大戦 ●日中戦争 ●第二次世界大戦に向けての戦時体制・国家総動員体制突入のため ●敗戦 ●新派短歌の全盛
<p>正宗家・歌文珍書保存会・正宗文庫 (諸派折衷、地下伝授の大成)</p>	<p>備前国 岡山県</p>	<p>三木元春 長治祐義 藤井高尚 本居大平 正宗雅敦 正宗直胤 正宗敦夫</p>	<p>師弟関係 血縁 正宗家</p>	<p>19c前半～ ●狂歌師・国学者の正宗雅敦が三木元春や長治祐義に和歌を学び、正宗家の歌壇は幕を開けた。</p>	<p>●兄の雅敦と同じく狂歌と国学を学んだ正宗直胤は、和歌と同じく岡山出身の藤井高尚、宣長の養子の本居大平、加納諸平に学び、地下伝授の歌学と鈴屋学派・平田派を融合した。 ●雅敦の孫の正宗敦夫は、和歌を井上通泰に学び、御歌所派歌学を身につけると共に、万葉集を研究。その歌の全ての用字をまとめた『萬葉集總索引』を編んだ(1931)。歌文珍書保存会を主宰(1909)、歌書を中心に国文学の稀釈書を蒐集・研究し、正宗文庫を設立した(1936)。 ●北面武士であった三上景文により天保年間に成立したと思われる『地下家伝』は、地下官人の系図をまとめた書物であるが、のちに正宗敦夫がその写本を編集し出版した。景文の『地下家伝』は歌道の系譜整理とはほとんど関係なく編まれたが、正宗敦夫においては、地下派歌学の系譜整理と地下家系の系譜整理とは一体のもので、それ故に景文の研究を頼みに『地下家伝』の写本研究を行ったのであり、正宗敦夫の研究は地下伝授全体の系譜整理の集大成となった。</p>	<p>存続 ◆一般財団法人正宗文庫 ◆敦夫の蔵書は、正宗文庫と共に、教授を務めたノートルダム清心女子大学が附属図書館内に「正宗敦夫文庫」として有する。 ◆敦夫はまた、正宗家と同じく鈴屋派・平田派の歌学・国学の影響を受けた黒川家(春村、真頼、真道)の歌書をノートルダム清心女子大学が購入する際に尽力し、現在、同大が「黒川文庫」として有する。</p>	

連歌・俳諧連歌の発展

流派名	本拠地	代表的歌人・歌論者・当主	流派の主体	流派の成立時期・成立事情 (cは世紀)	特徴	衰退・分裂・断絶の時期 (cは世紀。血統断絶の場合、掲載可能な限りその旨を記す。) ●衰退・分裂・断絶に至る記述 ◆は存続についての記述	衰退・分裂・断絶の理由 ●最終断絶以外(一時的な衰退など)の理由も記載した。 ◆は存続についての記述
連歌および俳諧の連歌	山城国 江戸 上方 全国	善阿 救済 周阿 二条良基 (朝山)梵灯庵 能阿弥 (高山)宗砌 心敬 専順 智蘊(蟬川親当) 宗祇 (牡丹花)肖柏 宗長 猪苗代兼載 三条西実隆 桜井基佐 芸阿弥 宗碩 能登永閑 (谷)宗牧 (谷)宗養 相阿弥 周桂 (辻)玄哉 木山紹宅 山崎宗鑑	師弟関係 連歌師と呼ばれる 連歌の名人(歌僧・茶人多し) 俳諧師(業俳)と呼ばれる 専業の俳諧の名人 遊俳と呼ばれる兼	13c後半～ ●連歌は、和歌(短歌)形式やそれまでの短連歌(上下の句を別の歌人が詠む)形式を基礎として、多数の歌人が連作する長連歌形式が整えられて発祥。神話にちなみ、「筑波の道」とも呼ばれる。 ●京都・畿内での草創期には善阿、救済らが活躍し、南北朝期に二条良基が大成。良基は救済の協力を得て『菟玖波集』を編纂した。 15c後半～ ●応仁の乱による京都文化の地方への伝播と、「西の京」の大内氏の庇護により、これら東西の文化の拠点を中心に、連歌会が全	●江戸時代に入り、より遊戯性を高めた俳諧連歌が生じ、俳諧師のみならず多くの遊俳が現れる。俳諧集には、山崎宗鑑の『犬筑波集(俳諧之連歌抄)』、荒木田守武の『俳諧独吟百韻』などがある。 ●俳諧連歌は、貞門派(「詞付」)、談林派(心付)、正風・蕉風(句付)を経て、雑俳の隆盛となる。その後、蕪村(俳諧中興の祖)と一茶による再興を経て、近代に入り、江戸後期の俳諧連歌を「月並」と非難した正岡子規によって俳句へと革新された。 ●形式上は、連歌の第一句を「発句」と言い(室町中期からの呼称)、俳諧(の連歌)を「連句」と言ったが(江戸中期からの呼称)、独立した発句(川柳やのちの俳句)が流行し、俳諧連歌のうち一句形式のものが「発句」、一句形式でないものが「連句」と呼ばれるようになった。明治期に「発句」から「俳句」が生じ、「連句」と「俳諧(連歌)」はより明確に区別された。さらに現在は、一般に「俳諧」が「俳諧(の連歌)」の「発句」(独立した五・七・五)と同義と信じられた結果、「俳諧」と「俳句」が単に一句形式の完結した定型詩として同一視されることがある。しかし本来、	存続 ◆旧派(近世まで)の連歌は俳諧の連歌の発展によって、また、俳諧の連歌は俳句の発展によって、衰退したと言えるが、近現代の短歌・俳句結社において連歌・連句形式の歌会・句会が催されている以上、連歌・連句は存続	●俳諧連歌の隆盛と衰退 ●俳句の隆盛 ●旧派の連歌師・俳諧師の衰退(職業としては消滅) ●和歌の近現代化(近現代短歌の隆盛)

	<p>荒不出守武 里村昌休 里村紹巴 里村昌叱 里村昌琢 里村玄陳 心恵 心前 細川幽齋 木食応其 乗阿 尚証 小堀政一(遠 州) 松永貞徳 西山宗因 北村季吟 井原西鶴 松尾芭蕉 与謝蕪村 小林一茶</p>	<p>業や趣味の俳諧作 者</p>	<p>国へ普及する。大内政 弘の志により、宗祇、 猪苗代兼載、宗長、肖 柏らが『新撰菟玖波 集』を編纂。 ●戦国時代には、里 村紹巴が『連歌至宝 抄』を著して連歌論を 確立、里村家は徳川 将軍家の連歌の師と なる。 17c半ば～ ●俳諧連歌は、狭義 の(旧派の)連歌から 派生し、より遊戯性を 高めた集団文芸として 発祥。単に「俳諧」とも 言う。</p>	<p>あくまでも「俳諧」は「連歌」かつ「連句」であ り、「俳諧(連句)」の「発句」を「立句」と言 い、その「俳諧(連句)」の「発句」の独立した ものは「地発句」と言う。当時の俳諧師に は、「地発句」にも、のちの「俳句」のような完 結性を見てはいない。 ●36句を続ける「歌仙」の形式は、「三十六 歌仙」から生じた。御所伝授草創期を担った 後水尾天皇は、地下伝授にも連歌にも極め て親和的で、二十一代集から漏れた武家歌 人・連歌師を集め、公家歌人をあえて一人も 採らなかった「集外三十六歌仙」は、後水尾 天皇の撰と言われる。 ●寺社の桜の木の下で連歌を興行したこと から、地下連歌の名手を「花の本」といい、 最大の花の本宗匠家は里村家である。紹巴 の子孫が里村本家(北家)、娘婿の里村昌 叱の子孫が里村南家と呼ばれた。</p>	<p>していると言える。</p>	
--	--	-----------------------	---	--	------------------	--

近世前期における国学・歌学としての和歌研究の勃興と、近世中・後期の国学・歌学の派閥(縣居派・江戸派・鈴屋派)

流派名	本拠地	代表的歌人・ 歌論者・当主	流派の主体	流派の成立時期・成 立事情 (cは世紀)	特徴	衰退・分裂・断絶の時期 (cは世紀。血統断絶の場合、掲載可 能な限りその旨を記す。) ●衰退・分裂・断絶に至る記述 ◆は存続についての記述	衰退・分裂・断絶の理由 ●最終断絶以外(一時的 な衰退など)の理由も記載 した。 ◆は存続についての記述
公家歌学系 (親中世歌学 系)	山城国 畿内 東海道 国 江戸	木下長嘯子 松永貞徳 西山宗因 山本春正 岡本宗好 下河辺長流 安藤為章 戸田茂睡 契沖 今井似閑 藤原惺窩	師弟関係 国学者	16c末～ ●国学・古学は、主に 中世歌道の批判を契 機とする学問大系であ るが、堂上に近い地下 の歌人らは、各人が堂 上の歌道を伝授されて いる。	●木下長嘯子が冷泉流歌道、下河辺長流 が三条西流歌道、安藤為章が中院流歌道 を学ぶなど、公家歌道の系譜を引いており、 実態は堂上家血縁者以外への秘伝歌道の 伝播の様相を呈する。 ●『林葉累塵集』など地下・庶民への和歌普 及に熱心で、堂上家歌道そのものの否定よ りも、『万葉集』の再評価や分析に基づく中 世歌道の修正、地下に対する堂上家の優越 的な歌道姿勢への批判という側面が大き い。 ●契沖は、伊勢神宮歌道、特に中西信慶と 蜜月であり、荷田春満・賀茂真淵とは異なる 二条流の歌学を模索。『万葉集』を中心に歌 集を研究し、仮名・漢字・梵字を分析して定 家仮名遣を改良するなど、実証主義的歌学 を確立。 ●藤原惺窩は儒学者であったが、木下長嘯 子と交流して歌学をも京学派に取り入れ、近 世儒学の祖となる。但し、幕府は京学派が 持つ陽明学の要素を排除し、専ら朱子学の 正当を主張。	近代と戦後に衰退 ●親中世歌学の立場ではあるが、中 世歌学を批判的に修正しようとした試 みこそが、当初の国学であった。その 後、国学は歌学史観よりも神道史観 の学色彩を濃くし、平田国学に至っ て神霊学的要素をも有するようになっ た。 ●右の奉納により、社家出身の荷田 家・賀茂真淵の研究も一層進展し、近 代初頭までは多くの歌学書が社家にも 保存されることになる。	●今井似閑ら弟子が、上 賀茂神社の三手文庫 (1702設立)に契沖の遺し た書物を奉納。現在に続 く。 1721 似閑が奉納を発意 1723 似閑死去 今井家が1737年と1739年 の二回に分けて奉納 ●一部は桂園派・御歌所 派へ吸収される。

熊沢蕃山一門	山城国備前国播磨国大和国下総国	中江藤樹 熊沢蕃山 中院通茂 清水谷実業 野々宮定基 野々宮定縁 (以上、蕃山四天王、蕃山門の堂上の四天王)	師弟関係	17c前半～ ●熊沢蕃山が備前国岡山藩主・池田光政に仕え、藩校・花島教場、次いで花園会(閑谷学校の前身)を開校して講義。	●熊沢蕃山自身は、中江藤樹門の陽明学者であり、自らは和歌をあまりしなかったにもかかわらず、堂上公家歌人、とりわけ靈元院歌壇の中心歌人ら(中院通茂や清水谷実業)が師と仰ぎ、直接教えを受けた。その論議・交遊の内容は、有職故実、陽明学、神道、幕政・藩政など多岐に渡り、和歌はもちろん、とりわけ狂歌が目立った。狂歌は、『古今集』を引用しつつ、諧謔・風刺を込めて改作する手法が流行したこともあり、蕃山が体得していたそのいわば新旧融合の本歌取の手法が、地下伝授や地下歌人らとの関わりをためらわない通茂や実業の関心の的となったのである。	●陽明学者としての信念から幕政・藩政を批判したことで、逃亡生活は長きに亘り、幽閉・蟄居を繰り返したが、京都の蕃山四天王をはじめ、行く先々で堂上・地下双方の門人を得たことで、その教えは広く受け継がれた。	●外様藩(岡山藩)で陽明学を講じる熊沢蕃山に対する、幕府・朱子学側(保科正之・林羅山)からの圧力と、それに否応なく屈した蕃山の岡山藩からの出奔。 ●岡山藩に対して行った批判に対する幕府・同藩からの圧力。 ●長い逃亡・隠遁生活
杉浦家歌壇・浜松和歌会	遠江国(浜松)東海国江戸	荷田春満 杉浦忠義 杉浦国頭 杉浦真崎 賀茂真淵 斎藤信幸	師弟関係 血縁(社家) 杉浦家 国学者	17c後半～ ●春満の姪雅子と結婚した浜松諏訪神社の神主杉浦国頭を中心とする歌壇。	●春満も浜松に立ち寄って歌会に参加し、京都と江戸の荷田家歌壇と同等の規模の歌壇となった。	賀茂真淵一門の形成に至る。 ●国学は、近現代の日本史学・神道学・民俗学・国文学などの諸学問の基礎となっている。	●近世初期の和歌の系譜は、二条派の堂上家の歌道、この直系の木下長嘯子らの歌学、荷田・真淵らの歌学に大分類できるが、このうち最後の系譜は、荷田春満から小中村清矩以降の日本史学に至るまで個人的な師弟関係で結ぶことができる。

<p>縣居・県居(あがたい)派(県門・古学派・賀茂真淵一門)</p>	<p>遠江国(浜松)東海国江戸上方</p>	<p>賀茂真淵 加藤千蔭(橘千蔭) 村田春海 加藤宇万伎(河津美樹) 楫取魚彦(以上、県門の四天王) 小野古道 本居宣長 村田春郷 荒木田久老 栗田土満 橘常樹 日下部高豊 三島自寛(以上、四天王と合わせて県門十二大家) 油谷倭文字 鶴殿余野子 土岐筑波子(以上、県門の三才女) 田安宗武 加藤枝直 村田橋彦 村田春道 上田秋成 田安宗武 松平定信 荷田在満 森田豊香 谷真潮 浅海澳満</p>	<p>師弟関係町人庶民</p>	<p>18c初頭～ ●真淵一門は「県門」と呼ばれ、県門和歌の派閥を特に「県居派」と呼んだ。 ●真淵は、中世歌学の発展的超克を目指して歌学改革を行っていた契沖や荷田春満の論を体系化し、国学を学問体系として確立させた。</p>	<p>●真淵は、『万葉集』を中心に研究し、自然で実直な万葉調和歌を重視(万葉主義)。これを「新学」として主張。朱子学を批判し、日本古来の精神風土としての「古道」を確立。 ●日本語の語意・文法や和歌の枕詞などの研究 ●真淵門下の双壁は、加藤千蔭、村田春海とされることが多い。二人とも、肥後国学の祖・高本紫溟や、その弟子かつ宣長門下で、塙保己一の『群書類従』の編纂に携わった長瀬真幸と交遊。真幸は九州の万葉研究の第一人者となる。 ●のち、本居宣長や加藤宇万伎ら『古今集』・『新古今集』重視の一派が分派。特に宇万伎とその門下は、古今・新古今風の実作を行う。別流(『古今集』重視・公家歌道・古今伝授系統)の小沢蘆庵・香川景樹らも反県居派の姿勢を鮮明にする。 ●加藤宇万伎門下の上田秋成ら、真淵の孫弟子の代に至るまで、分派した本居宣長と古代語の語意・音韻について激しく論争。次第に劣勢となる。 ●田安宗武・松平定信は、万葉風でありつつ京極派・正徹をも取り入れ、県居派主流とは異風を示した。</p>	<p>親真淵派から反真淵派にまで分裂。加藤千蔭・村田春海らを中心に江戸派を形成。 本居宣長一門は鈴屋派を形成。 ●ただし、国学は、近現代の日本史学・神道学・民俗学・国文学などの諸学問の基礎となっている。</p>	<p>●国学の発展による諸学派への分裂に伴う歌学の分裂。</p>
------------------------------------	-----------------------	---	-----------------	---	---	---	----------------------------------

<p>小沢蘆庵一門</p>	<p>上方 東海道 国 江戸</p>	<p>小沢蘆庵 小川布淑 前場黙軒 田山敬儀 小野勝義 山田以文 海野幸典(遊翁) 森田豊香 山田常典 頼静子 矢部正子</p>	<p>師弟関係 町人 庶民</p>	<p>18c半ば～ ●小沢蘆庵が冷泉為村や武者小路実岳に入門し、冷泉・二条流歌道を学ぶが、のちに堂上家歌道を批判して新派創始を狙い、「ただごと歌」を提唱し、為村から破門され、独立。</p>	<p>●小沢蘆庵が独自の歌論「ただごと歌」を提唱。これに一時的に、または長期に亘り影響を受けた門人が集った。 ●小沢蘆庵をはじめ、尊王論を基本的な立場とした。 ●県居派・江戸派と激しく対立した。(加藤千蔭、村田晴海の『筆のさが』に対する小川布淑の『雅俗弁』など) ●小沢蘆庵は、その独自の歌論にもかかわらず、本居宣長、上田秋成、伴蒿蹊、香川景樹、蒲生君平らと親しく交流。尾張藩家老の家臣であり、晩年の岡崎隠棲後も、宣長、秋成、景樹などの訪問を受け、交遊を続けた。結果的に、その歌学の一部はこれらの歌人に程よく引き継がれた。のち、「平安和歌四天王」の一人に数えられる。</p>	<p>香川景樹や、真淵一門と距離を置くようになった上田秋成らに受け継がれる。 ●ただし、国学は、近現代の日本史学・神道学・民俗学・国文学などの諸学問の基礎となっている。</p>	<p>●国学の発展による諸学派への分裂に伴う歌学の分裂。</p>
---------------	--------------------------------	--	---------------------------	--	---	--	----------------------------------

江戸派	江戸 東海道 国 上方	加藤枝直 加藤千蔭(橘 千蔭) 村田春道 村田春海 大石千引 一柳千古 清水浜臣 中島広足 和田巖足 井上文雄 天野政徳 小山田与清 岸本由豆流 前田夏蔭 加藤千浪 岡本保孝 山田常典 蜂屋光世 伊能穎則 間宮永好 鶴久子	師弟関係 血縁 町人 庶民	18c後半～ ● 県居派の一部が江戸派を形成	<ul style="list-style-type: none"> ● 真淵死後の江戸歌壇の主流。 ● 加藤千蔭、村田晴海は『筆のさが』を著し、香川景樹の桂園派を非難。 ● 県居派時代よりも古今・新古今調の傾向を示す。 ● ただし、『後の歌がたり』を著した中島広足など、一時的には親万葉・古今集、反新古今集、反本居・鈴屋派を明確に主張した者も多い。 ● 江戸派の中でも、清水浜臣とその門下は、王朝風の情緒的歌道を成した。 ● 小山田与清は「天保の国学の四大人」の一人。また、国学の小山田与清、神学の平田篤胤、考証学の伴信友として、当代の三大家と称された。門下に蜂屋光世、間宮永好ら。門下生との共編に『八洲文藻』。 ● 蜂屋光世・鶴久子夫妻は、光世が小山田与清の、久子が山田常典の門人。久子は宮内省に勤め、御歌所派歌道に接し、その女流歌人の税所敦子の歌道のほか、萩の舎の中島歌子の歌道にも触れた。但し久子自身は、これら二名が教えなかった下級士族以下の子女、下町の女性らを中心に和歌を教えた。 	<p>衰退</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ただし、国学は、近現代の日本史学・神道学・民俗学・国文学などの諸学問の基礎となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 国学の発展による諸学派への分裂に伴う歌学の分裂。 ● 鈴屋派の隆盛
-----	----------------------	--	------------------------	---------------------------	--	--	--

<p>鈴屋派・伊勢派・本居宣長一門</p>	<p>伊勢国 上方 尾張国 東海道 国</p>	<p>本居宣長 本居春庭 本居大平 長沢伴雄 石塚龍麿 近藤光輔 帆足長秋 高本紫溟 長瀬真幸 林桜園 和田巖足 平田篤胤 伴信友 田中大秀 石原正明 清水浜臣 村田橋彦 村田春明</p>	<p>師弟関係 血縁 町人 庶民</p>	<p>18c後半～ ●鈴屋派と伊勢派は、同じ本居宣長の和歌流派を指すと考えられる。門人らによる使い分けの真意は、不明確な点が多いが、同門の異称に過ぎないと見て差し支えない。 ●宣長・鈴屋派歌学は、真淵の万葉主義とは大きく異なる。</p>	<p>●鈴屋派・伊勢派は、新古今調の歌風を基調としつつ、万葉調・古今調・新風が混在。 ●同派を主導した本居宣長は、『万葉集』・『古今集』・『古事記』・『日本書紀』・『源氏物語』などの研究・注釈により、初期国学を大成。歌論書に『石上私淑言』、『くず花』、『古今集遠鏡』など。『源氏物語』の注釈書『紫文要領』や『源氏物語玉の小櫛』を著し、日本固有の情緒「もののあはれ」を提唱。『古事記伝』を著し、『日本書紀』に対する『古事記』の歴史的意義の格上げに貢献。初期古道論から平田復古神道への道筋を付けた。 ●肥後出身の長瀬真幸は、九州人初の鈴屋入門者・帆足長秋の著書を通じて宣長を知った。もう一人の師である肥後国学の祖・高本紫溟の勧めもあり、紫溟に連れられて伊勢を訪れ、直接宣長の教えを受けるに至った。宣長と紫溟の交遊も始まった。真幸は、塙保己一の『群書類従』の編纂にも携わり、紫溟と共に、真淵門下の双壁、加藤千蔭、村田春海とも交遊。九州の万葉研究の第一人者となる。門下に中島広足、林桜園、和田巖足ら。しかし、広足は一時的に反鈴屋派の姿勢を持った。桜園は原道館を開き、門下を指導した。</p>	<p>●長沢伴雄の旧蔵書は現在、台湾大学図書館に「長澤文庫」として所蔵されている。(台北帝大の時代から所蔵。) ●本居宣長の思想は、賛否両論を受けながら、多くの孫弟子にも受け継がれる。</p>	<p>●国学の発展による諸学派への分裂に伴う歌学の分裂。</p>
-----------------------	---	--	----------------------------------	--	---	--	----------------------------------

	江戸	村出春門 板倉茂樹 一見直樹 藤井高尚 寺西元栄 井本常蔭 東条義門 足代弘訓 橘曙覧 本居内遠 加納諸平 石川依平 佐佐木弘綱		は入さく異なつにか、 宣長自身は、賀茂真 淵から期待され、直接 激励を受け、これを力 として、真淵の古道論 を自ら進んで継承して いる。	●平田篤胤と伴信友は「天保の国学の四大人」の二人。 ●清水浜臣は村田春海門下だが、本居春庭・千種有功らとも交遊。 ●石原正明のように、新古今集、特に九条良経ら御子左歌壇を追慕した一派もいた。 ●古学による歌道「古学歌道」を提唱し、村田春門がこの概念を主唱・大成した。 ●村田春門、板倉茂樹、一見直樹は、伊勢白子の特に秀でた宣長の門人の意から「白子の三樹」と称される。 ●伊勢・松坂の鈴屋派歌会は、佐佐木弘綱に歌会の監督者着任を要請し、受諾した弘綱は鈴鹿郡石薬師から松坂に転居した。それまで弘綱は、菰野歌壇・冠峯社と親しく、中でも自邸を度々訪れた高田顕允に歌を教えたり、自らも竹柏社四日市支部へ出張講義に出向いた折に、冠峯社の歌会や顕允宅を訪れたりしていたが、これ以降は鈴屋派歌会での活動が主となる。	東条義門・足代弘訓・橘曙覧・本居内遠・加納諸平・石川依平など	
尾張歌壇・尾張鈴屋派	尾張国	本居宣長 本居春庭 市岡猛彦 市岡陸子 市岡和雄 植松茂岳 関戸内兄 関戸信秋 大藪信親	師弟関係 血縁 市岡家 植松家 関戸家 町人 庶民	18c後半～	●鈴屋派は伊勢派とも言ったが、尾張で栄えた鈴屋派・本居宣長一門を尾張鈴屋派と言った。 ●関戸家は『関戸本古今和歌集』を所蔵。	●本居宣長の思想は、賛否両論を受けながら、尾張門下にも受け継がれ続けた。	●市岡和雄の金鉄組への参加による歌壇衰退、青松葉事件(1868) ●国学の発展による諸学派への分裂に伴う歌学の分裂。
五十槻園	伊勢国 度会 三重県 上方 江戸	荒木田久老	師弟関係 町人 庶民	18c後半～	●縣居派門下と鈴屋派門下のうち、それらを外れた者が、荒木田久老門下として集まった。特に宣長の死後、急速に門下を増やした。 ●久老は内宮権禰宜として、真淵学を忠実に継承し、万葉調の和歌を詠み続けた。	衰退 ●ただし、国学は、近現代の日本史学・神道学・民俗学・国文学などの諸学問の基礎となっている。	●国学の発展による諸学派への分裂に伴う歌学の分裂。

<p>塙保己一門</p>	<p>武蔵国 江戸 全国</p>	<p>塙保己一 平田篤胤 屋代弘賢 石原正明 宮地仲枝</p>	<p>師弟関係 町人 庶民</p>	<p>18c後半～</p>	<p>●塙保己一は、和歌を閑院宮典仁親王・日野資枝・萩原宗固より学んだ。総検校の座にも就いた。 ●塙保己一『群書類従』・『続群書類従』</p>	<p>衰退 ●ただし、国学は、近現代の日本史学・神道学・民俗学・国文学などの諸学問の基礎となっている。</p>	<p>●国学の発展による諸学派への分裂に伴う歌学の分裂。</p>
<p>藤井家・後松屋歌壇(吉備津歌壇)</p>	<p>備前国 (吉備津)</p>	<p>藤井高尚 藤井高雅 萩原広道 東条義門 業合大枝 正宗直胤</p>	<p>師弟関係 血縁(神官家・社家) 吉備津宮(神社) 祠官(宮司・社家頭) 吉備津宮(神社) 社家</p>	<p>18c後半～ ●備中笠岡の祠官である小寺清先に国学を、京都の烏丸・武者小路流歌人である梅井道敏(一室)に和歌を学び、その後宣長の門人となった藤井高尚と、その養孫の高雅の代に全盛。</p>	<p>●高尚は、京都の鐸舎、大坂の小柴屋で鈴屋派歌学を指導。宣長の「もののあはれ」論を継承して、『三(みつ)のしるべ』などを著す。 ●高雅は、高尚の死後、松屋社中を継承して後松屋と号する。「五ヶ条扣」を制定し、歌合を開催。</p>	<p>近代に衰退・断絶</p>	<p>●尊王攘夷派による高雅の暗殺 ●歌人・門下生の死 ●版籍奉還(1869) ●廃藩置県(1871) ●近代化 ●新派短歌の全盛</p>
<p>敬業館・小寺派</p>	<p>山城国 備中国 (笠岡) 備後国</p>	<p>松岡仲良 小寺清先 小寺清之 小寺廉之 鈴鹿秀満</p>	<p>師弟関係 血縁 小寺家 町人 庶民</p>	<p>18c後半～ ●小寺家の私塾敬業館が中心となる。</p>	<p>●代々、卜部氏に神道を学び、笠岡稲荷神社祠官を継承。 ●清先が澄月に師事。</p>	<p>近代に衰退・断絶</p>	<p>●歌人・門下生の死</p>

円通寺・真如庵・閻魔堂	備中国越後国	大忍国仙義提尼良寛貞心尼	僧侶師弟関係	18c後半～	●義提尼『詠草集』 ●良寛・貞心尼『蓮の露』(貞心尼が師良寛の歌を集めた。)	近代に衰退・断絶	●歌人・門下生の死
柳園派	筑前国福岡県福岡市	青柳種信二川相近岡崎勝海上原定賀岡部東平伊藤常足	師弟関係血縁町人庶民	18c末～	●賀茂真淵・加藤千陰・村田春門・本居宣長のいずれの系譜をも引く。	近代に衰退・断絶	●歌人・門下生の死
反桂園派・秋山梨園派	豊前国山城国撰津国河内国	秋山光彪佐久間種林親信長田美年	師弟関係血縁秋山家佐久間家	18c末～ ●反桂園派と呼べる歌学流派は多く存在したが、極めて反抗的な姿勢を示したのが秋山光彪一門(梨園派)であった。	●村田春海を共通の師とし、香川景樹の歌に対して批判を展開した。 ●一時は京都歌壇の勢力を賀茂季鷹歌壇と二分する勢いを持った。 ●桂園派の中川自休は梨園一派に対し、『大幣』を著して反駁した。	近代に衰退・断絶	●歌人・門下生の死 ●桂園派の持ちこたえ
鏡月玉光一門	土佐国山城国	今村鏡月楠瀬大枝細木庵常	師弟関係町人庶民	1800前後～	●鏡月は賀茂真淵に私淑、本居宣長の歌会に参加し、宣長より評価を得る。しかし、鏡月ら一派は宣長には入門せず、純風の「いにしへぶり」を掲げて『古万葉集』を著す。	幕末に衰退	●同士の公費流用による今村鏡月への連座処分(京都からの追放)に伴う一時断絶 ●歌人・門下生の死
鐸舎	山城国	城戸千楯藤井高尚能勢春臣	師弟関係町人庶民	1814～ ●本居宣長に師事した城戸千楯が中心となり創始。	●京都における宣長学・鈴屋派の拠点となる。 ●八田知紀らのちの御歌所派歌人とも交流したが、明治改元を見ずして廃止された。	廃止(1850頃)	●歌人・門下生の死

黒川家	上野国 江戸 備前国 備中国 東京都 東京都 岡山県	黒川春村 黒川真頼 黒川真道 青木如園	血縁(国学者) 黒川家 師弟関係 庶民	19c初頭～	●春村は当初、狂歌師の浅草庵を継いでいたが、和歌・国学に転じ、国語文法・古美術などの考証に優れた。 ●春村の遺言により、真頼が後継者となった。大八洲(おほやしま)学会で教鞭を執った。	断絶 ●黒川家の歌学書は、ノートルダム清心女子大学を中心に、明治大学・実践女子大学・日本大学などに所蔵されており、「黒川文庫」と呼ばれている。ノートルダム清心女子大学による購入に尽力したのは、正宗敦夫であり、同大は「正宗敦夫文庫」をも有する。	●第一次世界大戦 ●関東大震災(1923) ●真道の死(1925)
大隈家・萍堂派	筑前国	大隈言愛 大隈言足 大隈言道 大隈言志 野村望東尼	血縁 大隈家 師弟関係 町人 庶民	19c初頭～	●二川相近に学んだ言道の代に全盛。佐佐木信綱により高く評価される。	幕末に断絶 ●しかし、思想は正岡子規・アララギ系に受け継がれる。	●明治改元直前に大隈と門下生らがそろって死去し、歌道家として近代を迎えることはなかった。
江幡家 (幡は、正しくは巾ヘンに者)	出羽国 秋田県 大館市	江幡通貞 江幡通静 江幡糸子 江幡通寛 江幡岩子 江幡通理	血縁(医家) 江幡家 師弟関係 庶民	19c初頭～ ●医者の家系で教育者も輩出した江幡家を中心に形成された歌壇。	●師である鈴木重胤・佐々木弘綱・高崎正風らの系譜を引く。 ●代々、漢詩・和歌の双方に長け、出羽大館文学を大いに発展させた。 ●江幡糸子・岩子がそれぞれの夫通静・通寛によく歌道を学び、江幡家を中心とする庶民の子女歌壇が形成された。	戦後に衰退 ●地元住民や旧公家・武家の子女などには受け継がれている。	●兵役による歌壇における男性の不足 ●第一次世界大戦 ●第二次世界大戦 ●検閲・出版統制 ●敗戦 ●新派短歌の全盛

国学の大成と平田派(平田国学、平田神道)、および藩校における歌学

流派名	本拠地	代表的歌人・歌論者・当主	流派の主体	流派の成立時期・成立事情(cは世紀)	特徴	衰退・分裂・断絶の時期(cは世紀。血統断絶の場合、掲載可能な限りその旨を記す。) ●衰退・分裂・断絶に至る記述 ◆は存続についての記述	衰退・分裂・断絶の理由 ●最終断絶以外(一時的な衰退など)の理由も記載した。 ◆は存続についての記述
		平田篤胤 服部中庸 大国隆正 六人部是香 中尾弘等		16c末～ ●細川幽斎、松永貞徳、北村家などによる地下伝授の開始以降、中世公家歌学を学び堂上に近い立場にありながら、地下への歌道伝授を厭わなかった歌人らが、中世歌学批判をも展開。歌学の否定ではなく、修正による発展を試みた。この歌学改革は、木下長嘯子に始まり、戸田茂睡、下河辺長流、契沖へと順に受け継がれる。これが国学の源流である。 1669 ●岡山藩が日本最古の藩校・岡山学校(正式には単に「学校」または「国学」)を設置・開校。ここに「国学」の	●平田篤胤は国学の大成者であり、復古神道(古神道)の大成者である。従って、最も狭義には、単に「国学」・「復古神道」とは平田国学・平田神道を指す。 ●和学・皇朝学・古学・古道学の意味一般での「国学」の語は、伏見稲荷の神官で、契沖を研究した荷田春満が、歌学・神道融合の「古道論」を唱えた頃に生じている。しかし、「復古神道」の語は未だ見られない。「復古神道」は、ほぼ平田国学そのものであると見てよい。すなわち、まず中世公家歌学の反省的・批判的態度に神道を融合した「古道」が生じ、古道の学問体系化の試みを「国学」と称し、ここから歌学の要素が希薄化し神霊学の要素が増大したものを「復古神道」と呼んだのである。しかし、契沖以後、塙保己一や伴信友らは、古道に始まり神霊学に至る系譜とは距離を置き、より実証主義的態度で国学に臨んだ。 ●だが、江戸中期まで(特に岡山藩と周辺諸藩において)、単に「国学」とは、日本最古の藩校である岡山学校と岡山藩藩学(備前・備中国の学問)を指した。むしろ、「岡山学校」の正式の名は単に「学校(国学)」であった。荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平	近代に衰退・断絶 昭和に絶家 ●篤胤は白川伯王家より「神霊真柱大人(かむたまのみはしらのうし)」の諡名霊神号を賜る(1845)。 ●平田家は関与しなかったが、島原・徳島・岡山・姫路・鳥取など九州・四国・山陽・山陰を中心とする気吹舎の門人らが結集して、足利三代木像梟首事件(1863)を起こし、復古神道は早速、尊皇攘夷運動実行の思想的支柱となる。親幕の京都守護職・会津藩主の松平容保が、関係者を一斉捕縛・殺害。事件には平田派の密偵の会津藩士らも関与した。岡山藩が容保に徹底抗議し、西国の平田国学派と佐幕派・会津藩との決裂が決定的となる。松平容保は、壬生浪士(のちの新選組)を活用した強攻策へ方針転換。とこ	●民衆による廃仏毀釈運動の激化 ●大教官本運動の失敗

平田派・平田
学派・気吹舎

出羽国
備中国
江戸
山城国
京都府
全国

下尾弘馬
鈴木重胤
小野春発
秋元安民
魚住長胤
大藪延親
臼田正秋
岩崎兌健
小保内定知
青柳高鞆
五十嵐正之
平田鏡胤(鐵胤)
生田万
碧川好尚
平田延胤
富岡鉄斎
玉松操
稲葉正邦
福羽美静
小島盛可
野中武雄
湯谷基守
三木鉄弥
平田胤雄
平田盛胤
長松清風

師弟関係
血縁(朱子学家→
国学・神道家)
房総平氏系大和
田氏→伊勢平氏
系平田氏
町人
庶民

用。こゝに「国学」の語が公式に生ずる。) 1673
●岡山藩が日本最古の庶民学校・閑谷学校を設置・開校。ここでも、「国学」とは岡山学校や岡山藩の藩学を指した。
17c後半～
●儒学が優勢となった岡山藩が、全国初の神儒仏分離策を行う。水戸藩、淀藩、会津藩がこれに続く。すなわちこの時点では、「国学」は一般に儒学をも含んだ。
●荷田春満が歌学・神道融合の「古道」を唱え、古道の学問体系化の試みとして「国学」の語を用いる。古代神社の神道・社家歌学系の項も見よ。
18c初頭～
●賀茂真淵が、中世

田篤胤らにより、儒学・仏教・蘭学に対する和学・皇朝学・古学・古道学の意味で「国学」の語が使われるようになってからも、岡山では両方とも「国学」と呼んだほか、元より岡山の国学を学ばない国学者はいなかったと見て差し支えない。従って、岡山の地では学閥同士の衝突も頻繁に起こり、神仏分離策を岡山藩が全国に先駆けて行ったのも、また必然であった。藩校における歌学の項も見よ。
●平田篤胤もまた、備中松山藩士平田篤穂の養子となり(1800)、岡山の黎明期古道の影響下に歩み始める。夢で入門を許された本居宣長に私淑、本居春庭・大平入門。書齋と私塾を兼ねた真菅乃屋を創設(1804)。真菅乃屋を拡充して気吹舎と号す(1816)。儒教を批判し、尊王攘夷運動に思想的支柱を与えた。自身の古伝説の正当化のため、次第に神霊学の様相を呈し、『古事記』などの古典の改竄を辞さなかった。『新鬼神論』・『古道大意』・『霊能真柱』など。気吹舎は鏡胤、延胤が引き継いだ。
●荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤の四人を「国学の四大人(しうし)」としたのは大國隆正。「大國」の姓は大國主神に由来。隆正は、藩校・帰正館を開校し、門人を育てる。誠之館をはじめ、播磨、備前、備

ろが、長州藩と欧米艦隊の衝突が始まった。西国諸藩は援軍せず傍観。三条実美や姉小路公知ら尊攘急進派公家と長州藩は攘夷親征(大和行幸)強行を計画。この暴走を知った孝明朝廷、中川宮、会津藩、薩摩藩、京都所司代・稲葉正邦が藩主の淀藩が八月十八日の政変(1863)を起こすが、表向きは公武合体派による尊王攘夷派・長州藩の排除でありつつ、実際には、梟首事件と同じく徳島藩、岡山藩、鳥取藩、米沢藩が関与した。これら西国諸藩は倒幕、尊攘、長州藩排撃のいずれの動きにも関与したことになるが、その背景にはあくまでも平田国学派としての暗黙の結束、復古神道の再現の目的があった。八月十八日の政変でも、会津藩や薩摩藩を助ける意図はなかった。
●篤胤の子孫や門人により平田神社創建運動が起き、1869年に篤胤を祀った祠を建立、1872年に事実上の神社創建、1881年に東京府認可。
●しかし平田派は、明治維新时期・王政復古の大号令においては津和野藩と共に思想的支柱となったものの、国家神道の整備が進むにつれ、明治政府から排除された。

●八教皇布運動の大敗
●神仏合同布教禁止令(1875)に基づく神道事務局の設置と大教院の解散
●国家神道と教派神道の分離
●教部省の廃止と内務省社寺局の設置、神社局と宗教局への分離、神祇院の設置による宗教行政の混乱
●第一次世界大戦
●平田篤胤の幕府親藩(尾張藩・水戸藩)への過大な接近を嫌悪した幕府からの故郷帰還命令による、出羽秋田への帰郷。(そのまま死没。)
◆しかし、平田国学・平田復古神道は、あらゆる神社神道、教派神道、諸教に影響を与えており、現代においてもその後継を自認する学者、宗教家、宗教団体などが存在する。

			歌学の発展的超克を目指して歌学改革を行っていた契沖や荷田春満の論を体系化し、対儒学・対仏教としての国学を学問体系として確立。 18c後半～ ●契沖を学び、真淵の激励を受けた本居宣長が、万葉主義の真淵とは異なった『源氏物語』や『古今集』重視の立場から古道論を展開・補完。門下の村田春門が「古学歌道」を主唱、古学・古道と歌学・歌道の一体化を明言。	後の藩校で国学・国典を講義。自身は、「国学」ではなく「本教本学」の語を用いた。隆正自ら大国主神ゆかりの地を発見し、神社を建立したとする。 ●隆正門下の鈴木重胤ら以降、平田国学はより皇学の様相を呈する。重胤は、宗像信仰の復興に尽力。 ●村田春門の「古学歌道」などに始まり、平田国学で大成された霊的国学・歌学とも言える学問は、ほとんどの国学者・国学系歌道家に影響を与えたと言える。しかし、橘守部のように、ほぼ独自の国学・歌学を追究した者もいる。守部の実家・飯田家は、谷川士清による垂加神道系国学の門下であったが、守部はとりわけ、宣長の『古事記』研究と篤胤の『古事記』曲解・改竄を批判して、『日本書紀』を重んじ、かつ虚と実(神話と史実)を峻別する、いわば科学的国学を築いた。篤胤と守部は、伴信友、小山田与清と共に「天保の国学の四大」と呼ばれた。	●南画・文人画家で儒学者の富岡鉄斎は、15歳頃より大国隆正に平田国学を、18歳頃より大田垣蓮月に小姓として和歌を学んだ。 ●平田家は1973年に絶家。 ●ただし、国学は、近現代の日本史学・神道学・民俗学・国文学などの諸学問の基礎となっている。平田国学・平田神道は、旧教派神道系や山陽・山陰の新宗教を中心に継承されている。 ●『日本巫女史』を著した中山太郎の父・相場吉蔵も平田門下で、同著も平田や吉蔵の神道の影響を受けている。		
一木二平一門	周防国遠江山城国江戸東京府	★一木二平 近藤芳樹 加納諸平 石川依平 ★門下 岩崎美隆 伊藤豊蔭 上田光賢 上田光逸 飯田秀雄 伴林光平	歌道拮抗の関係(一木二平同士) 師弟関係 庶民	19c前半～	●歌道に優れた左記の本居大平門の三人が、その末字をとって「一木二平」と呼ばれた。	衰退 ●ただし、唯一近代まで生きた近藤芳樹は、御歌所派として活躍した。	●三名の死
玉園・秋の屋	肥前国長崎	青木永章	師弟関係 庶民	19c前半～	●青木永章は、本居大平に国学を、養父に和歌を学ぶ。中島広足・近藤光輔と共に「長崎国学の三雄」と称せられた。	近代に衰退・断絶	●歌人・門下生の死

吉備雄・蒜園	備前岡山山陽道 山陰道 山陰道 山陰道	平賀元義 萩原広道	師弟関係 庶民	19c前半～	●元義は万葉調歌人として正岡子規の激賞を受ける。	幕末に断絶 ●しかし、思想は正岡子規・アララギ系に受け継がれる。	●明治改元直前に元義・広道と門下生らがそろって死去し、近代を迎えることはなかった。 ●歌・著作の甚だしい散逸
藁屋派	越前国 上方 飛騨国	橘曙覧	師弟関係 庶民	19c前半～	●国学を田中大秀に学ぶ。 ●正岡子規により、源実朝・田安宗武・平賀元義と共に絶賛された。	幕末に断絶 ●しかし、思想は正岡子規・アララギ系に受け継がれる。	●明治改元直前に大隈と門下生らがそろって死去し、近代を迎えることはなかった。
雅澄流	土佐国	鹿持雅澄	師弟関係 庶民	19c前半～	●和歌・国学を宮地仲枝に師事した鹿持雅澄による万葉学の流派で、ほぼ個人流派に終わるが、膨大な著作『万葉集古義』は、のちに天覧により宮内省から出版された。	万葉学流派としては断絶(1858) ●雅澄の死後に評価が高まった。	●雅澄の死(1858)
松廼舎	下総国	神山魚貫 伊能穎則 木村正辞 江波戸胤信	師弟関係 庶民	19c前半～	●独学の神山魚貫が創始。 ●神山魚貫家集『苔清水』 ●万葉研究者で東大教授の木村正辞が出た。 ●木村正辞『万葉集美夫君夫』 ●伊能穎則は魚貫のほか、村田春海門の小山田与清にも国学・歌学を学び、江刺恒久・間宮永好に教えた。また、教導職・権少教正として、この二人の弟子とは神道改革をも共にした。 ●江波戸胤信も松廼舎と椎木吟社の両方の歌学を学び、巧みに折衷した。	近代に衰退・断絶	●歌人・門下生の死
琴園派	駿河国 江戸	松木琴園 中村秋香 中村春二	師弟関係 庶民	19c半ば～	●石川依平・前田夏蔭らに師事した松木直秀(琴園)及びその門下生による国学と歌壇。	近代に衰退・断絶	●歌人・門下生の死
槻蔭舎→会 輔舎	陸奥国 二戸郡 岩手県	小保内定知	師弟関係 庶民	19c半ば～	●吞香稻荷神社神主であった小保内定知が創始。	断絶(1884頃)	●歌人・門下生の死

誠之館・興風会	備後国 (福山) 岡山県 広島県	中津美因 中島年光 中島博光 大国隆正	師弟関係 庶民	19c後半～ ●備後福山藩第七代藩主・阿部正弘が藩校・誠之館を設立。1855年開校。儒学、国学、和歌のいずれの講義も展開。 ●社家中津家より養子に入った中島博光が誠之館で学ぶ。福山良神社や鞆沼名前神社の宮司を務めたのち、歌道講義のための興風会を立ち上げ。	●博光を中心に、旧誠之館と興風会の歌道が展開。誠之館に博光の短冊が所蔵されている。 ●中島博光歌集『藻潮草』 ●平田派の大国隆正は、自身が開校した播磨小野藩の藩校・帰正館で国学・国典を講義したのち、誠之館にも招かれて講義。これらの藩校を含む京都、播磨、備前、備中のいずれの藩校の講義でも、「国学」ではなく「本教本学」の語を用いている。	幕末から近代初頭に断絶 ●誠之館はその後、小田県師範学校として利用された。小田県はそのまま岡山県に統合されたため、誠之館は岡山県のものとなったが、直後に広島県に移管された。	●歌人・門下生の死 ●新政府の命令による誠之館の廃校(1872)
鶴岡歌壇	出羽国 (鶴岡) 山形県	杉山廉 池田玄斎 田中朝陽 田中政徳 田中万春 建部山比子 秋保親愛 渋谷光長 服部正樹 星川清民 志田義貫 広瀬敵雄 白井重固 白井玉井 白井千代梅	師弟関係 血縁(国学者) 田中家 白井家 庶民	19c後半～	●山形鶴岡・庄内藩を郷里とする国学者らによる歌壇。	近代に衰退・断絶	●歌人・門下生の死
翠園・重嶺一門・佐渡歌壇	佐渡国 越後国 能登国 伊勢国 東京府 東京都	鈴木重嶺 蔵田茂樹 井上頼文 松本誠	師弟関係 庶民	19c後半～	●鈴木重嶺を中心とする歌壇。月並会が繁栄。 ●『雅言解』・『翠園寿筵歌集』 ●歌風は典雅・流麗で、御歌所派に近縁。 ●徐々に新派をも模索し、1895年に短歌結社の鶯蛙吟社を組織。『詞林』を刊行。	平成時代に歌道は断絶 ●鈴木重嶺関係資料は「翠園文庫」として昭和女子大学図書館に保存されている。 ●鈴木重嶺顕彰会が地元住民により設置されている。	●鈴木重嶺の死(1898) ●佐佐木信綱の竹柏会・『心の華』(のちの『心の花』)に吸収合併。 ●鈴木重嶺・佐渡歌壇の研究者松本誠の死(1995)による昭和女子大学への資料移管

菊の舎	陸奥国 江戸 岩手県 東京府	南部利剛 平田鏡胤 伊能穎則 江刺恒久 間宮永好 栗田寛	師弟関係	19c後半～	<ul style="list-style-type: none"> ●菊の舎は、平田鏡胤・伊能穎則に国学・歌学を学んだ江刺恒久中心の歌壇。月並会が繁栄。 ●恒久は、南部藩主・南部利剛の命で『奥々風土記』を編纂。これに、穎則と同じ小山田与清門下で水戸藩の間宮永好(倭書局出身、与清らと『八洲文藻』を共編)と栗田寛(彰考館出身、『大日本史』編纂者の一人)が考証加筆。 ●一方、藩主・利剛も自ら和歌を江刺恒久・間宮永好に学んだ。 ●伊能穎則は、神山魚貫のほか、村田春海門の小山田与清にも国学・歌学を学び、江刺恒久、間宮永好に教えた。永好もまた、与清に直接学んだ。穎則は、教導職・権少教正として、この二人の弟子とは神道改革をも共にした。恒久は神祇官、神祇省、教部省に出仕し、国幣社禰宜を歴任。永好も穎則の推挙で神祇権大史、次いで大史となる。 	近代に衰退・断絶	●歌人・門下生の死
今日庵	陸奥国 宮城県 仙台市	嶋原行雄 小倉随時 大越英春	師弟関係 庶民	19c後半～	<ul style="list-style-type: none"> ●行雄の没後、小倉随時が今日庵を継ぎ、東北随一の歌人を称された。 	近代に衰退・断絶	●歌人・門下生の死
椎木吟社(椎園派)	下総国 千葉県 (海上郡・旭・銚子)	海上胤平 江波戸胤信	師弟関係 庶民	1883頃～	<ul style="list-style-type: none"> ●加納諸平を師とした海上胤平が創始。のち御歌所寄人となる。門下生は数千人。 ●桂園派一門隆盛の中にあって、万葉調・五七調の正当を説き(「五七調正格説」、明治の新派短歌に影響を与える。 ●海上胤平『椎園詠草』、『椎園家集』、『東京大家十四家集評論』 ●江波戸胤信は松廼舎と椎木吟社の両方の歌学を学び、巧みに折衷した。 	20c初頭に衰退	●第一次世界大戦前夜の混乱

椎本吟社	上野国 江戸 東京府	橘守部 橘冬照 橘東世子 橘道守	血縁 橘(立花)家 師弟関係	19c末～	<ul style="list-style-type: none"> ●道守が養母の東世子と創設。月並会が繁栄。 ●本居宣長と平田篤胤の双方に異論を唱えて独自の国学を構築した橘守部は、道守の(養)父または(養)祖父。道守が養子に入り、直接師事した冬照は、守部の子か養子。冬照も道守も守部の子ならば、二人は兄弟である。 	20c初頭に衰退	●歌人・門下生の死
十善会	島根県 (出雲) 東京府 (目白)	慈雲 雲照 興然	思想的連帯 (久邇宮朝彦親王 への崇敬、戒律主義、 戒律歌道)	1884(または1887)～ ●高野山で真言密教 を学び、慈雲尊者に師 事した雲照が、朝彦親 王への崇敬を表して十 善会を創設。	<ul style="list-style-type: none"> ●厳格な戒律主義(「十善戒」)のもとで神儒 仏・顯密統合の思想と歌道を行い、極めて 特異な仏教思想を示し、早期に廃れた。 ●興然は、日本人初の上座部仏教徒であ る。(釈尊正風会を設立。) 	明治初期に衰退	<ul style="list-style-type: none"> ●思想的特異性による時 代との齟齬 ●国家神道・教派神道(出 雲大社教)への発展的解 体・吸収
雪の舎	東京府 東京都	秋山光条	血縁(神祇官宣教師) 秋山家 神官 師弟関係 庶民	19c末～	<ul style="list-style-type: none"> ●幕臣で神祇官宣教師であった秋山光条を 中心とする歌壇。 ●『雪の舎歌文集』 	近代に衰退・断絶 ●秋山家の血統は現在も存続	●歌人・門下生の死
山里和歌会	岡山県	岡直廬	師弟関係 庶民	19c末～	●二条派・桂園派に親和を示していた備作 和歌会の中心的歌人で、岡山神社祀官でも あった岡直廬が独自に立てた和歌会。	近代に衰退・断絶	●歌人・門下生の死

白夜会	長野県上伊那郡箕輪町	桃沢夢宅 千野方義 太田直樹	師弟関係 庶民	1908頃～	<ul style="list-style-type: none"> ●箕輪町の歌人が集まって形成されたもので、歌風は多種多様である。 ●同じ頃、伊那谷地域では、子規の影響を受けた近藤政寛による若菜会・明星派の影響を受けた長谷川喬村による潮会など新派短歌結社が設立されている。 	近代に衰退・断絶	●歌人・門下生の死
藩校における歌学	岡山藩(備前国、備中国)次い	藩士の子弟 庶民の子弟	藩士の子弟 庶民の子弟	<p>1666</p> <ul style="list-style-type: none"> ●岡山藩主池田光政が津田永忠らと共に閑谷を視察。庶民学校の設置計画を開始。 <p>1669</p> <ul style="list-style-type: none"> ●光政が藩校・岡山学校を設置。(最古の藩校) <p>1670</p> <ul style="list-style-type: none"> ●光政の命、永忠の主導で藩校・閑谷学校の建設を開始。 <p>1673</p> <ul style="list-style-type: none"> ●閑谷学校の講堂が完成し、開校。翌年、聖堂なども完成。(最古の庶民学校。また、藩立学校であるため、藩校ないし準藩校ではない) 	<ul style="list-style-type: none"> ●日本最古の藩校は岡山学校(岡山藩藩学、国学)であり、日本最古の庶民学校は同じく岡山藩の閑谷学校である。閑谷学校も藩立学校であるため、準藩校ないし二番目に古い藩校とも言えるが、他藩の藩校と異なり、当初から藩士の子弟のみならず庶民の子弟も入学できた。 ●この岡山学校と閑谷学校を模範として、全国に藩校が次々と設立されたが、この二校の設置時期は極端に早い。 ●「岡山藩藩学」とは、岡山学校のみならず、同校で教授された学問をも指した。 ●また、江戸中期まで(特に岡山藩と周辺諸藩において)、単に「国学」とは、岡山学校と岡山藩の藩学(備前・備中国の学問)を指した。むしろ、「岡山学校」の正式の名は単に「学校(国学)」であった。最古の藩校であるため、「備前」や「岡山」などの地名を冠する必要がなかったことにもよるが、実質的に岡山は、全国初かつ全国一の歌学・和学・神道・儒学(朱子学・陽明学)・漢学・仏教などの結集地であった。荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤らにより、儒学・仏教・蘭学に対する和学・皇朝学・古学・古道学の意味で「国学」の語が使われるようになってからも、岡山の藩士・庶民・子弟らは両方とも「国学」と呼んだほか、元より岡山の国学を学ばない国学者はいなかったと見て差し支えない。従って、岡山の地では学問同士 	<p>藩校により、盛衰が分かれた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●学制改革により、廃止の憂き目に遭う藩校が続出した。 ●廃止されなかった藩校は、主に旧制中学校となった。 ●現在は高等学校となっている旧藩校も多い。 ●水戸藩においては、まず『大日本史』を編纂する修史局であった江戸の彰考館で、稀に二条派和歌が嗜まれた。これは、徳川光圀が儒学・史学を中心とする水戸学大成を目指す中、南北朝問題を「本朝の大事」として深刻にとらえ、かつ南朝正統の立場を採ったことによる。(実際に、幕府の命で『本朝通鑑』を編纂中で 	<ul style="list-style-type: none"> ●近代の学制改革 ●戦後の学制改革(1946) ●第一次世界大戦 ●第二次世界大戦

	で、各藩の藩校		<p>藩校ないし半藩校でもある。) 1690 ●徳川綱吉が幕府直轄の湯島聖堂を設置。18c末～ ●岡山藩藩学と湯島聖堂・昌平坂学問所の学問繁栄を皮切りに、各藩に藩校が増加した。1841 ●水戸藩が藩校を仮開校。1857 ●水戸藩が上記藩校を弘道館として正式に開校。</p>	<p>又えない。従って、岡山の地では子関向上の衝突も頻繁に起こり、神仏分離策を岡山藩が全国に先駆けて行ったのも、また必然であった。 ●当初、岡山藩藩学に限らず、どの藩校でも主に国学・漢学・武芸を教えたが、次第に蘭学・洋学・医学・化学などが加わり、歌道も藩校によっては重要な教科となり、歌道方が設置された。 ●当初藩校には、その名の通り藩主・藩士の子弟のみが入学でき、庶民の子弟は入学できなかったが、次第に庶民にも門戸が開かれ、歌道も伝わっていった。 ●湯島聖堂は、現在に至るまで「日本の学校教育発祥の地」と謳われるが、本来は学堂ではなく孔子廟で、儒学奨励・異学統制のために建設したものである上、岡山藩の各藩校の設置のほうがおよそ20年も早い。その後、1790年から七年をかけて、寛政異学の禁に基づき、林家からの私塾の分離設置と幕府直轄化が行われ(昌平坂学問所)、幕府が奨励する唯一無二の教学が朱子学であることが「聖堂学規」として明文化された。朱子学と和歌・歌道とは当然相容れず、後者は、岡山藩をはじめとする全国の外様大名が設置した藩校で栄え、保護されて、地下・庶民にも浸透することとなった。</p>	<p>あった朱子学者・林鷺峰を呼び寄せて、その本朝観を問いただしている。)倭書局や、新たに創設した水戸彰考館でも、この水戸学派歌壇は概ねそのまま引き継がれた。徳川治保による水戸藩中興以降は、藩主・徳川斉昭が水戸学を引き継ぎつつ、和歌も嗜み、小山田与清を国学・歌学の師として江戸彰考館に招き、儒学・史学を母体とする後期水戸学を大成させた。斉昭自ら設立した弘道館でも水戸学派の国学や和歌が教えられた。一方、水戸藩主血統の松平容保の流れを汲む会津歌壇が、近代に栄えた。</p>	<p>●第一次世宗八戦 ●敗戦</p>
--	---------	--	--	--	---	--------------------------

<p>京都守護職・会津歌壇・会津和歌会（反明治新政府歌壇）</p>	<p>京都 陸奥国（会津藩） 福島県（会津若松） 蝦夷地（箱館）</p>	<p>松平照 松平容保 新島八重 中野竹子 白虎隊 朱雀隊 青龍隊 玄武隊</p>	<p>会津藩士 血縁（武家） 会津松平氏（清和源氏流を称する） 師弟関係</p>	<p>19c後半～ ●京都守護職歌壇とは、すなわち唯一同職に着任した会津藩主・松平容保を中心とする歌壇である。地縁としては会津の歌壇であり、血統としては水戸藩系の歌壇である。 ●新選組は京都守護職預りとなったが、歌壇らしき歌壇を一切持たなかった。京都守護職周辺の歌壇は、近代に会津に持ち帰られて現地歌壇と一体化し、会津和歌会として栄えた。</p>	<p>●松平容保及び藩士の子女を中心に、戊辰戦争中も多くの歌会が催された。降伏までの間、多くの辞世の歌も詠まれた。 ●『会津和歌集』</p>	<p>一旦、旧幕府歌壇と共に壊滅（1868） 主に会津藩士の子女らによって継承されたのち、戦後に衰退・断絶 ●新島八重が会津若松に帰郷した際に詠んだ和歌が2013年3月に発見される。</p>	<p>●大政奉還（1867）、王政復古（1868） ●会津戦争（1868） ●箱館戦争（1868～69） ●第一次世界大戦 ●第二次世界大戦 ●敗戦 ●歌人・門下生の死</p>
-----------------------------------	--	---	--	---	--	---	--

浪士組、新徴組、壬生浪士組(精忠浪士組)、新選組の文学師範	京都 江戸	伊東甲子太郎 尾形俊太郎 斯波良作 武田観柳斎 毛内有之助	師弟関係 浪士 幕臣	1863 ●将軍・徳川家茂上洛の際の将軍警護組織として、浪士組を結成。 ●反幕・尊皇攘夷に転じた者らは、江戸に戻る。幕府は、浪士組を新徴組として再結成。 ●公武合体による攘夷派は、京都壬生で壬生浪士組を結成。京都守護職・会津藩主の松平容保を助け、八月十八日の政変で活躍し、新選組に移行。 ●新選組は京都守護職預りとなったが、歌壇らしき歌壇を一切持たなかった。京都守護職周辺の歌壇は、近代に会津に持ち帰られて現地歌壇と一体化し、会津和歌会として栄えた。	●浪士組結成の時点で、浪士らは文武両道を目指し、後身の新徴組および分派の壬生浪士組でも同様だったが、正式に「文武師範」を置いたのは新選組である。 ●文武師範の中に文学師範が置かれたが、この「文学」とは、ほぼ幕藩体制の学問、すなわち朱子学、水戸学、兵学・軍学のことである。むしろ新選組は、隊士・三浦啓之助の父で、ほぼ洋学主義者と言える朱子学者・兵学者の佐久間象山などの影響を受け、公武合体・攘夷の傾向よりも佐幕・反朝廷の傾向が急速に増した。歌学分野では、朝廷・公家・新政府軍の歌学のほぼ全部と、国学における歌学のほとんどが排除された。従って、新選組が学んだ歌学は幕府歌学方(概ね冷泉派)や江戸冷泉派のそれのみであるが、最終的に隊士らの思想を満たす歌学はなく、歌学そのものを活動から排除し、歌学を伴わない和歌を詠むにすぎなかった。	江戸幕府の終焉(大政奉還、王政復古、江戸無血開城)と共に衰退・解散・断絶 ●明治新政府の御歌所初代所長となる薩摩藩の高崎正風は、当初会津藩に協力し、八月十八日の政変にも加担した。しかし、新選組は、二条派(朝廷の学問)の系譜上にある薩摩の歌学(桂園派)に興味はなく、高崎らと文芸の道で接することはなかった。新選組は幕府と運命を共にした一方で、高崎ら薩摩の歌学は御歌所派の母体の一つとなった。	●大政奉還(1867)、王政復古(1868) ●戊辰戦争(鳥羽・伏見の戦い、甲州勝沼の戦い、宇都宮城の戦い、会津戦争、箱館戦争)での度重なる衰微と最終的な敗北(1868~69) ●薩長同盟を中心とする明治新政府以降の皇国史観に基づく、賊軍としての新選組に対する文人らからの否定的評価(大佛次郎の小説『鞍馬天狗』など)
-------------------------------	----------	---	------------------	---	--	---	--

開国・近代化における明治新政府の皇国史観に基づく旧派(桂園派・御歌所派・宮内省派)の歌学政策と新派短歌への抵抗、神仏分離令・大教宣布運動および国家神道・教派神道(神道十三派)関連歌壇、軍部歌壇、教育勅語関連歌壇、師範学校歌道部の創設と、新旧両派の対立解消の模索

流派名	本拠地	代表的歌人・歌論者・当主	流派の主体	流派の成立時期・成立事情(cは世紀)	特徴	衰退・分裂・断絶の時期(cは世紀。血統断絶の場合、掲載可能な限りその旨を記す。) ●衰退・分裂・断絶に至る記述 ◆は存続についての記述	衰退・分裂・断絶の理由 ●最終断絶以外(一時的な衰退など)の理由も記載した。 ◆は存続についての記述
御歌所派(宮内省派)	京都府	中山忠能 中山愛子 孝明天皇 英照皇太后 九条夙子() 中山慶子 明治天皇 昭憲皇太后(一条美子) 柳原愛子 大正天皇 貞明皇后(九条節子) 三条西季知 八田知紀 高崎正風 伊東祐命 植松有園 植松有経 大口綱二(周魚) 松平忠敏	天皇 皇族 宮内省	1863 ●孝明朝、会津藩、薩摩藩、京都所司代・稲葉正邦が藩主の淀藩が八月十八日の政変を起こす。高崎正風も関与するが、明治維新が成立し、維新後は歌壇整備に専心。 1888～ ●御歌所派歌壇が確立。 経緯 1869 明治天皇即位後初の歌御会始 1872 侍従候所が歌道御用を担う。	●二条派・桂園派の流れを汲み、明治初期歌壇の主流を成す。まずは安曇野桂園派(内山真弓、高島章貞ら)が、江戸で同派歌道を広め、倒幕に参加し、次いで薩摩桂園派(八田知紀、高崎正風ら)が、安曇野桂園派の活動を基盤として、より源流の二条派歌道を桂園派において復興させ、かつ歌道御用掛や御歌所の要職に就いたことで、歌壇派閥としての御歌所派(宮内省派)が成る。桂園派の項も参照せよ。 ●月次歌会(つぎなみのうたかい)・・・毎月 ●歌御会始(うたごかいはじめ)・・・年頭● 『古今集』重視の伝統を示し、歌は保守的・観念的。戦後まで詠風を保つ。 ●与謝野鉄幹・正岡子規ら新派短歌運動側からの厳しい批判的となる。 ●「和歌は天賦自然の道」とする八田知紀の和歌観や、「調(調べ)」と「情(情け)」とが和歌の本質であるとする高崎正風の和歌観などを軸に、新派短歌に対する親皇室・親桂園の保守派の態度を堅持した。 ●八田知紀『志能布久佐』(家集)、『しらべの直路』(歌論書) ●高崎正風『進講筆記』、『埋木蓮花』 ●伊東祐命は江戸派の前田夏蔭・加藤千浪の門で、同派を御歌所派に取り入れた。	1946～47 廃止・衰退 ●華族の東京移住命令により、兵庫・岡山・福岡など上方以西の二条派・桂園派の衰退は決定的となったが、二条派・桂園派勢力の東京へ	●第一次世界大戦 ●関東大震災(1923) ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●敗戦 ●華族制度の廃止(1947) ●戦後の宮内省の機能縮小の一環として廃止。

<p>内省派) (二条派・桂園派一門)</p>	<p>東京府 薩長土肥</p>	<p>渡忠秋 近藤芳樹 本居豊頼 池辺義久 久我通久 入江為守 三条公輝 西四辻公業 福羽美静 香川景恒 香川景敏 阪正臣 小出繁 井上通泰 間島冬道 黒川真頼 鎌田正夫 税所敦子 鈴木小舟 千葉胤明 佐佐木信綱 金子元臣 武島羽衣 三条西実義</p>	<p>御歌所寄人 血縁(華族・士族) 薩長土肥 師弟関係 臣民</p>	<p>1874 歌道御用掛設置。八田知紀、高崎正風、近藤芳樹、福羽美静らが着任。一般国民の詠進が可能に。 1880 二条派宗匠・三条西季知が死去。 1886 御歌係長に高崎正風。 1888 御歌所設置。初代所長に高崎正風。寄人、参候、録事などの職が置かれた。御歌所首座には伊東祐命。 1926 皇室儀制令(「歌御会始」が「歌会始」)</p>	<p>●井上通泰は、姫路に生まれ、医師井上碩平の養子に入り、東京帝国大学医学部予科を経て、医科大学付属病院眼科助手となり、その後は姫路・岡山(姫路病院や岡山医専)で医師の道を歩む。しかし、並行して文学に通じ、森鷗外に影響を与え、鷗外は通泰に文学博士を授与するよう東大に推薦した(通泰は辞退)。通泰は、岡山で歌人としての地位を確立し、同県の歌人の藤井高尚を研究して『藤井高尚伝』を著し、また万葉の注釈書『万葉集新考』を著した。吉備史談会会長を務め、岡山の郷土史と国学の大家ともなった。1906年に常磐会を結成、1907年には御歌所寄人に任ぜられ、宮中歌壇に身を置いた。五島美術館内の大東急記念文庫が通泰旧蔵の懐紙、書帖、短冊等の歌学資料(本居宣長、香川景樹等、主に国学者の作品)や貴重書を「井上文庫」として保存。また、姫路文学館が通泰の著作や蔵書を「南天堂文庫」として保存。 ●税所敦子は、千種有功の桂園派歌道を学び、高崎正風の推挙で権掌侍として宮中に仕えた。御歌所内部の女流歌人として皇后、権典侍、典侍、内親王、女王、皇室関係者の子女に教えた。萩の舎で上流家庭の子女に教えていた中島歌子も、税所敦子と同じ立場を得ることはなかった。</p>	<p>の集中は御歌所派の整備には有利にはたらいなかった。 ●東京移住を終えて二条派・桂園派・御歌所派を担っていた有力者の多くが震災・戦災を受け、二条派一門主流でもなく東京移住もしなかった冷泉家歌道の生き残りの契機となった。</p>	<p>●旧呂家の呈精離脱(1947) ●敗戦によるGHQ及び政府の国語単純化政策 ●税制の一新と混乱による歌書の散逸(財産税・富裕税・シャブ勧告) ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化)</p>
<p>千種会 (御歌所派一門)</p>	<p>名古屋 岡山県 (津山藩) 東京府</p>	<p>大口周魚(鯛二) 尾上柴舟 小泉芝二</p>	<p>御歌所寄人 師弟関係</p>	<p>19c後半～ ●伊東祐命・高崎正風に学んだ御歌所の大口周魚によりひらかれた。</p>	<p>●旧派御歌所歌道の一派だが、尾上柴舟は早くから短歌改革を模索、平明で流麗な作歌を旨とする落合直文の浅香社に参加している。 ●最盛期には5万人の会員を抱えた。 ●尾上柴舟『短歌滅亡私論』。柴舟は、師の大口周魚に学んだ御歌所派の格調と品位に身を置きつつ、日本国民が旧式の短歌(和歌)を放置し、「なりけり」型ではなく「である」型の現代語による定型詩を模索しないならば、自然主義小説などの隆盛に押されて、いずれ定型詩の短歌は滅亡すると説いた。ところが、近現代短歌の実作の現状は、言うまでもなく、同論の登場にかかわらず隆盛を極めて現在に至る。石川啄木らの反駁を受けたこの柴舟の短歌滅亡論は、柴舟の杞憂に終わったというよりも、かえって</p>	<p>1920頃から衰退 戦後に廃止 ●尾上柴舟と同じ岡山県出身で、柴舟を師と慕う歌人・正富汪洋は、柴舟に働きかけ、柴舟を中心とする金箭会を結成。「新声」歌壇で知己の前田夕暮、若山牧水も参加。これが発展し、車前草社を結成(1905)。明星に対抗して叙景</p>	<p>●第一次世界大戦 ●大口周魚の死 ●尾上柴舟の死</p>

	東京都				近現代短歌に非連続的な御歌所歌道の性質を浮き彫りにし、御歌所歌道の稀少価値を高める結果となった。啄木自身が元より(柴舟よりも穏健派ながら)短歌滅亡論者であり、また柴舟も、短歌が滅亡しないことを知ってあえて論を発表したのである。 ●柴舟は、書家としては、当代の「御家」流ではなく、「平安朝」流の「調和体」の復古、日本化した漢字・仮名による「新平安朝」流を唱えた。この古筆回帰主義は、古歌・定型詩の温故知新の論と連動するものであり、同様の立場をとる師の大口周魚にも影響を与え、歌と書の両面で師をよく継承した。	詩・自然主義運動をおこなった。 ●但し柴舟は、これとは無関係の『車前草』なる歌誌を創刊。戦後には歌会始選者となる。(1949)	
大八洲(おほやしま)学会・大八洲学校(御歌所派一門)	紀州藩 東京都	本居豊穎 小杉楹邨 黒川真頼 塙忠雄 久米幹文 飯田武郷 佐佐木信綱 桃澤如水	国学者 御歌所寄人 師弟関係	1886～	●本居宣長の義理の曾孫である豊穎が主宰。 ●身分・出自・経済的事情・都市と地方の差などによる学問環境の格差を解消することを目的とした。(「大八洲学会設立之趣意」) ●国学と歌道を指南した。 ●『古今集』解釈を中心に据える。(『打聴鶯蛙集』・『古今集講義』)	1913 衰退・廃止	●本居豊穎の死 ●第一次世界大戦前夜の混乱
大日本歌道会(御歌所派一門)	東京都 全国の支部	御歌所派歌人 大町五城 高崎正風	御歌所派歌人 師弟関係 華族 士族 皇民	19c末～ ●台頭する与謝野鉄幹・正岡子規らの新派短歌に対して、旧派歌道側が示した抵抗の一環。	●『新万葉和歌集』・『勅題和歌集』の編纂。	廃止 ●大日本歌道奨励会に吸収。	●本格化した大日本歌道奨励会への吸収 ●第一次世界大戦 ●関東大震災(1923) ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●敗戦 ●新派短歌の全盛

<p>大日本歌道奨励会 (御歌所派一門)</p>	<p>東京府 東京都 全国の 支部</p>	<p>有栖川宮威仁親王 鍋島直大 大町五城 矢島作郎 鎌田正夫 高崎正風 武島羽衣 浅野清治 井原豊作 勝山牧次郎 木村正辞 江戸さい子</p>	<p>親王 御歌所派歌人 師弟関係 華族 士族 皇民</p>	<p>19c末～ ●台頭する与謝野鉄幹・正岡子規らの新派短歌に対して、旧派歌道側が示した抵抗の一環。 ●多くの分派を生み戦後に衰退するまで、御歌所派歌道の中核団体であった。</p>	<p>●総裁は有栖川宮威仁親王 ●中島歌子・樋口一葉らの「萩の舎」の後ろ盾となった鍋島家にも会員がいた。鍋島直大は会長を務めている。 ●准勅撰和歌集『新葉和歌集』を研究するなど、埋もれた旧派和歌の研究に尽力した。 ●女性が多く参加した。女性による地方支部の設立が積極的に行われた。 ●江戸さい子のように、旧派に身を置きながらも、女性の新たな歌道を追求し、与謝野晶子ら新派歌人と親交を結んだ女性もいた。 ●新派短歌に対し、由緒ある和歌の作法を主張して、多くの歌道書・歌集を編纂。 大町五城『歌語辞典』・『詠歌要義』・『和歌詞源抄』・『禁延廿六大家抄』 矢島作郎・鎌田正夫『昭代集』 武島羽衣『歌へのみち』</p>	<p>第一次世界大戦中、一時解散。総裁・門下の家々の男系・家系断絶により衰退。第二次世界大戦のため、より衰退し、消滅。</p>	<p>●第一次世界大戦 ●有栖川宮家の断絶 ●関東大震災(1923) ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●敗戦 ●新派短歌の全盛</p>
<p>歌道奨励会 (御歌所派一門と新派)</p>	<p>東京府 東京都 全国の 支部</p>	<p>御歌所派歌人 新派のうち旧派歌道寄りの歌人</p>	<p>師弟関係 庶民</p>	<p>明治初期～</p>	<p>●単に「歌道奨励会」とは「大日本歌道奨励会」を指したが、このほかにも「歌道奨励会」の名を冠する歌道団体が全国に存在した。</p>	<p>衰退・廃止</p>	<p>●兵役による歌壇における男性の不足 ●第一次世界大戦 ●第二次世界大戦 ●検閲・出版統制 ●敗戦 ●新派短歌の全盛</p>
<p>鹿鳴歌会・歌道鹿鳴会 (御歌所派一門と新詩社一門)</p>	<p>東京府 東京都 京都府 石川県 (能登・輪島)</p>	<p>御歌所派歌人 新詩社歌人</p>	<p>師弟関係 ※ 近代化された旧派歌道による社交</p>	<p>明治初期～</p>	<p>●鹿鳴館(1883落成)を模して、歌道を用いた鹿鳴館時代(1883～87)の現出がおこなわれた。 ●ただし、単に「鹿鳴歌会」とは、能登輪島で行われていた月次歌会としての鹿鳴歌会を指した。</p>	<p>戦後に衰退 ●輪島の鹿鳴歌会は地元の市民や巫女によって維持されており、公民館や輪島前神社の社務所などで歌会がおこなわれている。</p>	<p>●兵役による歌壇における男性の不足 ●第一次世界大戦 ●第二次世界大戦 ●検閲・出版統制 ●敗戦 ●新派短歌の全盛</p>

<p>風越歌会 (新古今・御歌所派一門)</p>	<p>長野県 (伊那市・飯田市) 東京都 東京都</p>	<p>三輪栖鳳 三浦元規 岡田忠敬 松井直寛 篠田保 上柳喜茂</p>	<p>師弟関係 庶民</p>	<p>1893～</p>	<p>●御歌所派に近縁だが、新古今集・御子左流を最も仰ぎ、象徴的・唯美的な歌風を保った。</p>	<p>戦中・戦後に衰退・離散 ●同地域には、1973年に飯田下伊那歌人連盟、2004年にはこれを改組した飯田下伊那歌人協会が発足しており、現在も短歌が活発な地域である。</p>	<p>●兵役による歌壇における男性の不足 ●第一次世界大戦 ●第二次世界大戦 ●検閲・出版統制 ●敗戦 ●新派短歌の全盛</p>
<p>国風社(婦人国風社) (冷泉派一門 かつ御歌所派一門)</p>	<p>京都府 愛知県 名古屋市 東京都 東京都</p>	<p>冷泉家 青木じょう子 (■は禾へんに農)</p>	<p>冷泉家 師弟関係 庶民</p>	<p>明治初期～</p>	<p>●国風会では、歌道のほか冷泉流披講を教えていた。 ●大口周魚に和歌を学んだ青木じょう子も、のちに「めざまし会」・「このはな会」・「明鏡短歌会」と新派結社を次々に作る一方で、冷泉流披講を体得し、熱田神宮献詠祭の選者などを務めた。 ●次第に女性参加者がフェミニズムの気風を示し、平塚らいてうらの青鞞社に吸収される形で国風社は衰退。</p>	<p>戦後に断絶</p>	<p>●青鞞社の解散(1916) ●第一次世界大戦 ●日中戦争 ●第二次世界大戦に向けての戦時体制・国家総動員体制突入のため</p>
<p>滝園社・黒田派 (御歌所派一門)</p>	<p>東京都 東京都 (麴町)</p>	<p>黒田清綱 黒田清秀 小林重道 大井田斎</p>	<p>御歌所寄人 師弟関係 血縁 黒田家 庶民</p>	<p>20c初頭～ ●八田知紀に学んだ黒田清綱が創始</p>	<p>●歌集『庭たつみ』 ●高崎正風の没後、黒田清綱が明治・大正両天皇への歌道指導に当たった。 ●清綱は、清秀が庶子であるため、家督を弟の実子清輝に譲った。ただし、清輝は洋画家となったため、滝園社は清秀が継承。</p>	<p>戦前に断絶</p>	<p>●第一次世界大戦 ●黒田清綱・清秀及び門下生の死 ●関東大震災(1923)</p>
<p>鶴園(たづその派) (御歌所派一門)</p>	<p>広島県 福山市</p>	<p>小林重道</p>	<p>師弟関係 庶民</p>	<p>1905～ ●黒田清綱・井上通泰に師事した誠之館出身の小林重道が主宰</p>	<p>●歌道雑誌『鶴園』 ●歌風は典雅明快。 ●小林重道は、御歌所寄人に推挙されるが、故郷を離れがたく、辞退した。 ●高崎正風が鶴園と号した。</p>	<p>1944 ●強制的に廃刊・廃絶</p>	<p>●第一次世界大戦 ●第二次世界大戦 ●検閲・出版統制による『鶴園』の強制廃刊</p>
<p>札幌興風会 (御歌所派一門)</p>	<p>札幌</p>	<p>額賀大直 小杉楡邨 阪正臣 武島羽衣 遠山英一</p>	<p>北海道神宮宮司 御歌所寄人 師弟関係 庶民</p>	<p>1907～ 札幌市内各地で開催 1975年以降は北海道神宮社務所が拠点</p>	<p>●会報『和歌新萬葉』 ●歌集『興風』 ●旬祭並献詠祭(北海道神宮)</p>	<p>存続 ◆現在は御歌所派に限らず様々な歌風の歌人の集団で、ほぼ近現代短歌となっており、古びず良好に存続している。</p>	<p>◆存続はしているが、以下の打撃は受けた。 ●第一次世界大戦 ●第二次世界大戦 ●敗戦</p>

<p>摘草会 (御歌所派一門)</p>	<p>名古屋 東京府 東京都</p>	<p>加藤義清 曾根田良久子</p>	<p>御歌所寄人 師弟関係 庶民</p>	<p>1912～</p>	<p>●加藤義清は歌道のほか楽曲の作詞にも力を入れ、唱歌「春風」などを作詞した。</p>	<p>1941 衰退・廃止</p>	<p>●第一次世界大戦 ●第二次世界大戦 ●加藤義清の死</p>
<p>美篇会 (御歌所派一門)</p>	<p>長野県 山梨県 東京府 東京都</p>	<p>奥村環 奥村文子 松枝花州</p>	<p>師弟関係 庶民</p>	<p>1918～</p>	<p>●大日本歌道奨励会の分派である。</p>	<p>戦後に廃止</p>	<p>●第一次世界大戦 ●日中戦争 ●第二次世界大戦に向けての戦時体制・国家総動員体制突入のため ●敗戦 ●新派短歌の全盛</p>
<p>伊那国風派 (伊那国風会) (御歌所派一門)</p>	<p>長野県 (伊那市・飯田市) 東京都</p>	<p>遠山英一 遠山稲子 桃沢夢宅</p>	<p>御歌所寄人 血縁 遠山家 女子 師弟関係</p>	<p>1915～ ●伊那実科女学校を拠点として創始された。</p>	<p>●小出粲・高崎正風に師事した遠山英一・稲子夫妻が歌壇の中心的役割を担った。 ●桃沢夢宅のように、京都で垂雲軒に学び、澄月の歌道を継承した者もいる。 ●歌道教育を中心とする女子教育をおこなった。 ●風越歌会の会員を兼ねた者も多かった。 ●伊那谷が、平田篤胤一門の国学・神道の全国最大の流入地域となる中(伊那平田派)、旧派歌道の維持は困難を極めた。</p>	<p>1920頃から衰退 戦後に廃止 ●同地域には、1973年に飯田下伊那歌人連盟、2004年にはこれを改組した飯田下伊那歌人協会が発足しており、現在も短歌が活発な地域である。</p>	<p>●第一次世界大戦 ●第二次世界大戦 ●口語詩・散文詩の隆盛、文語詩の衰退</p>
<p>箕輪歌壇・松島国風派(松島国風会) (御歌所派一門と新派)</p>	<p>長野県 (箕輪町)</p>	<p>御歌所派歌人 新詩社歌人 桃沢夢宅 矢島敏彦 上田穰 上田達昌 遠山英一 遠山稲子</p>	<p>御歌所寄人 師弟関係 庶民</p>	<p>20c初頭～</p>	<p>●澄月・桂園派・小出粲・高崎正風などの歌道を受け継ぐ。 ●桃沢夢宅のように、京都で垂雲軒に学び、澄月の歌道を継承した者もいる。 ●歌道教育を中心とする女子教育をおこなった。 ●風越歌会の会員を兼ねた者も多かった。</p>	<p>1920頃から衰退 戦後に廃止 ●同地域には、1973年に飯田下伊那歌人連盟、2004年にはこれを改組した飯田下伊那歌人協会が発足しており、現在も短歌が活発な地域である。</p>	<p>●第一次世界大戦 ●第二次世界大戦 ●口語詩・散文詩の隆盛、文語詩の衰退</p>

<p>中央歌道会 (御歌所派一門)</p>	<p>東京府 東京都 愛知県 名古屋市</p>	<p>明治天皇 昭憲皇太后 三室戸敬光 高崎正風 杉井吉従 横井祥祐 森林平</p>	<p>天皇 皇后 御歌所寄人 師弟関係 血縁(華族) 三室戸家(藤原 北家日野流庶流 柳原庶流)</p>	<p>20c初頭～</p>	<p>●近世までは歌道が家業とは言えなかった華族の家が、旧派和歌の衰退と共に、御歌所・宮内省の歌道職務を任じられたり、自ら旧派和歌の会派をひらくようになった。その家格は、堂上公家の中では下位の名家や半家であった。三室戸家もそのような家の一つであった。 ●旧派歌道関連の書籍出版業務を多く担った。『明治天皇御集』・『昭憲皇太后御集』・『昭和聖代百首歌集』・『たつかね集』・『松のしづく』など。</p>	<p>戦後に廃止</p>	<p>●第一次世界大戦 ●日中戦争 ●第二次世界大戦に向けての戦時体制・国家総動員体制突入のため ●敗戦 ●新派短歌の全盛</p>
<p>交詢社歌道研究会 (御歌所派を含む古風が基調だが、新派を多く含む)</p>	<p>東京府 東京都</p>	<p>福澤諭吉 高久貞義 学士会 如水会 茗溪会</p>	<p>御歌所派歌人 新派歌人 実業家 華族 士族 ※近代化された旧派歌道による社交</p>	<p>1880 ●福澤諭吉の提唱で交詢社設立。 1923 ●交詢社内に歌道研究会が発足。</p>	<p>●交詢社は慶應義塾出身者及び一般加入者で構成される実業家の社交クラブで、同会はその内部組織として歌道研究をおこなっていた。 ●『交詢和歌集』・『まとゐの花』刊行。 ●歌人三井甲之を中心とする右派団体「日本原理社」と交流がある者も多くいた。</p>	<p>戦前に廃止 ●交詢社は一般財団法人として存続しているが、歌壇の継承・形成はない。 ●日本における社交クラブの草分けとしては、他に東京倶楽部や日本倶楽部があるが、歌壇は当初から全く見られない。特に、鹿鳴館の一面に設立された東京倶楽部は、他の社交クラブと同様、皇族、華族、政財官の要人が参加したが、使用言語は英語に限られ(日本語はおろか他の外国語の使用も禁じられ)、また女人禁制であり、和歌文化の入る余地は全くなかった。</p>	<p>●第一次世界大戦 ●日中戦争 ●第二次世界大戦に向けての戦時体制・国家総動員体制突入のため ●新派短歌の全盛</p>
<p>東北歌道研究会 (御歌所派を含む古風が基調だが、新派を多く含む)</p>	<p>宮城県 岩手県 青森県 秋田県 山形県 福島県</p>	<p>大阪長雄</p>	<p>御歌所寄人 新派歌人 師弟関係</p>	<p>20c初頭～</p>	<p>●大阪長雄『雪のひかり』</p>	<p>戦後に廃止</p>	<p>●第二次世界大戦 ●敗戦 ●新派短歌の全盛</p>

<p>日本歌道普及会</p>	<p>札幌</p>	<p>御歌所派歌人一部、新派短歌歌人</p>	<p>御歌所寄人師弟関係</p>	<p>戦中～</p>	<p>●和歌文化のあまり普及していなかった蝦夷(北海道)地域に歌道を普及させるために戦前に設置された会や、その地域の人々の和歌を本州以南の日本人に紹介するために戦中に設立された会など、同名を冠する会が複数存在した。だが、固有名詞とするには大雑把すぎる命名であることも災いし、これらが異なる会であるのか、同一の会を指すのかは、文献や旧歌道公家へのインタビューからは判明しなかった。 ●戦後まで続いた同名の会は、『蝦夷萬葉』・『風雪：奉献歌』・『雪国：奉献歌御献題』などを刊行している。</p>	<p>戦後に廃止</p>	<p>●北海道開拓の完了 ●第二次世界大戦 ●敗戦 ●新派短歌の全盛</p>
		<p>教部省 教院 大教院 中教院 小教院 教導職総裁 有栖川宮 幟仁親王 大教正 三条西季 知 権大教正 稲葉正邦 神祇事務局、 宣教使御用掛 大國隆正</p>		<p>17c後半～ ●儒学が優勢となった岡山藩が、全国初の神儒仏分離策を行う。水戸藩、淀藩、会津藩がこれに続く。平田派や藩校の項も見よ。 江戸末期～ ●平田復古神道を奉じる国学者らを中心に、祭政一致運動が起きる。倒幕・開国した場合に、神道と歌道を国家管理下に置く方針も萌芽。1868 ●太政官布告(神仏判然令、神仏分離令)。天皇の神格化と王政復古、神道の国教化によって日本を祭政一致国家とする方針を示した。 1870 ●大教宣布詔。同上の方針に基づく。 1868～1875 ●当初、神祇官が設置され(1868)、宣教使が任命されたが(1869)、神祇官は立て続けに神祇省(1871)、教部省(1872)へと改組された。三条教則(三條教憲)が發布され、大教宣布・尊皇愛国運動の中心は半官半民の大教院となり(1872設置)、各地に中・小教院が設置され、教導職が任命された。神仏分離運動と、神道中心の神仏(ないし神儒仏)合同布教運動と</p>	<p>●近代における旧派歌道の整備は、主に別掲の宮内省御歌所が担うことになるが、新政府の発足直後の時期は、神道行政と一体化して行われた。 ●まず、大教宣布運動で和歌(とりわけ御所歌道)や俳諧が利用され、男系男子天皇を戴く国家の下に神仏と和歌・俳諧を組織的に統御するため、主に同運動強硬派の男系男子歌人・俳人が多数教導職に任命された。 ●有栖川宮幟仁親王が神道教導職総裁となり、歌道を利用した大教宣布運動に皇族自身が加わると共に、有栖川歌道が流入した。皇典講究所初代総裁にも就任し、同所にも有栖川歌道が流入。 ●神祇官の神祇省への降格(太政官への編入)は、祭政一致・天皇親祭国家の建設に向けた国策であり、実際は神祇官の昇格であった。しかし、神祇省は迷走し、すぐに教部省への改組(神儒仏合同布教による国民教化専門機関への転換)を余儀なくされた。</p>	<p>神祇官系統のあらゆる神道系歌壇は、19cのうちに急速に衰退し、1945年の神道指令をもってほぼ廃絶。 ●教部省の機能は、内務省の社寺局に移されたが(1877)、のちに神社神道部分は神社局、次いで神祇院へ、仏教・キリスト教・新宗教(教派神道を含む)は宗教局へと移された(1900)。神社局の独立設置や全国神職会の設立(1898、のちの大日本神祇会)は、神祇官興復運動、神祇特別官衙設置運動を受けたもので、神社局内には、再び復古神道を奉じて祭政一致を目指す急進派歌壇が生じ、宮内省御歌所派とは性質を異にした。国民精神総動員運動を受けて設置された神祇院の時代も同様であった。 ●神祇院廃止以降、神祇官系統の歌壇は岡山県とその周辺(山陽地方)に集中。現在までこれらの地域を中心とする新宗教系教団の歌壇として散在。 ●教導職家系の子女歌壇・歌道については、今なお女系巫女中心の祭祀を行うごく一部の巫女神道系の巫女や、本門佛立宇など一部の</p>	<p>●民衆による廃仏毀釈運動の激化 ●大教宣布運動の失敗 ●神仏合同布教禁止令(1875)に基づく神道事務局の設置と大教院の</p>

近代の神祇官
(宣教使)・神祇省・教部省
(教院・教導職)・内務省社
寺局・国家神
道・教派神道・
神社局・神祇
院・新宗教系
教団歌壇
(宮内省よりも
急進的で平田
復古神道を奉
じる立場と、桂
園派・御歌所
派一門とが複
雑に混在)

東京府
東京都
京都府
奈良県
岡山県
香川県
淡路島

御歌所派歌人
高崎正風
中山忠能
福羽美静
神官、神職
僧侶
長松清風
増上寺
神道事務局、
神道本局
総裁
有栖川宮
幟仁親王
管長
稲葉正邦
皇典講究所
総裁
有栖川宮
幟仁親王
新宗教系神道
教団(教派神
道・神道十三
派)
天理教(奈
良)
黒住教(岡
山)
金光教(岡
山)

政府
思想的連帯
(尊皇愛国思想を
教化する大教宣布
運動を展開し、の
ちに神道を国家神
道と教派神道に編
成)

を反復し、常に混乱し続けた。
1871

●近代社格制度制定。神社を「国家の宗祀」と定義(太政官布告)、のちの「神社非宗教論」と国家神道創設の礎となる。神道の中央集権化に伴う世襲神職の廃止と精撰補任(太政官布告)。

1875～

●教部省の神仏合同布教廃止による大教院解散を前に、神道事務局を設置。大教院直系の神道総本山構想は、神道事務局による皇大神宮遙拝殿(のちの東京大神宮)の中央神殿化構想として継承。1877年、内務省社寺局を設置。

1882～

●政府は祭政一致・神道国教化策から一転、1871年に神社を「国家の宗祀」と定義した太政官布告に基づき、「神社神道は宗教ではない」とし(神社非宗教論)、神道祭祀(神社神道、皇室神道、国家神道)と宗教(教派神道、仏教など)とを区別する祭教分離策を採用。非宗教の神社・神道を国の祭祀とし、他宗教の上位に置くことは、憲法の「信教の自由」に反しないとして(一元的外在制約説に基づく)、事実上、神道国教化策、神道による

●太政官・神祇官主導の神仏分離運動も、教部省・大教院・神官・僧侶主導の神仏合同布教も、仏教・儒教勢力、藩勢力ばかりか、他の神道勢力とも軋轢を生じた。また、神仏の整理・住み分けを行い、神仏間の無用の対立の回避を狙う太政官・教部省の意図とは裏腹に、大教宣布を拡大解釈して暴徒化した民衆の廃仏毀釈運動が激化した。神仏合同布教禁止令が出され、大教院存置の意味はなくなった。

●大教院の中枢部は、神道事務局、続いて神道本局へと継承され、これが現在の神道大教および神道大教院に至る。

●教派神道・神道十三派の概念が確立してからは、とりわけ幕末三大新宗教、中でも岡山県発祥の純教祖系新宗教(黒住教、金光教)に宗教歌壇が成立したが、岡山(備前・備中・美作)における新興宗教と宗教歌壇の隆盛は、鎌倉仏教以来、県史全般に言えることである(法然や栄西が岡山出身)。

●政府の祭教分離策への転換に伴い、多くの復古神道系歌人(歌道・歌学)は国家神道とも教派神道ともつかず離れずの立場となり、一部は宮内省御歌所に入ることとなる。但し、残る旧神祇官・大教院系歌人は、その後もしばしば急進的な祭政一致論を保った。

●三条実美や高崎正風らが明治天皇の御

新宗教の歌壇を除いては、受け継がれていない。

●神道事務局の神職養成機関であった皇典講究所の関係・後継組織である日本大学、國學院大学、皇學館大学には、旧派歌壇は残っていない。日大においては、その校風には神道色もほぼ残っていない。

●神祇官・教部省・大教院直系の神仏観・思想とその宗教行政を神道史上に位置付けるならば、近世までの伝統的な神道・仏教、その後の社寺局系神道の神社神道部分、現在の神社本庁を中心とする神社神道の全方面から見て、甚だ特異である。実際のところ、当時の大教宣布運動や教派神道、仏教改革に参加した神道・仏教教団とその後継教団の大部分は、現在も非神社神道すなわち教派神道系や諸教・新宗教扱いであり、伝統宗教の系譜ではない。現在全国のほとんどの神社を包括する神社本庁とて、大日本神祇会、皇典講究所、神宮奉齋会を母体とする一宗教法人であるが(実態は、関連団体の神道政治連盟などを通じて政府の神道方針を汲んで神道行政を代行する国家神道機関にほかならないが)、現在の教派神道連合会のごく一部の神道学閥(特に神道大教・神道大教院)に近い方針のみが、明治当初の国家・政府の主要な神道観であり、神道の国家管理や神道国教化のイメージであったと考えればよい。

●第一次世界大戦
●日中戦争
●大東亜戦争に向けての戦時体制・国家総動員体制突入のための歌道・文化生活の放棄
●敗戦
●新派短歌の隆盛
●GHQの神道指令(1945)による神祇院・近代社格制度(神社の国家管理)の廃止と宗教法人神社本庁の発足(1946)
●大教宣布運動・教派神道に参加した(政府・教部省によって厚遇された)歌人の出身地や、神道・仏教系新宗教教団の立教・立宗地の、岡山県への極端な偏りに伴う、歌壇の同県への偏り

		<p>山) ほんぶしん (岡山) 新宗教系仏教 教団 本門佛立宗 (京都、岡山) 日蓮宗不受 不施派(岡山) 日蓮講門宗 (岡山)</p>		<p>争天上、神道国教化、神道による国民統合策を強化した。1882年、皇典講究所が発足し、神官の教導職兼補の禁令が出され、1884年、教導職は廃止され、神官の布教は禁じられた。1882年、神宮司庁と神宮教院を分離設置。1884年にかけて祭教分離が行われ、教派神道が形成された。但し、政府は同時に宗教・教派神道弾圧を強化。神道色が希薄であった天理教や金光教は、弾圧対策として神道の教義を整備。神道事務局・皇典講究所総裁は有栖川宮幟仁親王、神道事務局管長は旧淀藩主稲葉正邦。1884年、神道事務局を神道本局に改編。1900年の神社局設置により、国家神道が名実共に確立し、神社局がこれを保護(事実上の管理統制)。神官は公務員とされ、布教活動は禁止された。これ以降、「国家神道」の語が頻用される。 ●1940年、宗教団体法施行、神社局を神祇院に改組・昇格。</p>	<p>●二本天皇や高阿止風らが明石入道の御意を受けて、本門佛立宗の開祖・長松清風(日扇)に御教歌を詠じさせるなど、政府(教部省・内務省社寺局および宮内省御歌所)は、天皇の威を借りて仏教系新宗教の歌人にも働きかけ、盛んに歌壇参加を呼びかけた。 ●他の大規模な日蓮・法華系新宗教(創価学会、霊友会、妙智会教団など)が歌壇を一切持たない一方、本門佛立宗の歌壇に関しては、岡山県を中心にかろうじて残る。 ●他の日蓮・法華系宗派(日蓮宗不受不施派、日蓮講門宗など)が岡山県で創始されるに伴い、東京と京都の大教宣布・教派神道歌壇はより縮小し、様々な新宗教系教団の私塾・私的歌壇として岡山県に集約していった。</p>	<p>組織は、教導職の組織をモデルとしている。 ●一方、巫女神道・巫女神楽を淫祠邪教として神道史・和歌史上の正統から排除する強硬策は、大教院や御歌所の設置以前から多くの神道派閥や歌壇の賛同により計画されたもので、教部省発布の巫女禁断令(1873、神霊の憑依などによって託宣を得る行為の禁止)はその具体的な国策であった。男系男子天皇を神道の主宰者として男子の藩閥官僚や神職が神道行政を司る体制を整備するにあたり、巫女神道の存在は大きな瑕疵とされた。巫女神道の項も見よ。 ●自ら非神道を表明して教派神道を外れ、現在諸教に分類される天理教やほんみち、ほんぶしんは、上記の全ての神道観から見て大幅に異質である。</p>	<p>備ワ</p>
<p>彰善会 (御歌所派一門)</p>	<p>東京府 東京都</p>	<p>高崎正風 大島為足 三輪経年 浅野三龍</p>	<p>政府 軍人 御歌所寄人 師弟関係</p>	<p>1898～</p>	<p>●殺人事件の増加などに見られる臣民のモラル・品格の低下を高崎らが嘆き、歌道・心学を主軸として教育勅語(1890)の主旨を臣民に啓蒙するために設置された。 ●「兎角意を曲げて、巧妙に作る方に向く」昨今の人民の新派短歌に対し、「まこと」の体現である「御製」を中心とする旧派和歌の復活と「和歌国家」の建設を説く。</p>	<p>1908年に一徳会に継承</p>	<p>●経済的衰退 ●臣民のモラル低下と暴動の増加に伴う、よりいっそうの教育勅語の啓蒙体制の強化のため、一徳会に機能を継承。 ●新派短歌の全盛</p>

<p>一徳会 (御歌所派一門)</p>	<p>京都府</p>	<p>高崎正風 二条基弘 近衛篤磨 福羽美静 大島為足 三輪経年 浅野三龍</p>	<p>政府 軍人 御歌所寄人 師弟関係</p>	<p>1908～</p>	<p>●殺人事件の増加や日比谷焼打事件(1905)に見られる臣民のモラル・品格の低下を高崎らが嘆き、歌道・心学を主軸として教育勅語(1890)の主旨を臣民に啓蒙するために設置された。 (「明治二十三年十月三十日の詔勅を我が国民が実行せねばならぬといふ主義」:「一徳会成立の趣意」高崎正風『史談会速記録』1908・8) ●「兎角意を曲げて、巧妙に作る方に向く」昨今の人民の新派短歌に対し、「まこと」の体現である「御製」を中心とする旧派和歌の復活と「和歌国家」の建設を説く。</p>	<p>戦後に廃止</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●第一次世界大戦 ●日中戦争 ●第二次世界大戦に向けての戦時体制・国家総動員体制突入のため ●新派短歌の全盛
<p>日本斯道会 (御歌所派一門)</p>	<p>東京府 東京都</p>	<p>西村茂樹 東郷平八郎 山縣有朋 井上頼国</p>	<p>政府 軍人 御歌所寄人 師弟関係</p>	<p>1912～</p>	<p>●一徳会と共に、教育勅語による教化策の普及に努めた。 ●殺人事件の増加や日比谷焼打事件(1905)に見られる臣民のモラル・品格の低下に対し、善事の推奨、約束の励行、怒りの抑制、歌道の鍛錬などが定められた。</p>	<p>戦後に廃止</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●第一次世界大戦 ●日中戦争 ●第二次世界大戦に向けての戦時体制・国家総動員体制突入のため ●新派短歌の全盛
<p>皇国和歌詠唱 奨励会</p>	<p>東京府 東京都</p>	<p>対台湾・対朝鮮・対中国・対ソ連強硬派・皇道派軍部</p>	<p>軍人 強硬派・皇道派軍部 思想的連帯 (皇国史観に基づく和歌文化の統合と奨励)</p>	<p>1930年前後～</p>	<p>●万世一系の天皇による親政、及び天皇を中心とする和歌国家の建設のため、「皇国和歌」を奨励。</p>	<p>戦後に廃止</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●天皇・御歌所派・政府・軍部主流(統制派)・新派短歌界からの黙殺 ●第二次世界大戦 ●敗戦

<p>師範学校歌道部</p>	<p>全国各地</p>	<p>教職員 師範学校生</p>	<p>教職員 師範学校生 (多くは女子) のちに著名歌人となつた師範学校生 良家の子弟</p>	<p>1900年前後～</p>	<p>●師範学校内にも歌道部が設置される場合があつたが、師範学校においては和歌・歌道は積極的に教えられていない。元より儒学(とりわけ朱子学)・漢学・皇学・洋学・医学などを基礎として始まり、教員養成専門機関としての機能を持つに至る師範学校において、歌道への精通が必要とされる機会が少なかったことが要因の一つである。 ●中島哀浪らが歌集『果樹園』を発表した佐賀県師範学校専攻科歌道部のように、男子・女子共に積極的な歌道部運営をおこなつた師範学校は極めて少なかった。太田水穂・島木赤彦らは同級生として長野県師範学校時代に短歌に目覚めたが、師範学校外での活動によってである。(『文学界』への投稿など。) ●初等・中等教育機関の場合も、『万葉集』以外の和歌(和歌の作法・由緒など)が教授されることはほとんどなく、新派短歌や、戦時体制に向けて万葉調を模倣して詠まれた皇道和歌が模倣されることが多かつた。徴兵によって、若年男子の詠歌活動は辞世の歌と結びつき、旧派和歌・新派短歌の系譜とは無関係の独立したものとなつた。いわゆる歌道伝承は、師範学校の女学生を含む銃後の女性の手になつた。</p>	<p>廃校 ●ただし、高崎正風ら旧派と佐々木弘綱ら新派の双方より「女子が優美な日本語・和歌に精進することへの賛美」がおこなわれるようになって以来、歌道は女子が第一に成すべき教養の一つであると見なされ、女子師範学校においては、家事裁縫のように必修科目とはならなかつたものの、和歌による歌会・歌道サロンが広く行われるようになり、下記の別項に見られるような女子大学における和歌研究の集中(歌書の女子大学への寄贈の集中)につながつた。</p>	<p>●兵役による歌壇における男性の不足 ●師範教育令による度重なる改革 ●第一次世界大戦 ●第二次世界大戦 ●検閲・出版統制(反戦歌、天皇・皇族・軍部批判歌への取り締まり強化) ●敗戦 ●GHQの指導に伴う、教員養成機関の師範学校から新制大学の教育学部・教養学部・学芸学部への改編・昇格</p>
<p>●以下、「赤門派」から「日本歌道振興会」まで全て、旧派(桂園派・御歌所派)と新派(正岡子規・根岸短歌会)との対立解消を意図した結社であるが、決裂し、前者の「和歌」と後者の「短歌」は異質のものとして現在に至る。</p>							
<p>赤門派(大学派・羽衣派) (御歌所派一門)</p>	<p>東京府 東京都</p>	<p>武島羽衣 大町桂月 塩井雨江</p>	<p>御歌所寄人 師弟関係</p>	<p>19c末～ ●雑誌『帝国文学』を発端とする。 ●武島羽衣が黒川真頼、物集高見、上田万年らに師事し、国学、国語学を体得。</p>	<p>●『美文韻文花紅葉』(1896) ●和歌・文語詩・擬古文体の保存と新時代に適合する変革を模索し、定型の新体詩との共存を図つた。 ●新古今集研究をも行う。(塩井雨江『新古今和歌集詳解』)</p>	<p>戦後に衰退</p>	<p>●第一次世界大戦 ●第二次世界大戦 ●口語詩・散文詩の隆盛、文語詩の衰退 ●御歌所の廃止</p>

<p>観潮楼歌会</p>	<p>東京府 東京都 文京区</p>	<p>森鷗外 ★新詩社一門 北原白秋 吉井勇 石川啄木 ★根岸短歌会一門 斎藤茂吉 伊藤左千夫 古泉千樫</p>	<p>対立関係</p>	<p>19c末～</p>	<p>●森鷗外の自邸観潮楼での歌会を観潮楼歌会と呼んだが、特に新派内対立の穏便な解決を図って1907年より開催された一連の歌会を言う。 ●旧派と新派の対立、新派内の対立は続いたものの、多くの各派歌人が参加した。ただし、新派主宰(与謝野鉄幹・正岡子規)は旧派歌道と異風新派への批判を緩めず、門下のみが積極的に参加した。</p>	<p>断絶 ●新派内の二派を呼び寄せた歌会については早くに廃止(1910) ●その他の鷗外主催の観潮楼歌会は、その後断絶(1922)</p>	<p>●新派内の二派の主宰者(与謝野鉄幹と正岡子規)の不和の深まりと二派からの旧派歌道への批判による歌会続行の困難 ●第一次世界大戦 ●森鷗外の死(1922)</p>
<p>菰野歌壇・冠峯社</p>	<p>三重県 (菰野)</p>	<p>佐佐木弘綱 佐佐木信綱 宇佐美祐次 宇佐美祐道 海上胤平 小出繁 高田顕允 土方興文 野呂金貞 稲垣金蔵 稲垣金治郎 稲垣重一 小林忠恕 小林令徳 羽田永清 太田軽舟 小菅敏治</p>	<p>師弟関係 血縁 佐佐木家 宇佐美家 稲垣家 小林家</p>	<p>1891頃～ ●祐之・祐次父子を中心に、顕允、興文、金貞、金蔵、金治郎らが活動を本格化。歌集に入集し始める。 1894 ●佐佐木信綱撰の『明治歌集』に祐次、顕允、金貞、重一の歌が入集。 1895～ ●宇佐美祐次を盟主とし、祐次と高田顕允を中心に冠峯社を結成。ほぼ全員が佐佐木弘綱・信綱門下。撰者に椎木吟社の海上胤平、次いで御歌所の小出繁を招く。</p>	<p>●ほぼ佐佐木弘綱・信綱門下であるが、兩名の歌風の影響で旧派寄りであった竹柏会よりも更に旧派和歌に寄っていた。但しこれは、古語の典雅を重視したという意味においてである。菰野を中心に、四日市、伊勢、鈴鹿など三重の名所詠を盛んに行う。弘綱が高く評価。松田久秋編・弘綱校閲の『伊勢名所和歌集』(1896)に祐次、顕允、金貞の歌を収録。 ●とりわけ宇佐美祐次(西之方)と高田顕允(東之方)が菰野歌壇の両雄と評される。(宮武恒樹『大日本歌人見立鑑』、1896) ●中でも高田顕允は、鈴鹿郡石薬師の佐佐木弘綱邸に度々通い、歌を学んだ。弘綱も、自邸から竹柏社四日市支部へ出張講義に出向いた折に、菰野歌壇・冠峯社の歌会や顕允宅を訪れ、交流を深めた。その後、伊勢・松坂の鈴屋派歌会が弘綱に歌会の監督者着任を要請し、受諾した弘綱は松坂に転居したため、菰野歌壇とはやや疎遠になった。</p>	<p>1899年頃から急速に衰退し、断絶 ●竹柏会よりも旧派的であったとはいえ、それは古語表現重視の面においてであり、桂園派・御歌所派の色は薄く、叙景歌・写生歌も多かった。そのため、一部のアララギ系歌人からは評価された。特に高田顕允は、北海道から九州までの新旧歌人らと交流し、自宅には現在も約八百枚の短冊が残る。しかし、急拡大する新派短歌の勢力に圧倒され、結果的には郷土歌壇の域を出るまでには至らなかった。</p>	<p>●中心歌人で大庄屋の高田顕允による経済的支援の弱体化、顕允の疲弊と作歌途絶、死(1902) ●新派短歌の隆盛</p>

竹柏会(竹柏園)	全国各地	佐佐木弘綱 高崎正風 佐佐木信綱 石樽千亦 前川佐美雄 木下利玄 川田順 九条武子 柳原白蓮 村岡花子 大塚楠緒子 五島茂 五島美代子 斎藤瀏 斎藤史 佐佐木治綱 佐佐木幸綱	師弟関係 血縁 佐佐木家 庶民	1898～ ●高崎正風に学んだ佐佐木信綱が中心となり、旧派和歌と新派短歌の決別の風潮に対する新たな短歌会の構築を意図。	●本部・各支部で月並会が繁栄。 ●信綱は「和歌」と「短歌」の語を使い分けているが、中島歌子・樋口一葉らの「萩の舎」による使い分けと同様である。 ●機関誌『心の花』刊行 ●信綱は結社の中心理念として「広く、深く、おのがじしに」を掲げ、旧派の伝統的・古典的風格を基盤としつつ、旧派・御歌所派和歌とも正岡子規門下の新派短歌とも異なる歌壇を形成した。 ●現在は、いわゆる「短歌結社」として機能している。旧派の歌道伝授はおこなっていない。 ●佐佐木信綱『日本歌学史』・『和歌史の研究』)	存続 ◆21世紀以降も存続。全国に会員がおり、最も安定的に存続している短歌結社の一つとなっている。	
常磐会(常盤会) (御歌所派一門)	東京都 神奈川県 静岡県 島根県	賀古鶴所 森鷗外 佐佐木信綱 大口周魚 小出祭 井上通泰 山縣有朋	御歌所寄人 師弟関係	1906～ ●左記の上から6名が料亭「常磐」に集い、新たな和歌会の形成を相談。	●山縣有朋の後援を受け、飯田町の賀古邸と山縣有朋の椿山荘とにおいて歌会を交互開催。 ●賀古鶴所・森鷗外をはじめ医師・医学者が多く参加した。 ●1909年2月21日の歌会は、山縣有朋の別荘である古稀庵で行われた。(森鷗外『古稀庵記』) ●当時決定的になりつつあった旧派歌道とこれを批判した正岡子規一門との対立の積極的な解消を意図したが、失敗に終わった。 ●井上通泰は、東京の常磐会・御歌所での活動(および眼科医院の開業)以前は、岡山で歌人(かつ医者)として大成。御歌所派の項を見よ。	戦前に解散 ●竹柏会が新派短歌側に大いに譲歩したのに対し、常磐会は二条派・桂園派・御歌所派の風格に立って新派一門に譲歩を迫るものであった。竹柏会とは対極的な結末を迎えることとなった。 ●井上通泰の編集による『常磐会詠草』は現在、東京大学附属図書館に所蔵されている。	●第一次世界大戦 ●山縣有朋の死(1922) ●賀古鶴所(1931) ●正岡子規・根岸短歌会・アララギ派一門からの批判と同一門の全盛 ●佐佐木信綱・竹柏会一門による新派短歌への専心
歌道普及会 (新派短歌一門だが、親旧派)	東京都	新派歌人 吉井勇 北原白秋	師弟関係 庶民	20c初頭～	●旧派和歌の作法・由緒など歌道普及のために設立された。 ●『和歌の作りやう』・『新派和歌入門』・『和歌の手引』など、歌道指導書を刊行。	戦前に廃止	●正岡子規・根岸短歌会・アララギ派一門からの批判と同一門の全盛 ●第一次世界大戦 ●日中戦争 ●第二次世界大戦に向けての戦時体制・国家総動員体制突入のため

<p>日本歌道普及協会 (新派短歌一門だが、親旧派)</p>	<p>東京都全国各地</p>	<p>新派歌人</p>	<p>師弟関係 庶民</p>	<p>戦中～</p>	<p>●『続 新萬葉』を編纂。</p>	<p>戦後に廃止</p>	<p>●正岡子規・根岸短歌会・アララギ派一門からの批判と同一門の全盛 ●第二次世界大戦 ●敗戦</p>
<p>日本歌道振興会 (新派短歌一門だが、親旧派)</p>	<p>東京都全国各地</p>	<p>新派歌人 千早正善 林由紀江 鈴木雄次郎</p>	<p>師弟関係 庶民</p>	<p>戦中～</p>	<p>●新派歌壇「白菊会」などを統括した。 ●林由紀江『若竹選歌集』</p>	<p>廃止(1982) ●ただし、門下生が1983年より「ふれあい短歌会」として継承。現在は、同短歌会の親族が歌集編纂などに尽力。</p>	<p>●正岡子規・根岸短歌会・アララギ派一門からの批判と同一門の全盛 ●千早正善と門下生の死</p>

門跡還俗による宮家増設と門跡寺院歌壇の継承、近代宮家歌道の粗製濫造・破綻と御歌所派への吸収消滅

流派名	本拠地	代表的歌人・歌論者・当主	流派の主体	流派の成立時期・成立事情 (cは世紀)	特徴	衰退・分裂・断絶の時期 (cは世紀。血統断絶の場合、掲載可能な限りその旨を記す。) ●衰退・分裂・断絶に至る記述 ◆は存続についての記述	衰退・分裂・断絶の理由 ●最終断絶以外(一時的な衰退など)の理由も記載した。 ◆は存続についての記述
宮家の歌道						<p>●幕末から明治にかけて、廃仏毀釈の風潮などに伴い、出家していた皇族が還俗し、宮家が多数増設された。多くの宮家が門跡寺院歌壇を母体としていたため、現在でも後裔歌壇は仏教色が強い。北白川宮家のように、修験道歌壇を母体としている宮家もあった。また、1947年に皇籍離脱した旧11宮家の全てが、かつての北朝天皇系世襲親王家の伏見宮家の男系子孫で、かつ皇統正嫡でも堂上・公家歌道家でもない歌道の系譜であり、その矜持から、天皇家・公家・堂上家よりも京極派・冷泉派の歌道・歌書をも比較的良好に保持し続けた家が多い。また、初代当主が還俗前に中世歌道の伝授を受けている家では、皇籍離脱後も比較的良好に歌道の保存がおこなわれている。</p> <p>●しかし、ほとんどの宮家では、皇族還俗直後に宮家歌道を乱造して破綻しており、その歌道は和歌史上の意義には乏しい。家伝・家宝(歌道伝授・歌書)を利用した急ごしらえの宮家歌道は、どの歌道派閥とも言えぬ根無し草に陥った。天皇と非皇族・非公家系藩閥官僚と国学者が結託し、二条派・桂園派の本体を母体として成り立っていた明治新政府の御歌所・宮内省歌道に、及ぶべくもなく、対抗できるはずもなかった。政府の神道・仏教政策にも翻弄され、また、宮家の当主たち自ら新宗教や陰謀、犯罪に関わるなど、生活が破綻する中、歌道に勤しむ間もなかった。(新宗教や犯罪への関わりは、皇籍離脱後も同様であった。)</p> <p>●こうして、多くの宮家歌道は、急速に御歌所派に吸収されるか、近現代短歌に移行し、宮家の文化生活はほぼ当初から西洋風サロンそのものとなった。だが、このことが、現在に至るまでの(旧)宮家どうしの親睦を促した。</p> <p>●今上天皇と旧11宮家との共通の男系祖先天皇は、現在より20世代・650年以上前の北朝第3代崇光天皇であり、今上天皇も北朝の血統である。</p> <p>●南北朝時代の13の勅撰集のうち11を独占したのは南朝の二条派歌道であったが、南北朝時代末期には北朝にも二条派歌道が流入しており、足利幕府による南朝・後南朝根絶作戦とは別に、北朝や北朝系宮家であっても南朝・後南朝の和歌文化を受け入れていた。</p> <p>●現在では、二条派・京極派・冷泉派といった対立はほぼ存在していないが、御製・皇族短歌が近現代化して一般国民の短歌結社の歌風に接近したのに対し、これら宮家には依然として前近代的な歌道・歌風・歌会を続ける者が存在する。</p> <p>●現在は、歌道師範家として積極的に天皇・皇族に歌道を伝授するというかつてのような形式は採っていない。</p> <p>●皇籍離脱とならなかった秩父・高松・三笠の三宮家、及び常陸・桂・高円・秋篠の各宮家は、文語表現を多用しつつも国民語・東京標準語をも使用した歌風で、歌会始などで親しまれている。</p> <p>●近世までの宮家・堂上公家・私家・地下歌道家などが採っていた秘传的・古今伝授的・サロンの歌道伝授の形式は、これら旧宮家よりもむしろ師弟に血縁関係のない一部の巫女・芸妓の世界や民間の和歌サロンにおいて見られる。</p> <p>●これら11宮家の中には、宮内庁や近現代の多くの短歌結社と同様に、「和歌」を「前近代短歌」、「短歌」を「近現代短歌」の意に用いる者も多く、「現在の御製・皇族のお歌は短歌であって和歌ではない」といった発言も、旧宮家歌人へのインタビューにおいてしばしば聞かれる。</p>	

<p>中川宮家→賀陽宮家→久邇宮家</p>	<p>山城国 京都府 東京府 東京都</p>	<p>久邇宮朝彦親王 久邇宮邦彦王 香淳皇后</p>	<p>血縁(天皇・皇族) 伏見宮邦家親王系</p>	<p>1863 中川宮 1864 賀陽宮 1875 久邇宮</p>	<p>●尊融(のちの中川宮、朝彦親王)は、青蓮院門跡・天台座主であった頃、同門跡・同座主であった慈円の和歌に触れている。また、陰謀の疑いで逮捕される前は、国事御用掛として、同職を共に務めた錚々たる歌道家出身者(二条・徳大寺・三条西・中山・姉小路家など)の歌道伝授を受けることとなった。 ●また、三条実美や姉小路公知ら尊皇攘夷急進派公家や長州藩が攘夷親征(大和行幸)強行を計画した際、中川宮は、孝明天皇の意を汲み、会津藩、薩摩藩ら公武合体派や、京都所司代・稲葉正邦が藩主の淀藩、徳島藩、岡山藩、鳥取藩、米沢藩と共に八月十八日の政変(1863)を起こす。五摂家や平田国学の項も見よ。</p>	<p>存続 ◆子女が古今集以来の優雅・典麗な歌道を継承</p>	<p>(A) ◆この項に掲げる各宮家は、断絶の有無にかかわらず、以下の影響を受けている。 ●御歌所派への吸収 ●関東大震災(1923) ●兵役 ●第一次世界大戦 ●第二次世界大戦の戦災(東京大空襲) ●皇籍離脱(1947年10月14日) ●皇籍離脱に伴う民間人への編入及び財産税の賦課による歌道・歌書関連資産の遺失 ●皇室財産の国庫帰属 ●標準国語の変化(東国方言の東京標準語化) ●御製・皇族短歌の近現代化、一般国民の短歌結社の歌風との接近による、伝統的・秘传的歌道の異議の希薄化 ●その他、該当の宮家に独自の要因</p>
<p>山階宮家</p>	<p>山城国 京都府 東京府 東京都</p>	<p>山階宮晃親王</p>	<p>血縁(天皇・皇族) 伏見宮邦家親王系</p>	<p>1864</p>	<p>●宮晃親王は勸修寺門跡であった。</p>	<p>断絶(1987)</p>	<p>(A)に同じ ●直系・家断絶(1987)</p>
<p>華頂宮家</p>	<p>山城国 京都府 東京府 東京都</p>	<p>華頂宮博経親王 華頂宮博厚親王</p>	<p>血縁(天皇・皇族) 伏見宮邦家親王系</p>	<p>1868</p>	<p>●博経親王は知恩院門跡であった。</p>	<p>断絶(1924)</p>	<p>●血統断絶</p>

<p>聖護院宮家・ 照高院宮家→ 北白川宮家</p>	<p>山城国 京都府 東京府 東京都</p>	<p>聖護院宮嘉言 親王 北白川宮智成 親王 北白川宮能久 親王 北白川宮能久 親王妃富子</p>	<p>血縁(天皇・皇族) 伏見宮邦家親王 系</p>	<p>1868 聖護院宮・照高 院宮 1870 北白川宮</p>	<p>●1868年に聖護院宮信仁入道親王が還俗し、1870年に北白川宮智成親王を称して北白川宮を創設。熊野三山検校は廃絶となり、聖護院歌壇は熊野三山社家・北白川宮家・近衛家などに流入する。 ●聖護院宮は上冷泉流・藤谷流歌道の流れを汲む伊勢外宮御師来田家の檀那であったため、これらの歌道流派が流入している。</p>	<p>存続 ◆子女(全員が女子)が『古今集』以来の古語による優雅・典麗な歌道・歌会を継承。 ◆宮家創設後、戊辰戦争に際し能久親王が盟主となった奥羽越列藩同盟の崩壊に始まる宮家衰亡の危機を乗り越えつつ、今日まで歌道を良好に保存。聖護院・熊野三山検校・九条流二条家・近衛流近衛家・上冷泉家・藤谷家・御歌所派の歌壇のいずれの系譜とも伝授・相伝関係で結ぶことができる極めて稀有な家である。 →「熊野三山検校～」の項を参照。</p>	<p>(A)に同じ</p>
<p>梨本宮家</p>	<p>東京都 東京都</p>	<p>梨本宮守脩親 王 梨本宮守正王 梨本宮守正王 妃伊都子</p>	<p>血縁(天皇・皇族) 伏見宮貞敬親王 系</p>	<p>1868 梶井宮 1871 梨本宮</p>	<p>●守脩親王は円満院門跡であった。 ●守正王妃伊都子は中島歌子らの「萩の舎」に参加した。</p>	<p>断絶(1976)</p>	<p>(A)に同じ ●守正王に対するA級戦犯指定・公職追放 ●男系断絶(1951年の守正王の逝去) ●血統断絶(1976年の守正王妃伊都子の逝去)</p>
<p>東伏見宮家→ 小松宮家</p>	<p>山城国 京都府 東京府 東京都</p>	<p>小松宮彰仁親 王 小松輝久</p>	<p>血縁(天皇・皇族) 伏見宮邦家親王 系</p>	<p>1870 東伏見宮 1882 小松宮</p>	<p>●彰仁親王は仁和寺門跡であった。 ●一代で廃絶。</p>	<p>断絶(1903) ●小松輝久が小松宮家の祭祀・資産を継承するが、歌道はおこなっていない。</p>	<p>●血統断絶</p>
<p>賀陽宮家</p>	<p>山城国 京都府</p>	<p>賀陽宮邦憲王</p>	<p>血縁(天皇・皇族) 久邇宮朝彦親王 系</p>	<p>1900</p>	<p>●邦憲王は伊勢神宮祭主であったが、外宮歌壇参加の形跡は見られない。</p>	<p>断絶(1986) ●これ以降、直系でない民間人家系としての男系存続のため、以下省略。</p>	<p>(A)に同じ ●直系・家断絶(1986)</p>

東伏見宮家 (伏見宮家の分家)	山城国 京都府 東京都 東京都	東伏見宮依仁親王	血縁(天皇・皇族) 伏見宮邦家親王系	1903	●一代で廃絶。	断絶(1955) ●東伏見宮家の祭祀継承のため、久邇宮邦彦王第3王子邦英王が東伏見の家名を名乗り、伯爵家となる(1931)。その後、青蓮院門跡の門主となり、法名を慈治と称する(1945)。歌道は特になが、仏教美術と音楽に関する活動を行う。一方、古都税騒動や、天台宗教団との対立(教団離脱の画策や門主世襲化の実現)など、多くの政治的・宗教的事件に関わる。	(A)に同じ ●男系断絶(1922年の依仁親王の逝去) ●血統断絶(1955年の依仁親王妃周子の逝去) ●東伏見慈治の遷化(2014)
朝香宮家	山城国 京都府 東京都 東京都	朝香宮鳩彦王	血縁(天皇・皇族) 久邇宮朝彦親王系	1906	●省略	存続 ◆民間人家系としての男系存続のため、詳細省略。	(A)に同じ
竹田宮家	東京都 東京都	竹田宮恒久王 竹田宮恒徳王 竹田恒正 竹田恒和 竹田恒泰	血縁(天皇・皇族) 北白川宮能久親王系	1906	●竹田恒泰氏はテレビなどのメディアにおいて現在最も国民に知られている「旧皇族」である。日本史・皇室・皇統・有職故実についての著書が多数あり、しばしば和歌・歌道についての言及もおこなっている。ただし、歌道継承者・歌人・歌道師範ではない。	男系は維持 ◆歌道伝授は衰退したが、スポーツ振興活動・メディア活動などを行う。	(A)に同じ
東久邇宮家	東京都 東京都	東久邇宮稔彦王	血縁(天皇・皇族) 久邇宮朝彦親王系	1906	●省略	存続 ◆男系を維持	(A)に同じ ●公職追放
高松宮家	東京都 東京都	高松宮宣仁親王	血縁(天皇・皇族) 大正天皇系	1913	●1913年に断絶した有栖川宮家の祭祀・資産を継承。	断絶(2004)	●血統断絶

戦後における短歌・歌会始・披講の国民事業化と、民間の和歌鑑賞会・披講会・『万葉集』関連団体の増加(歌道としての和歌から鑑賞・披講としての和歌へ)

流派名	本拠地	代表的歌人・歌論者・当主	流派の主体	流派の成立時期・成立事情 (cは世紀)	特徴	衰退・分裂・断絶の時期 (cは世紀。血統断絶の場合、掲載可能な限りその旨を記す。) ●衰退・分裂・断絶に至る記述 ◆は存続についての記述	衰退・分裂・断絶の理由 ●最終断絶以外(一時的な衰退など)の理由も記載した。 ◆は存続についての記述
歌会始	東京都	天皇 皇族・宮家 宮内庁 文部科学大臣 在野の著名歌人(アララギ系など) 日本芸術院会員 一般国民	同左	1947年 ●御歌所が廃止され、在野の歌人に選歌が委嘱された。	●題は、国民に分かりやすい平易なものに改めることとされた。(「社頭寒梅」・「松上雪」などから「あけぼの」・「春山」などへ改められた。) ●宮内庁は、「和歌」の呼称を「短歌」に改め、歌道・歌学の系譜を引く従来の和歌と近現代の俗語・漢語・カタカナ語・流行語を使用する新派短歌とをより区別するようになった。 ●現在、二条流や冷泉流と呼ばれていた歌道は、天皇・皇族には直接には受け継がれておらず、旧堂上家・旧宮家・旧社家・巫女・芸妓に受け継がれている。 ●佐佐木信綱・竹柏会門下からは、川田順が歌会始選者に召されている。	存続 ◆ただし、宮内庁は歌道・歌学という呼び方をしていない。 ◆現在は、従来の歌道・歌学の系譜とは無関係の短歌の入選がほとんどである。	
向陽会 (冷泉派一門)	京都府 東京都	冷泉為弘	旧華族 冷泉家他	●明治天皇勅命により発足。	●宮中よりお題を賜り、和歌を詠み、宮中に捧呈する。 ●主に華族会館より改称した霞会館で活動。	存続 ◆伝統和歌のみならず近現代短歌の披講もおこなう。	
披講会	東京都	坊城俊周 坊城俊成 坊城俊在 堤公長 近衛忠大	旧華族 血縁(旧華族) 坊城家 近衛家	●いわゆる披講会は民間にも存在するが、普通、単に「披講会」とは、宮中披講会を言う。	●旧華族の子弟が宮内庁式部職の嘱託として務める。 ●綾小路流により行う。 ●近世までは歌道が家業とは言えなかった華族の家が、旧派和歌の衰退と共に、御歌所・宮内省の歌道職務を任じられたり、自ら旧派和歌の会派をひらくようになった。その家格は、堂上公家の中では下位の名家や半家であった。坊城家や三室戸家がそのような家であったが、坊城家は歌人を多く輩出しないまでも、平安時代以降、披講の家である。	存続 (披講の流派。) ◆伝統和歌のみならず近現代短歌の披講もおこなう。	

綾小路流披講	京都府 東京都	主に二条派一門	旧華族 宇多源氏流綾小路家	●二条流・飛鳥井流とも呼ぶが、この場合、披講の側面のみならず、藤原北家二条流・飛鳥井流歌道(の披講流派であるとの自負)の側面も強調される。しかし、披講の担い手は、宇多源氏血統の綾小路家である。	●現在も、宮中歌会始や熱田神宮・津島神社の献詠祭が綾小路流披講を採用。	存続 (披講の流派。) ◆伝統和歌のみならず近現代短歌の披講もおこなう。	
ことの緒会 (綾小路流)	愛知県 名古屋市	綾小路聖山	血縁(旧華族) 宇多源氏流綾小路家	●綾小路流披講の主流。	●宮中歌会始や熱田神宮・津島神社の献詠祭において綾小路流披講を伝承。	存続 (披講の流派。) ◆伝統和歌のみならず近現代短歌の披講もおこなう。	
冷泉流披講 (冷泉派一門)	京都府	主に冷泉派一門	血縁(旧華族) 冷泉家 師弟関係	●冷泉家の披講作法。	●冷泉家の歌会が有名。	存続 (披講の流派。) ◆伝統和歌のみならず近現代短歌の披講もおこなう。	
菊栄親睦会	東京都	血縁(天皇・皇族・旧宮家)	血縁(天皇・皇族・旧宮家)	1947 ●11宮家の皇籍離脱に伴い昭和天皇の勅意により発足。	●天皇・皇族・旧宮家の親睦。	存続 ◆和歌に関する親睦・交流あり。	
堂上会	東京都	旧堂上家	血縁(旧堂上家)	●旧堂上家出身者の親睦会。	●向陽会のような和歌専門の会ではないが、旧歌道家出身者も参加している。 ●主に華族会館より改称した霞会館で活動。	存続 ◆和歌に関する親睦・交流あり。	
紫紅会	東京都	旧公爵・旧侯爵	血縁(旧公爵・旧侯爵)	●旧公爵・旧侯爵出身者の親睦会。	●向陽会のような和歌専門の会ではないが、旧歌道家出身者も参加している。 ●主に華族会館より改称した霞会館で活動。	存続 ◆和歌に関する親睦・交流あり。	

●現在、民間・一般市民による和歌関連サークルは、『万葉集』関係の団体がほとんどであり、以下に挙げたのはその一部にすぎない。ただし、『古今集』を専門的に扱うサークルも、少ないながらも存在する。

年齢層は高齢者が多く、『新古今集』を専門的に扱うサークル、若年者が中心となっているサークルは、ほとんど存在していないと考えられる。

また、近現代短歌を詠むサークルは多数存在するが、和歌鑑賞だけでなく和歌詠進活動・歌合・歌会をおこなっているサークルは、別項(下部)の女性専用和歌サークルにいくつか確認できる。

これらの偏りは、世代・世相・社会風潮・時代性・少子高齢化など、様々な要因から来ていると考えられる。(戦中・戦後・高度成長期を生きた大多数の高齢者による老後の写生・自然思慕の情から来る『万葉集』的なものへの要求と、極めて限られた(貴賤両極端な)出自・成育環境・趣味嗜好に生きる女子による格式・儀式性の保守の情から来る『古今集』及び耽美的・官能的文芸の賛美の情から来る『新古今集』的なものへの要求との分立。)

●以下に挙げた「万葉(集)の会」や「万葉(集)を読む会」のほかに、「万葉(集)を学ぶ会」・「万葉(集)に親しむ会」・「万葉会」・「万葉(集)研究会」・「万葉(集)勉強会」・「万葉(集)学習会」などの名を冠する『万葉集』関係のサークル・団体が存在し、高齢者に人気である。ウェブサイトを持たないサークル・団体も多い。

●このほか、次のような名称を持つ和歌関連団体が、各地域・各大学などに多数存在している。ほとんどの団体に同名の別団体があり、個性的な名称の団体は希少となっている傾向が強い。和歌文学会・和歌文学研究会・和歌史研究会・古典和歌会・古典和歌研究会・古典和歌文学会・古典和歌文学研究会・伝統和歌研究会・伝統和歌文学会・伝統和歌文学研究会・和歌学習会・和歌文学学習会・古典和歌学習会・古典和歌文学学習会など。

公家・武家伝統文化研究会	東京都	林純一 林香純	民間 ●主な年齢層:50~80代	●主宰者は薫香・香雅流・宗匠	●歌道伝授に該当する活動はおこなわないが、披講をおこなっている。	存続 ◆歌道伝授はなし	
全国万葉協会・全国万葉フォーラム・万葉の大和路を歩く会	奈良県 京都府 東京都	犬養孝 富田敏子	民間 ●主な年齢層:50~80代	●全国万葉協会が、所属する全国の万葉関連団体を統括。 ●所属団体は、持ち回りで万葉フォーラムを開催。	●万葉学者・国文学者の犬養孝に師事した富田敏子により設立された。 ●全国の民間の万葉関連団体を統括し、各団体の交流会を主催する。	存続 ◆歌道伝授はなし	
万葉(集)の会	全国各地	各会の代表者と会員	民間 ●主な年齢層:40~90代	20c後半に多数発足 ●同名の組織が全国各地に存在しており、ほとんどが高齢者によって運営されている。それぞれ地名を冠して呼ぶことが多い。(「蕪の浦万葉の会」など。)	●『万葉集』について学ぶ。 ●万葉の故地めぐり。	存続 ◆歌道伝授はなし	

万葉(集)を読む会	全国各地	各会の代表者と会員	民間 ●主な年齢層:40~90代	20c後半に多数発足 ●同名の組織が全国各地に存在しており、ほとんどが高齢者によって運営されている。それぞれ地名を冠して呼ぶことが多い。(「彦根万葉集を読む会」など。)	●『万葉集』について学ぶ。 ●万葉の故地めぐり。	存続 ★彦根万葉集を読む会 男性10名 女性39名 ★伊丹万葉集を読む会 男性3名 女性19名 ★(調布)万葉集を読む会 男性3名 女性9名 ★若園万葉集を読む会 男性3名 女性11名 ★(宮前)万葉集を読む会 男性5名 女性22名 ◆歌道伝授はなし	
かりほ会→若菜会	三重県名張市	山田得治	民間 ●主な年齢層:60~90代	1981~	●『万葉集』について学ぶ。 ●万葉の故地めぐり。	存続 男性2名 女性12名 ◆歌道伝授はなし	
正徹を顕彰する会	岡山県小田郡矢掛町	土井重光	民間 ●主な年齢層:60~90代	2001~	●正徹・招月庵流の在野専門家が集う。 ●作歌や正徹顕彰書道もおこなっている。 ●「平安和歌四天王」の一人である澄月や、御歌所首座伊東祐命などの専門家もいる。	存続 男性21名 女性51名 ◆歌道伝授はなし	
万葉の花とみどり	埼玉県比企郡小川町		民間 ●主な年齢層:60~90代	2003~	●NPO法人仙覚万葉の会による運営で、小川町立図書館を拠点に講座を開催。	廃止 ●歌道伝授もなし	

星と森披講学 習会	東京都 京都府	伊藤一夫 披講の専門家 上掲の大学の 教員	民間 ●主な年齢層:50~ 80代	2004~	<ul style="list-style-type: none"> ●民間の披講の研究会 ●作歌もおこなっている。 ●戦後に盛んになっていた旧公家による一般公開の披講が2007年以降は行われなくなり、当学習会が民間ながら大きな役割を担うこととなった。 ●東京成徳大学などの上掲の大学教員も活動をおこなっている。 	<p>存続 約70名 ◆歌道伝授はなし</p>	
鞆の浦万葉の 会	広島県 福山市	戸田和吉	民間 ●主な年齢層:50~ 80代	2004~	<ul style="list-style-type: none"> ●講師を招いての万葉講演会、万葉の故地めぐり。 	<p>存続 ◆歌道伝授はなし</p>	
古今伝授の里 フィールド ミュージアム	岐阜県 郡上市 大和町	和歌文学館 東氏記念館 大和文庫	民間	2005~	<ul style="list-style-type: none"> ●古今伝授・東家関係の歌書・歌集・史料の所蔵量は日本最大。 	<p>存続</p>	

近世の上流社会における女流和歌の空白時代と地下女性への桂園派歌道の流入、および近世・近代の花街・傾城・三業地(置屋・待合茶屋・料亭)・旅館における芸妓・女将歌壇の繁栄

流派名	本拠地	代表的歌人・歌論者・当主	流派の主体	流派の成立時期・成立事情(cは世紀)	特徴	衰退・分裂・断絶の時期(cは世紀。血統断絶の場合、掲載可能な限りその旨を記す。) ●衰退・分裂・断絶に至る記述 ◆は存続についての記述	衰退・分裂・断絶の理由 ●最終断絶以外(一時的な衰退など)の理由も記載した。 ◆は存続についての記述
-----	-----	--------------	-------	--------------------	----	---	--

●16世紀初頭から18世紀初頭までのおよそ200年の間、少なくとも和歌御会に女性は全く詠進していない。この時期は現在、旧宮家・旧華族・芸妓の歌道専門家の間で「女流和歌の空白時代」と呼ばれている。詳しくは、永正7年10月25日から享保17年1月24日までのおよそ220年とする研究がある。(「近世和歌御会における女性の詠進復活に関する一考察」 坂内泰子 国語と国文学66(3) 東京大学国語国文学会編 1989-03)
この200年間は、女性における和歌文化の展開が著しく滞っており、和歌御会以外の公家・武家の歌会における女性の活動も芳しくない。この時期は、勅撰集の終焉後の堂上家の男系継承に基づく歌道の確立、古今伝授の全盛期に当たる。
ただし、空白の200年を過ぎると、性別・身分を超えて寺子屋などで歌道を学ぶことができるようになってゆく。

●近代になり、新派歌壇においては、女性も「紫式部」・「清少納言」・「伊勢」・「相模」などの通り名ではなく本名で作歌するようになった。ただし、旧派歌壇においては今なお本名を明かさぬ女性もいる。

●近代・戦前に新派の近代短歌界のみならず旧派和歌界においても女性歌人が急増した要因には、歌道家である多くの皇族・宮家・旧宮家・旧公家・旧武家・旧社家の多くの男系断絶、華族制度の整備・華族への東京移住命令・秩禄処分や職業の一変による華族男性の困窮と自殺の増加及び伝統的家業としての歌道の衰退、徴兵と戦死による男性歌人人口の急減、神社の増設と近代社格制度・近代的巫女の整備による巫女への歌道の伝播などが挙げられる。
男系存続の場合も、歌道は生計・家柄・貴種維持に耐えうる職業ではなくなり、家主・家長・当主が貴族院議員への就業や軍務を開始したため、専業主婦や女子が家元・銃後として歌道を継承するほかなくなっていた。
さらに、戦後の一夫一婦制の徹底により男系断絶が加速し、戦後には、旧華族の歌道家の男性の多くが会社員や公務員として一般家庭の世帯主男性と同様に就業した。

●しかし、近代短歌(明星派・アララギ派など)の女性歌人がまず上・中流階級の女性から順に増加した要因の一つには、上掲の要因のほかに、華族女性の性的スキャンダルがあった。華族男性や歌人男性がそれまでの伝統的家職・歌道に代わる新たな家職・短歌を模索する中、それまでそれら肉親・親族の男性から歌道を学んでいた華族女性たちの中から、夫以外の歌人男性・芸の師の男性と肉体関係を持つ有閑マダムが現れ、性的スキャンダルを引き起こした。
吉井徳子(歌人吉井勇の妻)・斎藤輝子(歌人斎藤茂吉の妻)・近藤泰子(白洲正子の姉)らが歌人や実業家である夫に隠れて不貞をはたらいた「ダンスホール事件」、大正天皇の生母愛子の家である柳原家の柳原白蓮による姦通事件などは、当時も有名であった。
姦通罪が存在する時代でありながら、台頭する近代短歌界において師弟の男女の間で短歌指導と肉体の交換が行われることは珍しくなく、むしろ上流華族階級女性に蔓延した習慣であった。吉井勇・斎藤茂吉ら妻に裏切られた歌人・実業家の多くは激怒の上、妻を離縁し、時に追放した。華族からの追放処分を受ける女性も現れた。ところが、その斎藤茂吉に師弟関係を越えて身を任せた永井ふさ子も、茂吉の死後に茂吉と交わした書簡と共にその性的関係を世間に公表した。ただし、華族以上に皇室に近縁である宮家にそのような風紀凋落の実態があったことは、考えがたい。
しかし、それよりもやや保守的な女性歌壇は、「萩の舎」・「彩雲会」・「鹿鳴歌会」・「赤銅御殿」などを中心に充実し、旧派と新派の程よい折衷を模索していった。ただし、それらも、歌道の研究会・伝授相伝の場である以前に、近代的な社交と饗宴の場であることに変わりはない。

●一方で、女性への歌道の開放が女性の性の開放と結びついていない最も保守的な旧派歌道の一派は、このようないわゆる「不良華族」女性と近代短歌との関係とは裏腹に、巫女歌壇や比丘尼御所歌壇、中下級の家政婦・派出婦においていっそう閉鎖的・秘密的に伝承されることとなり、処女信仰・貞淑観念とさえ結びついた。多くの近代神社の巫女歌壇や比丘尼歌壇、家政婦歌壇においては、歌道伝授を受けるには処女でなければならない暗黙の了解さえ生じた。彼女らは本名を世間に明かすこともなかった。この系譜の歌道は、戦後に有能な中流・下流の庶民女性に受け継がれ、「女風会」「五色花会」以降の秘伝的継承に至る。

●もっとも、近世初期以降、近衛家・烏丸家・飛鳥井家など旧派の歌道師範家の男性が遊郭通いを繰り返しており(隆慶一郎の『吉野悲傷』に描かれる近衛信尋や滝沢馬琴の『羈旅漫録』に描かれる烏丸光広が有名)、この頃から歌道が花街の芸妓・舞妓などに流入している。しかしながら、この「女流和歌の空白時代」において、旧派歌道は芸妓・舞妓・女将・下女、そして比丘尼や地方神社の巫女・奉仕女らに流れ込むばかりで、のちに上級公家や財閥の女性が和歌・短歌の主要な担い手となるには、皮肉にも、華族女性自身による奔放なスキャンダルと一体の新派短歌の主唱を待たねばならなかった。

芸道の教養ではなく、売春を専ら仕事とする公娼や私娼に和歌・短歌が流れ込んだのは、奇しくもこれら華族女性の奔放な外出と近代的社交活動によるところが大きく、公娼や私娼との歌道談義は珍しくはなかった。一方で、堂上公家と交遊した芸妓・舞妓の多くは、売春を営まず、のちの公娼や私娼ではないため、芸妓・舞妓の旧派歌道は近代から戦前・戦中にかけて廃れた。

1946年のGHQの公娼廃止指令によって、ほぼそのまま公娼の活動は赤線に、私娼の活動は青線に移行したが、ここで売春宿の女亭主と所属する娼妓との師弟関係において行われた歌道は、ほとんどが新派短歌であった。政府・GHQの検閲・統制下にあったにもかかわらず、ここには多くの華族の子女や旅館・料亭の女将・女中らが参加し、歌道・芸道を表看板として多くの男性客と遊興している。1958年、売春防止法の施行により、性産業はもはや歌道の教養とは無縁となり、あらゆる赤線・青線地帯で歌道が散逸した。

但し、西日本(京都以西)と東日本(京都以東)では、公娼(赤線)および私娼(青線)の様相は異なる。西日本では、多くの公娼・私娼が部落差別問題と極めて密接に結びついており、公娼区域(赤線)・私娼区域(青線)は近世の穢多・非人の居住地域に、またはそれに隣接して設置された。一方、東日本では、「部落」とは単に「村落」の意味しか持たず、公娼・私娼区域は非常に人工的・近代的な区画整備によって設置されたが、このような部落問題の少なさが、かえって華族の子女や旅館・料亭の女将・女中らの同区域への進出を招き、多くの密通・姦通事件を生み出した。

●このような近代の華族による短歌界の激動の時代の中にあっても、和歌・短歌は、旧公家・旧武家の女子に限らず庶民の女子にも着実に継承されていった。幕末から近代にかけて、和歌は日本女性の優美さに適合する芸道として盛んに推奨され、佐佐木信綱や森鷗外らによる女性の歌壇参加への賛美と後援によって、歌壇の門戸は女性にいっそう開かれていった。

<p>江戸後期から 明治初期の女 性歌壇 (桂園派を中心 に諸派折衷)</p>	<p>山城国 京都府 江戸 東京都 東京都 全国</p>	<p>小河秀子 魚住こま 石井波子 伊奈るい 大田垣蓮月 野村望東尼 荒瀬百合子 飯田汐子 和泉竹子 高島式部 桜木太夫 上田ちか子 有村連壽尼 大池妙子 小笠原三千子 小野琴子 小野照子 小野愛子 上野兼子 奥村五百子 伊藤梅子 浮田夏月女 松尾多勢子 柳原愛子</p>	<p>女性による</p>	<p>江戸後期～戦後</p>	<p>●女流和歌の空白時代が過ぎると、次第に江戸派・鈴屋派などに十歳前後で入門する女子が増えた。 ●香川景樹の桂園派を中心に、上田秋成・小沢蘆庵・千種有功・大隈言道・能勢春臣・長澤伴雄・近藤芳樹・六人部是香ら当時の有力歌人に師事し、各々の女性独自の歌壇を形成した。 ●桜木太夫や上田ちか子など、太夫・芸妓・舞妓出身の女流歌人も増え、ここから花街全般に歌道が流入することになる。 ●祇園や島原には、大田垣蓮月や花街の女流歌人(桜木太夫や上田ちか子など)を中心に、橘曙覧や村上忠順ら男性歌人をも巻き込んだ歌壇が形成された。 ●花街歌壇は、多くの男子の養育の場ともなった。大田垣蓮月は出家後、18歳だった富岡鉄斎(日本最後の文人と言われる)を小姓として迎え、教育した。</p>	<p>存続 ◆神子・巫女・太夫・芸妓・舞妓・芸娘・女子学生・主婦など、あらゆる分業化された女性の職業と立場において継承されていると言え、断絶とは言えない。</p>	<p>◆存続はしているが、以下の打撃は受けた。 ●国語の変化 ●児童福祉法の制定 ●芸妓団体の会社化と芸妓の会社員化、花街運営の合理化・効率化による歌道の切り落とし ●人材減少</p>
---	--	--	--------------	----------------	---	---	--

<p>山城・京都・京都府の花街 花街 青楼 置屋 お茶屋 (上七軒芸妓・祇園甲部芸妓・祇園東芸妓・先斗町芸妓・宮川町芸妓・嶋原芸妓)</p>	<p>芸妓 太夫 舞妓 芸子 桜木太夫 上田ちか子 吉野太夫 夕霧太夫 中村芳子 高尾太夫</p>	<p>女性のみ 血縁不要 師弟関係</p>	<p>●近世・近代の地下伝授によって、一部の歌道が花街に流れ着いた。 ●桜木太夫・上田ちか子ら太夫・芸妓・舞妓・芸者出身の女流歌人が増え、そこからさらに庶民の女性に歌道が普及した。 ●六条三筋町(後に嶋原に移転)の太夫・吉野太夫の馴染み客には近衛信尋がおり、相互に和歌を指南したため、撰家の二条流歌道までもがいと簡単に花街に流入した。</p>	<p>●一時期は二条派歌道に長けていた指導者がいたが、現在、歌道は芸妓・舞妓になるために必須とされていない。 ●八坂女紅場学園祇園女子技芸学校・東山女子学園東山女子技芸学校・静岡芸妓学校など、芸妓学校がいくつか残る。 ●堂上家の男系断絶によって女性の歌道継承が重要となったことだけでなく、芸妓らが堂上家の当主、伊藤博文ら首相・政財界の有力者、歌道師範などの私娼・妾となったことも、女流歌壇の形成につながった。堂上家の男子は、別の堂上家の女子や内親王・女王を公式に正室・側室とすることが多かったが、近世後期以降は、芸妓を公式の正室とするほか、内密の妾とすることもあり、これが堂上家のみならず、中下級武家・藩閥政府内にも広がったものである。しかし、次第に女性ら自身によって一定の規模の歌壇が形成されるようになった。 ●京都嶋原では芸妓や与謝野蕪村らを中心とする「嶋原俳壇」が形成されるなど、俳壇が歌壇を上回るようになるが、三名妓などの名芸妓を中心に和歌も大いに詠まれ続けた。</p>	<p>一部でのみ歌道存続 歌道以外の芸道は良好に存続 ●現在、授業科目や履修可能な芸道として確認できるものは、以下の通り。 ★茶道、華道、書道、日本舞踊、京舞、箏、鳴物、囃子、三味線、笛、能楽、長唄、一中節、常磐津、清元、地歌、浄瑠璃、小唄、端唄、絵画</p>	<p>●国語の変化 ●児童福祉法の制定 ●芸妓団体の会社化と芸妓の会社員化、花街運営の合理化・効率化による歌道の切り落とし ●人材減少</p>
<p>江戸・東京府の花街 待合 (新橋芸者・赤坂芸者・神楽坂芸者・芳町芸者・向島芸者・浅草芸者・柳橋芸者・新吉原芸者・板橋芸者・品川芸者)</p>	<p>芸者 太夫 花魁 半玉 雛妓 美妓 名妓</p>	<p>女性のみ(歌道は女性のみには見られないが、男性芸者は存在する。) 血縁不要 師弟関係</p>	<p>同上(地域のみ読み替え)</p>	<p>同上(地域のみ読み替え)</p>	<p>同上(地域のみ読み替え)</p>	<p>同上(地域のみ読み替え)</p>
<p>出羽・山形県の花街 (やまがた舞子・酒田舞娘)</p>	<p>舞子 舞娘 芸妓 舞妓</p>	<p>女性のみ 血縁不要 師弟関係</p>	<p>同上(地域のみ読み替え)</p>	<p>同上(地域のみ読み替え)</p>	<p>同上(地域のみ読み替え)</p>	<p>同上(地域のみ読み替え)</p>
<p>越後・新潟県の花街 (古町芸妓・岩室芸妓)</p>	<p>芸妓 舞妓</p>	<p>女性のみ 血縁不要 師弟関係</p>	<p>同上(地域のみ読み替え)</p>	<p>同上(地域のみ読み替え)</p>	<p>同上(地域のみ読み替え)</p>	<p>同上(地域のみ読み替え)</p>

加賀・能登・石川県の 花街 (主計町芸妓・にし茶屋 街芸妓・東山ひがし芸 妓)	芸妓 舞妓	女性のみ 血縁不要 師弟関係	同上(地域のみ読み替 え)	同上(地域のみ読み替え)	同上(地域のみ読み替え)	同上(地域のみ読み替え)
遠江・駿河・伊豆・静岡 県の花街 (熱海芸妓)	芸妓 舞妓	女性のみ 血縁不要 師弟関係	同上(地域のみ読み替 え)	同上(地域のみ読み替え)	同上(地域のみ読み替え)	同上(地域のみ読み替え)
尾張・三河・愛知県の 花街 (名古屋芸妓・安城芸 妓)	芸妓 舞妓	女性のみ 血縁不要 師弟関係	同上(地域のみ読み替 え)	同上(地域のみ読み替え)	同上(地域のみ読み替え)	同上(地域のみ読み替え)
摂津・河内・和泉・大阪 府の花街	江戸・東京では早くから分離されていた巫女・神子と芸妓・舞妓と娼妓・遊女とが未分離である時代が長く、現在も表立った芸道のみを継承する芸妓・舞妓の存在は確認されていない。歌道とも無縁であると考えられる。 また、明治の華族制度成立の際、全137堂上家のうち、大阪出身の堂上家は水無瀬家の1家のみであり(摂津国)、堂上公家の本拠地であった京都や堂上公家が移住した東京と比べて、和歌文化や娼妓業と分離した花街文化の発展の見込みの希薄さは明らかであった。					
陸奥・宮城県の花街	仙台には、花街と呼ばれるものが明治時代に入るまで存在していない。京都宮廷とも鎌倉・江戸幕府とも異なる奥州藤原氏・伊達氏の文化が栄え、和歌そのものは広く親しまれた。芸者の置屋が仙台に立ち並ぶようになるのは明治4・5年あたりからである。					
養花楼→輪違 屋	京都府 嶋原	桜木太夫	女性のみ ●客は「観覧謝絶」 (「一見さんお断り」)	1688～	●女流歌人桜木太夫を抱えていた置屋として有名である。桜木太夫は、和歌を能勢春臣に学んだ。 ●置屋兼お茶屋。	営業は存続 ●和歌・歌道の実態は不明だが、行われていないと思われる。(本表の協力者である巫女や芸妓の未訪問により不明。)
旅館・ホテルの 女将(御上)・ 若女将・女中 の歌道	全国各 地	一般女性 富小路禎子	女性のみ 左記の通り 血縁不要 師弟関係	●女将など旅館業に 従事する女性が歌道 にも長けている場合 がある。	一部でのみ存続 ●いわゆる旅館・ホテルの女将・若女将などのことである。 ●華族制度の廃止によって貴族院議員などの職を失った旧華族の親族男性に代わって、富小路禎子のように女性が旅館業などで一家の生計を立てる場合もあり、没落した堂上歌道家にとって女性が歌道再興の鍵となった。 ●さらに、主に御歌所派門下の歌会が全国各地の旅館などを利用して行われるようになったことから、女将・若女将も歌道を学ぶ必要が生じ、歌壇の一角を担うようになった。 ●一部、現在でも烏丸家・飛鳥井家・富小路家などの歌道を継承している下女もいる。	
公娼・赤線地 帯の歌壇	全国各 地	上記の全般的解説を見よ。				

私娼・青線地帯の歌壇	全国各地	上記の全般的解説を見よ。
------------	------	--------------

近代の上流・中流家庭(華族・士族)の子女による歌道継承

流派名	本拠地	代表的歌人・歌論者・当主	流派の主体	流派の成立時期・成立事情(cは世紀)	特徴	衰退・分裂・断絶の時期(cは世紀。血統断絶の場合、掲載可能な限りその旨を記す。) ●衰退・分裂・断絶に至る記述 ◆は存続についての記述	衰退・分裂・断絶の理由 ●最終断絶以外(一時的な衰退など)の理由も記載した。 ◆は存続についての記述
-----	-----	--------------	-------	--------------------	----	---	--

●歌道を継承する女性には、当初は華族・士族など良家の女性が多かったが、次第に樋口一葉などの下級の出自の女性が増加した。

<p>萩の舎 (江戸派・御歌所派など)</p>	<p>東京都 (小石川安藤坂)</p>	<p>加藤千浪 伊東佑命 高崎正風 中島歌子 三宅花圃 伊東夏子 金枝玉葉 田中みの子 樋口一葉 梨本宮妃伊都子 鍋島栄子 綾小路八十子 広橋利子 近衛衍子 近衛貞子 中牟田恒子 前田朗子 (以下、男性客員教授) 鈴木重嶺 江刺恒久</p>	<p>良家の女性のみ血縁(宮家・華族・士族) 梨本宮家 鍋島家 綾小路家 広橋家 近衛家 中牟田家 ●樋口一葉は例外的参加</p>	<p>1877～ ●加藤千浪に指導を受けた中島歌子が小石川の自宅「池田屋」で主宰した私塾。和歌を中心に、書(主に加藤千蔭流)や古典文学など諸芸を教えた。時に出稽古も行った。歌子の父・中島又衛門は豪商。萩の舎をもって上・中流家庭の子女の近代歌壇の幕開けとなる。 ●最盛期の門下生は1000名ほど。 ●兄弟子の伊東佑命を通じて御歌所所長の高崎正風と交流を開始したことを機に、上・中流家庭の多くの子女らが門下生となる。</p>	<p>●当初は専ら良家の夫人・令嬢のみが参加できる歌塾であったが、樋口一葉(1886年入門)など、例外的に入会が認められる有望な下級士族の子女なども出始めた。その後も、宮家・華族・士族の子女を中心に門下生を増やしたが、萩の舎の内部において、下級の出自の子女が良家の子女を指導する身分不問の師弟関係が出来上がる場合もあった。しかしこれは、多くの貴婦人の集いをも兼ねた萩の舎の歌会とは根本的に折り合わず、下級士族以下の子女、下町の女性たちは、次第に蜂屋光世・鶴久子夫妻の江戸派の歌道に流れた。しかし、中島歌子とて、皇后、権典侍、典侍、内親王、女王、皇室関係者の子女ばかりに歌道を教授した御歌所の税所敦子と同じ立場を得ることはなかった。税所を宮中に推挙したのは、高崎正風であった。 ●歌子と同じく加藤千浪に指導を受けた岡山の二条派歌道出身の伊東佑命を通じ、御歌所の高崎正風らとの交流も盛んとなった。 ●盛大華麗な歌会がおこなわれた。時々、男性歌人・男性客を招いては遊興も行われた。 ●1901年設立の日本女子大学の歌道教師を中島歌子や三宅花圃が務めた。</p>	<p>1903廃止 ●日本女子大学のOB・学生のほか、有志の女子大学OB・学生の間で受け継がれている。(萩の舎の歌を鑑賞するサークル活動など。) ●「与謝野晶子の短歌、樋口一葉の和歌」というように、「短歌」と「和歌」の語・概念の区別は、萩の舎の全盛期の頃に始まる。この使い分けは、これ以降、冷泉家の当主夫人を筆頭に、女性歌壇全般に著しく見られるようになり、現在では国民一般に浸透している。</p>	<p>●主宰中島歌子の死 ●主宰と門下生及び門下生どうしの不和</p>
-----------------------------	-------------------------	--	---	--	---	--	---

<p>輪島鹿鳴歌会 (御歌所派・明星派など)</p>	<p>石川県 (輪島)</p>	<p>御歌所派歌人 新詩社歌人</p>	<p>多くは女性 ●男性の出入り可</p>	<p>明治初期～</p>	<p>●鹿鳴歌会(別項)のうち、能登輪島で行われていた月次歌会。単に「鹿鳴歌会」とも言った。 ●現在は、特に旧上流階級の女性ばかりが参加しているわけではなく、地元の主婦・高校生・中学生なども参加している。</p>	<p>存続 ◆地元の市民・主婦・巫女らによって維持されており、公民館や輪島前神社の社務所などで歌会がおこなわれている。</p>	<p>◆存続はしているが、以下の打撃を受けた。 ●兵役による歌壇における男性の不足 ●第一次世界大戦 ●第二次世界大戦 ●検閲・出版統制 ●銃後支援活動への専心、女子挺身隊・国民義勇隊の編成による、歌会の機会の喪失及び歌道の荒廃 ●敗戦 ●新派短歌の全盛</p>
<p>丹後鹿鳴歌会 (御歌所派・明星派など)</p>	<p>京都府 (丹後)</p>	<p>御歌所派歌人 新詩社歌人</p>	<p>多くは女性 ●男性の出入り可</p>	<p>明治後期～</p>	<p>●鹿鳴歌会(別項)のうち、丹後地方で行われていた月次歌会。</p>	<p>昭和末期に断絶</p>	<p>●銃後支援活動への専心、女子挺身隊・国民義勇隊の編成による、歌会の機会の喪失及び歌道の荒廃 ●後継者の不在</p>
<p>相模鹿鳴歌会 (御歌所派・明星派など)</p>	<p>神奈川県 (相模)</p>	<p>御歌所派歌人 新詩社歌人</p>	<p>多くは女性 ●男性の出入り可</p>	<p>明治後期～</p>	<p>●鹿鳴歌会(別項)のうち、相模地方で行われていた月次歌会。</p>	<p>昭和末期に断絶</p>	<p>●銃後支援活動への専心、女子挺身隊・国民義勇隊の編成による、歌会の機会の喪失及び歌道の荒廃 ●後継者の不在</p>
<p>国風会→二葉会</p>	<p>愛知県 名古屋市</p>	<p>奥田大和 宮川有子</p>	<p>多くは女性 男装した女性 ●男性の出入り可</p>	<p>19c後半～</p>	<p>●日常生活を男装で送った奥田大和をはじめとして、歌会でも男装が行われた。 ●『大和歌集』</p>	<p>戦中に衰退</p>	<p>●兵役による歌壇における男性の不足 ●第二次世界大戦 ●検閲・出版統制 ●銃後支援活動への専心、女子挺身隊・国民義勇隊の編成による、歌会の機会の喪失及び歌道の荒廃 ●敗戦</p>

赤銅御殿・ことたま (諸派折衷)	福岡県 (福岡市天神) 大分県 (別府市青山)	伊藤伝右衛門 宮崎龍介 柳原白蓮	多くは良家の女性 ●文化人男性の出入りあり	19c末～ ●東京柳橋の芸者奥津りょうの娘で、竹柏会・『心の花』に参加していた柳原白蓮が主宰。(日蓮への信仰から、宮崎燐子改め、白蓮を名乗る。)	●伊藤伝右衛門が建てた別荘(通称「赤銅御殿」)が、妻柳原白蓮をはじめとする歌人・文化人の交際の場となる。 ●歌誌『ことたま』の発行(1934または35) ●伊藤伝右衛門と結婚していた柳原白蓮は、宮崎龍介との姦通を犯したため、華族からの除籍と財産没収の処分を受け、伊藤伝右衛門と離婚し、宮崎龍介と結婚、同居を始めたが、1954年に再び赤銅御殿に迎え入れられている。 ●竹久夢二・高浜虚子なども出入りしていた。	戦後に衰退・廃絶 ●赤銅御殿は大分県竹田市に移築され(当時のままの建材を多く使用)、一般の民家となっている。(西日本新聞 2008/02/08 夕刊) 一般の民家のため、詳細省略 ●柳原白蓮旧居(東京都豊島区西池袋2-15-16)は、「ことたま会」として白蓮門下の女流歌人による歌壇を形成したが、衰退。	●第一次世界大戦 ●第二次世界大戦 ●柳原白蓮の死(1967) ●赤銅御殿の取り壊し(1979)
女子文壇	全国各地	中流以上の出自の女性文人	女性のみ 和歌・短歌・詩・随筆の投稿	1905～	●和歌・短歌を含む女子文学の総合雑誌の役割を担った。	廃止 ●お茶の水女子大学・跡見学園女子大学・大妻女子大学・相模女子大学などが分散所蔵。	●第一次世界大戦 ●第二次世界大戦 ●検閲・出版統制 ●銃後支援活動への専心、女子挺身隊・国民義勇隊の編成による、歌会の機会の喪失及び歌道の荒廃 ●敗戦
短歌至上主義	埼玉県 川越市	杉浦翠子	女性のみ ほぼ杉浦翠子単独の歌壇	1933～ ●アラragi・斎藤茂吉に師事するが、次第にアラragiの歌風に疑念を抱くようになり、特に島木赤彦と激しく対立し、1923年にアラragiを退会。	●アラragiの花鳥風月の写生に反旗を翻し、『短歌至上主義』を主宰・創刊し、主知的短歌の道を歩んだ。	戦後に衰退	●兵役による歌壇における男性の不足 ●第二次世界大戦 ●検閲・出版統制 ●銃後支援活動への専心、女子挺身隊・国民義勇隊の編成による、歌会の機会の喪失及び歌道の荒廃 ●敗戦

明日香	全国各地	今井邦子 今井節子 岩波香代子	女性のみ 師弟関係	1936～ ●斎藤茂吉に師事していた今井邦子が「アララギ」を退会し、独自に女性のための短歌結社を創設	●現代に至り、短歌を基盤とする女性とこどものネットワークとして拡大。「女性短歌ネットワーク」・「こどもたんかひろば」を開設。	存続 ◆全国各地に支部を設置。	
彩雲会 (御歌所派、のちに明星派)	石川県 金沢市 京都府 大阪府	江戸さい子 江戸久子 岸馨子 丸山いゑ 松川艶 浅川あさを 坂本華心	ほとんどが女性 ●男性の出入り可	1939～ ●大口周魚・武島羽衣に学んだ江戸さい子が主宰	●江戸さい子は、大日本歌道奨励会石川支部長、金沢第一高女歌道講師を務めた。 ●旧派・御歌所派に近縁ながら、新詩社・与謝野晶子らとも交流。次第に明星派の色が濃くなっていった。	戦中・戦後に衰退・離散	●兵役による歌壇における男性の不足 ●第二次世界大戦 ●検閲・出版統制 ●敗戦 ●江戸さい子の死(1961) ●東日本大震災(2011) (震災・原発問題などの影響による宿泊客の激減に伴い、江戸さい子・与謝野晶子らの交流の場となった銀水閣(七尾市和倉温泉)が営業停止。
千尋園・陸奥女歌会 (諸派折衷)	宮城県 仙台市 岩手県 福島県	一般女性 青山竹女	女性のみ 血縁(藩士の女性) 沼澤家 栗村家	★千尋園:近世・近代 ★陸奥女歌会:戦後	●陸奥国(特に仙台)で近世期に活躍した青山竹女・小野とよ女・小川しち女らの門下生の末裔女性による歌会。	戦後に断絶	●銃後支援活動への専心、女子挺身隊・国民義勇隊の編成による、歌会の機会の喪失及び歌道の荒廃 ●後継者の不在
桑の実会→時雨会→清渚会 (御歌所派、のちに明星派)	三重県 桑名市 石川県 京都府	角倉家茂 栗山富美子	多くは女性 ●男性の出入り可	戦前・戦中～ ●角倉家茂が創始した、三重県、特に桑名の女性を中心とする歌壇。	●彩雲会・御歌所派と親しく交流した。 ●名称変更が頻繁。 ●1923年に設立された桑名若菜会の会員が多く参加した。	存続していると言える ◆現「三重県かるた協会」は、「桑の実会」会員が多く参加した「桑名若菜会」を中心に三重県内のかるた大会が統合して発足した会である。 ◆歌道・歌会の側面(時雨会・清渚会の系譜)は、戦中・戦後に衰退・離散している。	●兵役による歌壇における男性の不足 ●第二次世界大戦 ●検閲・出版統制 ●敗戦

<p>瑞穂会 (御歌所派に 近縁だが、諸 派折衷)</p>	<p>京都府 (北白 川) 石川県</p>	<p>一般女性 吉本信子 浅野聖子</p>	<p>多くは女性 ●男性の出入り可</p>	<p>戦前・戦中～</p>	<p>●桑の実会・彩雲会・御歌所派とも交流した。</p>	<p>戦中・戦後に衰退・離散</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●兵役による歌壇における男性の不足 ●第二次世界大戦 ●検閲・出版統制 ●銃後支援活動への専心、女子挺身隊・国民義勇隊の編成による、歌会の機会の喪失及び歌道の荒廃 ●敗戦
<p>和歌倶楽部 (御歌所派に 近縁だが、諸 派折衷)</p>	<p>東京都 神奈川県 京都府</p>	<p>一般女性 鹿鳴歌会の一 派</p>	<p>女性のみ 師弟関係</p>	<p>戦前・戦中～ 派</p>	<p>●やまとことばで書くことのできない外来語の使用・カタカナ表記や仏教語以外の漢語の使用を大幅に許可した。</p>	<p>昭和末期に廃止</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●兵役による歌壇における男性の不足 ●第二次世界大戦 ●検閲・出版統制 ●銃後支援活動への専心、女子挺身隊・国民義勇隊の編成による、歌会の機会の喪失及び歌道の荒廃 ●敗戦

<p>女人短歌会 (源流は御歌所派で、歌会始召人を輩出したが、竹柏会・『心の花』の弟子筋であり、諸派折衷)</p>	<p>東京都</p>	<p>阿部静枝 森岡貞香 長沢美津 五島美代子 葛原妙子 中城ふみ子</p>	<p>女性のみ 師弟関係よりも同志関係</p>	<p>1949～ ●森岡、五島らが佐佐木信綱の竹柏会・『心の花』に影響を受けて入会し、一堂に会したことが原点。 (五島の夫の茂もまたその会員で、結婚時には信綱が媒酌している。)のち、尾上柴舟に学んだ阿部らが創立していたポトナムに、森岡が参加。阿部・森岡と長沢が『女人短歌』を創刊し、五島・葛原も加わり、女人短歌会が始まる。</p>	<p>●師弟関係よりも同志関係の結社だが、葛原は入会後に森岡を知り、以後影響を受けるなど、師弟の意識は存する。 ●長沢美津編『女人和歌大系』 ●五島は「母の歌人」、「母性愛の歌人」と評される。 ●「和歌」と「短歌」の語を使い分けている点は、信綱や萩の舎と同様であって、自らが現代短歌歌人・結社であるという自覚は、初期においては、同会(とりわけ長沢と五島)が評価した中城ふみ子に比すれば、未だ希薄である。中城は、同会の歌人たちよりも早世であるにもかかわらず、歌風はより前衛的で、同会入会は1951年になってからであった。 一方、旧派歌道から脱しきらない同会創立歌人たちの態度と歌風こそは、宮中の歌会始召人に招聘される厚遇に影響した。女性の現代短歌の出発点が、女人短歌会よりも、塚本邦雄が評価し寺山修司に影響を与えた中城であるとされるのは、そのためである。</p>	<p>平成中期に衰退・離散 ●元来、御歌所派、とりわけ千種会の系統であり、歌会始召人を輩出している。(1992年に長沢、2006年に森岡)</p>	<p>●後継者の不在 ●自ら評価した中城ふみ子らとその後継の女性歌人らによる現代短歌の隆盛</p>
---	------------	--	-----------------------------	---	--	---	---

戦後の家政婦・派出婦、一般・民間女性、女子大学・女子短期大学(旧女学校・女高師系)、女子学生の有志による歌道関連活動

流派名	本拠地	代表的歌人・ 歌論者・当主	流派の主体	流派の成立時期・成 立事情 (○は世紀)	特徴	衰退・分裂・断絶の時期 (○は世紀。血統断絶の場合、掲載可 能な限りその旨を記す。) ●衰退・分裂・断絶に至る記述 ◆は存続についての記述	衰退・分裂・断絶の理由 ●最終断絶以外(一時的 な衰退など)の理由も記載 した。 ◆は存続についての記述
-----	-----	------------------	-------	----------------------------	----	---	--

●現在では、いわゆる近現代短歌の団体がほとんどであるが、稀に旧堂上家・旧御歌所派の歌道を継承する和歌団体も存在する。ここには、このような団体のみを掲載した。

●現在では女子学生・家政婦・職業巫女・アルバイト巫女・芸妓・舞妓・社家女性・主婦など、出自を問わない様々な民間女性により歌道が継承されている。

●多くの民間の和歌団体は男女・年齢を問わず参加できるが、男性の参加を禁じている団体も少なくない。実際には、「短歌サークル」と「女性の親睦サークル・茶話会」とを兼ねた団体が多く、男性の参加が可能な和歌団体であっても、男性の参加はほとんど見られない。また、師匠・講師のみが男性で、生徒・門下生が全員女性である団体も多い。本格的な旧堂上家・旧御歌所派の歌道については、ほぼ女系継承または民間の有志の女性のみによる継承となっていると考えられる。

●前頁のように、明治時代に入って以降、和歌を学ぶことは、女性が身に付けることが望ましい教養であると称揚されるようになっていた。戦時中には女性が銃後の嗜みとして歌道をも担うことになる。戦後になり、女性の人権意識の高揚や社会進出が進む中で、「歌道家元」が「男系」であることにほとんどの国民はこだわらなくなった。2000年頃からは、老若男女問わず、インターネット上で和歌・短歌を発表する歌人も増加した。

●しかしながら、旧派・御歌所派歌道については、女性のみが就業可能な職業や女性のみの特化した芸道教室(巫女・芸妓・舞妓・舞子・舞娘・家政婦・旧公家の専業主婦・華道や着付けや琴の教室など)以外にはほとんど継承されていない。
また、日本伝統文化学科・日本文化学科が、ほぼ現女子大学・旧女子大学の大学・旧女学校系の大学にしか設置されておらず、男女共学の場合でも男性からの人気は低迷している。
歌道関連の蔵書を的確に扱うために拡充すべき司書及び司書希望者も女性に偏っており、和歌研究者も女性に多くなっている。
これらの様々な要因により、女性同士の歌道サークル・交流会が比較的良好に維持される結果となっている。また、女子大学内に歌道会・国文学研究会の事務局が設置・移設されたり、女子大学図書館に歌書が所蔵・移管されるなどしている。

家政婦・刀自・ 家刀自・腰元・ 女中・下女・侍 女・派出婦・内 弟子	全国各地	一般女性	女性のみ 左記の通り 血縁不要 師弟関係	●旧華族夫人・一般家 庭夫人への出仕と師 事の中で歌道を継承 することがある。	存続 ◆旧華族の女性の場合、男系断絶した旧歌道師範家への家政婦としての出仕や嫁入りによって歌道を継承することもある。この場合、男性当主や女性当主より歌道を習うが、その後は、血統については冷泉家のように女系継承となる。 ◆特に旧華族・良家に仕える家政婦のことを刀自・家刀自・腰元と呼び、一般家庭に入った家政婦のことを女中・下女・侍女・派出婦と呼ぶことが多い。ただし、家政婦の仕える家の夫人のほうを刀自・家刀自と呼ぶこともある。 ◆秘伝的な歌道伝授あり		
夕露会	神奈川県 東京都 千葉県	一般女性	女性のみ 血縁不要 師弟関係	1982～	●旧華族家・実業家の家・大規模の一般家 庭の腰元・女中・派出婦による歌会。	存続	

家政婦和歌交流会	神奈川県 埼玉県 東京都 千葉県	一般女性	女性のみ 血縁不要 師弟関係	1985～	●特に出自・派出先を問わない中流以下の家事手伝い・家政婦による和歌の交流会。	存続	
朝霜会 (諸派折衷)	愛知県 名古屋市	一般女性	女性中心 ●男性の出入り可	戦中～	●『朝霜』刊行。 ●歌書を多く所蔵した。	戦後に断絶	●後継者の不在
女風会 (御歌所派に 近縁だが、諸 派折衷)	東京都 神奈川県 京都府	一般女性 江沢つる 飯田梅子	女性のみ 血縁 旧公家・旧士族末 裔の参加あり ●一見参加不可 ●黒色以外の染髪 女性の参加不可 ●ピアス不可	戦後	●一般女性による歌道・教養・作法秘伝結社。旧華族・士族の出自ながら他家に嫁いだ女性もおり、各家々の旧態依然とした歌道からの脱却を訴えた女性どうしの集いであった。 ●やまとことばで書くことのできない外来語、カタカナ、仏教語以外の漢語の使用は原則禁止であった。	昭和末期に廃止 ●一部は和歌倶楽部や女葉会に吸収された。	●後継者の不在
伊那女子歌会 (御歌所派一 門)	長野県 (伊那市・飯田市) 東京都	一般女性	女性のみ 師弟関係	1949～	●伊那国風会の系譜を引く歌道会で、歌壇の拠点であった伊那実科女学校を前身とする伊那弥生ヶ丘高等学校の卒業生や生徒が、学校とは無関係に有志で継承していたものである。 ●小出粲・高崎正風に師事した遠山英一・稲子夫妻に学んだ女学校時代の女性による同窓会も、歌道をよく継承していた。	断絶(1977) ●男女共学化 ●同地域には、1973年に飯田下伊那歌人連盟、2004年にはこれを改組した飯田下伊那歌人協会が発足しており、現在も短歌が活発な地域である。 →「風越歌会」・「伊那国風会」・「箕輪歌壇」の項も参照。	●後継者の不在

<p>五色花会 (『古今集』などの勅撰集重視)</p>	<p>東京都 京都府 岡山県</p>	<p>巫女 女中 一般女性 猪苗代華穂 花房ひとえ</p>	<p>女性のみ ●一見参加不可 ●和装必須</p>	<p>1958～</p>	<p>●歌会を開催。歌は一部のみ公開。ただし、積極的に歌を公開している者もいる。 ●主に民間の祭祀・儀式・文化事業に詠進。 ●歌書を多く所蔵している。 ●歌会は和装不要。ネット歌会も多い。 ●歌風は、『古今集』などの勅撰集のうちの四季賛美の歌風が多く、戯言歌・俗謡調の歌はほとんどない。 ●歌集の編纂、歌会の開催</p>	<p>昭和末期に断絶</p>	<p>●後継者の不在</p>
<p>杉並万葉会 (『万葉集』重視)</p>	<p>東京都 杉並区</p>	<p>一般女性 主な年齢層: 50～90代</p>	<p>女性中心 血縁 旧公家末裔の参加あり ●男性参加可能だが、ほぼ女性のみであった。</p>	<p>1960頃～</p>	<p>●『万葉集』を中心とする和歌鑑賞の会。 ●一般家庭に入った旧堂上公家の末裔女性も参加した。</p>	<p>存続 男性3名 女性38名</p>	
<p>歌会 萩の花 (江戸派・御歌所派など)</p>	<p>東京都 茨城県</p>	<p>一般女性 青柳しの 青柳ゑの 氏寺千代子 主な年齢層: 50～80代</p>	<p>女性のみ ●一見参加不可 ●茶髪・ピアス不可 ●和装は不要</p>	<p>1962～</p>	<p>●中島歌子主宰の「萩の舎」の和歌(特に樋口一葉の和歌)を中心に鑑賞し、作歌も行う。 ●萩の舎の門下生を多く有する日本女子大学や、関連のある跡見学園女子大学(跡見花蹊が創立者)などにメンバーを有するが、各大学とは無関係の学生有志団体。</p>	<p>平成時代に断絶 男性4名 女性67名</p>	<p>●後継者の不在</p>
<p>武蔵野会 (二条派・御歌所一門)</p>	<p>東京都</p>	<p>一般女性 主な年齢層: 50～90代</p>	<p>女性中心 血縁 旧公家末裔の参加あり ●男性参加可能だが、ほぼ女性のみとなっている。</p>	<p>1965～</p>	<p>●旧堂上公家の末裔の女性などが烏丸家などの二条派歌道を継承していた。</p>	<p>平成時代に断絶</p>	<p>●後継者の不在</p>

中野万葉会 (『万葉集』重視)	東京都 中野区	一般女性 久保和代 青木和子	女性中心 血縁 旧公家・旧士族末裔の参加あり ●男性参加可能だが、ほぼ女性のみとなっている。 ●主な年齢層:60～90代	1973～	●『万葉集』を中心とする和歌鑑賞の会。 ●万葉学者の中西進を講師として招聘している。	存続 男性3名 女性134名	
目黒万葉会 (『万葉集』重視)	東京都 目黒区	一般女性 北川律子	女性中心 血縁 旧公家末裔の参加あり ●男性参加可能だが、ほぼ女性のみとなっている。 ●主な年齢層:60～90代	1975～	●『万葉集』を中心とする和歌鑑賞の会。	存続 男性2名 女性58名	
清風会 (中世歌道を中心に諸派折衷)	京都府 東京都	一般女性 小松崎芳江 曾我いよ 一条みさお	女性のみ 血縁 旧公家・旧士族末裔の参加あり 小松崎家 江見家 ●主な年齢層:20～90代	1976～	●使用禁止ではないが、再びやまとことばで書くことのできない外来語、カタカナ、仏教語以外の漢語をほとんど使用しなくなった。 ●『万葉集』と『古今集』以降の勅撰集を同様に扱う。 ●主に民間の祭祀・儀式・文化事業に詠進。『古事記』・『日本書紀』・勅撰集など古典・歌書の編纂周年事業や神宮式年遷宮記念歌会に詠進。 ●歌書を多く所蔵した。	存続 女性10名ほど	
女子道会	東京都 岡山県	巫女 女中 一般女性	女性のみ	1986～	●「女子道社」とは異なる歌道サークル。 ●自由に詠めるものの枕詞・掛詞などのある一定のルールの存在しない新派短歌に対して、「女子道」に基づく和歌の継承を行い、女性の品性としての枕詞・掛詞を模索した。日の目を見ずに閉会した。	平成時代に断絶	●後継者の不在

女流秘伝	東京都 神奈川県 京都府 岡山県	巫女 女中 一般女性 江波戸優花 吉川りせ 景山良子	女性のみ ●一見参加不可 ●茶髪・ピアス不可 ●和装は不要	1988～	<ul style="list-style-type: none"> ●一般女性による歌道・教養・作法秘伝結社。 ●旧派歌道を受け継ぎながらも、旧公家の歌道の特権的で旧態依然とした閉鎖性については、積極的な脱却と超克を訴えた。 ●江波戸家は、元より明治期の下総の歌人江波戸胤信を師匠とした歌の名家であり、旧歌道家としての矜持は、現在は「女流の秘伝の歌道・教養・作法」という形で子女により受け継がれている。 	平成時代に断絶 女性約50名	●後継者の不在
良風会	東京都	良家の女性 旧公家・旧士族末裔子女 女中 一般女性	女性のみ 血縁 旧公家・旧士族末裔の参加あり ●主な年齢層：20～40代	1991～	<ul style="list-style-type: none"> ●近代以降、吉井徳子・斎藤輝子・柳原白蓮・永井ふさ子ら上流家庭の歌人の妻や歌人女性が主導的にかかわった性的スキャンダルを通じて、女性短歌は男性歌壇の束縛から脱した。現代に至り、林あまりの『MARS ANGEL』や今野寿美の『世紀末の桃』のように過激な性描写が女性自身によって行われるようになった。 このような潮流は、性的スキャンダルの陰で秘伝的な歌道を継承した旧堂上家・武家の女性の日常にも例外なく流れ込んだ。 しかし、これら旧堂上家・武家の女性は、バブル景気下におけるこのような「日本女性」のあり方の急変と過激な性の解放・語句表現に反発し、漢語・外来語をほとんど用いず、全ての性表現を「花」・「月」・「春」・「露」などのやまとことばでおこなった。いわゆる歌の風格である「歌格」を重視し、「女性の性の歌格」を追求した。 しかし、日の目を見ず、短期間で閉会した。 	平成時代に断絶	●後継者の不在
和香会	東京都 千葉県	一般女性	女性のみ	1997～	<ul style="list-style-type: none"> ●陰暦5月5日などに練り香(百和香)と和歌による会を開催。 ●武蔵野会・清風会と同様、道路交通網関連の献詠も多い。 	存続 女性20名ほど	

萌黄	三重県 名張市	山田得治	女性中心 ●主な年齢層:60～90代 ●男性参加可能だが、講師以外は女性しか参加していない。	1999～	●『源氏物語』及びそこに登場する和歌を学ぶ。	存続 女性20名 ◆歌道伝授はなし	
水無月会 和歌の部	三重県 名張市	一般女性 橋本芳櫻	女性中心 ●男性参加可能だが、女性しか参加していない。 ●主な年齢層:60～90代	2000～	●和歌全般を学ぶ。	存続 女性10名 ◆歌道伝授はなし	
太宰府万葉会 (太宰府市民遺産「万葉集つくし歌壇」の主要育成団体)	福岡県 太宰府市 福岡県 全県 九州	一般女性 松尾セイ子 米川治子	女性中心 ●女性のほうが多いが、男性も多数参加。 ●主な年齢層:60～90代。但し、2010年頃から壮年男性や10代の学生の参加が見られるようになり、新元号「令和」の発表(右記)以降、その傾向が増している。	戦後 ●同名の団体が複数あり、離合集散を経て現在に至る。現在の団体の設立は1998年。育成歌壇の「万葉集つくし歌壇」の太宰府市民遺産への認定は2011年。	●『万葉集』を中心とする和歌鑑賞の会。 ●毎月、万葉講座(巻1～巻20までを読む)を開催し、筑紫地域の万葉歌碑めぐりを行うなど、活動は盛んである。 ●毎年、同集「梅花の宴」(天平2年正月13日に太宰府で開催)を再現する活動を行っており、2019年4月1日の新元号「令和」の発表時には、ゆかりの地である太宰府と共に、同会も取り上げられた。 ●万葉時代を再現した衣装(特に古代官人衣装)を数多く製作しており、宴で会員自ら着用するほか、太宰府中学校や文化祭・太宰府市どんたくパレードなどへ衣装貸出しも行っている。	存続 男女50名 ◆太宰府市民遺産「万葉集つくし歌壇」の育成・継承活動は盛んであり、市と市民が協力体制にある。 ◆歌道伝授はなし	

<p>糸姫会 (御子左派・正徹流・中世歌道・澄月流・近世二条派)</p>	<p>東京都 岡山県</p>	<p>一般女性 武田あさゑ</p>	<p>女性のみ 民間の女性 ●一見参加不可 ●黒色以外の染髪 女性の参加不可 ●ピアス不可 ●和装は不要 ●主な年齢層：10～40代</p>	<p>2002～</p>	<p>●歌道のほか、かるた・羽根つき・貝合・花いちもんめなど、日本古来の女性の遊びをおこなっている。 ●歌合・貝合・花合の開催。ただし、和歌は余情会より提供を受けることも多い。</p>	<p>存続 女性10名ほど</p>	
<p>余情(よせい)会 (御子左派・正徹流・中世歌道・澄月流・近世二条派かつ新派)</p>	<p>東京都 岡山県 石川県 新潟県 秋田県 北海道</p>	<p>一般女性 長満たき 戸井留子 青柳香織 武田あさゑ 伊田小春 袴ちの子 ★男性が少数参加 園井長光 岩崎純一</p>	<p>女性中心 ●一見参加不可 ●黒色以外の染髪 女性の参加不可 ●ピアス不可 ●和装は不要 ●主な年齢層：20～50代</p>	<p>2003～ 途中より男性参加が可能となった。</p>	<p>●歌会を開催。歌は一部のみ公開。ただし、積極的に歌を公開している者もいる。 ●主に民間の祭祀・儀式・文化事業に詠進。『古事記』・『日本書紀』・勅撰集など古典・歌書の編纂周年事業などに詠進。 ●武蔵野会・清風会と同様、道路交通網関連の献詠も多い。 ●歌書を多く所蔵している。 ●歌風は、前近代和歌全般に渡るが、御子左風・唯美主義・デカダン(退廃派)・現代批判の傾向を示す新派。 ●黒色以外の染髪とピアスを禁止している。</p>	<p>存続 男性2名 女性17名 ◆開闢の岩崎を中心として、本総覧の作成・編纂初期の最大母体である。 ◆開闢の岩崎がNEXCO中日本の「やまごころ周遊記」に和歌を詠進するなど、道路交通網関連の地方創生事業に詠進。</p>	
<p>日本文化系学科</p>	<p>各大学を参照</p>	<p>「日本文化学科」の学科名としては、右に掲げる15大学に設置されている</p>	<p>大学教員(男女とも) 大学生(多くが女子)</p>	<p>各大学の設置年 ●21c初頭が多い。</p>	<p>学科は存続。日本伝統文化教育一般を行うが、歌道は教えていない。冷泉家以外の歌道家での歌道の実習もおこなわれない。ただし、和歌に接することのできる授業が設けられている。 ◆千葉大学・帝京大学・東京家政学院大学・聖徳大学・北海学園大学・聖学院大学・川村学園女子大学・明星大学・学習院女子大学・駒沢女子大学・愛知学院大学・相愛大学・南山大学・帝塚山大学・沖縄国際大学 ◆旧女学校・現女子大学・平成の大学再編前まで女子大学であった男女共学の大学がほとんどを占める。 ◆同学科の学生の多くは女子学生が占めており、男子学生からの人気は低迷している。 ◆キリスト教系女子大学が最も多く、次に仏教系女子大学が多くなっている。 ◆ほとんどが国文学科の改組であり、日本文学・日本史学・民俗学・宗教学などが中心。 ◆芸道については、華道・書道・香道については実習体験できる一方で、歌道は教えていないが、和歌の鑑賞・研究などは盛んである。 ◆「日本伝統文化学科」を設置する大学は東京成徳大学のみであるが、当大学も旧女学校が母体である。 ◆「正宗敦夫文庫」・「黒川文庫」を所蔵するノートルダム女子大学(附属図書館)など、貴重な歌書をまとめて所蔵する女子大学では、比較的よく保存・研究が行われている。</p>		

日本伝統文化学科・日本伝統文化マイスター	東京都	東京成徳大学のみ	大学教員 (男女とも) 大学生 (多くが女子)	2001 ●日本語・日本文化学科より改組	学科は存続。日本伝統文化教育一般を行うが、歌道は教えていない。冷泉家以外の歌道家での実習もおこなわれない。ただし、和歌に接することのできる授業が設けられている。 ◆日本伝統文化学科を設置する大学は、東京成徳大学のみである。 ◆旧女学校が母体である。 ◆独自の資格として「日本伝統文化マイスター」が設けられているが、和歌について問われる力量は「作歌」ではなく「披講」となっている。 ◆このほか、「日本文化学科」が全国の女子大学を中心に設置されている。
和の伝統文化コース	京都府	京都造形芸術大学 芸術学部 通信教育部のみ	大学教員 (男女とも) 大学生 (多くが女子)	2009 ●通信教育部改組	学科は存続。歌道は教えていない。冷泉家以外の歌道家での実習もおこなわれない。ただし、和歌に接することのできる授業が設けられている。 ◆和の伝統文化コースを設置する大学は、京都造形芸術大学芸術学部通信教育部のみである。 ◆旧藤川洋裁研究所・藤川女子専門学院が母体である。 ◆このほか、「日本文化学科」が全国の女子大学を中心に設置されている。
家政系大学・学部・学科の和歌	全国各地	家政大学・家政短期大学	大学教員 (男女とも) 大学生 (多くが女子)	各大学の設置年 ●21c初頭が多い。	●男系血縁による存続と無関係となった現代における歌道には、「日本の文化・芸術」としての歌道と「日本女性の教養・家政」としての歌道の側面があるが、後者は上掲の家政婦・派出婦・家刀自において重視され傳承されており、いわゆる家政大学においては、調理・裁縫などと比べて重視されておらず、講義も設けられていない。ただし、前者についても、日本文化学科には女子学生の在籍者・希望者が殺到しており、男子学生の人気低迷している。
女子学生の有志による歌道サークル・歌会・和歌研究会・旧歌道家への出仕	各大学を参照	女子学生	女性のみ 民間の女性 (大学の主催や斡旋ではない。学生個人、または大学を超えた学生どうしによる活動)	各女学校・女子大学の創立年 ●歌道師範女性が教授を務めた女学校を前身とする女子大学では、現在も和歌研究が盛んである。 ●旧華族夫人・一般家庭夫人への出仕と師事の中で歌道を継承することがある。	存続 ◆歌道サークル・歌会に該当する集い・機会は下記の女子大学に偏向して存在している。 ◆和歌関連の研究者・学者も女性に多く、かつ女子大学に集中している。 ◆特に、女子大学の同窓会は、伝統的歌道の良好な保存の場となっている。 ◆白百合女子大学内に和歌文学会の事務局が置かれるなど、女子大学は和歌文化継承の拠点の役割を担っている。 ◆和歌関連の郷土資料を所蔵する図書館も、女子大学に極めて多い。 ◆ただし、現在、「歌道」を女子教育の要諦として掲げている女子大学は存在しない。 ◆旧華族の女子の場合、男系断絶した旧歌道師範家への家政婦としての出仕や嫁入りによって歌道を継承することもある。この場合、男性当主や女性当主より歌道を習うが、その後は、血統については冷泉家のように女系継承となる。 学習院女子大学・白百合女子大学・お茶の水女子大学・日本女子大学・跡見学園女子大学・大妻女子大学・フェリス学院大学・昭和女子大学・駒沢女子大学・共立女子大学・武庫川女子大学・川村学園女子大学・聖心女子大学・実践女子大学・帝京短期大学・相模女子大学・京都女子大学・椋山学園女子大学・金城学院大学・神戸女子大学・神戸松蔭女子学院大学・ノートルダム清心女子大学・梅花女子大学・奈良女子大学・大阪女子大学(全在学生の卒業に伴い廃止)・甲南女子大学・芦屋女子短期大学・大手前女子大学(現在は大手前大学)・梅光女学院大学(現在は梅光学院大学)・立正女子大学(現在は文教大学)・静岡女子大学(現在は静岡県立大学)・城西大学女子短期大学・県立新潟女子短期大学・藤女子大学・福岡女子大学 ◆少数ではあるが、藤花学園尾山台高等学校(江戸さい子らが歌道教授を務めた藤花高等女学校が前身)など、旧女学校系の高校・中学校に歌道が伝わっている場合もある。

その他の歌壇(右翼団体が標榜する歌道など)

流派名	本拠地	代表的歌人・ 歌論者・当主	流派の主体	流派の成立時期・成 立事情 (cは世紀)	特徴	衰退・分裂・断絶の時期 (cは世紀。血統断絶の場合、掲載可 能な限りその旨を記す。) ●衰退・分裂・断絶に至る記述 ◆は存続についての記述	衰退・分裂・断絶の理由 ●最終断絶以外(一時的 な衰退など)の理由も記載 した。 ◆は存続についての記述
不二歌道會 (旧堂上公家 の歌道伝授を 受けていない 独立の歌道団 体)	東京都 全国各 地	影山正治 佐々木壽 神屋二郎 大賀知周 西川泰彦	思想的連帯 (大道不二、求道一 貫)	1941 新国学協会 1949 不二歌道会 ●東京都認可団体	●玄洋社・黒龍会を源流に持つ。大東会館 を拠点とする大東塾の歌道部門である。 ●いわゆる伝統右翼の団体で、歌道・吟道 の鍛錬による人格形成を説く。 ●歌道教室の招聘講師・歌人は右派活動 家であるとは限らない。 ●本部・研修施設である大東会館は、東京 都認可の一般財団法人。	存続 ◆現存する日本の歌道関係団体のう ち最大規模のものであり、ほとんどの 都道府県に支部を設置し、大学教職 員・会社員なども所属している。た だし、いわゆる伝統右翼の団体であり、 歌道専門の団体ではない。	

(6) 琉球・海外における歌壇

汎アジア主義・八紘一宇・大東亜共栄圏構想の影響下における沖縄および海外(すなわち、当時の大日本帝国の外地における)歌壇の形成(琉球、台湾、朝鮮、中国、満州、サイパン、パラオ、樺太)

流派名	本拠地	代表的歌人・歌論者・当主	流派の主体	流派の成立時期・成立事情 (cは世紀)	特徴	衰退・分裂・断絶の時期 (cは世紀。血統断絶の場合、掲載可能な限りその旨を記す。) ●衰退・分裂・断絶に至る記述 ◆は存続についての記述	衰退・分裂・断絶の理由 ●最終断絶以外(一時的な衰退など)の理由も記載した。 ◆は存続についての記述
琉歌・沖縄三十六歌仙・浦添御殿・琉球桂園派歌壇	琉球国(琉球政府は琉球王国と呼称) 首里	安谷屋親雲上宗春(最古参の琉球和歌歌人) 識名親方盛命(琉球の和歌の公式上の祖) 玉城親方朝薫 惣慶親雲上忠義 平敷屋親雲上朝敏 東風平親方朝衛 与那原親方良矩 本部按司朝救(以上、琉歌・和歌双方の名人) 吉屋チルー 恩納なべ (以上、琉歌女流の双璧。琉歌中心の活動中、和歌吸収。) 屋良親雲上宣易 池城親方安倚 安仁屋親雲上賢孫	琉歌歌人 沖縄三十六歌仙 血縁(琉球国王・王家) 第二尚氏 血縁(琉球王族、王子・按司、按司部、尚氏、向氏、摂政(シツシー)・国相家)	～14c末 ●琉球で、御嶽(うたき)を管理する巫女(ノロ)や神職により歌謡「おもろ」が行われる。楽器は伴わない。「おもろ」は「思ひ」と同語源・同意。 14c末～ ●中国から三弦伝来。のち三線となる。 1531～1623 ●琉球国第4代尚清王代から第8代尚豊王代にかけて、首里王府が土着の祝詞(うむい)を基に歌謡集『おもろさうし』を主に平仮名で編纂。「おもろ」に「草紙」を付したもの。琉球古	17c～ ●琉球で琉歌が隆盛を極めると共に、和歌では二条派歌道が琉球に流入。琉歌・和歌双方の歌壇が琉球で確立。 1634～1850 ●計18回の琉球使節(江戸上り)を通じて、和歌・琉歌が相互に流入。 1650 ●羽地朝秀が琉球初の正史『中山世鑑』を編纂。 17c後半～ ●琉球の和歌の公式の祖は識名親方盛命とされる。識名は、和歌・擬古文体の随筆集『思出草』を著す。 1697～ ●蔡鐸らが琉球の史書『中山世譜』の編纂を開始。のち子の蔡温が加筆・修正。 17c末～ ●和歌が琉球へ一方的流入する時代を過ぎ、元禄期以降、琉歌歌人と琉球の和歌歌人の双方が輩出される時代へと移る。 18c～ ●二条派歌道が琉球王国に本格的に流入。 19c前半～ ●薩摩藩との交流を通じて多くの御殿(ウドゥン)が桂園派を学ぶ。とりわけ、浦添王子朝薫は香川景樹に直接学び、琉球に桂園派を定着させる。 19c半ば～ ●三司官(世あすたべ)の宜湾朝保が鹿児島で、	断絶 ●近世後期以降、本州・九州・四国では国学が優勢となり、歌論においても『万葉集』派(特に賀茂真淵門・縣居派)と『古今集』派(特に香川景樹門・桂園派)とに分裂する中、琉球では国学よりも歌謡が常に優勢で、沖縄三十六歌仙を中心に、琉歌と共に桂園派・御歌所派和歌の歌壇が形成された。 ●琉球国の多くの御殿(ウドゥン)のうち、とりわけ浦添御殿による薩摩藩との好誼が、琉球への桂園派定着の契機となった。但し、浦添御殿初期の和歌はほとんど残されていない。その後、八田知紀に学んだ宜湾朝保の中央歌壇での活動が、琉球の御歌所派の形成へとつながる。 ●琉球における歌謡・定型詩は、土着の祝詞(うむい)に始まる。	●廃藩置県・琉球処分(琉球国支配の終焉と、大日本帝国・琉球藩・沖縄県への編入・再編) ●第二次世界大戦の戦災(沖縄戦) ●敗戦 ●華族制度の廃止(1947) ●敗戦によるGHQ及び政

(琉歌と桂園派
和歌の折衷)

沖縄県
那覇市
沖繩市
浦添市

石嶺親雲上真忍
国頭親方朝齊
浦添親方朝昭
栢堂和尚
読谷山王子朝憲
宜野湾王子朝祥
世名城親雲上盛郁
大工廻親雲上安詳
義村按司朝頭
浦添按司朝英
浦添王子朝熹
浦添按司朝忠
宜湾親方朝保
新城徳昌
安仁屋親雲上賢孫
(以上、和歌中心の
活動だが、琉歌をよ
くしない者もなかつ
た。)

第一尚氏分家浦
添御殿
血縁(士族(サム
レー)、親方(ウェー
カタ))
第二尚氏分家小
禄御殿支流向氏宜
湾殿内

語を多用。
16c後半～
●少なくともこの時期
までに、琉球に和歌が
流入。「おもろ」などの
土着の定型詩の律動
や文学性と混ざり、
「八・八・八・六(サンパ
チロク)」形式の叙情
短詩が確立。これを琉
歌と呼び、和歌と区
別。三線を伴奏に使用。
1585
●安谷屋親雲上宗春
が豊臣秀吉に謁見、
天王寺歌会に参加。

のち歌道御用掛となる八田知紀(香川景樹・桂園
門下で、高崎正風らの師)に学んで帰琉。薩摩・琉
球双方の桂園派歌壇を結ぶ。
1872
●琉球処分開始。明治政府の命で、琉球国王尚
泰が慶賀使を東京に派遣(正使に摂政の伊江朝
直、副使に三司官の宜湾朝保)。この際、朝保が
吹上離宮の歌会に参席。一方の朝直は、尚泰を
大日本帝国の華族に列するとする明治天皇の詔
勅を下賜。両名は逡巡の末、受諾。これ以降、旧
琉球王朝の王族・文人・歌人らは厚遇され、天皇
宮中の歌会に召されるようになる。しかし一方で、
これは琉球國の事実上の滅亡と大日本帝国傘下
への編入を意味した。帰国後、両名は旧琉球國民
(藩民)から激しい非難を受け、半ば隠棲した。
●宜湾朝保が歌書を多作。『遺稿松風集』、『沖繩
集』(『沖繩三十六歌仙』を紹介)、『琉球解釈』、
『上京日説』、『宜湾朝保書』。
1888
●御歌所設置。琉球の桂園派歌壇もそのまま御
歌所歌壇に移行。
1916
●宜湾朝保が「琉球の五偉人」の一人として紹介
される。(伊波普猷・真境名安興共著、小沢書店刊
行の同題の著にて)

り、「おもろ」、(日本から流入し
た)中世和歌、「おもろ」や和歌
の琉球風の変型である)琉歌、
二条派・桂園派・御歌所派和
歌、近現代短歌と順に変遷して
きた。これら歌謡・定型詩の変
遷・入れ替わりという文化的側
面に限れば、日本・薩摩藩と琉
球國に敵対的な関係はあまり
生じなかった。しかし、「おもろ」
や琉歌などの伝統歌謡が、後
続の和歌や新派短歌の日本・
薩摩藩からの流入によって存
亡の危機にさらされたのは明ら
かであり、琉球國の終焉と共に
その歌謡文化の大部分は廃れ
た。今やほとんどの沖縄県民に
とっては、現代日本語を母語と
する以上、琉球の伝統歌謡の
理解は極めて困難なものになっ
ている。

府の国語単純化政策
●税制の一新と混乱によ
る歌書の散逸(財産税・富
裕税・シャブ勧告)
●標準国語の変化(東国
方言の東京標準語化)

<p>臺北(台北)歌壇→臺灣(台湾)歌壇(『万葉集』重視)</p>	<p>台湾(台北・高雄)大日本帝国日本</p>	<p>一般市民 吳建堂 吳振蘭 蔡焜燦 蕭翔文 姚望林 余世俊 李秀茂 鄭昌 林玉鳳 林聿修 館量子 黃敏慧</p>	<p>台湾人 漢民族 客家 台湾原住民(高砂族) 華僑 日本人 在日台湾人 台湾人留学生 ●主な年齢層:80代~90代</p>	<p>1968 ●日本統治時代に日本語・和歌を学んだ吳建堂により発足。日本語教育を受けた台湾人が参加。日本人も少数ながら参加している。</p>	<p>●創始者吳建堂が犬養孝に師事し、『万葉集』を学んだことが契機となる。 ●「台北短歌研究会」が発足。(1967) ●14名で『台北歌壇』刊行開始。(1968) ●戒嚴令下において「台湾」の語を避け、歌集名を『台北歌壇』とし、歌壇自体も表向きは「台北歌壇」などの別称を名乗り、そのまま21世紀を迎えるが、2003年に正式にいずれも「台湾歌壇」となる。中心的活動は「台北歌会」の開催。 ●主に「万葉の心」を歌壇の主軸として掲げ、古語調で詠む歌人が多い。吳建堂は「日本の短歌界が晦渋歌に陶醉して居る頃、台湾では万葉調が守りつがれた。」(『臺灣萬葉集 下巻』孤蓬万里著 犬養孝校閲 1993年元旦)としており、台湾歌壇としての自負と共に日本の短歌界への批判も見える。 ●入江家歌人で当時の侍従長の入江相政が、1935年の台湾の地震で被災した蔡焜燦を見舞っている。 ●吳建堂『台湾万葉集』 ●恋歌も詠まれるが、全体から見ると少ない。</p>	<p>存続 約100名 ◆現在も歌壇はあり、ネット活動が盛んであるが、高齢化が進んでおり、存亡の危機にある。 ◆東日本大震災に際しては、同歌壇の歌会で多数の追悼歌が詠まれた。(2011年3月27日) ◆このほか、台北俳句会などがある。</p>	<p>●戒嚴令</p>
<p>歌林臺灣の會(かりん台湾の會)・臺灣(台湾)たんがら短歌會</p>	<p>台湾(台北・高雄)大日本帝国日本</p>	<p>一般市民 傅彩澄 林百合 など台湾歌壇の多くの歌人</p>	<p>台湾人 漢民族 客家 台湾原住民(高砂族) 華僑 日本人 在日台湾人 台湾人留学生 ●主な年齢層:80代~90代</p>	<p>●日本統治時代に日本語・和歌を学んだ台湾人らにより発足。日本人も参加している。</p>	<p>●台湾歌壇ほどの規模ではないが、同じく日本統治時代に和歌を知った台湾人を中心とする万葉歌壇。 ●『たんがら台湾』刊行。</p>	<p>存続 約140名 ◆現在も歌壇はあり、ネット活動が盛んであるが、高齢化が進んでおり、存亡の危機にある。</p>	<p>●日本の敗戦</p>

臺灣神社歌壇	台湾各地	神官 神職 巫女 巫堂 台湾神宮 台北天満宮 新竹神社 台中神社 台南神社 高雄神社 花蓮港神社	台湾人 漢民族 台湾原住民(高砂族) 華僑 ●主な年齢層:80代~90代	●日本統治時代に創建された台湾の神社における歌壇。	●台湾の神社のほとんどは、台南で薨去した北白川宮能久親王を祭神としていた。また、北白川宮家自体も断絶せず、戦後の皇籍離脱ののちも血統は存続し、現在に至っている。そのため、現在も旧台湾神職者には北白川宮家に崇敬を示す歌人が多い。 ●能久親王妃富子も台湾神社鎮座祭で和歌献詠をおこなった。 ●ただし、神社歌壇自体は現在、ほぼ残っておらず、「台湾歌壇」が台湾の最大歌壇であり、台湾で和歌を詠む者はこちらに参加するのが一般的である。	神社歌壇は、敗戦に伴い神社と共に廃止・破壊・荒廃したが、和歌を詠む人は現在も多くいる。 ◆一部は改築または新築され、中華民国の戦死者を祀る忠烈祠となっている。	●日本の敗戦
●日本統治時代における朝鮮の歌壇では、在朝日本人による歌作よりも朝鮮人による日本語での歌作のほうが多い。							
日韓王族歌壇(日鮮融和・婚姻政策)	大韓帝国 大日本帝国	梨本伊都子 李方子 など新旧の宮家の子女	血縁 大日本帝国の皇族・宮家・華族 大韓帝国の皇帝・皇族 大日本帝国の王公族 大日本帝国の華族 大韓帝国の華族 大日本帝国の朝鮮華族	近代～ ●日韓併合(1910)	●朝鮮への和歌の流入経路には様々なものがあるが、天皇家・皇族・宮家・華族の歌道は「内鮮一体・日鮮融和」策の結果として流入することとなった。日鮮一体化の担い手として、まず宮家の女子に白羽の矢が立った。梨本宮守正王第一女子の方子は、皇族・華族の女子が集った歌壇「萩の舎」で学んだ母梨本伊都子の御歌所派の和歌・短歌の才を引き継いでいた。裕仁親王(昭和天皇)妃の候補にも抜擢され、順風満帆かと思えた。しかし結局、大韓帝国皇太子から日本の王公族となった李垠と結婚した。その後、生涯に渡り、文芸や福祉に力を注いだ。伊都子・方子の日韓両国への尽力と女性としての生き方は、現在も「萩の舎」を知る同歌壇の高齢女性に語り継がれている。	衰退・低迷 ●旧朝鮮王族末裔には、極めて親日的な姿勢を持って和歌を詠んでいる人々もいる。しかし、歌壇は、存続しているにせよ、日韓・日朝関係の悪化に伴い、縮小している。親日的な朝鮮人による歌壇は、日本人に対しても自国民に対しても政治的な配慮なく活動できる台湾歌壇のような状況にない。 ●北朝鮮の和歌の現状については不明。歌壇は皆無であると考えられる。	●日本の敗戦 ●日韓・日朝関係の悪化

<p>朝鮮文人報国会 (皇民化政策)</p>	<p>大日本帝国 (京城)</p>	<p>南次郎 小磯國昭 阿部信行 辛島驍 佐藤信重 李光洙 俞鎮午 李箕永 金東煥 崔載端</p>	<p>朝鮮總督府 大日本帝国陸海空軍 京城帝国大学 国民総力朝鮮連盟 親日派朝鮮文士 朝鮮の文芸団体を 統合・吸収 朝鮮文人協会 朝鮮俳句作家協会 朝鮮川柳協会 国民詩歌連盟</p>	<p>1939 朝鮮文人協会 発足、『国民文学』刊 行 1942 ハングル版『国 民文学』を廃止 1943 朝鮮文人協会 が朝鮮俳句作家協会 などを統合して発足</p>	<p>●世界最高の皇道文学樹立のため興亜と朝鮮人 皇民化を使命とする朝鮮總督府の御用団体で、日 本統治時代の朝鮮文学の全てを統合・監視した。 ●綱領の四大目的 1. 朝鮮文学界の日本語化促進 2. 朝鮮文士の日本的鍛錬 3. 作品の国策協力 4. 現地の作家動員</p>	<p>廃止(1945)</p>	<p>●日本の敗戦</p>
<p>京城詩話会・ 亜細亜詩脈協 会 (親朝鮮)</p>	<p>大日本帝国 (京城)</p>	<p>内野健兒 江口捨次郎</p>	<p>渡朝した日本人</p>	<p>1926年2月 京城詩話 会 同年10月 亜細亜詩 脈協会</p>	<p>●機関誌『亜細亜詩脈』</p>	<p>廃止(1928) ●現在、韓国が歌集を保存</p>	<p>●鐘路警察署高等課によ る『亜細亜詩脈』1927年6 月号の発売禁止・押収 ●『亜細亜詩脈』終刊 (1927年11月) ●朝鮮總督府による内野 健兒の朝鮮追放(1928) ●日本の敗戦</p>
<p>あしかび会・元 山短歌会 (親朝鮮)</p>	<p>大日本帝国 (京城)</p>	<p>渡辺清房 市山盛雄</p>	<p>渡朝した日本人</p>	<p>1919 あしかび会 1927 元山短歌会</p>	<p>●渡辺清房『松濤園』(1928)</p>	<p>廃止 ●現在、韓国が歌集を保存</p>	<p>●日本の敗戦</p>
<p>真人社 (親朝鮮)</p>	<p>大日本帝国 (京城)</p>	<p>市山盛雄 道久良</p>	<p>渡朝した日本人</p>	<p>1923～</p>	<p>●短歌雑誌『真人』 ●「自分にとって朝鮮は第二の故郷」(市山盛雄歌 集『韓郷』、1931) ●市山盛雄『朝鮮風土歌集』(1935) ●道久良『歌集朝鮮』(1937)</p>	<p>廃止 ●現在、韓国が歌集を保存</p>	<p>●日本の敗戦</p>

<p>朝鮮歌話会 (親朝鮮)</p>	<p>大日本 帝国 (京城)</p>	<p>一般市民</p>	<p>渡朝した日本人</p>	<p>日韓併合期～</p>	<p>●『昭和九年版朝鮮歌集』(1934)</p>	<p>廃止 ●現在、韓国が歌集を保存</p>	<p>●日本の敗戦</p>
<p>現在の朝鮮民族による中道的・反日的またはそれに類する短歌</p>	<p>大韓民 国 日本</p>	<p>一般市民 朴貞花 李正子 高英梨 在日女性文芸協会</p>	<p>女性中心 韓国居住の韓国人 在日韓国・朝鮮人 朝鮮短歌を取り上げる日本の新聞及び短歌結社・歌人</p>	<p>近代～ ●日本統治時代に日本語・和歌を学んだ現地の朝鮮人や、在日朝鮮人による歌壇。</p>	<p>●現在の朝鮮人・在日朝鮮人による歌風は、親日的な歌から反日的な歌まで様々である。日本統治時代に対する批判は朝鮮短歌の主要な題材となっているが、これ以外にも、男性(日朝問わず)に対する女性の自立の主張、在日朝鮮人に対する日朝両国民の理解への批判など、様々なテーマが見られる。 ●朴貞花(『身世打鈴』が著名)などの朝鮮歌人や日本人自身による日本統治時代を批判的に詠んだ短歌、反日・反米の和歌・短歌は、朝日歌壇(近藤芳美・馬場あき子・佐佐木幸綱らが選者)やフェミニズム関連メディアが積極的に取り上げてきたが、その後読売歌壇も取り上げるようになった。 ●現在では、日朝関係の悪化への配慮があっても、掲載歌風の大きな偏りはかつてほどではないものの、依然として従軍慰安婦などを扱った短歌が掲載されていることに変わりはない。</p>	<p>存続 ◆日本統治時代を朝鮮に対する日本の侵略とする立場の歌壇は、日韓・日朝関係の悪化に伴い、拡大している。一方、親日的な朝鮮人による歌壇は、日本人に対しても自国民に対しても政治的な配慮なく活動できる台湾歌壇のような状況にない。 ◆北朝鮮の和歌の現状については不明。歌壇は皆無であると考えられる。</p>	<p>●日本の敗戦 ●日韓・日朝関係の悪化</p>
<p>日韓女子歌壇・現在の朝鮮民族による和歌(親日本・親韓国短歌)</p>	<p>日本 大韓民 国</p>	<p>一般市民 青柳香織 鈴木香菜 西本晴子 ハン・ミョンジャ イ・ギュリ パク・スミン イ・ヨンア チョン・ジヘ</p>	<p>女性中心 一般市民 韓国居住の韓国人 在日韓国・朝鮮人 日本の旧華族 日韓の女子学生 日韓の主婦 「菽の舎」の歌の愛好家女性</p>	<p>2004～ ●日韓の皇族・王族の友好や御歌所派の格式を理想として一般市民女性により続けられている歌壇。</p>	<p>●「台湾歌壇」は台湾の歌壇を代表する固有の団体の名称でもあるが、「日韓歌壇」は特に固有の団体の名称としては用いられていない。ただし、「日韓女子歌壇」については、歌人当事者らによって固有名称として用いられることがある。 ●現在は、出自に関係なく和歌に関心のある日韓の女子大生や主婦が携り、歌風は親日的であるが、歌壇は秘密結社的である。 ●和歌と朝鮮の短歌である時調の両方に親しむ。</p>	<p>存続 ◆極めて親日的な姿勢を持っている。しかし、存続しているにせよ、日韓・日朝関係の悪化に伴い、縮小している。親日的な朝鮮人による歌壇は、日本人に対しても自国民に対しても政治的な配慮なく活動できる台湾歌壇のような状況にない。</p>	<p>●日韓・日朝関係の悪化</p>

漢民族による和歌	中華人民共和国 日本	一般市民	中国在住の漢民族・学生 在日中国人 中国人留学生	近代～ ●日本語・和歌を学んだ現地の漢民族や、在日中国人による歌壇。	●高齢女性に御歌所派の継承者がいるほか、日本語を学び和歌に関心のある在日中国人・中国人留学生の若者もいる。 ●現在は、年齢を問わず、女性を中心に短歌の歌人がいる。 ●歌風は、親日的な歌から反日的な歌まで様々である。 ●上掲の朝鮮歌壇と同じく、中国人や日本人自身による反日・反米の和歌・短歌は、朝日歌壇(近藤芳美・馬場あき子・佐佐木幸綱らが選者)やフェミニズム関連メディアが積極的に取り上げてきたが、昨今は読賣歌壇も取り上げている。	存続 ◆しかし、存続しているにせよ、日中関係の悪化に伴い、縮小している。親日的な中国人による歌壇は、日本人に対しても自国民に対しても政治的な配慮なく活動できる台湾歌壇のような状況にない。	●日本の敗戦 ●日中関係の悪化
日満王族歌壇	満州国 大日本帝国	愛新覚羅氏王子・王女 愛新覚羅顯し(「し」は王へんに子。日本名は川島芳子) 愛新覚羅溥儀 貞明皇后	血縁 大日本帝国の皇族・宮家・華族 満州国の皇帝・皇族 大日本帝国の王公族 大日本帝国の華族 満州国の華族 大日本帝国の満州華族	近代～ ●満州国建国(1932)	●上掲の日韓歌壇の発端と同様、日本の皇族と清朝・満州国の皇族との間でも、婚姻関係による血統・家系の融和が図られた。歌道家正親町三条(嵯峨)家本流の嵯峨浩は、日本の皇族・関東軍・満州国皇帝溥儀の意向によって愛新覚羅溥傑との縁談がまとめられた。溥儀と浩の子慧生は恋人大久保武道と共に心中した。(天城山心中。1957年)日韓歌壇と同様、日満女性に共通の悲恋の実話が、歌壇の趣旨に影響している。また、清朝肅親王の王女顯「し」(左記参照)は、川島芳子として日本語教育を受け、和歌・短歌を含む詩歌群を遺している。のちに中華民国政府により漢奸として銃殺刑となったが、この詩歌集は刊行されている。このように、日満の間でも、両国共通の女性の生き方への共感が、王族を離れた一般女性らの歌壇存続の契機となっている。	廃止 ●現在、満州に皇族・王族・王公族は存在しない。ただし、日本の皇族・旧華族の一部は満州民族と混血している。	●日本の敗戦 ●日中関係の悪化 ●満州語の消滅の危機 (「危機に瀕する言語」 “Endangered language”で「極めて深刻」に指定されている。母語話者数は約30人) ●日本軍による満州国傀儡によって満州語が絶滅に瀕したのではなく、すでに清朝の時代に愛新覚羅王族の多くは満州語を話せなかった。

満州短歌・短歌精神・短歌中原	満州国 大日本帝国	<p>★『満州短歌』 八木沼丈夫 香川末光 香川美人 富田充 原真弓 ★『短歌精神』 富田充 ★『短歌中原』 八木沼丈夫 田邊益男 及川鶴治 ★復刊『短歌中原』 原真弓</p>	渡満した日本人 満州民族	<p>1929 『満州短歌』刊行 1941年4月 『短歌精神』刊行 同年11月 『短歌中原』刊行 1945 全て廃刊 1948 『短歌中原』復刊、すぐに廃刊 ●日本語・和歌を学んだ現地の満州民族や、在日満州人による歌壇。</p>	<p>●「満州短歌」とは、満州人・満州の日本人の短歌、満州郷土藝術協會が発行した短歌雑誌、またはこの雑誌の短歌のいずれをも言う。 ●八木沼丈夫『長城を踰ゆ』・『遺稿 八木沼丈夫歌集(死後)』 ●現在、満州民族は、北京語・客家語・台湾語などを母語とする台湾人や朝鮮語を母語とする朝鮮人と異なり、普通話などの中国語を母語としており、満州語そのものが存亡の危機にある。満州民族の詩歌のほとんどが、普通話などの中国語でおこなわれており、若年者を中心に和歌・日本の古典への関心も極めて希薄であると考えられる。</p>	<p>『満州短歌』系列の満州短歌雑誌は全て廃刊 満州民族による歌作は存続 ◆満州歌壇も親日的な人々によって作られたものの、和歌を詠む満州民族の多くは高齢化している。 ◆現在、満州民族のほとんどは中国国民であり、それ以外に台湾・香港・澳門・アメリカ・日本などに分布しているが、民族意識は有している。</p>	<p>●日本の敗戦 ●日中関係の悪化 ●満州語の消滅の危機(「危機に瀕する言語」 “Endangered language” で「極めて深刻」に指定されている。母語話者数は約30人) ●日本軍による満州国傀儡によって満州語が絶滅に瀕したのではなく、すでに清朝の時代に愛新覚羅王族の多くは満州語を話せなかった。</p>
彩帆(サイパン)・天仁安(テナアン)歌壇	北マリアナ諸島 サイパン島 テナアン島	サイパン住民 旧神社 彩帆神社 南陽神社 南興神社 天仁安神社	一般島民 日本人 ●主な年齢層：80代～90代	●日本統治時代に日本語・和歌を学んだサイパンの住民や、同時に創建されたサイパンの神社における歌壇。	<p>●一般島民や神社神官による歌壇があった。現在は、神社はほとんど廃止され、一般島民により継承されている。 ●彩帆神社は再建され、彩帆香取神社となる(1985)。神社周辺に七五三・短歌会など日本文化が残る。 ●高齢女性に継承者がいる。</p>	体系的な継承ではないが、和歌は詠まれている。 ◆島民・原住民が日本の和歌・文学・国歌・軍歌の保存に尽力している。	●日本の敗戦
パラオ歌壇	パラオ諸島 パラオ島 ペリリュー島 アンガウル島	パラオ住民 旧神社 南洋神社 朝日神社 ペリリュー神社 アンガウル神社	一般島民 日本人 ●主な年齢層：80代～90代	1922～ ●南洋庁開庁(1922) ●日本統治時代に日本語・和歌を学んだパラオの住民や、同時に創建されたパラオの神社における歌壇。	<p>●一般島民や神社神官による歌壇があった。現在は、神社はほとんど廃止され、一般島民により継承されている。 ●日本の委任統治領となり、南洋庁が開庁されて以降、住民の多くは日本人となり、パラオの都市中心部の文芸が日本語・日本文学そのものとなる。 ●中島敦ら日本の文学者・国語学者を中心に、和歌・詩・小説などの日本文学が普及される。 ●現在に至り、日本の保守系団体による神社の再建が相次いでいるが、特に歌壇など日本文化の形成などは見られない。 ペリリュー神社(1982) 南洋神社(1997)</p>	体系的な継承ではないが、和歌は詠まれている。 ◆島民・原住民が日本の和歌・文学・国歌・軍歌の保存に尽力している。	●日本の敗戦

樺太和歌	樺太	西村巖	渡樺した日本人 樺太原住民 アイヌ ロシア人	1905 ポーツマス条約・樺太民政署設置 1907 樺太庁 1987 樺太短歌会発足 ●日本語・和歌を学んだ樺太原住民や、在日樺太人による歌壇。	●「樺太短歌」とは、樺太原住民・樺太の日本人の短歌、樺太短歌会が発行した短歌雑誌、またはこの雑誌の短歌のいずれをも言う。 ●松本昌夫『樺太悲歌—歌集』	存続 ◆『樺太短歌』を固有名称とする短歌団体(約20名で推移)が存在する。(札幌市手稲区前田)	●日本の敗戦
------	----	-----	---------------------------------	---	--	--	--------